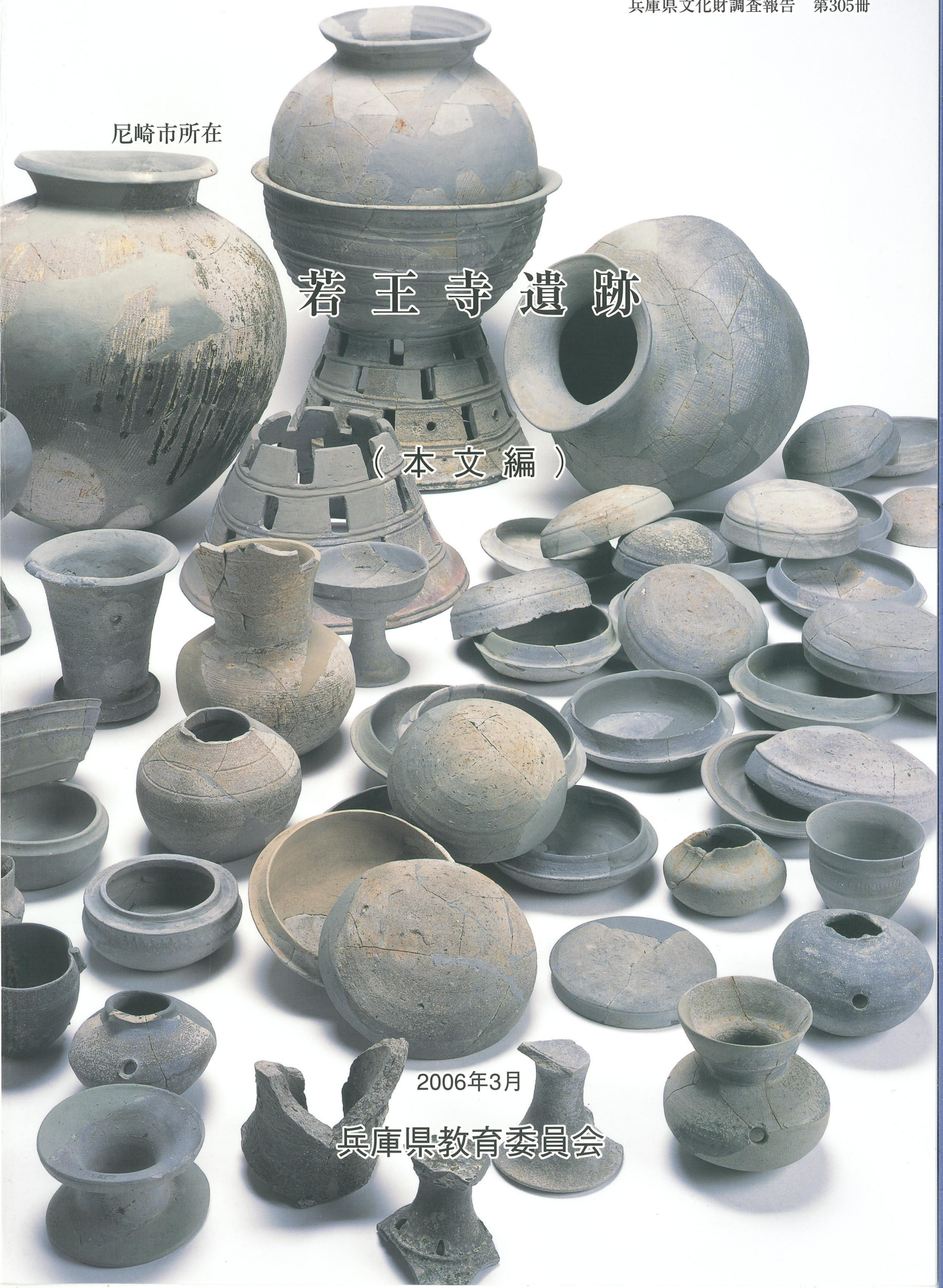
兵庫県文化財調査報告　第305冊

尼崎市所在

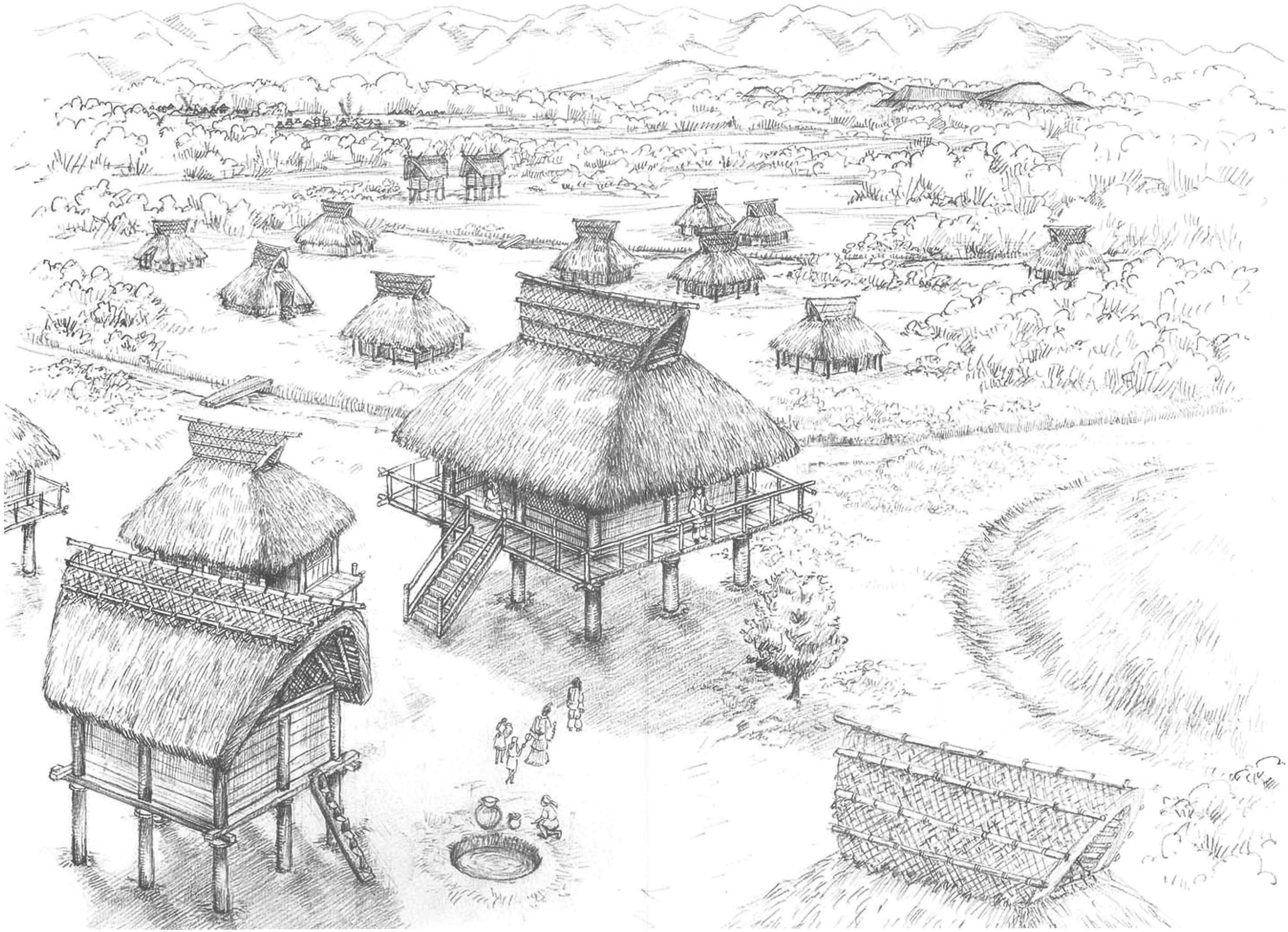
若王寺遺跡

（本文編）



2006年3月

兵庫県教育委員会



尼崎市所在

若王寺遺跡

（本文編）

2006年3月

兵庫県教育委員会

遺跡遠景（航空写真）

遺跡遠景（航空写真）

遺跡近景（航空写真）

遺跡近景（航空写真）

東地区（東から）

西地区（東から）

カラー図版4

北壁土層断面

SX03土器出土状況（南から）

SX05（東から）

SE06・09（南から）

SE06（南から）

SK98（東から）

SK98（西から）

SK98（西から）

包含層土器密集部

SP130・197・264出土遺物

SP265・499・502・SD03・04出土遺物

SP16～36出土遺物

SP50出土遺物

SE01・06出土土器

SE07・09出土土器

SK84出土土器

SK84出土土器（小型丸底壷）

SK80出土土器

SK102・107・111・118・121出土遺物

SX03出土遺物

SX04出土遺物

SX05出土土器

SX05出土須恵器

須恵器

土師器

製塩土器

土師器（布留式甕）

須恵器

須恵器

羽口

土錘

羽口・鉄滓・土玉・台石ほか

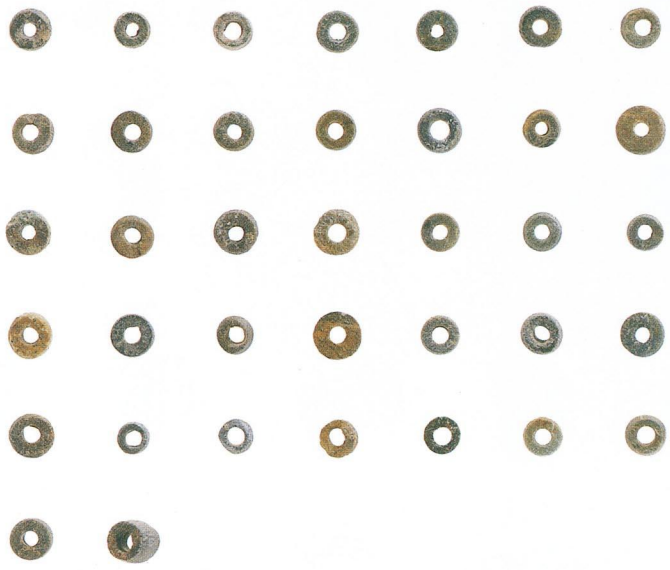
鉄滓

土玉

韓式土器（甑ほか）

ミニチュア土器・土製品

石製品（紡錘車・勾玉・有孔円板・臼玉ほか）



臼玉

石製品（紡錘車・勾玉・有孔円板）

石製品（裏面）

砥石・石錘ほか

ガラス管玉

石鏃

砥石・玉砥石

砥石・台石

例言

1．本書は兵庫県尼崎市若王寺３丁目11－46に所在する若王寺遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書は経済産業省工業技術院大阪ライフエレクトロニクスセンター（後に独立行政法人産業技術総合研究所関西センター）建設事業に伴う発掘調査報告書である。

3．昭和40年度に尼崎市教育委員会による小園地区土地区画整理事業に先立つ確認調査が行われ、遺跡の範囲が確定された遺跡である。若王寺遺跡の中心部分で経済産業省工業技術院大阪ライフエレクトロニクスセンター建設の計画が上がり、それに先立ち平成11年度に確認調査を実施した。兵庫県教育委員会が主体となり、高瀬一嘉が担当した。

4．本発掘（全面）調査は、平成12年度と平成16年度に同じく兵庫県教育委員会が調査主体となって実施した。調査は渡辺　昇・川村慎也が担当した。

5．調査で使用した方位は国土座標第Ⅴ系を使用した。また、水準は３級点を使用した東京湾平均海水準である。測量は㈱ジオテクノ関西に委託して実施した。

7．個別遺構図・土層断面図などは調査員が実測したものである。

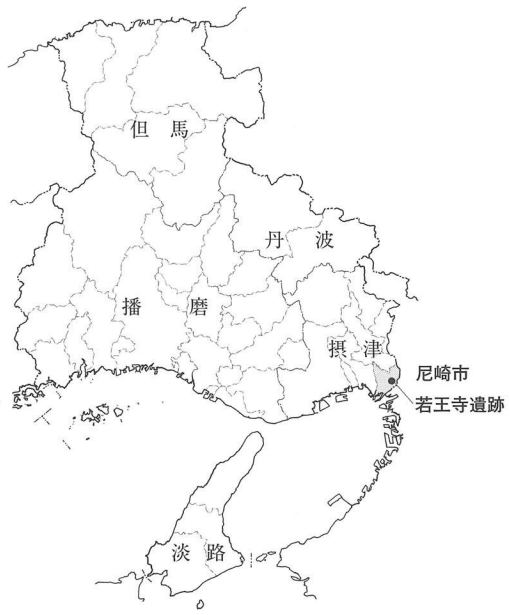
8．写真は調査員が撮影した。ただし、空中写真については図版１は国土地理院撮影、それ以外については㈱ジオテクノ関西撮影のものである。

9．整理作業は、平成14～17年度に独立行政法人産業技術総合研究所関西センターと委託契約をかわして兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で行った。

10．執筆は渡辺が担当した。Ⅴ　鍛冶関連遺物の金属学的調査については、大沢正己氏に、Ⅵ　鍛冶関連遺物の考古学的調査については、真鍋成史氏に原稿を戴いた。編集は友久伸子・津田友子の協力を得て渡辺が行った。

11．本書にかかる遺物や図面・写真などの資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目１番５号）ならびに同魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630－１）に保管している。ご活用下さい。

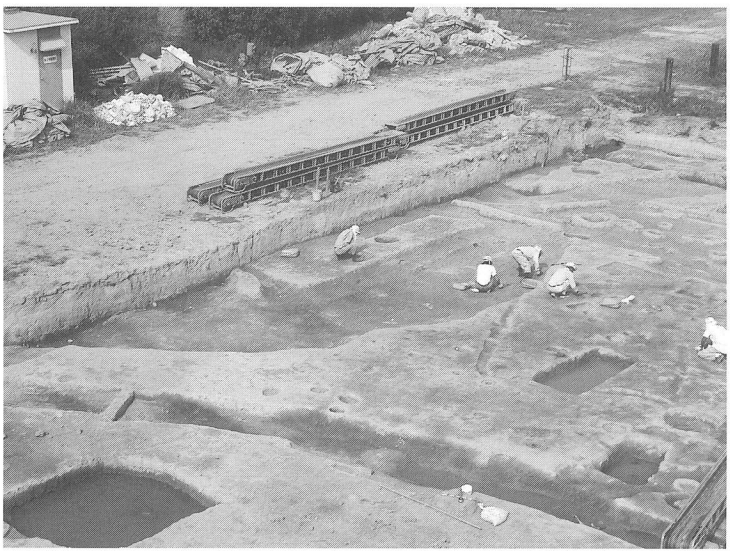
12．発掘調査・整理調査にあたって、下記の方々・機関のご協力・ご指導を得ました。感謝致します。　（敬称略）
村川行弘・勇　正廣・石野博信・水野正好・和田晴吾・藤原　学・真鍋成史・大道和人・尼崎市教育委員会



第１図　遺跡の位置

本文目次

Ⅰ　はじめに …… 1
(1)　調査に至る経緯
(2)　第２次調査（全面調査）
(3)　確認調査の経過と結果
(4)　第３次本発掘調査の経過
(5)　第４次本発掘調査の経過
(6)　第５次立会調査の経過
(7)　第６次本発掘調査の経過
(8)　整理作業の経過
Ⅱ　若王寺遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 8
Ⅲ　調査結果 …… 17
(1)　第３次本発掘調査の結果
(2)　第４次本発掘調査の結果
(3)　第６次本発掘調査の結果
Ⅳ　出土遺物 …… 38
(1)第３次本発掘調査出土土器
(2)第４次本発掘調査出土土器
(3)出土石器・石製品
(4)出土木製品
(5)出土金属製品
Ⅴ　若王寺遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査 …… 157
Ⅵ　若王寺遺跡出土鍛冶関連遺物の考古学的調査 …… 178
Ⅶ　おわりに …… 185



本文挿図目次

第１図　遺跡の位置
第２図　若王寺遺跡調査区域 …… 2
第３図　若王寺遺跡　第１次調査他出土土器 …… 3
第４図　調査区位置図 …… 4
第５図　周辺の遺跡位置図 …… 11
第６図　若王寺遺跡　第３次本調査遺構平面図 …… 13
第７図　掘立柱建物跡配置図 …… 14
第８図　土坑配置図 …… 15
第９図　出土土器拓影図(1) …… 108
第10図　出土土器拓影図(2) …… 109
第11図　出土土器拓影図(3) …… 110

表目次

第１表　土器・土製品観察表 …… 111
第２表　土錘一覧表 …… 149
第３表　石製品一覧表 …… 151
第４表　木製品一覧表 …… 153
第５表　金属製品一覧表 …… 153
第６表　出土鉄滓一覧表 …… 154
第７表　出土ガラス滓一覧表 …… 155
第８表　出土羽口一覧表 …… 155

Ⅰ　はじめに

1．調査に至る経緯

若王寺遺跡は早くに調査が実施され、古墳時代の代表的な集落として、また代表的な製鉄遺跡として知られていた遺跡である。昭和25年頃に電気試験所構内で5世紀の完形土師器が見つかっており、その後1960年代の名神高速道路建設計画とともに、一帯の区画整理事業が計画され、それに伴って若王寺遺跡の確認調査（第1次調査）が実施された。遺跡周辺は小園地区土地区画整理事業の施工範囲内に入っていた。確認調査の結果、今回本発掘調査を実施した地域を中心に遺跡が広がっていることが確認された。通商産業省の工業技術研究所が建設される予定であったが、包含層が厚く残っており、遺構も稠密に残存していると思われる部分は、庁舎を避けて建設工事が実施された。確認調査が実施されたその頃、尼崎市では田能遺跡の発掘調査が行われていた。昭和40（1965）年、発掘調査の組織も定まっていないときの調査で、兵庫県の発掘調査の歴史のはじめを彩る調査であった。保存問題が起こっているにも関わらず、調査が完遂出来るかどうかの狭間であったとお聞きしている。同時並行で確認された若王寺遺跡は、さらに厳しい状況で2つの遺跡の保存はもちろん、調査も微妙な状況であった。そのような背景で調査が行われたようで、全面調査を実施するのは困難な状況であった。当時の調査担当者、行政担当者の努力の結果、極力保存が図れるよう協議がなされたようである。

2．第2次調査（全面調査）

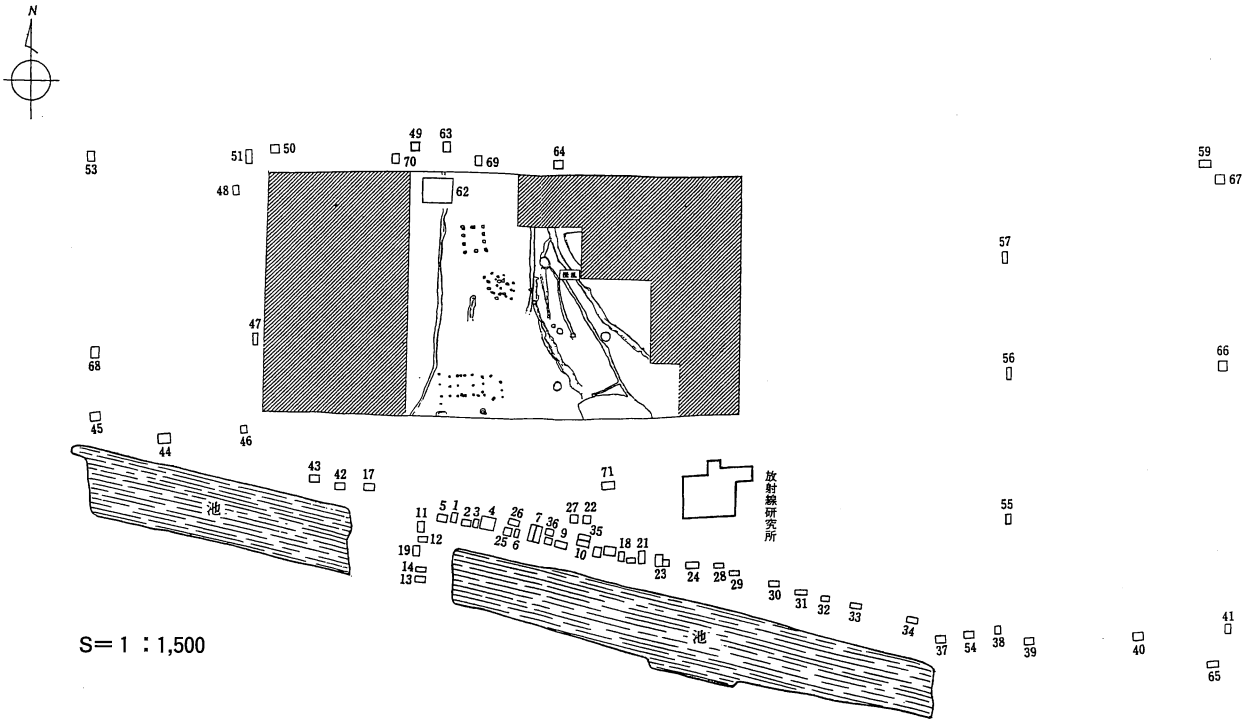
今回調査を実施した北側の関西電力の総合技術研究所建設に先立って全面調査が実施されている。前記の区画整理事業に伴って、電気試験所北側一帯が国から関西電力に払い下げられることとなり、そこに建設計画が浮上したものである。確認調査が行われた同年の昭和40（1965）年12月から翌年5月までの5ヶ月間費やして調査は行われている。

尼崎市史第8巻によると、東西100m、南北50mの範囲を調査対象とし、西半ではほとんど包含層もなく遺構も検出されていない。東半では竪穴住居跡4棟と掘立柱建物跡4棟が確認されている。柱穴はさらに多数確認されており、増加する可能性は十分に考えられる。柱穴は今回の調査と同様に柱基礎（柱根）が残っているものもあり、形態も円形・方形・不定形と各種あるなど、当然ながら多くの点で一致している。調査成果として異なるのは、竪穴住居跡が検出されていることと、奈良時代の遺物が検出されていることである。井戸・土坑などは同じ状況で出土遺物の内容にも大きな差はない。ただ、滑石製品や木器の製品の出土頻度は高いように思われる。

3．確認調査の経過と結果

通商産業省工業技術院電子技術総合研究所大阪ライフエレクトロニクス研究センター内で新たに庁舎新築事業が計画され、その候補地が以前保存した部分に相当する可能性があった。ただ、明確な位置関係が把握できなかったことから、通商産業省工業技術院電子技術総合研究所と兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の間で協議が行われてきた。遺跡の明確な範囲を確定するとともに、全面調査での遺構面までの深さや土量などの資料を得るためにも、再度確認調査を実施することとなった。

確認調査は、平成11（1999）年11月24日に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所企画調整班　高瀬



第２図　若王寺遺跡調査区域（第１次調査トレンチ配置図、第２次調査区遺構模式図）

一嘉が担当した。調査は６ヶ所のトレンチを設定して確認した。全地点で遺構が確認され、濃密な包含層が検出された。そのことから、建設予定地の西側には残土が小山状に置かれており、確認調査を実施することは不可能であったが、全域本発掘調査が必要と判断された。

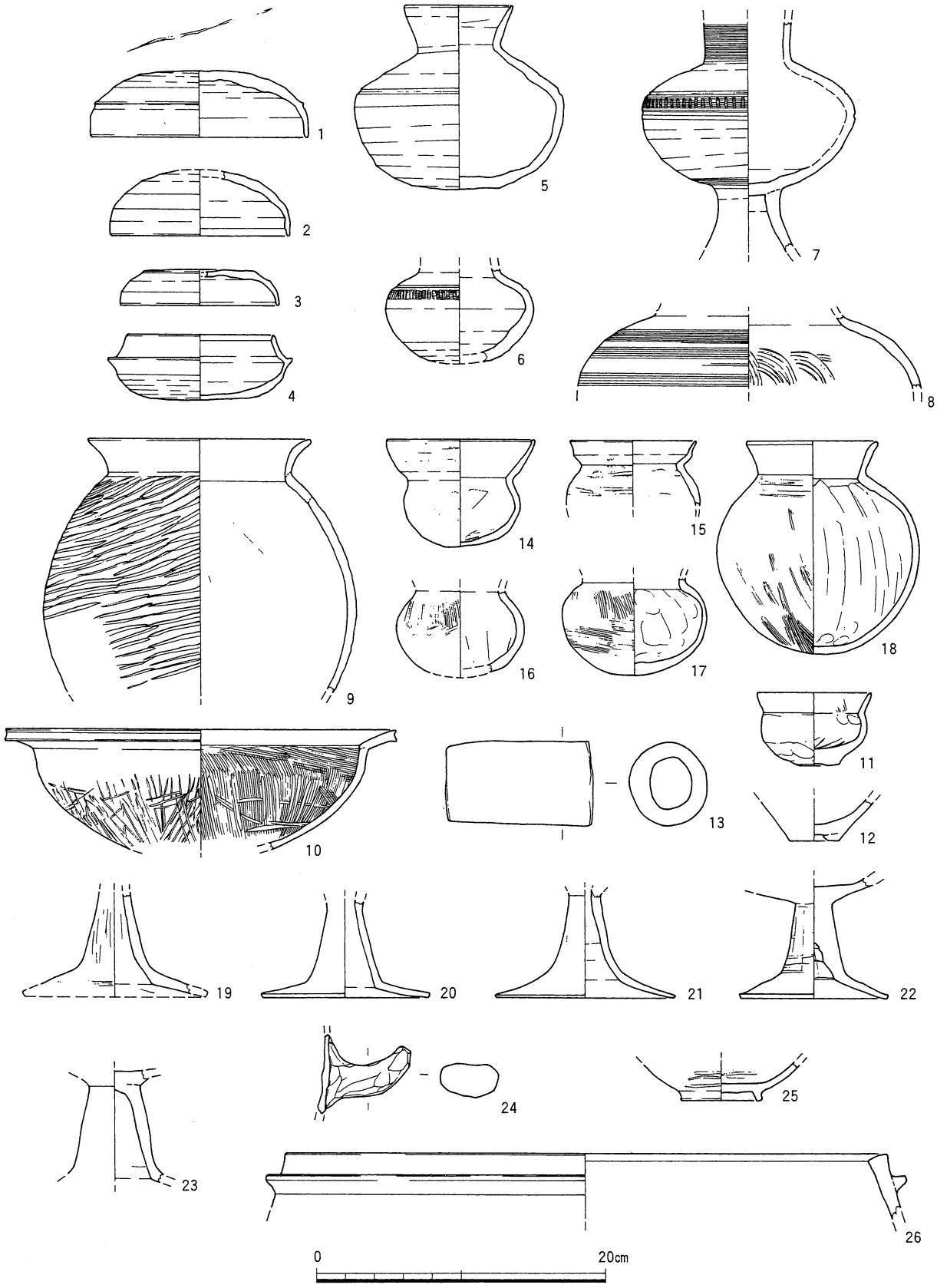
全体に30～80cmの盛土があり、その下に旧耕土が認められる。床土と黄灰色シルトの下層が包含層である。トレンチによって色調・土質に変化はあるものの15～30cmの厚さがある。土器の包含量は濃密である。古墳時代前期から後期の遺物である。その下が遺構面となる黄灰色極細砂のベース面である。

４．第３次本発掘調査の経過

第2次確認調査の結果、新庁舎建設予定地全域に遺跡が広がっていることが明らかとなり、翌年度の平成12年度に本発掘調査を実施することとなった。

調査は2000年６月20日に現地で測量用の杭打ちを行い調査に着手した。当初の予定では全体を一気に調査するつもりでいたが、排土置場の都合から、東西に分割して調査を行わざるを得なくなった。調査区内に存在した土塁状の盛土を場外搬出したのち、東半から調査を実施した。９月６日に空中写真撮影を行い、９月９日に現地説明会を実施、断ち割り作業などを行って東半の調査を終了した。

引き続き西半に仮置きしていた排土で東半を埋め戻し、西半の機械掘削を行った。西半の方が遺構の密度は低いものの、包含層は厚く予想以上に手間取った。10月27日に空中写真撮影を行い、図化作業を行ったのち断ち割り作業や後片付けを行い、11月13日に撤収し、調査を終了した。調査面積は2,380㎡である。包含層の密度は濃く、土器量は面積の割に多い遺跡であった。遺構密度も高く、掘立柱建物跡18棟、井戸７基の他に、多数の溝・土坑・ピットを検出している。



第３図　若王寺遺跡 第１次調査他出土土器（「摂津加茂遺跡を守った」2005から）

第４図　調査区位置図

調査の組織

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

		所長	寺内幸治
		副所長	大村敬通
	企画調整班	調査専門員	山本三郎
		主査	吉識雅仁
			稲田　毅
	総務課	課長	森　俊雄
	調査第４班	調査専門員	西口和彦
調査担当	調査第４班	主査	渡辺　昇
		臨時技術職員	川村慎也
	調査参加者	前田陽子・永野　香・上山雅代・山川かおり・宮永秀和	

作業委託　株式会社野原建設工業

５．第４次本発掘調査の経過

第3次本発掘調査の終盤時に調査区北側に追加工事が行われることが明らかとなった。そのため、若王寺遺跡発掘調査工事その２として247㎡の小面積の本発掘調査を実施した。新庁舎に関連する配電施設建設などに伴う調査である。調査区が不定形であることから、４つの区画に分けて実施した。調査方法は第３次調査と同じく盛土・近現代の耕土を機械掘削し、その下を人力で行った。調査は12月12日から26日までの12日間を費やして行った。調査の組織・担当者は第3次本発掘調査と同じである。

作業委託　株式会社飛島建設

６．第５次立会調査の経過

第３・４次本発掘調査による新庁舎建設後、新たに電気関連施設等の掘削を伴う工事が予定されたので、第4次調査として主に工事実施にあたって立会調査を実施した。第３・４次調査区周辺のライフラインに伴う配管工事部分である。調査地区は狭長で狭いところは幅30㎝の地区も存在した。約280㎡を調査対象としたが、十分な成果を挙げることはできなかった。既設管の付け替えなども多々あり、包含層の有無を確認した程度である。ただ、東側については徐々に低くなっており、遺跡の中心部から離れていくことが看取された。調査は2001年７月から９月まで断続的に行い、実働９日間を費やした。兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が調査主体となり、独立行政法人産業技術総合研究所関西センター尼崎事業所からの依頼で調査を実施した。調査は工事施工に合わせて断続的に実施した。調査は吉識雅仁・渡辺　昇が担当した。

７．第６次本発掘調査の経過

平成12年度に同地の電総研大阪開発交流センター新設工事に伴って本発掘調査（第３次調査）を実施し、新たな成果を得たが、今回新たに排水施設と電気関係施設の建設計画が上がったので、その範囲について本発掘調査を実施することとなった。調査地区が２ヶ所あることから、西区・東区と呼称する。

今年度の調査についても独立行政法人産業技術総合研究所関西センター尼崎事業所管理監からの依頼により調査を実施した。第4次本発掘調査よりもさらに狭い70㎡が調査対象である。東側８㎡部分はすでに建物基礎などで掘削されており、遺構面は残っていなかった。西側62㎡について調査を行った。調査は2004年５月10日から20日までの実働８日間を費やした。

調査の組織

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

		所長	平岡憲昭
		主幹	輔老拓治
	企画調整班	主査	中川　渉
	調査第１班	調査専門員	吉田　昇
調査担当	調査第１班	主査	渡辺　昇

作業委託　安西工業株式会社

８．整理調査の経過

整理作業は、発掘調査段階から順次行っていた。若王寺遺跡現場事務所で水洗い作業と台帳作成の一部を実施した。それ以降の作業を平成13～17年度の５ヵ年に渡って兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。平成13年度は水洗いと注記作業を、平成14年度は接合・補強と実測・拓本作業の一部（主に木器）を行い、井戸枠の一部を元興寺文化財研究所に委託して保存処理を実施した。平成15年度は実測・拓本作業の大半と復原作業ならびに木器の保存処理を、平成16年度は金属器の実測と写真撮影・写真整理・図面補正までと金属器の保存処理を行い、平成17年度はトレース作業・レイアウト・原稿執筆と報告書刊行を行った。

整理調査は、渡辺が担当した。保存処理については整理保存班　主査　藤田　淳・中村　弘（木器）、主任　岡本一秀（金属器）が担当した。

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

		13年度	14年度	15年度	16年度	17年度
	所長	大村敬通	藤本修三	平岡憲昭	平岡憲昭	平岡憲昭
総務課	課長	森　俊雄	森　俊雄	織田正博	織田正博	大西義明
整理保存班	主任調査専門員	池田正男	池田正男	池田正男	池田正男	池田正男
	主査	岡田章一	村上泰樹	村上泰樹	村上泰樹	森内秀造
	主査		菱田淳子	菱田淳子	菱田淳子	菱田淳子

調査担当

主査　渡辺　昇

調査参加者（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　嘱託員）

平成13年度

長谷川洋子・伊藤ミネ子・衣笠雅美・江口初美・家光和子・川上　緑・渡辺二三代

平成14年度

八木和子・前山三枝子・宮田麻子

平成15年度

増田麻子・友久伸子・津田友子・加藤裕美・又江立子・小野潤子・吉田優子・眞子ふさ恵・石野照代・中田明美・西野淳子・蔵　幾子・大仁克子

平成16年度

友久伸子・津田友子・加藤裕美・又江立子・小野潤子・吉田優子・眞子ふさ恵・西口由紀・島村順子・石野照代　中田明美・蔵　幾子・大仁克子・木村淑子・前田千栄子・宮野正子・河上智晴・奥野政子・岡田祥子・早川有紀

平成17年度

友久伸子・津田友子・豊田貞代・久保昭夫

保存処理担当

栗山美奈・三好綾子・藤井光代・三島重美・豊田貞代・森田美穂

作業風景

現地説明会

Ⅱ　若王寺遺跡の位置と周辺の遺跡

若王寺遺跡は、尼崎市若王寺３丁目に位置する古墳時代の集落跡である。JR尼崎駅北東1.7㎞にあり、現在の海岸線から6.2㎞離れている。尼崎市の中では北部になるが、遺跡の大きな特徴として海岸線に近いことである。それは猪名川沿いに内海が広がっており、東方１㎞未満に汀線があったと思われる。尼崎市は大阪平野西側に位置しており、猪名川・武庫川によって形成された低地・沖積地である。以前は、国道２号線付近までが弥生時代の海岸線と考えられていた。さらに等高線の５ｍラインから上が安定した地域とされていたが、遺跡の存在からは細かい地形の変化があったことが明らかになっている。伊丹台地から南側に猪名野古墳群そして塚口古墳群が位置し、その延長上に遺跡が存在している。現在のJR福知山線沿いが安定した地域であったことが理解できる。そして猪名川沿いに大きく海が入っており、若王寺遺跡は市域の北部であるにもかかわらず、海に面するくらい比較的海岸線に近い位置を占めている。

周辺は遺跡の稠密地帯である。伊丹段丘から下りてくる猪名川（藻川）右岸地域には御願塚古墳・天狗塚古墳（南清水古墳）・大塚山古墳・池田山古墳・御園古墳そして若王寺遺跡北西の伊居太古墳と前方後円墳が続いている。その部分は古墳時代から奈良時代の遺跡が多く営まれているが、河川周辺には弥生時代の遺跡が多く認められる。兵庫県では明石川流域とともに尼崎市域は弥生時代の遺跡が多いのが特徴である。

旧石器時代の遺跡は確認されていない。近隣では川西市加茂遺跡や芦屋市朝日ケ丘遺跡で調査されており、遺物としては採集資料を含めて山麓から丘陵上で確認されている。伊丹台地の高い部分にしか生活の痕跡が確認されていない。加茂遺跡と豊中市蛍ケ池北遺跡・柴原遺跡で国府型ナイフが知られている。続く時期の有舌尖頭器も川西市花屋敷遺跡、豊中市野畑遺跡から出土している。

縄文時代になっても尼崎市では調査例が少ない。藻川川床遺跡や田能遺跡・上ノ島遺跡などで晩期の土器が遺構面からまとまって出土している。若王寺遺跡でも以前の調査で１点だけ出土している。遺物としては後期のものが猪名庄遺跡などで出土している。隣接する伊丹市域に入ると遺跡は確認されるようになる。僅かの標高差が関係しているようである。沖積地の大阪空港A遺跡・森本遺跡・原田西遺跡で中期の土器が、大阪空港B遺跡・森本遺跡で後期の土器が出土している。伊丹台地から上になると、明確な遺構が検出されている。有岡城跡・伊丹郷町遺跡下層で中期から後期の土器が土坑と共に確認されており、川西市加茂遺跡では後期の土器棺墓が調査されている。晩期になると伊丹市口酒井遺跡で時期幅を持って土器が出土し、籾痕の残った浅鉢など、農耕文化のはじまりの論争に重要な役割を果たしている。周辺の田能遺跡・森本遺跡でも晩期の突帯文土器が出土し、弥生前期につながっている。豊中市では中期に野畑遺跡で住居跡が、野畑春日遺跡で墓跡が確認されている。

弥生時代になると遺跡は急激に増加する。小河川である庄下川流域の上ノ島遺跡では縄文晩期の突帯文土器から弥生前期にかけての土器が出土している。前期の単純遺跡として指標的な遺跡で弥生の開拓ムラとして理解されている。このような小河川沿いに前期の遺跡は営まれはじめると考えられていたが、武庫川流域の東武庫遺跡でも前期の遺構が確認された。方形周溝墓が検出されており、朝鮮半島から持ち込まれた無文土器が出土したことで知られている。２遺跡の中間にあたる武庫庄遺跡では震災復興調査で大型の独立棟持柱を有する掘立柱建物跡が調査された。柱の年輪年代学と放射性炭素の分析から絶

対年代（BC54±20）が提出されている遺跡である。調査は昭和40年代から継続して行われており、中期の大集落であったことが看取される。上ノ島遺跡の南側には庄下川川床遺跡が存在する。前期の土器は市内では、北裏遺跡・栗山庄下川遺跡・猪名川川床遺跡・猪名庄遺跡でも出土している。阪神間でも最近の調査で西宮市北口遺跡や芦屋市六条遺跡・神戸市本山遺跡で遺構が検出されており、前期の遺跡の広がりが明確になってきた。

尼崎を代表する遺跡である田能遺跡は猪名川左岸の伊丹市との境界部分に位置する。弥生時代を通しての集落で、西摂津の母集落の１つである。遺構も墓・住居跡・水田と各時代各種の遺構が検出されている。遺物も多種多様で西摂の指標となる遺跡である。伊丹市になるが西に接する口酒井遺跡は農耕のはじめを考えるのに重要な遺跡で、縄文晩期の土器（浅鉢）に籾痕が付いている。中期は断絶するが後期に再び生活をはじめている。田能遺跡の北東にある原田西遺跡も歴代遺跡で中期に大規模な墓域を有している。兵庫県では木棺そのものが残存していた最初の例である。その北側の岩屋遺跡では前期の井堰が調査されている。大阪空港を隔てた北東部には豊中市勝部遺跡が位置している。田能遺跡と同様に前期からの大集落で拠点集落である。田能遺跡と異なるのは、後期まで継続せず、後期には遺跡が拡散することである。中期から後期にかけて利倉遺跡・上津島遺跡・島田遺跡・蛍ケ池北遺跡・新免遺跡・穂積遺跡など多数の遺跡が豊中市域で拡大していく。池田市では宮ノ前遺跡が拠点集落である。兵庫県側では、河口付近から台地上にこの時期から上がっており、川西市加茂遺跡が大規模な防御機能を持つ拠点集落になる。台地下にある栄根遺跡も中期から継続し、尼崎市の北裏遺跡・東武庫遺跡・武庫庄遺跡・猪名寺下層遺跡などと隣接する伊丹市大阪空港A遺跡・原田西遺跡がある。

後期になると遺跡は減少する。田能遺跡は継続するが、大半の遺跡は廃絶し新たな遺跡が展開する。その１つが若王寺遺跡で、他に中ノ田遺跡・東園田遺跡・西ノ坪遺跡・善法寺遺跡がある。この時期の西摂地域の特徴として高地性集落がある。六甲山塊から長尾山にかけての西摂平野縁辺部に集中する。代表例は芦屋市会下山遺跡、西宮市五ケ山遺跡である。神戸市では金鳥山遺跡・保久良山遺跡・荒神山遺跡・伯母野山遺跡があり、桜ケ丘銅鐸出土地との関係でムラからクニへの論議がなされている地域である。青銅器は尼崎市では田能遺跡出土の銅釧・銅鏃だけである。銅鐸も山麓部では桜ケ丘遺跡をはじめ多数確認されているが、低地では伊丹市中村遺跡から外縁付紐式銅鐸が出土しているだけである。豊中市利倉遺跡からは銅鐸の耳だけが出土している。

古墳時代になると、はじめは猪名川左岸の豊中市で桜塚古墳群が造営され、遅れて右岸の猪名野古墳群が築かれる。桜塚古墳群は前期から中期にかけての古墳群で、前方後円墳である大石塚古墳・小石塚古墳・御獅子塚古墳と円墳の大塚古墳・南天平塚古墳の５基が現存するが、明治期の絵図によると36基の古墳が存在しており、それ以上の大規模な古墳群であったことが想像される。大石塚古墳・小石塚古墳が埴輪から前期末とされており、他は中期の古墳である。周囲から埴輪円筒棺も検出されている。この２基の主体部は不明であるが、他の３基は木棺など複数の主体部が確認されている。鏡・甲冑・武具・農耕具と豊富な副葬品を保有している。猪名野古墳群は桜塚古墳群より一段階遅れて構築されたと言われてきたが、最近出土した有岡城跡・伊丹郷町遺跡下層の埴輪は古い時期になりそうで、４世紀末から造墓活動を開始したようである。猪名野古墳群も桜塚古墳同様市街地の中で早くに削平されていたが、５基の前方後円墳が確認されている。尼崎市大塚山古墳・南清水古墳（天狗塚）・池田山古墳・御園古墳と伊丹市御願塚古墳である。大塚山古墳を除いて西面する特徴がある。最近の調査では伊丹市南本町遺跡で埋没古墳が複数確認されており、相当数の古墳があったものと思われる。若王寺遺跡の北西

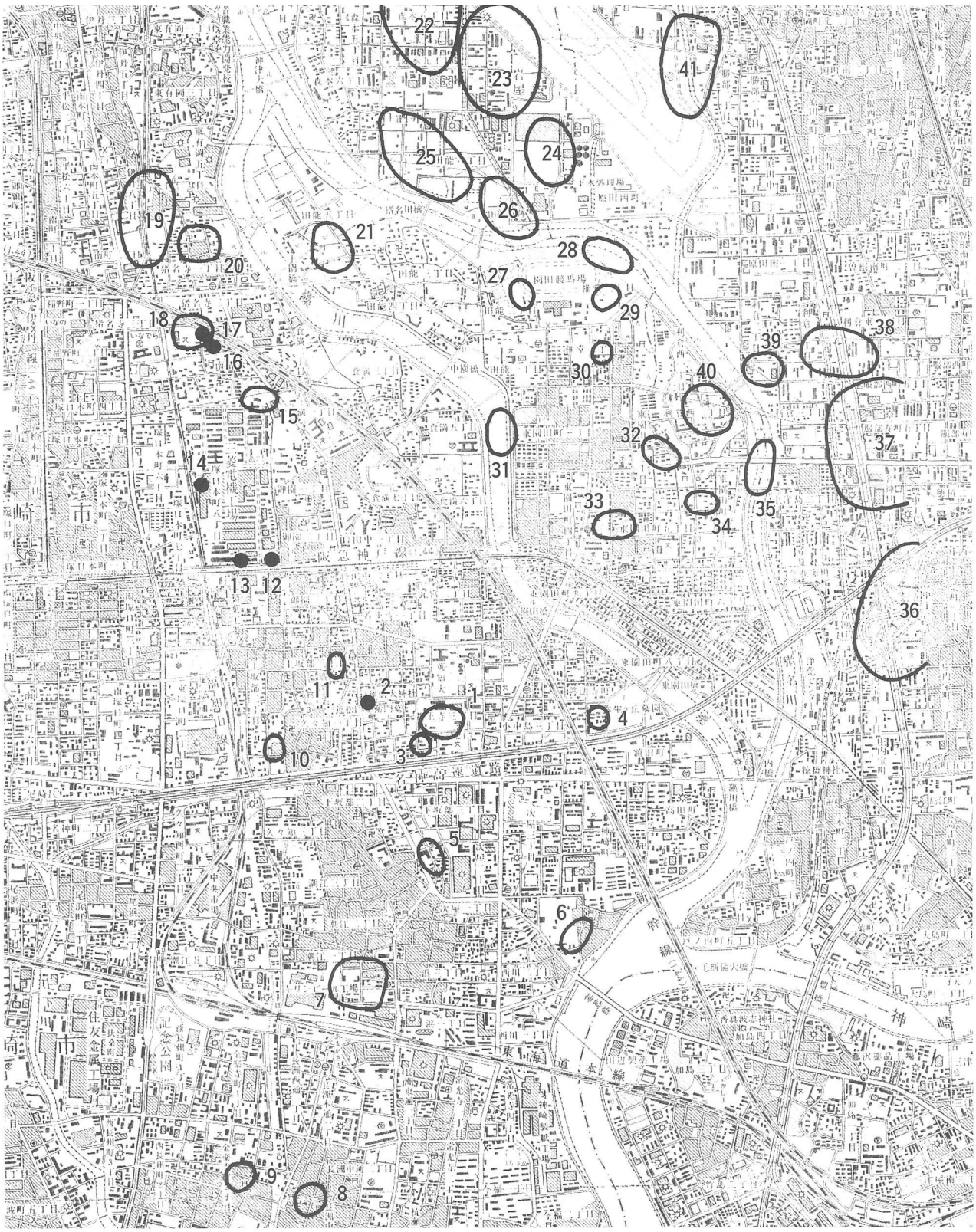
300mのところに南面する前方後円墳である伊居太古墳が中期の古墳とされている。市域最大の古墳であるが、不明な点が多い。周辺部では武庫川左岸に紀年銘鏡を出土した宝塚市安倉古墳が、北側の山塊には宝塚市長尾山古墳・万籟山古墳が、猪名川左岸には池田市池田茶臼山古墳が、猪名野古墳群に先立って構築されている。若王寺遺跡の住民たちはこの時期から生活をはじめ、少量ながらも製鉄作業に従事していたようである。中期には市域では水堂古墳が存在する。粘土槨を内部主体とする円墳である。中期の古墳は少なく、上記以外に伊丹市柏木古墳、西宮市大塚山古墳、芦屋市金津山古墳・打出小槌古墳などである。

後期になると横穴式石室を主体部とする古墳が増加するのが一般的であるが、尼崎市域では現存する古墳はなく、調査でも横穴式石室は確認されていない。後期としては唯一岡院石棺が現存するものである。墳丘は明らかでないが、塚口古墳群は後期まで継続していた。周辺では猪名野古墳群が埋没古墳として南本町遺跡で確認されている。猪名庄遺跡でも埋没古墳が検出されており、削平された小古墳が市域にも多数あったと想定される。尾根上・山麓部には通有の古墳群が認められる。芦屋市八十塚古墳群、西宮市五ケ山古墳群・老松古墳群、宝塚市長尾山古墳群などである。若王寺遺跡は6世紀に遺跡の中心を有する集落遺跡で古墳痕跡も確認している。集落遺跡としては若王寺遺跡以外に下坂部遺跡・東園田遺跡・深田遺跡・道ノ下遺跡がある。

奈良時代になると、畿内の一部であることからも荘園開発がさかんになる。東大寺領猪名庄を代表として、市域に荘園が広がっていくようになる。猪名庄遺跡は潮江字東大寺に位置する初期荘園遺跡で、第31次調査によって荘所が明らかにされた代表的な初期荘園遺跡である。倉庫と荘所の一部、それに付随する井戸が検出されている。東側に大畦畔があり、それによって水田化を進めている状況が明らかになった。当時の景観を想定でき、その状況を彷彿とさせる遺跡である。下層には古墳や弥生時代末からの濃密な包含層があり、この部分が古墳時代にも中心地であったことが窺える。それを利用して荘園開発を進めていったものと思われる。初期須恵器・韓式土器も多く出土している。また、中世まで継続しており、鎌倉時代の終わりまで大きな集落であったようである。掘立柱建物跡やそれを巡る堀、井戸・土坑が検出されている。１基の井戸から蘇民将来札が出土している。豊中市小曽根遺跡や宝塚市安倉遺跡でも出土している。

集落は中ノ田遺跡・松ケ内遺跡・東武庫遺跡・上ノ島遺跡がある。官衙関連遺物である石帯・緑釉陶器が出土している。寺院は猪名寺廃寺が市域北端の猪名野古墳群に接して造営される。法隆寺式の伽藍配置を採る。伊丹台地上には伊丹廃寺が、猪名川左岸には新免（金寺）廃寺が、武庫川西側には芦屋廃寺が築かれる。伊丹廃寺は平安時代に再建され、その時の瓦窯跡が金堂基壇から検出されている。猪名寺廃寺の西側に近接する南本町遺跡からは奈良時代の周りに溝を巡らせた掘立柱建物跡と墨書土器を埋納した井戸が検出されている。市内では前記した猪名庄を最古として橘御園・潮江荘・長洲荘など荘園が数多く設置され、その関係の遺跡も多々あろうかと思われるが明らかにはされていない。平安時代の遺跡は長洲浜に多い。金楽寺貝塚・石ノ戸遺跡・辰巳橋遺跡・小田遺跡が点在する。猪名庄遺跡も東大寺領としてこの地域も寺領の一部であるとして、鴨社領長洲御厨との土地争いの争論があったが決着がつかなかったようである。

中世になると遺跡数は増加する。海岸線は、ほぼ現在と同じであろうと推定され、荘園に比定されている地域も多い。特に注目される遺跡は大物遺跡である。大物浦に関連する遺跡と考えられ、古代から近世にかけての港湾施設の状況が推測される。各地からの搬入品が多くみられる。大物遺跡の北側には

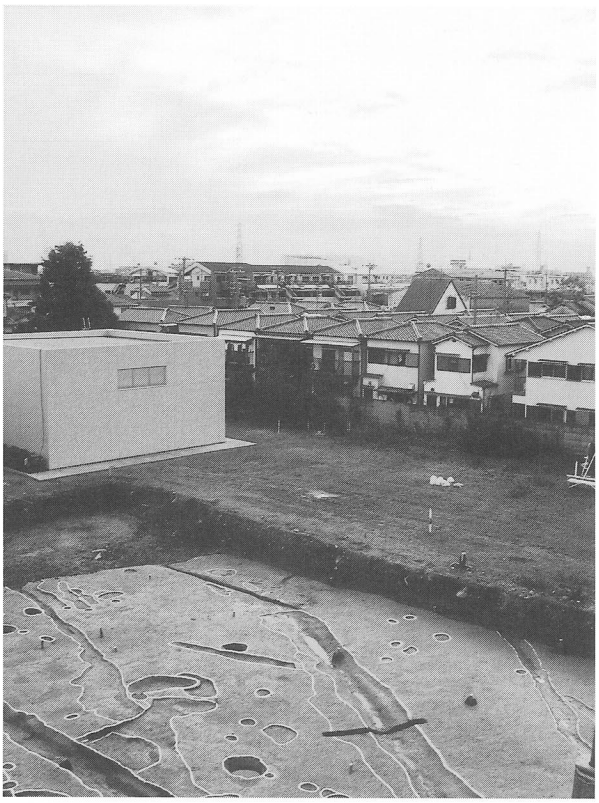


第５図　周辺の遺跡位置図　　S＝１：25,000

1.若王寺遺跡　2.伊居太古墳　3.二ノ坪遺跡　4.善法寺遺跡　5.下坂部遺跡　6.猪名庄遺跡　7.西川遺跡　8.石ノ戸遺跡
9.金楽寺貝塚　10.川崎遺跡　11.伊佐具神社遺跡　12.岡院石棺　13.御園古墳　14.池田山古墳　15.松ヶ内遺跡　16.南清水古墳
17.大塚山古墳　18.中ノ田遺跡　19.南本町遺跡　20.猪名寺廃寺　21.春日神社遺跡　22.森本遺跡　23.岩屋遺跡　24.原田西遺跡
25.口酒井遺跡　26.田能遺跡　27.田能高田遺跡　28.猪名川川床遺跡　29.園田競馬場遺跡　30.大西遺跡　31.藻川川床遺跡
32.東園田遺跡　33.深田遺跡　34.西浦遺跡　35.上津島川床遺跡　36.島田遺跡　37.上津島遺跡　38.利倉南遺跡　39.利倉遺跡
40.利倉西遺跡　41.勝部遺跡

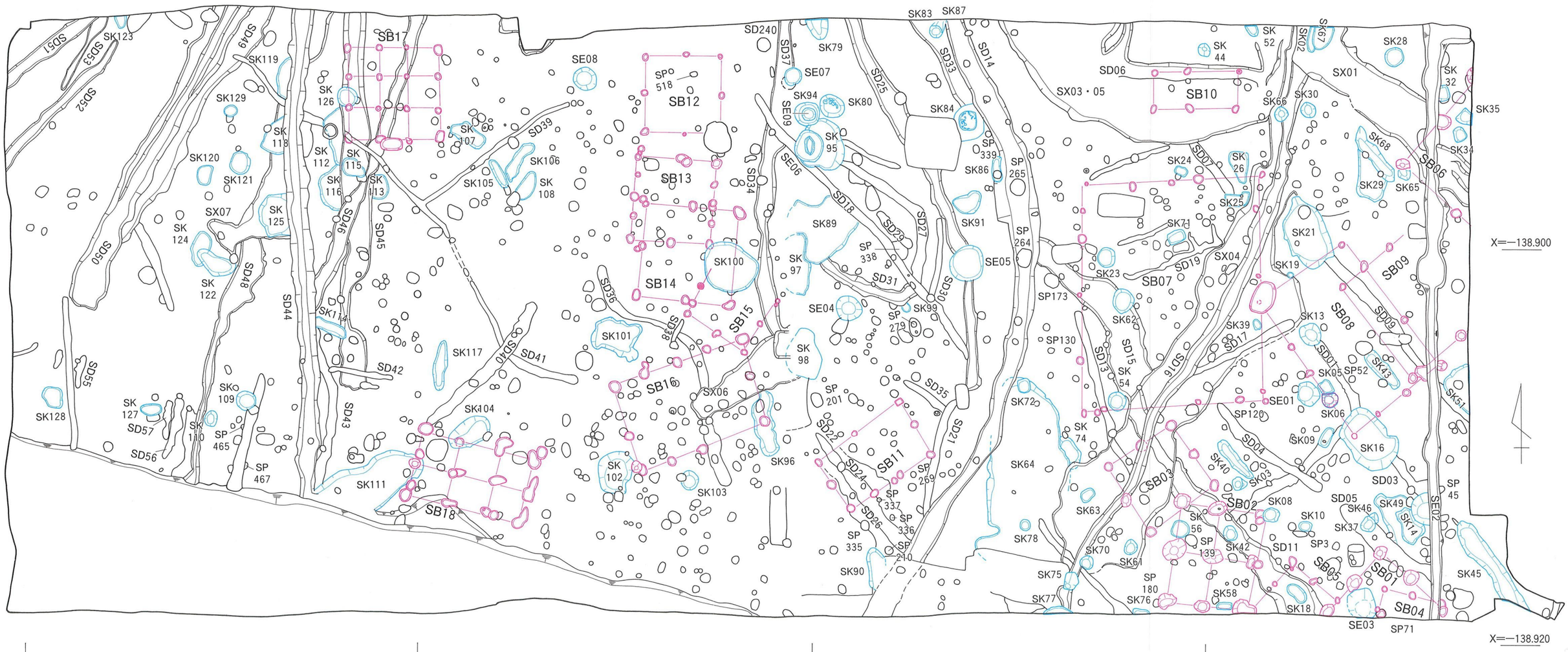
前記した長洲浜の金楽寺貝塚などの遺跡と栗山庄下川遺跡・道ノ下遺跡・長ノ手遺跡・深田遺跡などがある。中世城館として富松城跡・塚口城跡（塚口御坊）と伊丹氏が築いた伊丹市有岡城跡がある。有岡城跡は荒木村重によって再築城され近世城郭への端緒となっていく。

近世では、有岡城跡や尼崎城が築城される。一国一城令によって破棄された有岡城跡とその城下は伊丹郷町として繁栄していく。継続的な発掘調査が実施され、酒造業を中心に近世の町屋の代表例として重要である。

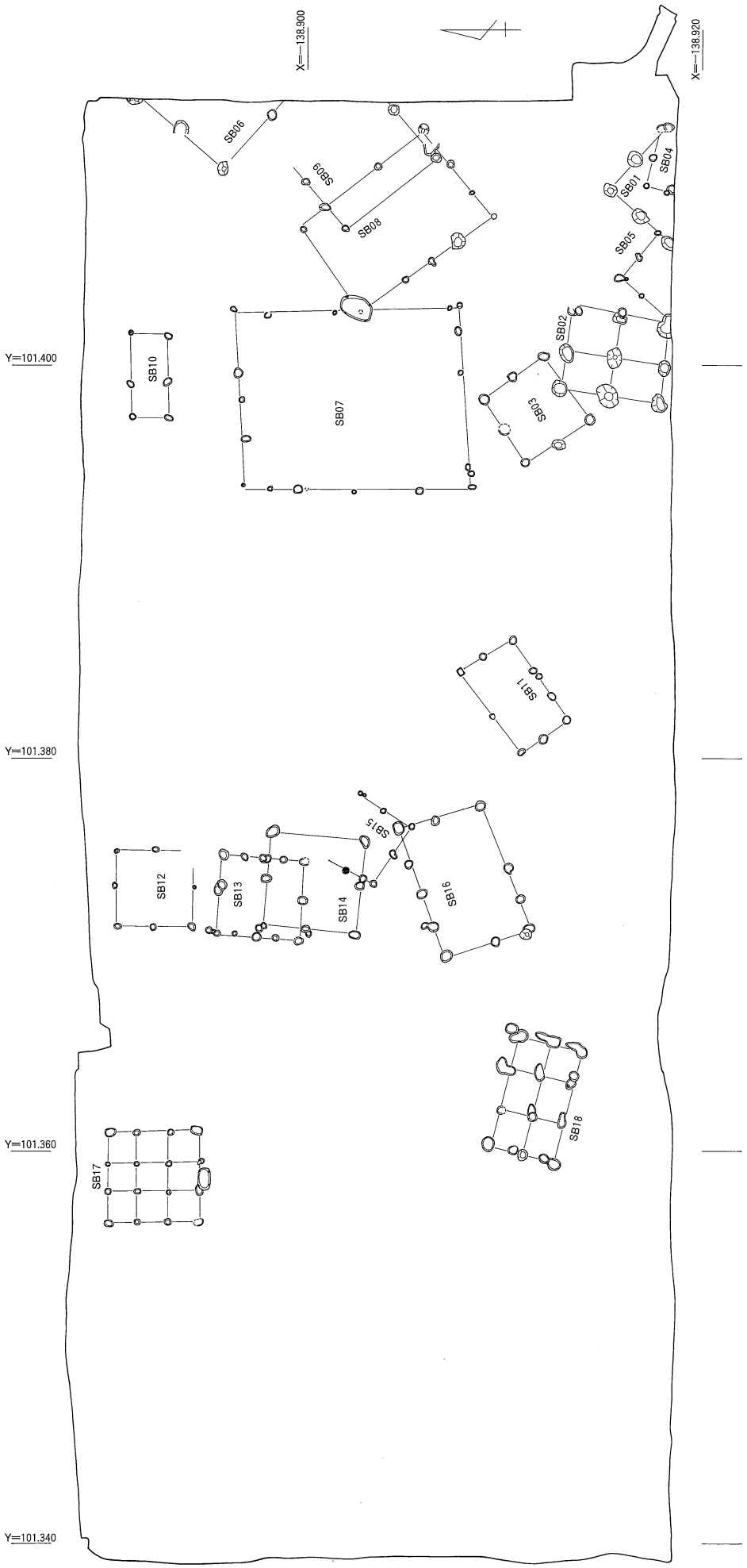


調査区

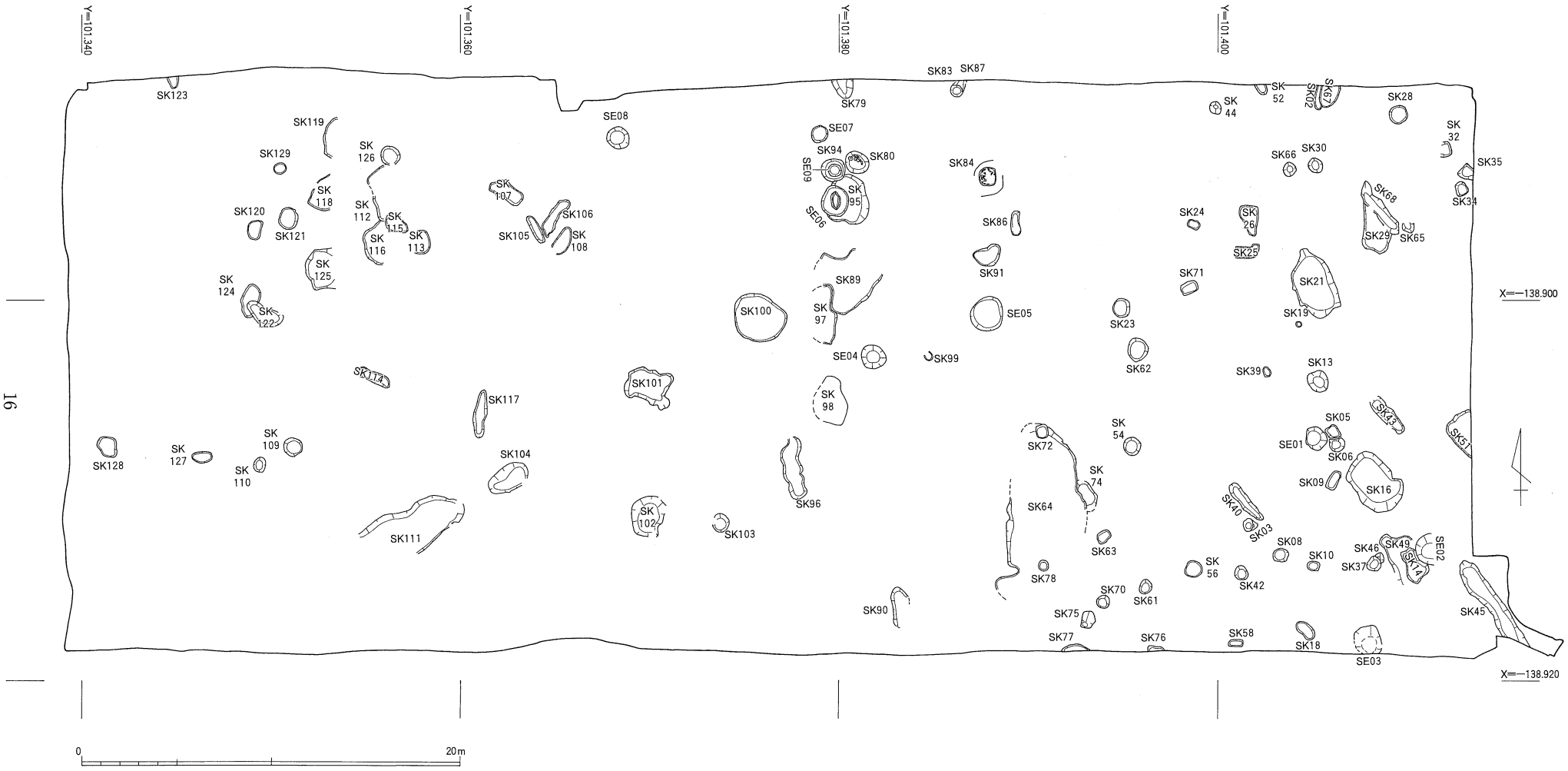
現地説明会



第 6 図　若王寺遺跡　第 3 次本調査遺構平面図



第７図　掘立柱建物跡配置図


Y=101.340
Y=101.360
Y=101.380
Y=101.400
X=−138.900
X=−138.920
SK123
SK119
SK129
SK126
SK118
SK120
SK121
SK112
SK115
SK116
SK113
SK125
SK124
SK122
SK114
SK117
SK128
SK127
SK109
SK110
SK104
SK111
SK107
SK106
SK105
SK108
SE08
SK101
SK102
SK103
SK100
SK97
SK98
SK96
SK89
SE04
SK99
SK79
SE07
SK94
SK80
SE09
SK95
SE06
SK83
SK87
SK84
SK86
SK91
SE05
SK72
SK54
SK74
SK64
SK63
SK78
SK90
SK75
SK77
SK70
SK61
SK76
SK58
SK56
SK42
SK18
SE03
SK23
SK62
SK71
SK24
SK26
SK25
SK44
SK52
SK02
SK67
SK28
SK66
SK30
SK32
SK35
SK34
SK68
SK29
SK65
SK21
SK19
SK39
SK13
SK05
SE01
SK06
SK09
SK16
SK43
SK51
SK40
SK03
SK08
SK10
SK46
SK49
SK37
SK14
SE02
SK45
0
20m

第８図　土坑配置図

Ⅲ　調査結果

（1）第３次本発掘調査の結果

１．調査概要

2,380㎡の本発掘調査の結果、調査区南西部の池によって遺構が存在しない部分以外は、ほぼ全域に遺構が検出されている。その密度は非常に高く、県下の遺跡では第１級のものになろうかと思われる。

若王寺遺跡は古墳時代前期から後期にかけての集落遺跡であり、さらに製鉄に携わった集落として特徴的である。検出した遺構は、掘立柱建物跡14棟、井戸８基、古墳１基と柵跡数条、そして多数の溝・土坑・ピットである。大半の遺構は古墳時代後期に属するものである。

基本層序は、盛土下に部分的に旧耕土があり、その下に灰褐色細砂、そして包含層である黒褐色細砂層があり、地山となっている。包含層はやや淡いものや、地山ブロックを多く含む層と、黒色に近い層に細分される。概ね古墳時代後期の遺構は黒色から褐灰色の地山ブロックを僅かに含む層で、古墳時代前期は地山ブロックをあまり含まない黒色層である。

２．掘立柱建物跡

SB01（図版８・９）

A-７・８区に位置しており、SP07、SK01、SK11、SK12、SK20で構成される。２間×２間以上の掘立柱建物で、１間はどちらも２ｍである。現状では４×４ｍ以上の建物となる。調査区外へ延びるため床面積や規模は不明である。柱穴は１ｍ近い大型のもので、深さも80㎝前後を測る。大半の柱穴は柱を抜き取っており、柱痕跡を下部でしか確認することはできなかった。主軸方向は北東－南西方向（N45°E）で、SB05・06と同じである。

埋土はSP07のみが地山ブロックを含む埋土で、他の遺構はほとんど含まないが色調は褐灰色である。

出土遺物

須恵器・土師器の小片が出土している。

SB02（図版８・９）

A-６・７区に位置し、SK04、SK15、SK22、SK47、SK50、SK53、SK57、SK59、SK60で構成される。いずれも直径が１ｍ前後を測る土坑からなっている。現況では２間×２間の総柱構造を持つ掘立柱建物を確認している。南（調査区外）へ続く可能性がある。

埋土は地山ブロックを多く含むC埋土のものが中心となる。主軸方向はSB01に比べると南北に近いN18°Eで、SB04と似た方位を示している。柱間は約２ｍで、柱穴の規模は最大径で1.2ｍを測る大型のものである。柱はSB01と同様に抜き取っており、下部でのみ柱痕跡を検出している。

出土遺物（図版122･123；**１～３**）

柱　穴から古式土師器が出土している。１は壺の底部、２・３は甕の底部である。

SB03（図版10･11）

A・B-６区に位置する掘立柱建物跡で、２間×２間の側柱建物である。SB01･02と同様に１間２ｍを測る。東辺のみ柱痕跡を確認しているが、他辺の柱は抜き取られている。

主軸方向はN65°EでSB01・02とは異なっている。SB08･09・15と同じ主軸方向を持つ。埋土は淡い

色調のもので、地山ブロックを多く含んでいる。

SB04（図版10･11）

A-7・8区に位置する掘立柱建物跡で、SB01と切り合い関係にある。現況では2間×1間以上の建物で、東西方向は南の調査区外へ続いている。

埋土は褐灰～黒褐色で、地山ブロックを含む。主軸方向はN20°EでSB02と近い数値である。

SB05（図版12･13）

A-7区に位置する掘立柱建物跡で、SB01・02と切り合い関係にある。現況では2間×2間以上の建物で、南側の調査区外へ続いている。柱穴は他の掘立柱建物跡のものよりも小型で、最大で50cmである。

埋土は褐灰～黒褐色で、地山ブロックを含む。主軸方向はN45°EでSB01と同じ数値である。

SB06（図版12･13）

C-8区に位置する掘立柱建物跡で、SB09と切り合い関係にある。東西方向は1間で南北方向は2間確認されており、東側の調査区外へ続いている。現況では2間×1間以上の建物である。

埋土は褐灰～黒褐色で、地山ブロックを含む。主軸方向はN40°Eである。

SB07（図版14･15）

B･C-6・7区に位置する平面規模の大きな掘立柱建物跡である。SB08と接しており、北側にSB10が位置している。東西方向は3間、南北方向は4間で、柱間は広い。ただし柱穴の規模は小さく、径30cm前後である。

埋土は黒色～黒褐色で、地山ブロックを含まない。主軸方向はN2°Wとほぼ南北方向に主軸を持つ。柱痕跡は認められず、柱は抜き取られている。

SB08（図版16･17）

B-7・8区に位置する掘立柱建物跡で、SB09と切り合い関係にあり、SB07と接している。東西方向は3間で南北方向は4間である。

埋土は褐色～暗褐色で、地山ブロックを含まない。主軸方向はN60°EでSB03に近い数値である。

SB09（図版16･17）

B･C-7・8区に位置する掘立柱建物跡で、SB06・08と切り合い関係にある。東西方向は2間以上で、東側調査区外へ続いている。埋土は褐色～暗褐色で、地山ブロックを含まない。主軸方向はN58°EでSB03に近い数値である。

平面内にSK07があり、土師器壺が据えられていた。甕口縁部で蓋をしており、土器棺と思われる。

出土遺物（図版122･123；**4～7**）

SK07より土師器壺・甕口縁部（4・5）、P13より小型器台（6）、SP107より高杯杯部（7）が出土している。

SB10（図版18･19）

C-6・7区に位置する掘立柱建物跡で、1間×2間の小型の建物である。柱穴も径30～45cmと小さいが、礎板を敷いている柱穴があり、特徴的である。

埋土は褐色～暗褐色で、地山ブロックを含まない。主軸方向はN2°Eとほぼ南北を向いている。

SB10は埋没古墳（SX05）の墳裾に位置しており、古墳との関連が想定される。古墳の周濠部分にあたり、土層の検討から、古墳造営時の建物であると思われる。その上に遺物層があり、SX05出土遺物として取り上げている。

SB11（図版18･19）

A･B-5区に位置する掘立柱建物跡で、2間×2間の小型の建物である。南北2間であるが柱間が1.6mと狭くなっている。柱穴は径40～60cmとさほど大きくない。

埋土は褐灰色～暗褐色で、地山ブロックを含む。主軸方向はN62°EでSB03に近い数値を示す。

SB12（図版20･21）

C-4区に位置する掘立柱建物跡で、2間×2間の正方形の建物である。1間2mで、南東隅は撹乱坑によって欠いている。柱穴の大きさには差があり、径30～70cmと変化がある。柱は抜き取られている。

埋土は褐灰色～灰色で、地山ブロックを少量含む。主軸方向はN2°Eとほぼ南北を向いている。

SB13（図版20･21）

C-4区に位置する掘立柱建物跡で、SB12の南側に位置している。2間×4間の建物である。柱間は梁行き方向が1間2mで、桁行き方向は1間1mである。柱は痕跡を確認したものもあるが、抜き取られているものもある。

埋土は褐灰色～灰色で、地山ブロックを少量含む。主軸方向はN4°Eと南北に近い値で、北側に近接するSB12と並んでいた可能性が高い。

出土遺物（図版122･123；**8**）

SP347より土師器底部が出土している。

SB14（図版22･23）

B･C-4区に位置する掘立柱建物跡で、SB13・15と切り合い関係にある。2間×2間の側柱建物である。柱間は一定でなく、1間2m～2.5mの幅がある。柱痕跡は確認できず、柱は抜き取られたものと思われる。

埋土は褐灰色～灰色で、地山ブロックを少量含む。主軸方向はN10°Eで南北よりやや東に振っている。

出土遺物（図版122･123；**9**）

SP361より須恵器ハソウが出土している。頸部が短く時期はTK208であろうか。

SB15（図版22･23）

B-4区に位置する掘立柱建物跡で、SB14･16と切り合い関係にある。2間×2間以上の側柱建物である。1間は2mを測る。柱痕跡は確認できず、大半の柱は抜き取られたものと思われるが、柱基部が残存している柱穴もある。

埋土は褐灰色～灰色で、地山ブロックを少量含む。主軸方向はN40°Eである。

出土遺物（図版122･123；**10**）

SP379より土師器壺が出土している。

SB16（図版24･25）

A･B-4区に位置する掘立柱建物跡で、SB15と切り合い関係にある。2間×4間の側柱建物である。南北4.2m、東西6.8mである。梁行は2.6m・1.6mと等間隔ではない。桁行は1間1.7mである。柱痕跡は確認できず、大半の柱は抜き取られたものと思われる。

埋土は黒色～黒灰色で、地山ブロックを少量含む。主軸方向はN60°Eである。

SB17（図版24･26･27）

C-2・3区に位置する掘立柱建物跡で、総柱建物である。3間×3間で柱間は1間1.8mである。柱

痕跡は確認できず、大半の柱は抜き取られたものと思われる。

埋土は褐灰色～灰色で、地山ブロックを少量含む。主軸方向はN２°Eのほぼ南北方向である。

出土遺物（図版122･123；**11**）

SP476より土錘が出土している。中央が僅かに膨らむ管状の土錘である。

SB18（図版28･29）

A-３区に位置する掘立柱建物跡で、２間×３間の総柱建物である。１間1.8mで、柱痕跡は確認できず、柱は抜き取られている。主に柱穴北東側に抜き取りのためのピットが掘られ、斜め方向に抜き取っているようである。

埋土は褐灰色～黒色で、地山ブロックを多く含む。主軸方向はN10°Eである。

出土遺物（図版122･123；**12～14**）

SP424より土師器甕・須恵器甕の口縁部（12･14）、SP421より須恵器甕（13）が出土している。

３．ピット（図版30～37）

掘立柱建物跡には復原できなかったが、多数のピットを調査している。その中には柱基部が残存しているものもあり、確実に柱穴であることが理解される。柱痕跡を確認しているものや、礎板・礎石が残っているもの、柱を抜き取ったものなどある。また、２基並んでいるものもあり、比較的多くの掘立柱建物跡が存在した可能性が高い。特にSP71の現状での径50cmを超える柱や、礎盤を有するピットと、それに本来セットとなった掘立柱建物跡は大型になるものと想定される。SP264・SP265と並ぶ礎盤を伴い、柱穴内に共伴土器を保有している建物は立派なものになろうと推測される。現在確認している以上に6世紀中頃から後半にかけての大型建物が存在していた可能性が高く、若王寺遺跡の評価に影響するものである。

出土遺物（図版124～127；**15～65**、図版256～259；**S5・S24･S28･S31**、図版254･256；**J8･J17**、図版268･269；**W7**）

SP02　須恵器杯蓋（58）が出土している。

SP20　土師器甕（42）が出土している。

SP28　土師器壺の底部（57）が出土している。

SP76　砂岩製の砥石（S28）が出土している。

SP93　土師器鉢（45）が出土している。

SP130　土師器高杯（15･16）が出土している。

SP149　須恵器短頸壺（64）が出土している。

SP153　土師器鉢（50）が出土している。

SP194･195　須恵器壺（65）が出土している。

SP197　布留傾向の甕口縁部（17）、手づくねによるミニチュア鉢（18）が出土している。

SP209　土師器高杯（51）が出土している。

SP217　土師器高杯（52）が出土している。

SP226　土師器底部（53）が出土している。

SP233　須恵器坏身（61）が出土している。

SP240　内湾する体部から屈曲して開く短い口縁部を持つ鉢（19･20）、高杯の杯部（21）が出土して

いる。

SP256　須恵器壺（62）が出土している。

SP264　SP264は大型の柱穴となるもので、SP265とセットになるピットである。礎板であったろう板材も出土している。特徴的なものは土錘が集中している点である。最大長1.2m、深さ0.6mの大きな遺構である。布留系の甕（22～24）、小型丸底壺（25～27）、鉢（28）、高杯杯部（29･30）、土錘（31～33）、須恵器杯蓋（34）、卵形の叩き石（S５）が出土している。

SP265　SP265もSP264と並んだ同一建物になる柱穴である。底に小型丸底壺が置かれ板材が入っている。小型丸底壺（35･36）、砂岩製の砥石（S24）が出土している。

SP291　土師器壺の底部（55）が出土している。

SP333　土師器壺の底部（54）が出土している。

SP339　土師器鉢（46）が出土している。

SP360　土師器の脚部（63）が出土している。

SP383　砥石（S31）・柱根（W７）が出土している。

SP411　土師器甕の底部（56）が出土している。

SP428　土師器甕（43）、壺（49）が出土している。

SP445　土師器高杯（47）が出土している。

SP459　土師器高杯（48）が出土している。

SP482　土師器甕（44）が出土している。

SP499　二重口縁を持つ土師器壺（37）、高杯の脚部（38）、手づくねによるミニチュア鉢（39）、滑石製の双孔円盤（J８）、滑石製臼玉（J17）が出土している。

SP502　土錘が２点出土している。（40･41）

SP503　須恵器坏身（60）が出土している。

SP541　須恵器坏身（59）が出土している。

４．溝

多数の溝を検出している。SD14・16など調査区内を貫いている溝やSD27など製鉄遺構を囲むと思われる溝やSD56・57などの性格不明の短い溝など性格の異なる溝がある。遺跡の面積に比較すると、溝の数が多いのも特徴の１つである。

SD01（図版38･39）

B-７区に位置する溝で、SK16によって切られている。同じくSK16によって切られているSD02及びさらに西側に続くSD10と同じ溝の可能性が高い。SD01だけでは長さ4mを測る。幅30cm、深さ7cmである。直線的な平面形状で、SK16付近で内湾し弧状となる。溝の断面形状は皿状である。

SD02（図版38･39）

A-７区に位置する溝で、SK16とSD04によって切られている。SD01から延びてくる溝の可能性が高い。同じようにSD04に切られているSD10とも同じ溝と考えている。SD02だけでは長さ2.8m、幅は40cm、深さ20cmを測る。直線的な平面形状で、溝の断面形状は半円形である。溝の形状はSD01と比べて深く、形状も異なっている。

SD03（図版38・39）

A-8区に位置する溝で、SK16・SE02によって切られている。SD01から延びてくる溝の可能性も残されているが、SK16付近の形状からは直線的には続かないように思われる。別の溝であるとしたら、切り合い関係のなかでは最も古い時期の遺構となる。直線的に3m延びて、東側に直角に曲がっている。幅30cm、深さ8cmを測り、断面形状は皿状である。

出土遺物（図版128・129；**66・67**）

土師器甑（66）と須恵器杯蓋（67）が出土している。

SD04（図版38・39）

A・B-7区に位置する溝で、SD02・10を切っている。わずかに内湾する溝である。約7mの長さがあり、幅40cm、深さ20cmを測る。断面は逆台形で、溝として深さのあるしっかりした溝である。

出土遺物（図版128・129；**68・69**）

須恵器杯身が2点出土している。

SD05（図版38・39）

A－7・8区に位置する。SD04の延長状に位置しているが、溝の形状は異なっている。直線的に延びるが、幅が1.15mと広い。深さは18cmで長さ6mを測る。

SD06（図版38・39）

C－6・7区に位置する。古墳前面にあたる掘り込み部の溝状になっている部分であるが、溝としてよりも段とした方がいいかもしれない。もしくは埋没過程での埋土の違いかもしれない。一応古墳を画する目的の遺構としておく。南側肩部に須恵器を並べた段がある。直線的に延び、7mの長さを測る。

出土遺物（図版128・129；**J10**）

滑石製の双孔円板が1点出土している。

SD07（図版38・39）

C－6・7区に位置する。北側は古墳周濠であるSX05に切られている。溝の形状は浅い逆台形になっている。ほぼ直線的に延びるが、西側にわずかに内湾している。長さ3.2m、幅35～42cm、深さは6cmを測る。埋土は褐灰色。

SD08（図版40）

C－6区に位置する。SD07北西側に直角に交わる溝で、北東側は古墳周濠であるSX05に切られている。溝の形状は浅い皿状になっている。直線的に延びる。長さ4.2m、幅20～32cm、深さは6cmを測る。埋土は褐灰色。

SD09（図版38・39）

B－7・8区に位置する。北西側はSK21に切られている。溝断面の形状は半円形になっている。ほぼ直線的に延び、南西側調査区外へ続いている。長さ11m、幅45～58cm、深さは20cmを測る。埋土は黒褐色で緻密な土である。地山ブロックは含まない。同じ平面上にある空間を共有するSB08と主軸が同じである。

SD10（図版38・39）

A-7区に位置する溝で、北東側をSD04に、南西側をSD11によって切られている。SD02及びさらに北東側に存在するSD01と同じ溝の可能性が高い。SD10のみでは長さ4、8mを測る。幅45cm、深さは18cmである。肩部には凹凸があるが直線的に延びる。溝の断面形状は半円形である。埋土は灰色。

出土遺物（図版128・129；**70・71**）

土師器甕が出土している。

SD11（図版38・39）

A-6・7区に位置する溝で、調査区外南東側に延びている。西側はSD16・SX04によって切られている。長さ10.8mを測る。箱形の断面で幅50～200cmと幅があり、平均的には60cm前後で、深さ25cmである。南端の幅が最も広くなっている。深さは極端に変化はないが、僅かに低くなっている。直線的な平面形状で、埋土は褐灰色の極細砂である。

出土遺物（図版128・129；**72～74**）

土師器甕（72）・鉢（73）・底部（74）が出土している。

SD13（図版40・41）

B-6区に位置する溝である。主軸方向はN12°Wで、直線的に細くのびている。断面の形状は半円形である。深さは25cm、幅35cmで、長さは9.3mを測る。南側はSD16に切られている。

SD14（図版40・41）

調査区を南北に貫いている溝で、A-5・B・C-5・6区に位置する。調査区外南北両側に延びており、西側を内側にした弧状を示している。幅1.0～1.8m、深さ15～22cmを測る。南北両端の幅が狭く浅く、中央部分が深く幅が広くなっている。同じように調査区を貫いているSD16が東側に存在している。この2条の溝は若王寺遺跡内で性格を分ける意味のある溝と思われる。2条の溝は北側で広くなっており、南側で近づくように流れている。北側での間隔は17.5mで、両者の間に古墳が築かれている。調査区南半では平行して、7mの距離を隔てて近接している。北端の西側には溝がオーバーフローした部分と思われるSD33がある。さらに西側には、SD25が位置している。その南にあるSD21とそのさらに南にあるSD24・22・26を切っている。溝空間内にSP264・SP265の礎板を有するピットがあり、前代の遺構で、溝敷設以前には大型の掘立柱建物跡が存在していたものと思われる。

出土遺物（図版128・129；**75～86・J11**）

出土遺物は小片が多いが点数も多い。土師器甕（75）・高杯（79）・小型丸底壺（76～78）・甑の把手（81）・壺底部（80）、須恵器杯蓋（82）・坏身（83）・甕（85）・鉢（84）、滑石製双孔円板（J11）、土錘（86）が出土している。

SD15（図版40・41）

B-6区に位置するSD13に平行する溝である。弧状を描いており、西側をSD14に、南側をSD16に切られている。主軸方向はN12°Wで、断面の形状は浅い不定形である。北側が幅が狭く浅く、南側にいくほど、幅が広く深くなっている。深さは10cm前後で、幅は2m前後と広い。西側に内湾して8.5mの長さを測る。

出土遺物（図版128・129；**87**）

精製の小型丸底壺が1点出土している。

SD16（図版40・41）

A-6区・B-6・7区・C-7区に位置する溝で、調査区を南北に貫き延びている。北東方向から南西方向に緩やかに弧を描くが直線的である。溝両側に浅い落ち込みSX04があるが、溝が溢れた際のものであろう。北端はSX01に切られているがSX01下面に溝は残っている。中央部分から北側が幅1.0～1.2mと広く、南側が0.6mと狭くなっている。深さは15～28cmを測り、断面形状は半円形である。北側の方が

深く、レベルも低くなっている。

出土遺物（図版130・131；**88～93**）

製塩土器（89）や羽口（93）など特殊な遺物を包含しており、他に土師器高杯（88）・甑の把手（90）、須恵器把手付き鉢（91）、土錘（92）が出土している。

SD17（図版40・41）

B-7区に位置しており、N62°Eの主軸を有する。直線的にのび、細く浅い溝で、西端をSD16で切られている。断面形状は浅く皿形で、幅40cm、深さ6cmを測る。

SD18（図版42・43）

B-5区・C-4・5区に位置しており。N45°～50°Wの主軸を有する。製鉄遺構であるSD27・31を切っているが、東側でSD25に、西側でSE06に切られている。ほぼ直線的に延びており、断面形状は箱形で幅40～60cm、深さ15～25cmを測る。北西にあるSD34も同一の溝である。長さで13.5mを測るが、SD34も含めると17.5mになる。

出土遺物（図版130・131；**94・95**）

須恵器杯蓋2点が出土している。

SD19（図版40・41）

B-6・7区に位置する直線的な溝でSD08・07と一体の遺構かと思われる。製鉄遺構の南辺溝と思われる。直線的に延び両端が北側に屈曲しかけている。5.5mの長さで、主軸はN68°Eである。幅は20～45cmで一定でなく、東側の方が広い。両端が曲がっているが、西側は鈍角で、東側は直角である。ただ、東側は内側の西方向にももう1条平行して同じような溝があることから、外周ではなく別の機能がある可能性が高い。断面形状は逆台形である。

SD21（図版42・43）

A・B-5区に位置するほぼ南北に走る溝で、南側をSD14に切られている。北側も土坑によって切られている。長さ6.5mを測り、断面形状は箱形で、幅30cm、深さ12cmを測る。埋土は黒褐色細砂である。

SD22（図版42・43）

A-5区に位置する溝で、東側にSD24、西側にSD26が存在する。東西の2つの溝はSD22の流れが溢れた際の溝の可能性が高く、一体の溝とも考えられる。主軸方向はN40°Wで南端はSD14に切られている。長さは7.2mを測り、幅は55～78cm、深さは5～18cmである。南側の方が浅く幅が狭い。埋土は褐灰極細砂である。

SD24（図版42・43）

A-5区に位置する溝でSD22の流れの溢れた部分と考えている。平面形状がSD22と同じことがそう考えた大きな理由である。当然主軸方向も同じである。北側は不鮮明になる。幅は最大1.1mである。

SD25（図版42・43）

BC-5区に位置する溝でSD14の西側に同じような弧を描いて存在する。SD14以前の同様な性格の溝の可能性が高い。南のSD21も同じ溝かもしれない。西側を内側にした内湾する溝で、長さ20mを測る。幅は0.6～1.2mあり、北側の方の幅が広く深くなっている。

出土遺物（図版130・131；**96・97**）

須恵器杯身（97）と杯蓋（96）が出土している。

SD26（図版42・43）

A-5区に位置する溝でSD22の流れの溢れた部分と考えている。SD22を挟んでSD24の対極に位置している。当然主軸方向もSD22・24と同じである。北側は不鮮明になることもSD24と同じである。幅は最大0.8mである。

SD27（図版42・43）

B・C-5区に位置する溝で、隅丸方形にめぐる。SD18によって切られている南側のSD31も同じ溝であろう。溝で囲まれた製鉄遺構の一部と思われる。幅45～55cmで、深さ10cm前後である。断面形状は逆台形で、オリーブ黒の細砂が埋土である。

出土遺物（図版130・131；**98～100**）

須恵器杯身と土師器高杯が出土している。

SD28（図版42・43）

C-5区に位置し、SD27の北側にある長さ3.2mの直線的に延びる溝である。西側をSK95に切られている。幅30cm前後・深さ5～10cmの浅く断面が皿状の溝である。

SD29（図版42・43）

B・C-5区のSD27・31で囲まれた製鉄遺構の中にある長さ2.4m、幅40～50cm、深さ10cm前後を測る溝である。SD18の北東にあり、主軸方向もN45°Wと近いもので相互に関連があろうかと思われる。

SD30（図版42・43）

B・C-5区のSD27（製鉄遺構）の外側に沿って弧状に巡る溝である。ただし、SD27を切るSD18を切っているので時期的には最も新しい溝と言え、直接的に製鉄遺構とは関連がない。南北方向に4m延び、幅は30cm前後で深さは10～15cmを測る。断面形状は底の丸い箱状でしっかりしている。

SD31（図版42・43）

製鉄遺構の南辺となる溝である。B-5区に位置し、SD27と一体の遺構である。西側をSK89に切られている。長さ5.3m、幅60～80cm、深さ20cm前後を測る。断面形状は半円形からU字形で、埋土は黒褐細砂である。主軸方向はN60°Wを中心とする。

出土遺物（図版130・131；**101**）

須恵器ハソウが出土している。

SD33（図版42・43）

調査区を南北に通っているSD14の西側のオーバーフロー部分になる可能性が高い。幅2mで、長さ5.4mを測る。

出土遺物（図版130・131；**102～105**）

土師器壺（102・104）・鉢（103）・甕（105）が出土している。

SD34（図版42・43）

C-4区に位置する。SD18の延長上にあり、続く同じ溝と考えられる。長さ2.8m、幅40～60cmを測る。SD37を切っている。

SD35（図版42・43）

B-5区に位置する。N50°Wの方向にのびる。東端はSD21によって切られている。幅50cm前後、長さ2.5mを測る。

出土遺物（図版130・131；**106**）

須恵器杯蓋が出土している。

SD36（図版44・45）

A-4区、B-3・4区に位置する。緩いS字状の平面形態をしており、両端の直線距離は12.5mを測る。幅30～47cm、深さ25～70cmを測り、断面形状も皿状やU字形など部分によって変化がある。埋土は黒褐細砂である。北端で土師器が出土している。

出土遺物（図版130・131；**107・108**）

小型丸底壺（107）、布留甕の特徴を示す甕上半部（108）が出土している。

SD37（図版42・43）

B・C-4区に南北に走るやや大型の溝で、緩くカーブしてSD26に続くものと思われる。長さ16m、幅38～55cm、深さ30cm前後を測る。SD26はSD14に切られているが、両者ともに弧状に調査区を南北に貫いており、同質の性格を有していると思われる。

SD38（図版44・45）

B-4区に位置し、SD36を切っている長さ1.4mの短い溝である。

SD39（図版44・45）

C-3区に位置する主軸をN55°Eに持つ溝である。直線的にのび、長さ9.1m、幅0.9～1.2m、深さ30～58cmを測る。深さ・形状は変則的ではあるが、しっかりした溝である。SD41・47と直角に交わっており、切り合い関係はなく一体の溝と考えられる。

SD40（図版44・45）

B-3区に位置し、北西方向を内側にしてわずかに弧状にめぐる溝である。幅65～82cmとやや幅広で、長さは6.6mを測る。深さは30～60cmで、断面の形状は皿状である。埋土は黒褐細砂である。

SD41（図版46・47）

SD40に切られた形でB・C-3区に位置する溝である。北西に続くSD47も同じ溝と思われる。自然の流れによるものか緩やかにS字状にカーブしている。SD39との接点までをSD41としており、両端の直線距離は12.2mを測る。断面形状も変則的で、部分的に皿状・逆台形・U字形になっている。深さも25～70cmと差が大きい。

出土遺物（図版130・131；**109**）

土師器甕口縁部が1点出土している。

SD42（図版46・47）

B-2区に位置し、東西方向に直線的にのびる。長さ3.2mを測る。幅2.2m、深さは60cmである。断面の形状は浅い皿状である。

SD43（図版46・47）

A・B-2区に位置する溝である。平面は緩くカーブし、両端をSD44に切られている。また、交差するSD42を切っている。両端部の距離は7.4mあり、幅3.5m、深さは70cmを測る。断面の形状は皿状である。

SD44（図版48・49）

2区を南北にほぼ直線的に流れる溝で、南側は池によって切られている。幅0.9～1.4mで、長さ24.8mを測る。調査区を貫いているなかで唯一直線の溝である。主軸方向はN3°Wである。深さは最大で46cmあり、概ね二段になっている。上は皿状で浅く、中央部分にU字状の下段が掘り下げられている。埋土は数層あるが、中央が凹んでおり自然堆積を示している。

出土遺物（図版132·133；**110〜121・S30**）

土師器甕（110·111·114）・壺（113·115）・鉢（117）・甑（116）と須恵器杯蓋（118·119）・杯身（120·121）・甕（112）、砥石（S30）が出土している。（119）〜（121）は形態的に初期須恵器の特徴を示している。

SD45（図版46·47）

BC-2区を南北に流れる幅の広い溝で、SD46に切られている。最大幅1.6mを測り、深さは10cm前後と浅い。埋土は灰色のシルトである。

出土遺物（図版132·133；**122·123**）

須恵器の樽形大型ハソウ（俵壺）（122）と土錘（123）が出土している。

SD46（図版46·47）

SD47・44によって切られた溝で、SD45を切っている。BC-2区に位置し、N28°Eに主軸方向をとる。北側は調査区外へ延びている。幅は60〜84cmで、深さは8〜14cmと浅く皿状の断面が大半である。

SD47（図版46·47）

C-2区に位置し、南東方向に続くSD41、北東方向にのびるSD39と一体の遺構と思われる。僅かに蛇行しているが、全体的には主軸をN40°Wに持つ。西側はSD44に切られているが、SD44の底部分で端部が確認されているので、全体を調査している。全長12.2m、幅26〜40cm、深さ20cm前後を測る。

SD48（図版48·49）

A·B-1区、B·C-2区に位置する溝で、東側のSD46と平行するN25°Eに主軸を持つ。南側が幅40cmと狭く、北側が1.2mと広くなっている。南端は池で切られており、北側ではSD44にも切られている。北は調査区外へ続いている。現況で25mの長さがある。

出土遺物（図版132·133；**124〜128**）

土師器甕（124·126）・高杯（125）・鉢（127）と支脚（128）が出土している。

SD49（図版50·51）

B-1区、C-1・2区に位置する幅の広い直線的な溝である。SD50と同じ溝とも考えられる。幅の広い全体（上層部分）をSD49としている。N28°Eの主軸となり、最大幅2.6mを測る。調査区内で長さ16.7mを測る。

出土遺物（図版134·135；**129〜131・J9**）

土師器高杯（129〜131）と滑石製双孔円板（J9）が出土している。

SD50（図版50·51）

B-1区、C-1・2区に位置するSD49下層部分の溝である。幅40〜55cm、深さ10cm前後を測る。底には粗砂があり自然堆積である。本遺跡の他の遺構では、土坑を中心に埋土上面からの方が遺物が多く出土しているが、本溝では底に近い下層部分から出土している。

出土遺物（図版134·135；**132〜156・S34**）

土師器小型丸底壺（132·133）・甑（134〜136）、須恵器杯蓋（141〜144）・蓋（145）・杯身（146〜150）・ハソウ（151〜153）・壺（151）・甕（155·156）、土錘（137〜140）、砥石（S34）が出土している。

SD51（図版50·51）

C-1区の調査区北西隅に位置する。N50°Eの主軸で直線的に延びる溝で、両端ともに調査区外へ延びている。長さ6m、幅80cm、深さ10〜16cmを測る。埋土はマンガンを多く含む灰シルトで、時期の異

なる遺構と思われる。

SD52（図版50・51）

C-1区に位置し、SD51に平行して走る溝である。主軸方向もほぼ同じのN47°Eであるが、埋土は褐灰シルトで古墳時代後期の遺構であろう。長さ7.2mを測り、調査区外南西方向へ続いている。断面は皿状で8cm前後と浅い。

SD53（図版50・51）

C-1区に位置し、SD51に切られている。N30°Eで、北側は調査区外へ続いている。長さ4.4m、最大幅80cm、深さ10cmを測る。

SD54（図版50・51）

B・C-1区に位置する。主軸をN18°Wに持つほぼ直線的な溝で、SD50によって切られている。長さ4.8m、幅40～50cm、深さ10cm前後を測る。断面形は半円形から逆台形である。埋土は褐灰シルト層である。

SD55（図版50・51）

B-1区に位置する南北方向の短い溝で、1.8mを測る。

SD56（図版50・51）

A・B-1区に南北に走る溝である。3.2mの長さで、幅は30cm、深さは5～7cmと浅い。SD57を切っている。東にあるSD48と平行している。

SD57（図版50・51）

B-1区に位置し、SD56に切られている。長さ2mを測り、短い溝である。

SD58（図版50・51）

B-1区に位置する南北方向の短い溝で、SD55と並んでいる。1.2mときわめて短い溝で、最大幅50cm、深さ8cmを測る。

5．井戸

SE01（図版52・53）

B-7区に位置する素掘りの井戸で、今回調査した中で最も古い時期の遺構になる。堀方は南東側が二段になっている。下段は隅丸方形で東西90cm、南北1m、深さ80cmを測る。埋土の下層は灰シルト、上層は灰色～にぶい黄橙粗砂である。

出土遺物（図版136・137；**157・158**）

埋土上層の肩部に接して布留0式の完形の甕（157）が、底近くから底部（158）が出土している。

SE02（図版52・53）

A-8区に位置し、東半が現代溝によって削平されている。直径1.6mの円形で、深さ0.7mの素掘りの井戸である。出土遺物から、5世紀前半から中葉にかけての遺構である。

出土遺物（図版136・137；**159～162**）

埋土上層から土師器甕の口縁部（159・160）と高杯（162）が出土しており、底近くの下層から手捏ねのミニチュア土器（161）が出土している。

SE03（図版52・53）

A-7区に位置し、不定形の掘り方である。二段に掘り下げられており、下段の断面は方形である。

上段の深さは0.3m、下段の深さは0.7mを測る。

出土遺物（図版136･137；**163**）

井筒埋土から古墳時代前期の壺底部が出土している。やや不安定な平底で、底面には植物の押圧痕が見られる。

SE04（図版52･53）

B-5区に位置し、平面は径1.3mの歪な円形を呈する。深さは45cmで、断面形状は半円形である。

SE05（図版52･53）

B-5区に位置する円形の素掘りの井戸である。南北1.8m、東西1.7m、深さ0.45mを測る。

出土遺物（図版136･137；**164･165**）

埋土下層から須恵器口縁部が2点出土している。

164は壺の口縁部で、筒状に立ち上がって端部を外反させ、肥厚して角張らせている。外面にはカキ目が施される。

165は甕の口縁部で、外反して開く口縁端部を上下に肥厚させ、端面を形成している。

SE06（図版54･55）

C-4・5区にまたがって位置し、本遺跡では唯一の井側が残っている井戸である。井戸掘り方は東西1.1m、南北1.6mの長円形を呈しており、深さ1.1mを測る。底は砂層で井側を突き刺しており、判然としない。中央部分に船材を再利用した井側が据え付けられている。長さ90cmの材を2個組み合わせている。不定の長楕円形の平面をしている。北側の方が広く、南側が尖りぎみである。底から40cm前後付近に面があり、須恵器壺・土師器甕が置かれている。井側上面には須恵器杯身と勾玉が出土している。最も多くの遺物が出土している井戸である。出土須恵器からTK10前後の時期と思われる。掘り方内に噴砂が検出されず、噴砂をSE06が切っていることから、地震痕跡は6世紀中葉以前のものであることが判断できた。

出土遺物（図版136･137；**166～175・J4・J5**、図版264～267；**W4・W5**）

土師器甕（166･167）・小型丸底の壺（168）・甑（170）・底部（169）、須恵器杯身（171～173）・壺（174･175）、滑石製の小型勾玉（J4･J5）、船材を利用したと思われる井側材（W4･W5）が出土している。

SE07（図版52･53）

C-4区に位置し、径0.8mの円形を呈する素掘りの井戸である。深さ1.25mを測り、本遺跡検出の井戸では最も深い。底面が平坦で、断面形状は方形である。

出土遺物（図版138･139；**176･177**）

底面にほぼ接する位置から土師器甕（176）・高坏脚部（177）が出土している。

布留甕ではないが、布留期のものと思われ、これらの土器の所属は5世紀初め頃と考えている。調査した井戸のなかではSE01に続く時期の井戸であろう。

SE08（図版54･55）

C-3区に位置し、東西1.2m、南北1.1mを測るやや歪な円形を呈している井戸である。断面形状は箱状で、深さ0.75mを測る。今回調査した中では最も新しい時期の井戸である。

出土遺物（図版138･139；**178･179**）

埋土下層から須恵器の杯蓋（178）と杯身（179）が出土している。

SE09（図版54･55）

C-4・5区にまたがって位置し、断面形状は箱形を呈する。南北1.2m、東西0.9mを測る不定楕円形の平面プランである。深さは0.7mで、遺物が多く含まれていた。

出土遺物（図版138･139；**180～192**、図版264～267；**W1･W2**）

土師器・須恵器と木器が出土している。土師器は高杯（187～191）・小型丸底壺（184～186）が主体で、甕口縁部（180～183）も出土している。須恵器は壺（192）が出土しており、板材（W1）･折敷把手と見られる製品（W2）も出土している。

6．土坑

土坑は129基調査したが、そのうちの相当数は掘立柱建物跡の柱穴であったろうと思われる。掘立柱建物跡として復原したものは、住居跡の柱穴として取り扱っているが、それ以外にも柱穴の可能性が高い土坑が多数あることを記しておく。特に調査当初の調査区東側部分では、大型の柱穴を想定していなかったことから、大半を土坑として調査を行った。のちに掘立柱建物跡として検討して柱穴と確認した。SB02ではほとんどが土坑としての番号を付している。また、調査段階で井戸と認識したものは井戸に変更した。

土坑のなかで性格が明らかなものはない。平面形状は円形、楕円形、方形、溝状、不定形と多種である。断面も台形、皿状、箱形、半円形、U字形、不定形と種類がある。SK65、SK84など多量の土器を包含している土坑が多いのが特徴である。他の遺構には須恵器を伴う例の方が多いが、土坑では小型丸底壺を主体とする土師器が主に入れられている。土坑は4世紀末から5世紀前半にかけて多く築かれていたようである。これら土師器は土坑底や埋土には入れず、上面に配置されている。

ここでは代表的な土坑だけを報告することにする。

SK05（図版56･57）

B-7区に位置し、不定楕円形の浅い土坑である。長径90cm、短径70cm、深さ14cmを測る。東側が深くなっており、断面は東肩が急で、西側は緩やかである。上層には土師器数個体が置かれていた。

出土遺物（図版140･141；**195･196**）

土師器甕（195･196）が出土している。布留甕ではないが併行期の須恵器を伴わない4世紀代の遺物である。

SK13（図版56･58）

B-7区に位置し、SK05の北側約2mのところにある。隅丸方形の平面で、北側が深くなっている。断面形状は方形から台形である。

出土遺物（図版140･141；**197**）

土坑底面から離れて、口縁部を有さない土師器甕と土師器複合土器（197）が出土している。

SK21（図版60･61）

B･C-7区に位置する不定形の土坑である。長径3.7m、短径2.2mを測り、深さ40cm前後で断面は浅い皿状を呈する。

出土遺物（図版140･141；**211～217**）

土師器甕（211･212･214）・鉢（213）・高坏（215･216）、須恵器杯身（217）が出土している。

SK23（図版60・61）

B-6区に位置する円形の土坑である。長径約1m、短径90cmを測り、深さ20cmで垂直に掘り下げられ、断面形状は浅い方形である。

出土遺物（図版142・143；**218～225**）

ここでも土坑底面から離れて上面に土器が存在している。

土師器壺（218・219）・甑（224）、弥生土器（220～223）、須恵器壺（225）が出土している。

以上の遺物から弥生土器は含まれるものの、おおむね6世紀前半の土坑と思われる。

SK28（図版62・63）

C-7・8区にまたがって位置する円形の土坑で、径90cm、深さ20cmを測る。垂直に掘り下げられ、断面形状は方形である。底は平坦で、レベルも同じである。底と東側肩部には自然堆積の土が見られるが、その上層は1層で埋められたようである。遺物も上層に入っている。布留甕と山陰系の甕、精製の鉢が出土しており、布留期の遺構である。

出土遺物（図版142・143；**227～231**）

二重口縁を有する大型の壺（228）、二重口縁の山陰系の甕（227）、布留甕（229）、精製の鉢（230）、高杯の脚台（231）が出土している。

SK29（図版62・63）

C-7区に位置する不定形の落ち込みである。南北に長く、最大長3.85mを測る。遺構は10cm前後と浅い。北側は溝状で、それ以外のところで土師器が出土している。小型丸底壺から、遺構としては布留期のものと考えられる。

出土遺物（図版142・143；**232・233**）

小型丸底壺（232）・甕（233）などが出土している。

SK42（図版64・65）

A-7区に位置する不定方形の土坑で、1辺80cm、深さ20cmを測る。底面は平坦でなく、中央部に径20cm、深さ10cmの円形のピットがある。埋土上面から土師器が出土している。

出土遺物（図版144・145；**240～242**）

布留甕の特徴を示す土師器甕（240）、鉢（241）・高坏坏部（242）が出土している。

SK45（図版64・66・67）

調査区南東隅A-8区で検出した遺構で、当初土器棺と考えていた。最大長1.3mを測る不定形の土坑で、半分を調査し東半は調査区外へ続いていた。二重口縁の壺（245）の体部を棺身に口縁部を蓋にしたものかと思われた。調査終了前に拡張したところ、溝となって南東方向へ延びていた。主軸方向をN55°Wにとる溝であるが、遺構名はSKのままで報告する。深さは25～40cm、幅80～110cmを測る。溝の南東部からは小型丸底壺が出土している。

出土遺物（図版144・145；**245～249**）

土師器二重口縁壺（245）・甕（246）・高杯脚部（247）・小型丸底壺（248・249）が出土している。

SK62（図版68・69）

B-6区に位置する不定円形の土坑で、1.2×1.0m、深さは82cmを測る。2段に掘り下げられており、下半は垂直に、上半は台形に広がっている。変化点の上下に自然堆積層があり、自然に埋まったようである。下部と上部は意図的に埋められたようである。

SK64（図版70・71）

A・B-6区に位置するSD14に切られた溝状の落ち込みである。溝の弧状の外湾部に位置している。幅4m、長さ9.2m、深さ0.2～0.35mを測る。中央より西側の方が概して深くなっている。東側は肩部が緩やかである。

出土遺物（図版146・147；**256～284**）

遺物は中央部分にまとまって出土している。土師器甕（256～262）・甑（266）・ミニチュア土器（263・264）・製塩土器（265）と須恵器杯蓋（267～269）・杯身（271～277）・甕（270）・短頸壺（280）・高杯（278・279）・脚部（281）、土錘（282・283）、羽口（284）、滑石製臼玉（J18）、砥石（S11・S14）が出土している。

SK65（図版70・72）

C-8区に位置し、SB06の南西隅の柱穴（SK81）に切られている。北側が直線的で南半が円形の不定形を呈している。全体的には逆おむすび状になり、東西1.2m、南北1.3m、深さ1.25mを測る。埋土は1層で意図的に埋められたものと思われる。上面に土器が置かれていた。

出土遺物（図版144・145；**252～255**）

上面に土師器甕（252・253）と高杯（254・255）が数個体置かれている。布留式の土器である。

SK66（図版70・73）

C-7区に位置する隅丸方形の土坑で、上面は南北0.6m、東西0.68m、深さ65cmを測る。断面は逆台形で下面は1辺0.4m前後になっている。下半には灰色系のシルトが堆積しており、その上面（全体的には中位）に土師器甕の完形品が横向きになって出土している。

出土遺物（図版148・149；**285・286**）

ほぼ完形の土師器布留甕（285）、二重口縁を持つ山陰系の甕（286）が出土している。

SK72（図版74・75）

B-6区に位置する不定形の土坑で、SK64の北端に位置している。SK64の下部にあり、より古い遺構である。最大長0.8m、深さ45cmを測り、意図的に埋められている。

出土遺物（図版148・149；**292～294**）

土坑上面には土師器高杯が3個以上集中して置かれていた。

SK80（図版74・75）

C-5区に位置し、隣接してSE06・09が存在するが、切り合い関係はない。平面形状は不定形で、南北1.2m、東西1.3mの隅丸方形に近い。断面は逆台形に掘り下げられ、底面は平坦である。深さは50cmで底面は1辺80cmの方形に近い形状になる。ここでも埋土は1層で上面に遺物が集中して置かれている。布留期の土坑である。

出土遺物（図版150・151；**305～323**）

土師器に限られ、壺（305・306）・甕（307～315）・小型丸底壺（316～320）・鉢（322）の器種がある。

SK84（図版74・75）

C-5区に位置する不定隅丸方形の土坑で、北東部をSD14に切られている。南北1.5m、東西1.45mで深さ55cmを測る。断面形状は逆台形で底は平坦である。1層では埋められておらず、土坑底周辺に自然堆積の層が見られ、1点の小型丸底壺が置かれている。肩部近くまで意図的に地山土を主体にして埋め、黒シルト層に変えて、上層に土器を多量に置いている。原則的には上面に土器を配置しているという点では他の遺構に共通するが、細かな点で差異がある。

出土遺物（図版152～157；**324～359**）

出土遺物は土師器だけで、小型丸底壺（325・327～351）を主体に二重口縁壺（324）・甕（326）・高杯（352～359）が使用されている。

SK111（図版82・83）

A-2・3区に位置する不定形の土坑である。西端はSD44と接しており、南側は池によって切られている。現存長5.6m、幅2.8m、深さ20cmを測り、断面は浅い皿状を呈する。

出土遺物（図版156･157；**363～365**）

土師器鉢（363）・高坏（365）、須恵器鉢（364）が出土している。

SK121（図版84・87）

C-2区に位置する不定円形の土坑である。南北1.1m、東西1mを測り、深さは1.1mである。2段に掘り下げられており、下半は垂直に、上半は台形に広がっている。遺物は上層に置かれた状態で出土している。

出土遺物（図版156･157；**369**）

土師器が何点か出土しているが、図化できたのは（369）の小型丸底壺のみである。

7．落ち込み

SX01（図版90･91）

調査区北東部に位置する落ち込みで幅の広い溝状を呈している。両端ともに調査区外へ続いている。主軸方向はN55°Wであるが、北西側の一部はSX03に切られており、この地点でほぼ南北方向に主軸方向を変えている。この部分でくの字に折れ曲がっていることになる。曲がっているところが最大幅で2.8mを測る。それ以外は2.5m前後の幅で、深さは20cm前後である。全体的に底は平坦で断面形状は浅い台形であるが、部分的に中央部分が深くなっている個所がある。

出土遺物（図版158･159；**370～393・S15**）

出土遺物は全体に広がっているが、須恵器・韓式土器を包含しているのは北側の集中部分のみに限られる。それ以外の部分では土師器に限られており、遺構の時期は布留Ⅱ期かと思われる。北側部分の遺物は埋没時期を示しているものと思われ、古墳築造時ではないかと思われる。手捏ね土器と小型精製土器が多いのは遺構の性格を表している可能性が高い。

土師器壺（371･372）・丸底壺（376～378）・甕（370・373～375）・高坏（379～383）・甑把手（393）、製塩土器（384）・手焙り形土器（385）、須恵器高杯（386）・ハソウ口縁部（387）・装飾壺？（388）、手づくねのミニチュア鉢（390～392）、砥石（S15）が出土している。

SX04（図版102･103）

A･B-6、B･C-7に位置する落ち込みでSD16を挟んで両側に浅く広がっており、SD16のオーバーフローした部分かもしれない。最大幅5.8mで平均でも4m前後ある。深さは浅く0.3～0.4mを測る。主軸方向はN60°E前後である。

出土遺物（図版164･165；**441～449・J1・S21**、図版272･273；**M4**）

出土遺物は土師器甕（441）・器台（442）・甑把手（443）、須恵器坏蓋（444･445）・蓋（446）・壺（449）・ハソウ（451）・椀（448）・装飾器台（450）・滑石製紡錘車（J1）、砥石（S21）、鉄製品（M4）が出土している。

SX06（図版100・101）

B-4で検出した溝状の落ち込みで、鉄粉が散布して固まっている面の下面に相当する。N40°Wと斜交方向に主軸を有している。製鉄遺構の下部に位置しており、製鉄遺構形成前の排水などの意図がある溝状の可能性もある。製鉄遺構面の東側までは存在せず、西側端部から掘り下げられている。東側が幅が広く2.5mあり、西側に向かって徐々に狭くなって、長さ6mで終焉する。最も深い部分で45cmを測る。

出土遺物（図版182・183；**533～548**）

土師器と土錘に限られる。土師器も高杯・杯が多く、祭祀的な遺構ではと思われる。精製小型の土器が多い。土師器しかないが、時期は須恵器を伴う6世紀代まで下ると考えられる。

土師器壺（533・535・537）・布留系の甕（534）・鉢（536）・高杯（538～546）・土錘（547）・蓋（548）を図化した。

SX07（図版102・103）

B・C-2にあり、SD48を切っている落ち込みである。南北方向のSD44には切られている。最大幅6m、最大深度0.2mを測る不定形の浅い遺構である。

出土遺物（図版182・183；**549～551**、図版272・273；**M3**）

出土遺物は少なく、また時期にもばらつきがある。土師器の甕（549・551）、須恵器坏身（550）、鉄製品（M3）を図化した。

8. 古墳（祭祀遺構）（図版92～99）

C-6・7区に位置する、当初、落ち込みとして調査したSX03・05、僅かに高くなる平坦面で不明遺構として調査したSX02であるが、調査が進捗すると一体の遺構であることが判明した。遺構名はSXとしているが、全体で古墳であったであろうと思っているが断定はしかねる。調査部分は古墳の墓前祭祀を示した好資料であり、北側に南面する古墳（前方後円墳）が存在していたと考えている。半円形に調査をしており、北側は調査区外へ延びている。半円形の縁辺部を溝状に検出した部分がSX03で、北側の方形の高まりをSX02として調査した。その間の部分がSX05である。出土遺物の名称や遺構名を報告する際は旧遺構名のまま称している。

SX03　やや歪ながら半円形に巡る溝状遺構である。幅は0.7～1.6mと数値に開きがあり、深さは20cmを最高値とする浅いレンズ状の断面である。溝と溝の内側の間隔で広いところは北端で13mあるが、北西側にさらに広がって延びているから数値は大きいものになる。

出土遺物（図版160～165；**394～440・S7・S20**）

遺物は全体に広がっているが、西側部分に濃密に出土している。煮沸具である甕・甑・竈が多いのが特徴である。また、そこには須恵器杯も多く見られる。

土師器甕（394～398・405～407）・鉢（399・401～404）・手づくねのミニチュア鉢（400）・甑（408～413）、須恵器杯蓋（414・415・420～423・429・430・436）・坏身（416～419・424～428・431・432）・大型甕（433）・短頸壺（437）・ハソウ（438）、土錘（439）、円柱状の土製品（440）、砥石（S7・S20）が出土している。

SX02　長さ7mを段状に掘り下げ、幅0.8mの平坦面を構築している。比高差は0.15mと浅いものであるが、確実に掘り下げて段差を築いている。僅かに高くなった部分は東西両方ともに撥形に内側に直線で曲がっている。ただ西側にも折れ曲がった部分があり、これを西側端部とすると9m余りの長さに

なる。SX03の弧の中心はさらに西側になるので、さらに西へ延びていたかもしれないが、平坦面を利用して建てられているSB10の位置は長さ7mの中央に存在していることから、この長さが本来の数値で溝の中央から東にずれているとした方が妥当かと思われる。SB10は東西2間、南北1間の小型建物で祭祀に伴う施設と考えている。平坦面の小段の下である南側に須恵器杯が並べられていた。位置的にはSX05部分に相当する。

SX05　SX02とSX03に挟まれた部分である。当初はSX03が溝状に検出されたが、調査を進めると肩部にも遺物が見られ溝中の土器と同時期と判断した。そのことから、最終的に周囲を残した意図があったかもしれないが、同じ時期の同一遺構であったと考えた。

出土遺物（図版166～181；**452～532・J6・J12・S19・S29・S33**）

SX03に近い部分は土師器の煮沸具がやはり多く出土している。内側に近い部分は須恵器が主体となっている。西側では杯の一群があり、その横に大型の甕・壺が配置されている。さらに東のSB10の空間に入ると再度須恵器杯の一群が出土している。単純にセットとして置かれているもの、重ね合わせているもの、セットの下に1点の杯を重ねているものの3種がある。最後の重ね合わすものは、杯のセットをそのままの状態で置く際は身を重ね合わせているが、それに対してセットを天地逆にする際は蓋を下に伏せて敷くように不安定な形に置いている。杯だけを使って、各種の置き方でSX02の前方に並べていた。明らかに意図があり、一つの祭式を示しているものと考えられる。その前には滑石製の双孔円板、メノウ製勾玉、玉砥石、製鉄作業に使う砥石と台石が出土している。

土師器壺（452・453）・甕（454～461）・甑（463～469）・小型丸底壺（470・471）・杯（472・473）・鉢（475）、手づくねのミニチュア鉢（474）、竈（476）、須恵器杯蓋（477～493）・杯身（494～515）・蓋（516）・高杯の脚部（517～519）・甕（520～526）・壺（527・528・532）・ハソウ（529～531）、メノウ製の勾玉（J6）・滑石製の双孔円板（J12）・砂岩製の玉砥石（S29）・砥石（S19）・台石（S33）が出土している。杯蓋・杯身の時期はMT15～TK10くらいに比定できる。

全体を検討してみると、古墳の方向に向いての墓前祭祀の状況が想定される。通常の祭祀には滑石製品が使用されるが、ここでは通常副葬品とされるメノウ製の勾玉が共伴していることが古墳とする根拠でもある。

9. その他

土器棺（図版104・105）　土坑・落ち込み等の遺構は確認できていないが、C-3区より壺棺が出土している。壺と鉢の組み合わせのものと二重口縁壺の2群が約70cm離れて並んでいる。いずれも包含層出土遺物として掲載している。（図版186；**573**、図版200；**687**、図版188；**584**）　前者は（573）の壺の上に（687）が底部を上に覆う状態で押しつぶされている。この2基の土器棺には明らかに時期の断絶が認められるので、本来は他にも土器棺が存在したことも考えられる。

地震痕跡（図版108・109）　中央付近から北西部分において液状化現象である噴砂を確認している。特にC-4・5区のSE06やSD17周辺で顕著であった。

噴砂はC-4・5区ではほぼ南北方向に近い主軸に走っており、南西方向では僅かに角度を変えている。噴砂の規模は、幅では最大10cmで大半は3～5cmを測り、深さは最大60cmある。地山下層の灰色砂礫層から供給されている。6世紀後半の時期であるSE06は噴砂を切っており、その噴出時期が6世紀中葉以前であることが理解される。SD18・SD25では図上では溝を噴砂が切っているように表しているが、

噴砂の位置を表したものである。溝底の地山では検出しているが、溝埋土では確実に調査していない。そのことから、地震の時期は6世紀中頃と短い時期決定することは困難であるが、可能性は残されている。

（2）第4次本発掘調査の結果（図版110～115）

調査は若王寺遺跡その2として実施したものである。第3次本発掘調査区の北側に接した地区で、247㎡の小面積である。調査区の形状が不定形なため、4つの区画に分けて調査を行った。各区画はバックホウを用いて盛土及び近現代の耕土を掘削したのち、遺物包含層（第Ⅲ層）以下を人力で掘り下げた。遺構面検出後は、遺構掘削、平面図の（1/20）作成、土層堆積状況の実測、各種写真の撮影等の諸記録を随時作成した。調査は、12月12日から着手し、12月26日にすべての調査・測量を終了したのち、現場を撤収し、調査を完了した。

調査区内の基本的な層序はⅠ層:盛土、Ⅱ層:近現代の耕土、Ⅲ層:黒褐極細粒砂層、、層:黄橙色シルト（基盤層）に大別される。Ⅲ層は遺物包含層である。層序は隣接する第3次本発掘調査区の堆積状況と同じ様相を呈しているが、包含層に含まれる遺物は減少している。基本的に第Ⅲ層（包含層）から出土する土器は古墳時代前期のものが多いが、遺構に伴う遺物は、第3次本発掘調査区のものと同様に、古墳時代後期の所産であると考えられる。

今回の調査では溝7条と柱穴、土坑、落ち込みなどを検出した。遺構は第3次本発掘調査に比べると密度も薄く、遺物も少ない。1区中央部は近代の撹乱を受け遺構は残っておらず、1区東側についても後世に撹乱を受けて、遺構および包含層は見られなかった。1区の東部分は浅い溝や落ちが錯綜し、小さく複雑な起伏が認められる。遺構の密度は3区、4区が比較的密度が高く、2区は撹乱をうけて遺構面がほとんど残存していなかった。

落ち込み（図版110）

1区の西端部で東にむけて緩やかに下る落ちを検出した。西側の肩は明瞭であるが、東側の上がりは浅く、自然地形のくぼみであろうと考えられる。大半が撹乱され全体の形は不明瞭である。第3次本発掘調査区は西側に緩やかに下っていたが、本調査区の地形は東に向かって傾斜していることがわかる。

SD02（図版114･115）

1区中央部をSD04に平行して直線的にのびる溝である。南北は調査区外へ続く。深さは約25cmを測る。

出土遺物　（図版276･277；**1139**）

土師器鉢が出土している。

SD04（図版114･115）

1区から4区にかけて直線的に延びる溝である。幅約150～160cm、深さ約15～20cmをはかる。時期を明確に示す遺物は出土しないが、埋土の印象から中世以降の耕作にともなう溝であろうと考えられる。

出土遺物　（図版276･277；**1140～1143**）

土師器甑（1140）、須恵器杯（1142･1143）が出土している。

SK02（図版112･113）

4区北端の西壁際で検出された。西側半分は調査区外に続き、不定円形の土坑であったと思われる。深さは最大で22cmを測る。

出土遺物（図版276･277；**1137･1138**）

底面から離れた上層から土師器と共に土錘・釣針などが出土しており、土師器高杯（1137）・土錘（1138）を図化した。

第３次調査でも大量の土錘等が出土しており、旧海岸線に近いという遺跡の立地からも若王寺遺跡において漁労がさかんに行われていたことがわかる。

SP06（図版114･115）

柱穴から柱根部分が出土した。残存する径は約19cmほどで、根元部分に刳り込みが施されている。同様の加工は第３次本調査など過去の調査においても数例確認されている。

今回の調査では柱穴、土坑、溝などの遺構を検出した。遺構に伴う土器が少ないため明確な時期を述べることは難しいが、第３次本調査の結果などから検出した遺構は、概ね古墳時代後期の所産であると考えられる。全体として遺構は少なく、包含層も希薄になりつつあり、集落の中心からは遠ざかっている印象を受ける。遺構・遺物の出土状況から当調査区は集落の辺縁部、もしくは遺構の空白地帯にあたるものと思われる。調査面積が少なく、調査区も不定形なため検出した柱穴間の関係は明らかにできなかったが、SP21やSP29のような柱穴も確認できるので掘立柱建物が数棟存在することは間違いないと思われる。また、その１で確認した埋没古墳にともなう周溝が検出されるかと期待されたが、今回の調査区では確認できなかった。検出した遺構、遺物は第３次本発掘調査区の様相と大きく変わることはなく、既存の知見を補強するものであった。

（３）第６次本発掘調査の結果（図版116～120）

基本土層は、①表土　②盛土　③盛土（砕石）　④盛土（５･７･８層とコンクリートなど）　⑤黄褐シルト質極細砂　⑥にぶい黄褐シルト質極細砂　⑦オリーブ褐シルト質極細砂　⑧暗灰黄細砂　⑨灰細砂　⑩灰中～粗砂となっている。

⑤層は遺物包含層で、⑧層は地山である。

西区の調査では、調査区東側で南北に横切る高圧線が埋設されていることが明らかになったので、調査対象面積を縮小している。また、遺構面直上まで、現代の手が加わっている。①～④層は盛土で、現代のものである。撹乱が多くみられる。その面（⑤層上面）で耕作痕跡・ピット・土坑が確認されている。⑤⑥層の上面で耕作痕が検出されている。上から第１面、第２面として調査した。

第１面の遺構はピット・土坑・スキ溝で、ピット・土坑は性格が不明である。ピットは柱穴になりそうなものは検出されていない。スキ溝は幅20cm前後のものが多く、南北方向に限られている。

第２面の遺構はスキ溝だけを検出している。第１面と同様に南北方向の溝に限られている。その下の層にも古墳時代の土師器が少量ながら含まれている。古墳時代の遺構は確認できなかったが、西側の第２次調査区のような居住域が広がっていないことは確認された。調査区内では水田畦畔などの遺構は検出できなかったが、水田が存在した可能性が高い。

東区の調査では、調査区内に廃棄土坑と高圧線や電柱が通っているなど、元の面は全く残っていなかった。遺構面より深く撹乱が及んでいることを確認した。一部断ち割りを行ったところ、砂層が続く。

２地点の本発掘調査結果、東区では現代の撹乱によって遺構は残存していなかった。西区の調査でも２面の耕作面を検出しただけである。若王寺遺跡での中心となる古墳時代の遺構は確認されなかった。ただ、土層から古墳時代には居住域でなく、生産域であった可能性が高いと思われる。

Ⅳ　出土遺物

遺物はコンテナ（TS28タイプ）で280箱出土している。大半は土器であるが、鉄器・木器・玉類・石器も出土している。自然遺物は比較的少なく、種子類に限られる。製鉄関連の遺跡であることが、本遺跡の最大の特徴であるが、製品を持っていないという面もまたひとつの特徴なのであろう。

時期はおおむね古墳時代に限定される。遺構も同様である。古墳時代初頭の庄内期から古墳時代後期の須恵器杯Gが出現する前までである。整理作業時に数点の中世の土師器・瓦器を確認したが、表土か撹乱層からで遺構に伴うものではない。第２次調査では僅かに中世の遺構を検出している。また、今回報告の第６次本調査区では近世かそれに前後する時期の遺構に限られている。

（１）第３次本発掘調査出土土器

１．掘立柱建物跡（SB）出土土器（図版122･123；１～14）

掘立柱建物跡から出土している遺物は少ない。柱穴に限られることもあるが、柱穴出土量は少数である。図化したのは、SB02、09、13、14、15、17、18からの出土遺物である。柱穴以外ではSB09の空間から出土した大型の壺などは掘立柱建物跡に置かれた遺物かとも思われる。それ以外は柱穴から出土したものである。

SB02（図版122･123；１～３）

底部３点を図化している。すべて土師器で２点は平底で、１点は尖り底に近い小さな平底である。(1)は壺で、(2)・(3)は甕底部である。(3)は弥生第･様式系の甕底部である。３点の時期は、今回調査したなかで最も古い時期を示している遺構の１つであろう。

SB09（図版122･123；４～７）

口縁部を欠いた大型の壺（4）と甕口縁部（5)、小型器台（6)、高杯口縁部（7）を図化している。(4)は内面ユビ成形した比較的丁寧なつくりで、外面も調整が加えられている。掘立柱建物跡の空間に据え付けられているような状況で検出された。明瞭な掘り方を確認できなかったことから、掘立柱建物内に置かれていたものと考えた。やや器高のある球形の体部で、肩は張らずナデ肩である。底部は突出平底で、不安定観は否めない。外面はナデ整形であるが、表面磨滅しており丁寧な仕上げ調整が行われていたような印象を受ける土器である。反面、大型であることから粘土紐の継ぎ目も残っている。
直接接して大型の甕口縁部も出土している（5)。２点の関係から土器棺を想定させる。表面磨滅が著しい。如意状の甘い稜線のくの字甕で、体部は内湾しているが直立ぎみで、ヨコナデによって頸部が凹んでいる。口縁部は僅かに外反し、端部は丸く長めに引っ張りだすように仕上げられている。

(6)は円板充填法を採用した上台の小さな器台である。脚部は高杯のものに似ており、屈曲して外方に開いている。端部は尖りぎみに丸く仕上げられている。脚部内面はヘラケズリがなされており、絞り目は見られない。内面も変化点は明瞭で強い稜線となっている。上台は水平に近く浅いもので、直線的に延びている。端部は尖っている。形態的には高杯上部が続くものであるが、確実にこの部位で仕上げており、器台として機能している。

(7)は直線的に広がる杯部で、僅かに屈曲したS字状になっている。端部近くで水平に開くように広がり、端部は器肉の薄い尖った形態をしている。おそらく屈曲して立ち上がる部分が剥離したもので

ある。

SB13（図版122･123；8）

底部の破片１点を図化している。中央部分を欠いた壺底部の破片である。タタキメによって底部を作ったもので、再成形によって突出平底にしている。外面はハケ整形しており、内面はユビ仕上げかと思われる。底部の厚さは厚めで、突出部が高くなっている。

SB14（図版122･123；9）

須恵器ハソウ（9）が１点出土している。図上で完形になるもので、須恵器のなかでやや古相を示している。口縁部は外傾するが、僅かに屈曲している。非常に緩やかなS字状である。器壁は薄くシャープなつくりである。頸部上部に稜線を有しており、端部は外側に尖ってつまみ出している。体部はやや扁平な形状で、肩部に円孔を保有している。底は丸底である。

SB15（図版122･123；10）

土師器口縁部1点（10）を図化している。くの字状に屈曲して、S字状に緩やかなカーブを持って開く口縁部。布留式ではないが布留併行期の壺口縁部であろうか。端部は外側に広がり、丸く納めている。器肉は厚めで、内面に明瞭な稜線を持っている。内面ヘラケズリによって形成しているか。

SB17（図版122･123；11）

土錘（11）を１点図化している。中央部分が最も幅の広い管状土錘である。タタキメが残っており、端部付近はタタキ原体を使って成形したものと思われる。端部は両面とも切断したかのような面となっている。管状の孔は歪んでおり、管状のものを芯にして作ったのではないようである。

SB18（図版122･123；12～14）

土師器甕口縁部（12）と須恵器甕口縁部（13）・（14）の３点を図化している。

（12）はくの字状に屈曲し内湾気味に開く口縁部で端部内面が僅かに肥厚しており、布留式の傾向を示している。

（13）は径の大きい口縁部で端部は肥厚し、端面下に１条の断面三角にシャープな突帯を有する。口縁部は外反しており、長めの口縁部になって頸部に続くものと思われる。器壁も薄く精製品である。

（14）は器壁の厚い製品で、口縁部は外反し、端部は内外に肥厚する。面にならず、丸みのある端部である。明瞭な稜線にならない頸部になる。

２．ピット（SP）出土土器（図版124～127；15～65）

掘立柱建物跡に復原できなかったピット出土の遺物である。遺構の章に記したように確実に柱根が残るものや、柱痕跡を確認できるものが多数を占める。多くは掘立柱建物跡の柱穴として捉えて問題ない遺構である。

（15）・（16）はSP130出土の土師器高杯脚部である。（15）は裾部で変化して開くもので、三方透かしの円孔を有する。中実の脚部で、外面上半はヘラミガキ端部にはヨコナデが施される。脚柱部内面はヘラケズリによる。裾部下半の変化点からは水平に近い形状で下方に直線的に延びている。端部は尖りぎみに丸く納める。（16）は（15）よりも大型の脚部で、裾径12.8cmを測る。緩やかに屈曲して開く脚部で、端部を内側に肥厚させている。外面にはヘラミガキ、内面はヘラケズリであるが、杯部との結合方法は（15）と異なっている。接合部は残存していないものの、円板充填か中空タイプの脚部である。透孔は認められない。

(17)・(18) はSP197からの出土土師器である。(17) は布留傾向の口縁部が内湾する甕である。体部は直線的に開き、頸部内面の稜線は明瞭である。端部は肥厚していないが、内側につまみかかっている。プロポーションから布留期として良いように思われる。(18) は手捏ね土器である。小型の鉢を表現したミニチュア製品である。内外面ともにユビ成形によっており、多少ユビ調整が施されている。底部は僅かに認められる程度の平底の形状である。外側に直線的に開き端部は丸く納めている。底部の期肉が厚く口縁端部に向かって薄くなっている。

(19) ～ (21) はSP240出土土師器で、(19) は小型の鉢である。口縁部が最大径となる口の広いもので、口縁部は短く端部は尖りぎみである。頸部は余り強い稜線ではなく、内湾する体部へと続く。外面は縦方向のハケ整形で、内面はユビ仕上げ、口縁部はヨコナデである。下半に黒変が観察される。(20) も (19) と似た形状の鉢である。体部が丸みを持つもので、内湾度が強い。張り出しており、口縁径と最大腹径の差があまりない。頸部の稜線は明瞭で、口縁部は外側に直線的に短く延びる。端部は角張りぎみである。

(21) は高杯杯部である。端部は外側へ引っ張りだしており、尖っている。器壁は厚めで、杯部下半は平たい。上半は内湾し、下半との間に稜線が明瞭である。ヨコナデによる段があり、それによって段が強調されている。脚部との接合部は残存していないが、中実になろうかと思われる。

(22) ～ (34) はSP264出土遺物である。(22) ～ (24) は土師器甕である。(22) は端部内面が肥厚している典型的な布留式甕である。体部はほぼ球形で、口縁部がくの字状に屈曲して内湾する口縁部に続く。体部外面は細かいハケ整形で、内面はヘラケズリである。外面肩部に規則性のない櫛状工具による刺突文が広い間隔で見られる。左上がりの施文である。頸部下面の内側にもハケ原体で器面調整した痕跡が残っている。口縁部はヨコナデが施されているが、頸部付近は強くなされており、頸部は段がついている。(23) も同じく布留期の甕であるが、器高が高くなっており、倒卵形の体部になっている。内面の底部近くはユビ成形の痕跡が明瞭で、指頭圧痕が多数見られる。内面上方はヘラケズリによって薄く形成されている。外面はハケ整形で、主に縦方向で、一部斜め方向に整形している。頸部は稜線を持って曲がっており、口縁部は外側に直線的に延びている。ヨコナデで仕上げられている。端部は僅かに内側に肥厚しかかっている。(24) は球形体部の甕である。薄く作られており、丁寧な作りである。体部は僅かに器高が高いが、ほぼ同じ値の球形になっている。内面下半はやはり指頭圧痕が多数明瞭に残っているが、薄く丁寧に出来上がっている。ユビの痕跡が多いのに薄いのは型作りを示しているのではないかとも想像させる。体部内面上半はヘラケズリ、外面はハケ整形である。縦方向ののちに横方向のハケ整形を行っている。頸部は稜線を持ってくの字の口縁部となる。口縁部は内湾し、端部は内側に僅かに肥厚した角張る形状になっている。端部の口作りは布留式のものではないが、口縁部が内湾していることやプロポーションから布留期の範疇の甕である。(22) ～ (24) はいずれも外面にスス・炭化物の付着が顕著である。

(25) ～ (27) は土師器小型丸底壺である。(25) は口径が最大径になる口縁部が開いた形状になるもので、口縁部は内湾し短部は尖っている。頸部の稜線は鋭く、外面はヨコナデによって凹んでいる。体部は小さめで僅かに肩が張るが丸くなり丸底になるであろう。二次焼成を受けている。(26) は器肉が厚くボテッとした印象を受ける。最大径は体部の最大腹径の9.0cmである。体部は算盤玉形の低い体部である。底はきれいな丸底ではない。緩やかなくの字になり、口縁部は直線に延びる。体部内面はヘラケズリののちナデ、外面はハケ整形からナデ仕上げ。口縁部はヨコナデを施している。体底部は一部

黒変し、ススが付着している。(27) は口縁部が開き、体部の低く小さいタイプである。体部は扁平な球形で、明瞭な稜線の頸部から緩やかに屈曲しつつ直線に延びる口縁部へと続く。端部は外反ぎみに尖っている。表面磨滅が顕著であるが、精製のものである。口縁部はハケ整形ののちヨコナデを施す。

(28) は土師器鉢である。内面にユビ成形が残っている。内湾する体部で、口縁部は内側に傾いており、丸く納めている。底部の方が浅くなっている。製塩土器として使用されても不思議のないものであるが、火をうけておらず製塩土器としてはつかわれていない。製塩土器なら丸底Ⅱ式になる。

(29)・(30) は高杯杯部である。(29) は口縁端部近くで水平に屈曲して開いている。杯部下半にも変化点があり、段になっている。脚部との接合部から水平に延び、僅かに内湾してから、再度水平に広がるものである。端部は角張る。外面全体に黒変が観察され、一部にススの付着が認められる。(30) は杯下半が水平になり屈曲して大きく外反する杯部の大きな高杯である。ユビ成形の痕跡を残し、外面はハケ整形している。

(31) ～ (33) は管状の土錘である。似たタイプのもので柱穴に納められているのは興味深い。器壁が薄い（円孔が大きい）のが特徴である。中央部分が若干膨らんでいる。ユビ成形後ナデにより仕上げられるが、(31) では板状工具による調整痕が認められる。いずれも二次焼成を受けている。

(34) は須恵器杯蓋である。内湾する体部にわずかに稜線がつき、口縁端部は外側に尖る。

共に卵形の叩き石（S5）も出土している。（別項で詳述）

SP265もSP264と並んだ同一建物になる柱穴である。底に小型丸底壺が置かれ板材が入っている。(35) は底に横方向に置かれて出土した土師器小型丸底壺である。やや大きめで体部は球形である。口縁部はくの字で、直線的に延び端部は丸く納めるが多少つまみあげている。外面はユビ成形・ヘラケズリののち上半はハケ整形がなされている。口縁部はヨコナデ仕上げ。

(36) も土師器小型丸底壺である。底部を欠失しているが、全体は想像できる。体部はユビ整形されており、外面は表面磨滅している。小さ目の体部から口縁部は大きく直線的に広がっており、端部は尖りぎみである。頸部は明確な稜線を持っている。口縁部内面にはハケ整形が見られる。二次焼成を受けている。

共に砂岩製の砥石（S24）も出土している。（別項で詳述）

SP499出土の遺物からは 3 点の土師器と玉類 2 点を図化している。(37) は土師器壺口縁部で、緩やかな二重口縁になっている。内湾する体部で甘い稜線の頸部から口縁部となる。端部は外側に肥厚させ角張るもので、口縁部は緩やかで明瞭な稜線を持たない。体部は内外ともにユビで成形しており、口縁部はヨコナデである。

(38) は高杯脚部である。内面には絞り目とユビ成形が顕著である。緩やかにラッパ状に広がる裾部である。端部は丸く仕上げている。

(39) は手捏ね土器である。ミニチュアの鉢であろうか。内外ともにユビ成形で、ユビ調整を軽く行っている。尖りぎみの丸底である。

共に滑石製の双孔円板（J8）・滑石製臼玉（J17）も出土している。（別項で詳述）

SP502からは 2 点の土錘が出土している。いずれも円筒形を呈している。(40) はSP264出土の土錘と同様の作りで円孔の大きいタイプである。ただ、中央が膨らむものではなく、逆に両端の方に幅があり中央部が窪んだ形状をしている。長さ8.7cm、最大幅4.55cmを測り、孔径2.3cm、重さは174.6gである。(41) はタタキが施された特殊な土錘である。両端がタタキによって角が取れ丸くなっている。中央付

近は明瞭でないが、両側のみタタキで形成されたと思われる。格子状のタタキである。長さ9.4cm、最大幅4.3cmを測り、孔径1.4cm、重さ230.2gである。

その他のピット出土遺物

(42) はSP20出土土師器甕口縁部である。くの字状に屈曲し、内湾気味に立ち上がる口縁、端部を内側に肥厚する布留系甕である。

(43) はSP428出土土師器甕口縁部である。(42) に比べると肩が張るタイプで頸部の屈曲度が高い。口縁部はS字状の緩いカーブで開き、端部はわずかに外反する。肩部内面にヘラケズリを施す。

(44) も土師器甕口縁部である。くの字甕でSP482出土である。頸部が緩やかな形状で、稜線を持たない。器壁は厚くなっている。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を内側に肥厚する。肩部内面にユビ押さえ痕が残る。

(45) はSP93から出土した土師器鉢口縁部である。口径24.7cmと大型の土器である。口径が最大径となる形状で、体部は内湾し、短く外反する口縁部につながる。内湾して立ち上がる体部から外反して開く口縁部が続き、端部を肥厚して端面を形成する。

(46) はSP339からの出土である。やはり最大径が口径になるタイプで、器壁が厚くボテっとしている。頸部がほとんどないような形の鉢か、口縁部の破片で残存部が頸部となる甕口縁部かと思われる。

(47) はSP445出土の土師器高杯の杯部である。浅い椀状の杯部で脚部以下は欠損している。脚部との接合は円板充填法によっている。杯部底は平坦で、脚部につながっている。内外面ともにナデ仕上げののち、ヨコナデを施している。

(48) はSP459出土の土師器高杯である。わずかに段を形成し、屈曲して口縁部が内湾気味に大きく立ち上がる。脚部はラッパ状に開き、端部は丸く収める。円孔は穿たれていない。磨滅のため調整は不明ではあるが、外面結合部にユビ押さえ痕、脚部内面に粘土ひもの積み上げ痕が螺旋状に残る。二次焼成による赤変が見られる。

(49) はSP428出土の土師器小型丸底壺の口縁部である。球形の体部から、くの字状に屈曲して内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ小型丸底壺である。磨滅により調整は不明である。

(50) はSP153出土の土師器の口縁部である。器形からは鉢か高杯杯部かと思われる。内湾しつつ直立になる口縁部である。端部は丸く納めている。底近くで急に曲がっている。精製土器で、小型鉢か上田町Ⅱ式のような裾が大きく広がる高杯脚部が接続するものと推定している。

(51) はSP209出土の土師器高杯脚部である。脚部が低い形で、円孔が1ヵ所残存している。円孔は外側から開けており、内面に粘土が貼り出している。内面はヘラケズリで、外面はヨコナデである。裾は緩やかに広がっており、端部は角張る形状である。内面は平滑ではない。

(52) はSP217出土の土師器高杯である。脚部だけが残存している。器高が低く、水平に近く広がっている。器壁はいびつで薄く、端部をわずかに内湾させる。

(53) ～ (57) は土師器底部である。(53) はSP226出土で壺の底部である。底部中央が僅かに上げ底になる突出平底である。表面磨滅が著しく技法は不明である。

(54) も底部中央が僅かに上げ底になる突出平底である。やはり壺の底部で径が少し大きい。ユビ成形ののち内外面ともにハケ整形がなされている。内面はくもの巣状のハケメである。SP333からの出土である。

(55) は底部中央だけがドーナツ状に上げ底になる突出平底の壺である。SP291から出土しており、厚みのある底部である。磨滅が著しい。

(56) はSP411出土の甕底部で外面には右上がりのタタキメが認められる。底部再成形したもので、タタキメが歪んでいる。底部は平底で、器壁は厚い。

(57) はSP28出土の甕底部である。僅かに外側に肥厚した突出平底である。直線的に広がる体部に続き、外面は板ナデで仕上げられている。

(58) はSP02出土の須恵器杯蓋である。体部は椀状に内湾しており、天井部はロクロケズリで、下半はロクロナデである。変化点の稜線は明らかでない。

(59) はSP541出土の須恵器杯身である。僅かに内湾ぎみの直線に延びる体部から上方に外反する立ち上がり部が接続する。受部は短く斜め上方は上がっている。受部端部は丸いが、口縁端部は外側に尖ったシャープなものになっている。

(60) も須恵器杯身である。SP503出土で直線的に外側上方に延びる体部から、そのまま直線的に広がる受部へとつながる。受部端部は丸く仕上げられているが、立ち上がり部は端部近くで外反している。端部は丸く薄くなっている。端部内側が面状になっており、段が認められる。内外面ともロクロナデで、外面底部はロクロケズリである。残存部が少ないこともあろうが、稜線は不明瞭である。

(61) も須恵器杯身である。SP233出土で、やや厚手の感じを受ける。内外面ともロクロナデで、外面底部はロクロケズリである。残存部が少ないこともあろうが、稜線は不明瞭である。体部は内湾し、立ち上がりも内傾ぎみに延び、端部は丸く納めている。受部は短く上方へ尖っている。

(62) はSP256出土の須恵器である。外面上端に櫛描き波状文と下端に左上がりのタタキメが施されている。肩部分の破片と思われ内湾している。壺の破片であろうか。

(63) はSP360出土の土師器である。脚部で器高の低いものである。短くふんばりぎみに広がる

(64) はSP149出土の須恵器である。内傾する体部から口縁部が短く直立する短頸壺である。口縁端部内面に1条の沈線がめぐらされる。内外面共にロクロナデによる。

(65) はSP194とSP195から出土の接合資料で、外反して開く口縁部の破片で、外面に凹線文で画された櫛描き波状文が2帯施される。櫛描きの細かい施文である。壺口縁部か。残存部上方で変化点があり、さらに開くようである。

3．溝（SD）出土土器（図版128～135；66～156）

SD03（図版128･129；66･67）

(66) は土師器甑の把手周辺部分の破片である。体部は内湾しており、把手は上方へ反り返る。体部に挿入して接合している。ナデ・ハケ整形後ヨコナデ仕上げ。内面の一部にススが付着している。

(67) は須恵器杯蓋である。稜線が顕著である。体部は丸く内湾し、天井部も緩やかに内湾している。口縁部はわずかに内湾し、端部は丸く収められる。ロクロナデで、天井部にロクロケズリがなされている。

SD04（図版128･129；68･69）

2点の須恵器を図化している。(68) は古相を示す杯身である。体部は内湾するが、比較的浅く重心が低い形態である。立ち上がり部は内側へ直線的に延びる。端部は外側に細く尖らせている。内側に面を持っており、沈線状になっている。底部はやや上がりぎみである。受部は水平に短く延びる。外面下

半はロクロケズリで成形している。それ以外はロクロナデである。底部外面には平行する3条のヘラ記号が確認できる。

(69) も杯身であるが、(68) に比べると立ち上がりが高い。体部の残存部は少ないが、直線的である。受部も体部から続く直線で、上方に向かって延びている。立ち上がりは長く内側に向かって外反している。端部は外側を尖らせている。ロクロナデで作っている。

SD10 (図版128・129；70・71)

(70)・(71) は土師器甕口縁部である。(71) は外反して開く口縁部で、端部は丸く収まる。磨滅により調整は不明である。

(71) は球形の体部から屈曲した口縁部が外反する。体部外面にハケ調整を施している。二次焼成による赤変が見られ、外面にススの付着が見られる。

SD11 (図版128・129；72～74)

(72) は布留傾向の土師器甕である。倒卵形をした体部で内面はヘラケズリで作っている。下半は下から上方向への、上部は斜め上方向から横方向のケズリである。外面はハケ整形で、ユビ調整を加える。明瞭な頸部はヘラケズリによって形成されたもので、鋭く仕上がっている。口縁部は内湾するもので端部は内側に肥厚している。器壁は薄く丁寧に作られている。体部下半にはススが付着しており、布留傾向を示す典型的な甕である。布留0期とされるものと考えて問題ないか。(73) は口径21.7cmを測る大型の特殊なタイプの土師器鉢である。小型精製鉢を大型にしたような形状をしている。全体的に内湾するような鉢であるが、体部中位に段が施されており、特殊な形状に感じられる。体部全体は比較的直線的に開き、口縁端部は尖りぎみに丸く納めている。不安定な底部には貝殻状の施文具で整形したと思われる粗いハケ状の痕跡が残っている。体部にナデ整形後、口縁部にヨコナデを施して仕上げている。体部の一部には火を受けた痕跡が残る。

(74) は土師器壺の底部である。底面中央が上げ底になった平底である。体部は外反するように広がっていく。内外面ともにナデ調整であるが、内面にはヘラ状の圧痕が残っている。

SD14 (図版128・129；75～86)

(75) は土師器甕口縁部で、明瞭な稜線を持たないくの字甕である。体部は肩の張らない楕円形で、頸部は甘く外反する口縁部につながる。端部は外側につまみ出しており、丸くおさめている。口縁部の広がりは小さく、最大腹径の方が上回っている。口縁部にはユビの痕跡が明瞭に残っており、口縁部を広げて作りだしたものと思われる。外面ハケ整形で、内面ヘラケズリののちハケ整形している。ハケ目は粗く、貝殻条痕の可能性もある。

(76) ～ (78) は土師器小型丸底壺である。(76) は口縁部を欠いているが、やや器高の高い球形の体部でユビ成形ののち、ユビ調整を加えている。頸部は甘く口縁部に続いている。(77) は完形品であるが、やや変わった形状をしている。体部はやや扁平な球形で、屈曲して頸部となり、外反する口縁部となる。(78) も算盤玉状の扁平な体部で、頸部はすぼまり口縁部に続く。内面には指頭圧痕が残っており、ユビ成形のままである。内面は平滑ではない。外面にはススが付着している。

(79) は土師器高杯脚部である。裾が水平に近く広がるタイプで、脚部は細く内側にすぼまっている。内面には絞り目が残されており、ナデ調整が施されている。外面も仕上げナデが見られる。裾部内面には粗いハケ状の痕跡がある。

(80) は土師器壺底部である。突出平底であるが、底部の高さがやや高めである。底部再成形で、ユ

ビ成形によって底部を作っている。体部は直線的に延びるようである。外面にはユビ押さえ痕が顕著に残る。

(81) は土師器甑の把手である。比較的太く上方に反る。ユビ成形後ナデ仕上げ。

(82) は須恵器杯蓋で、天井部の稜線が明瞭である。天井部にはロクロケズリを施している。天井部は直線的で、稜線を持ってから口縁部が内湾し、端部は丸く仕上げる。

(83) は須恵器杯身である。体部は直線的に延び、受部に続いている。受部は短く、上方へ延びている。立ち上がりは内傾しており、口縁端部は尖る。

(84) は須恵器の口縁部である。長頸となるものでスリ鉢かもしれない。端部は丸く肥厚し、端部下に凹んだ部分が存在する。端部下は斜めに直線に延び狭まっている。器壁は厚めである。一部に自然釉が残る。

(85) は須恵器甕の口縁端部の小片である。断面の形はおおむね三角形であるが、端部中央が凹んでいる。内外に大きく肥厚するもので、ロクロナデである。小片のため、不明確だが復原すると45cmと大型になる。

(86) は土錘である。管状のもので、やはり歪な作りである。中央が膨らむものではない。二次焼成を受けており、黒斑がある。

共に滑石製双孔円板 (J11) も出土している。(別項で詳述)

SD15 (図版128・129；**87**)

(87) は土師器小型丸底壺で精製品である。体部は浅い半円球形で、鋭い稜線を持つ頸部になる。そこから内湾する口縁部になるが、非常に薄く丁寧に作られている。端部は鋭く尖っている。ナデ整形ののちヨコナデで仕上げる。

SD16 (図版130・131；**88〜93**)

(88) は土師器高杯脚部である。筒部は中空で、裾に向かって僅かに広がっているが直立ぎみである。裾部は多少外反するように比較的低い位置で広がっている。端部は角張りぎみである。二次焼成を受けている。

(89) は脚台部である。手捏ねで作っている。ユビ成形ののちにナデ調整している。内外面とも同様である。脚台内面は上げ底になっている。脚台Ⅱ式の製塩土器である。全体に二次焼成を受けている。

(90) は甑の把手である。上方に反っており、断面形はやや扁平で歪な方形で先の方へ細くなっていく。下面にスス状炭化物の付着が見られる。

(91) は須恵器の把手付きの鉢である。内湾する体部から口縁部が内傾して立ち上がる。口縁端部は丸く収める。把手部は本体への接合部のみが残されている。把手は口縁部になる変化点の下に付加されており、縦方向の断面円形の細い把手になるものと思われる。全体的にロクロナデで仕上げられている。上から5条の波状文－凹線－5条の波状文－直線文－4条の波状文が施文されている。波状文が消されていることから、波状文施文後に凹線・直線文が施されていることがわかる。

(92) は土錘の破片である。断片ではあるが、中央孔は細く紡錘形のものであったかと思われる。

(93) は羽口である。残存する先端部は円筒形に近く、ガラス滓が付着している。断面形は円形で強く被熱している。

SD18 (図版130・131；**94・95**)

須恵器杯蓋2点を図化している。(94) は内湾気味の天井部から、内湾する口縁部に続く。器高に比

べて口径は広めであることから、全体的には平たい印象を受ける。特に天井部の高さがないので扁平な感じである。端部は外側に尖らせているが、内側に面はなさない。天井部はロクロケズリであるが、境界の稜線は明瞭ではない。ロクロナデで内面は1定方向の仕上げナデが施されている。

(95) は天井部と体部に変化点がある。ロクロナデによって突帯状になっている。天井部は平坦に近くそこから内湾している。口縁部は外反ぎみで細く尖らせている。口縁部は直線的である。

SD25（図版130・131；**96・97**）

(96) は須恵器杯蓋で、天井部は丸みを持つ。全体的に内湾し、口縁部はやや直線的に延びる。端部は外側に丸く納めている。天井部はロクロケズリである。

(97) は須恵器杯身で (96) とセット関係にあると思われる。底部の一部を欠いているが、ほぼ完形である。体部は内湾しているものの、比較的直線的である。受部まで内湾ぎみに延びている。受部は上方へ延び端部は丸い。器壁は厚めである。立ち上がりは直線的に内傾している。端部は外側に尖らせ、内側が面をなしている。底面には十字に交差する二本のヘラ記号がみられる。

SD27（図版130・131；**98〜100**）

(98) は土師器高杯杯部である。杯部底は平たく水平に開き、口縁部は直線的に外傾し端部は尖る。脚台部は中空で接続している。内外面ともハケ整形で、口縁部はヨコナデ。内面の一部にススが付着している。

(99) は須恵器杯身で丸底ではあるが、平たく歪である。体部は内湾し、受部は端部が膨らんで丸くなり体部から直線的に延びる。立ち上がりは内傾し、端部は外側に丸くつまみあげている。底部はロクロケズリ。

(100) も須恵器杯身で底部は尖りぎみで、僅かに内湾しつつ直線的に受部につながる。口縁部は内湾ぎみに内傾しており、端部は丸い。

SD31（図版130・131；**101**）

(101) は須恵器の口縁部を欠くハソウである。肩部に円孔を有している。内面はユビ成形で、外面はロクロナデである。外面には自然釉がかかっている。体部は球形である。

SD33（図版130・131；**102〜105**）

(102) は土師器壺口縁部である。弥生的な壺口縁部は筒状の頸部から外反して大きく開き、端部を上下に肥厚している。端面に櫛描き波状文が施され、上端部にはヘラ状工具による刻み目がめぐる。内外面にハケ目の痕跡が残る。内面にススの付着が観察される。

(103) は土師器鉢である。精製の浅鉢で薄く仕上げられている。丸底で体部は内湾している。口径が最大径になる。明瞭でシャープな稜線を内面に有し、直線的に外傾する口縁部に続く。端部は丸い。外面にハケ調整後ミガキの痕跡がある。

(104) は土師器壺底部である。底部は平底で体部は外反する。外面にはタタキの後、縦方向に板ナデが施されている。器壁は厚めである。

(105) は土師器甕である。やや下膨れに長胴化した体部からくの字状に屈曲して開く口縁部がつく。口縁端部はわずかに上方へ引き上げられる。体部内面底部にはユビ押さえ痕が顕著に残るが、以上ではヘラケズリが施されている。外面はハケ目がほぼ全面に残る。全体の器形から、布留式でも新しい時期に比定することができる。内面の一部にススの付着が見られる。

SD35（図版130･131；**106**）

（106）は須恵器杯蓋である。内湾する体部で、天井部も丸くなっている。口縁部も内湾し、端部は外側に向かって尖っている。稜線部分に1条の沈線がみられる。

SD36（図版130･131；**107･108**）

（107）は土師器小型丸底壺の体部である。口縁部を欠いている頸部までの破片である。浅い半球形の体部で、外面一部にヘラミガキの痕跡があり、黒斑も認められる。内面には板ナデの痕跡が残る。

（108）は土師器甕である。体部は内湾しており、上位の方に最大腹径を持つ倒卵形である。くの字甕であるが、頸部が強いヨコナデによって段が作られており、そのため二重口縁のようにも見える。口縁部は直線的に延び、端部は内側に肥厚させつつ丸く納めている。内面はヘラケズリののちハケ整形、外面は斜め方向のハケ整形で仕上げている。口縁部はヨコナデである。布留式の甕である。体部下半に黒斑が見られる。

SD41（図版130･131；**109**）

（109）は土師器甕口縁部である。頸部までしか残存していない破片である。くの字状に屈曲して開く口縁部はわずかに内湾し、端部を内側に肥厚させる。外面屈曲部にはハケ状工具の当たり痕が確認できる。肩部内面には横方向のハケ調整が観察できる。

SD44（図版132･133；**110～121**）

（110）・（111）・（114）は土師器甕である。（110）はわずかに内湾ぎみの口縁部で、端部は角張りぎみに内側に肥厚する。くの字甕で、頸部の稜線は明瞭である。頸部にハケ目が残る。（111）は（110）よりも内湾する口縁部で、端部は角張り内側に肥厚する。くの字甕であるが、頸部上方で1度屈曲しており直立する。頸部の稜線は明瞭である。頸部は強いヨコナデによって窪んでいる。（114）はくの字甕で表面磨滅している。体部は僅かに内湾し、やや甘い頸部から直線的に延びる口縁部になる。端部は丸く、中央部の器壁が厚くなっている。

（112）は甕口縁部である。外反して開く口縁端部を内外に肥厚させ、端部に凹線状の溝をめぐらす。頸部外面にはタタキの痕跡もあり、ナデで仕上げられている。現状では土師質のように見えるが、形態・技法から本来は須恵器として焼かれたものが、焼成不足で生焼けとなったものと思われる。

（113）・（115）は土師器壺の口縁である。（113）は外傾して直線的に開き端部は内側に尖る。外面には6条1単位の櫛描き波状文が2段に施される。小片ではあるが、比較的厚手で大型の壺であったと思われる。（115）も小破片で、外反して開く口縁部の外面に櫛描き波状文が施されている。

（116）は土師器甑の把手である。外反して上方に上がっている。先が細くなっている。断面は円形となっているが、歪で、ユビ成形・調整がなされている。

（117）は土師器の大型鉢である。口径が最大径となるもので、口縁部は外反し端部は角張る。底部は丸底であるが、接地面の大きい底部である。体部は内湾するが直線的である。上下の接続部はないが、同一個体であることは明らかとして、図上で復原した。頸部外面には2条の沈線がめぐらされる。体部上半外面にはていねいなミガキ、内面にはハケ目が残る。底面にはタタキ目・粗いハケ目が残り、一部に黒斑が認められる。

（118）は須恵器杯蓋である。内湾する体部で稜線は有さない。ロクロナデだけで、ロクロケズリは認められない。体部から内湾したままで口縁部に続く。端部は外側に尖っている。

（119）は須恵器杯蓋である。平べったいが内湾する天井部から直立ぎみに僅かに外傾する口縁部に

つながる。端部は丸く納めている。器高は低めで全体的には扁平な印象を受ける。外側に突出する稜線が特徴的な蓋である。天井部にはロクロケズリを行っている。肩部に断面三角形の突帯状の段を持っている。

（120）・（121）は須恵器杯身で、古相を示す。（120）は扁平な器形である。体部は内湾し、擬口縁状になって受部となる。受部は僅かに外側に出る程度である。立ち上がりは大きく内側に屈曲し外反する。端部は丸くなっている。体部の器壁は厚い。静止ケズリが見られる。全体はロクロナデで、内面には仕上げナデが施されている。（121）は（119）とセット関係になるものである。成形技法は（120）と似ており、静止ケズリの見られる製品である。体部は内湾し丸く仕上げられている。受部は突帯状に水平に開き、端部は尖らせている。立ち上がりは僅かに外反しつつ内傾している。

（119）～（121）は形態的に初期須恵器の特徴を示す。共に砥石（S30）も出土している。（別項で詳述）

SD45（図版132・133；**122・123**）

（122）は須恵器樽型ハソウの破片である。口縁部を欠いているが、体部は復原可能である。体部に櫛描き波状文と直線文を施している。側面は内側に凹んだ面となっている。稜線が鋭い製品である。TK208の時期と思われる。

（123）は管状の土錘で大型品である。現存長7.7cm、径3.6cmを測る。二次焼成を受けている。

SD48（図版132・133；**124～128**）

（124）は土師器甕口縁部で内湾する体部から短く外反する口縁部になる。ヨコナデで仕上げられており、頸部が凹んでいる。端部は丸い。体部内面には板ナデの痕跡がある。

（125）は土師器高杯杯部である。内湾する下半から稜線を持って僅かに外反する口縁部になる。端部は尖りぎみである。中央の変化付近は強いヨコナデによって器壁が薄く凹んでいる。外面は縦方向のハケ整形で、全体的にはヨコナデで仕上げている。一部ナデ調整・ハケ調整も加えている。

（126）は土師器甕である。口縁部を欠いているもので、頸部以下が残っているものである。底部は小さな平底で、中央が上げ底になっており、不安定なものである。体部は長楕円形で緩やかな弧を描いている。重心は低く、下膨れの体部である。内面はヘラケズリ、外面には粗いハケ目状の痕跡（貝殻条痕か？）がある。

（127）は土師器鉢である。やや不安定な平底から内湾する体部になり、頸部付近で内傾してから外反する口縁部になり、口径が最大径になるものである。口縁端部は尖りぎみで、僅かに上方につまみ出している。粘土紐の継ぎ目が明瞭なことから、粗いつくりの印象を受ける。

（128）は土師器（土製）支脚である。ユビ成形で作られたもので指頭圧痕が全面に残っており、平底で中実になっている。指頭圧痕が全面に見られる。一端を引き上げ、甕などを支えたと思われる部分が残っているが、指状の突起はつかないタイプと思われる。上面は皿状にくぼみ、いわゆる沓形と呼ばれるタイプであろう。

SD49（図版134・135；**129～131**）

（129）～（131）は土師器高杯である。（129）は椀形の杯部で内湾しており、端部は丸く内側に向かっている。脚部は中実になろうかと思われる。外面はハケ整形がなされている。下端の脚部との接合部分に櫛状工具による刺突の痕跡が残る。

（130）・（131）は同一個体になると思われるが、確認できる接点がないことから、別個体として扱っている。（130）は杯部で平坦な底から直線的に外傾し、端部付近で外側につまみ出して水平に開いて

いる。端部は丸い。外面は丁寧なハケ整形である。また、(129) と同じく、脚部との接合部分に棒状工具により刺突した痕跡が残っている。(131) は脚部である。表面磨滅が著しく成形技法は不明である。杯部との接合部から緩やかに広がり、裾部で角度を変えて大きく広がる。端部は尖っている。脚柱部内面はケズリによるものと思われる。二次焼成による赤変が見られる。

共に滑石製双孔円板 (J9) も出土している。(別項で詳述)

SD50 (図版134·135；132〜156)

(132)・(133) は土師器小型丸底壺である。(132) は最大腹径が低い位置にあり、丸底であるが接地面の広い安定した形状になっている。扁平な球形の体部から頸部になり、外反する口縁部になる。端部は尖りぎみの丸くなっている。体部はユビ成形で指頭圧痕が内面に残っている。(133) は手捏ねに近い粗雑なつくりである。口縁部は折り曲げて作っている。やはり、平底に近い接地面の大きい底部で、断面形状が隅円方形に近い形になっている。口縁部は薄いが、体部の器肉は厚くボテッとした感じである。いずれにも黒斑が認められる。

(134) 〜 (136) は土師器甑把手である。(134) は幅広で薄く上方へ大きく延びている。先端は尖っている。(135) は断面が楕円形で厚い。斜め上方に延び、先も丸くなっている。(136) はほぼ水平に延びてから、急激に上方に上がるもので、先は尖っている。幅は広めで厚めである。一般的な把手である。(137) は両端に円孔のある有孔土錘である。現存長6.5cm、太さ1.5cmで一方の端部を欠いているがほぼ全容は推定できる。手捏ねで作っている。片側から穿った孔を有している。

(138) 〜 (140) は管状土錘である。長さやタイプも異なっている。(138) は片側を欠いている。片側から穿孔したと思われる。幅は狭く歪である。(139) は芯に粘土を撒いて作ったような土錘で、外面に多数の指頭圧痕が残っている。表面もでこぼこで平滑ではない。両端も水平にはなっていない。(140) は中央が膨らみ、両端が丸みを持った土錘である。3点の中では丁寧に作られた土錘で完形である。

(141) 〜 (144) は須恵器杯蓋である。(141) は体部外面の稜線が明瞭である。天井部はやや平たいが丸く、稜線を持って口縁部が直立する。端部は外側に尖らせている。天井部はロクロケズリで、一部を欠いているが全体像は想定できる。口縁部の作りや技法など精緻でシャープなつくりである。(142) は天井部が丸みを持つ。天井部はロクロケズリである。全体的に内湾しており、変化点がない。端部は外側に丸く仕上げている。(143) は扁平な器高の低い蓋である。天井部が尖りぎみで歪に焼き上がっている。天井から直線的に広がり肩を持って外傾して口縁部となる。端部は外側につまみ出しており、尖っている。肩部に沈線を有している。(144) も扁平な杯蓋である。天井部はロクロケズリがなされており、平坦になっている。平坦な天井部から緩やかに口縁部へと続く。口縁端部上部に直立する変化点がある。端部は全体的に尖らせている。外面には自然釉がかかっている。

(145) はつまみを持つ須恵器蓋である。器形からみて、有蓋高杯の蓋と思われる。つまみ部は中央が凹んだ丁寧なつくりである。ロクロケズリののちにつまみが付加されている。天井部は平たくなっている。口縁部は残存していない。

(146) 〜 (150) は須恵器杯身である。(146) は立ち上がりが大きく延び、僅かに端部が外反する。端部は外側につまみ出している。体部は内湾しており、大きく屈曲している。底部は残っていないが器高の高い杯身になろうかと思われる。器肉は極端に薄いわけではない。(147) は口径の大きなもので緩やかに内湾する体部から受部につながり、受部は水平に開いている。端部は丸い。立ち上がりは外反しており、端部は尖りぎみに丸い。(148) は緩やかに内湾する体部から受部は直線的に延びている。受部

端部は丸く、底部は平たい。立ち上がりはやや外反するものの内傾して、端部付近で外反する。ロクロケズリによって稜線が認められる。中ぐらいの口径で器高は高めかもしれない。(149) は内湾する体部で直線的に受部まで延びている。口径は大きめである。立ち上がりは内傾しており、端部は丸く僅かに肥厚している。(150) は平坦ぎみの底部から内湾し、受部まで延びている。受部端部は尖っている。立ち上がりは大きく外反している。端部は尖る。

(151) は須恵器ハソウ口縁部である。屈曲した2段になる口縁部で、頸部から外傾する。端部は角張る。外面には櫛状工具により刺突列点文が2段に施される。外面一部に灰かぶりの痕跡がある。

(152)・(153) は須恵器ハソウ底部である。球形の体部から直線的に外傾する口縁部につながる。頸部の稜線は明瞭ではない。肩部下に円孔が1ヵ所あり、肩側上方から内側に穿孔している。(152) の肩部には櫛状工具による刺突列点文が巡らされている。(153) は体部がやや扁平な算盤玉状をしている。肩部に円孔が1ヵ所ある。底部は接地面の大きい丸底である。

(154)・(155) は須恵器甕である。(154) は口頸部と体部に接合部分はないが同一個体と思われるので復原図として図化した。体部は歪な体部である。最大腹径は器高中位より上位に存在する。頸部は湾曲し、明瞭な稜線を持たない。口縁部は外反し、端部は内外に肥厚する。体部外面には格子目のタタキ、内面には同心円の当て具痕が見られる。(155)・(156) は須恵器甕である。いずれも外反して開く口縁部の端部を肥厚し角張らせて、玉縁状を形成する。(155) の体部外面には平行タタキ、(156) ではその上にカキ目が見られ、両者とも内面には同心円当て具痕が見られる。

共に砥石 (S34) も出土している。(別項で詳述)

4．井戸 (SE) 出土土器 (図版136～139；157～192)

SE01 (図版136･137；157･158)

(157) は土師器甕である。底部を欠いている。くの字甕で、頸部内面の稜線は明瞭ではない。口縁部は外側に開き、端部は丸いが角張りぎみである。体部は楕円球形をしており、尖り底か小さな底部になろうかと思われる。内面はヘラケズリ、外面は右上がりのタタキ成形ののちハケ整形を施している。庄内期の甕であろう。二次焼成が激しく、剥離・赤変が顕著である。(158) は僅かに平底として残っている底部である。球形の体部になる。内面は粘土紐の継ぎ目が見られ、指頭圧痕が残り、ユビ整形がなされている。外面はタタキ成形からナデ・ミガキで調整している。両者共、外面にスス状炭化物の付着が見られる。

2点の土師器は井戸底面からやや浮いた地点で出土しており、今回調査した遺構の中で、最も古い時期になる遺構と思われる。

SE02 (図版136･137；159～162)

(159)・(160) も土師器甕口縁部である。(159) は内湾する二重口縁で、かろうじて二重になっている。端部は角張る。ヨコナデで仕上げる。外面に被熱の痕跡がある。(160) は外傾する口縁部で端部は角張る。ヨコナデで仕上げる。

(161) は土師器ミニチュア土器である。鉢で指頭圧痕が全面に残っている。平底に近い丸底で体部は内湾し、口縁部は内傾する。端部は尖る。

(162) は高杯脚部である。中空の脚部で緩やかに広がり、裾部は外湾して大きく開く。裾端部に向かって徐々に器壁は薄くなっていく。端部は丸い。3方向に円孔が穿たれている。内面はヘラケズリと

ユビ成形ののちナデ調整、外面はヘラミガキで仕上げており、ヨコナデもなされている。

SE03（図版136･137；**163**）

（163）は土師器壺底部である。安定の悪い平底である。外面タタキ成形で再成形して底部を作り出している。内面はハケ整形からナデ調整している。

SE05（図版136･137；**164･165**）

（164）は須恵器壺口縁部である。ロクロナデで、外面にはカキメが見られる。端部が肥厚しており玉縁状になる。緩やかに外反する口縁部である。

（165）は須恵器甕口縁部である。ロクロナデである。外傾する頸部から内外に肥厚する端部になる。内外に肥厚し、端面とならずに面中央部分も突きでている。

SE06（図版136･137；**166～175**）

船材を再利用した井戸で比較的多くの遺物が出土している。須恵器・土師器・玉類が出土している。

（166）・（167）は土師器甕口縁部である。（166）は 水平に近く開く口縁部で、おそらく体部はあまり膨らまず、最大径が口縁端部になるタイプの甕である。頸部にはユビ押さえ痕・ハケ調整痕が残る。（167）はくの字甕で、内湾する体部から比較的明瞭な稜線になる頸部となって僅かに外反する口縁部となる。端部は尖りぎみである。体部内面はヘラケズリとユビ成形、外面は細かいハケ整形である。口縁部内面はやはり細かい横方向のハケ整形ののち、全体にヨコナデを施して仕上げている。口径が比較的小さ目の甕である。

（168）は作りは粗いが小型丸底壺の底部である。重心の低い体部で、歪な球形である。粘土紐継ぎ目が明瞭で、ユビの痕跡も明らかである。

（169）は土師器底部である。やや不安定な平底である。

（170）は土師器甑の口縁部である。尖った端部から直立ぎみに延びている。下半に向かってやや広がっていく。粘土紐継ぎ目が認められ、外面はハケ整形である。

（171）～（173）は須恵器杯身である。（171）は内湾する体部で受部は水平に開く。立ち上がりは上部に外反して延びている。端部は尖りぎみに丸い。立ち上がり中央が厚くなっている。（172）は直線的に開く底部から低く内湾する体部になる。受部は体部から直線的に続く。端部は丸い。立ち上がりは内傾し、端部はやはり丸い。（173）は内湾する体部から立ち上がりも内湾する。受部は水平に短く丸く納めている。内面中央に同心円の当て具痕が残る。

（174）・（175）は須恵器壺である。（174）は算盤玉状の体部から外反する口縁部になる。端部はやや肥厚し丸く納めている。ロクロナデから外面はカキメが施されている。（175）は底部と口縁端部を欠いている。球形の体部から外反する口縁部になる。体部内面には指頭圧痕が残っている。外面には格子タタキが下部に見られ、上半はカキメが施されている。頸部外面には刺突文が2段に施され、凹線文と交互に帯となっている。

共に滑石製の小型勾玉（J4･J5）・井側に再利用されたと思われる船材（W4･W5）も出土している。（別項で詳述）

SE07（図版138･139；**176･177**）

（176）は土師器甕の完形品である。井戸底でなく中位に位置して出土している。廃棄時の遺物であろうか。球形の体部で丸底である。ほぼ中位下よりに最大腹径を有している。口縁部は外反しているが、端部付近で上方へつまみ上げている。端部は丸い。体部内面はヘラケズリで、頸部近くはユビ成形され

ている。指頭圧痕の周囲には粘土の継ぎ目も見られ、一部と頸部にはハケ調整も加えられている。外面ほぼ全面にススの厚い付着が見られる。SE01の甕と違って新しい要素を多く持っている。

(177) は土師器高杯脚部である。3方透孔の円孔を有する。ラッパ状に開くもので、裾部は変化点を持ってさらに開いている。端部は細く丸い。脚柱内面には絞り目、外面にはハケ調整痕が残る。

SE08 (図版138・139；**178・179**)

2点の須恵器を図化している。(178) は杯蓋である。丸い天井部で口縁端部は丸くなっている。僅かに肥厚ぎみである。(179) は杯身で、口径15.80cmと大型のものである。逆に器高は3.05cmと低く、全体には非常に扁平である。接地面の大きい平たい底部から屈曲して外傾し、さらに広がって受部に続く。受部端部は丸くほぼ水平である。立ち上がりは無い湾ぎみに内側に延びている。受け部に重ね焼き痕が残り、外面には自然釉の付着が見られる。2点はセット関係にはないと思われる。

SE09 (図版138・139；**180～192**)

(180) ～ (183) は土師器甕口縁部である。すべて小片で磨滅している。(180) では内湾し端部が僅かに内側に肥厚する。明瞭ではないが、布留期の傾向を示している。(181) では外反し端部を外側につまんでいる。端部は面となり角張る。(182) では内湾ぎみに外傾してから端部を外側につまむ。(183) は外反し端部付近でさらに曲げている。すべてヨコナデで仕上げているが、(180) のように粘土紐がみえるものもある。(181)・(182) では外面にススが付着する。

(184) ～ (186) は土師器小型丸底壺である。(185)・(186) は底部を欠いている。(184) は接地部の多い断面形状が隅丸方形をしている体部である。口縁部は外反する。体部内面はユビ成形でナデ調整を加える。外面もユビ調整である。口縁部はヨコナデである。(185) は球形の体部から外傾する口縁部になる。端部は尖り、中央部がやや器壁が厚くなる。体部内面はユビ成形でナデ調整を加える。外面はハケ整形である。口縁部はヨコナデである。(186) は扁平な球形の体部から外傾する短い口縁部に続く。内外面ハケ整形で口縁部はヨコナデをしている。体部内面はユビ成形で掻き取っている。(185)・(186) は精良な胎土による精製品である。

(187) ～ (191) は土師器高杯である。形態・規模はまちまちである。(187) は接合点が確認できないが図上で完形に復原できるものである。杯部は深く水平に延びてから大きく外反ぎみに広がっている。杯部外面に凹線がある。脚部はラッパ状に開き端部は角張りぎみである。脚部内面はヘラケズリで上端にはヘソ状粘土充填の痕跡が見られる。(188) は器壁が厚い椀形高杯である。口縁部は外反して開く。杯部外面にはハケ調整痕が、内面にはハケ調整の後放射状暗文様に粗いヘラミガキが見られる。脚部は外傾して開き接地するような位置で屈曲し水平に開いている。内面ヘラケズリ、外面はハケ整形ののちヘラミガキされている。粘土充填が確認できる。(189) は (187) に近い形態で大型のものである。脚部内面はヘラケズリののちハケ整形、外面はハケ整形ののちヘラミガキで仕上げられている。杯部もハケ整形ののちミガキで丁寧に仕上げられている。脚部は中空である。(190) はさらに大型の高杯杯部である。しっかりしたほぼ水平の受け部から外反気味に大きく立ち上がって開く口縁部が続く。屈曲部と接合部にはユビ押さえ痕が顕著に残る。(191) は裾部の破片である。外側に開いてから端部が下方につまみ出されたものである。内面はヘラケズリで、端部周辺はヨコナデである。

(192) は須恵器の口縁部である。壺であろうか。小型のものの口縁部である。外反し、端部は尖る。頸部に細かい6条の櫛描き波状文が施されている。

共に板材 (W1)・折敷把手と見られる製品 (W2) も出土している。(別項で詳述)

5．土坑（SK）出土土器（図版140～157；193～369）

SK02（図版140・141；193・194）

須恵器杯蓋（193）と土師器高杯（194）を図化している。（193）は天井部がやや平坦ながら丸いもので、稜線が明瞭である。凹線状に凹んで直立する口縁部になる。端部は外側につまみ出している。内面に稜線を持っている。（194）は内湾する杯部で端部は丸い。

SK05（図版140・141；195・196）

（195）・（196）は土師器甕口縁部である。（195）は湾曲する頸部で口縁部部は外反している。端部は上方につまみ上げている。端部は尖っている。体部外面はハケ整形で、口縁部はヨコナデで仕上げる。端面を形成しており、上方につまみ出すなど丹波地方産の特徴を有している。（196）は長胴の重心の低い体部から口縁部が屈曲して開く。口縁部は器壁が厚く、叩き出しによる。体部外面にはタタキの後ハケ調整が、内面にはハケ調整が施されている。外面一部にはススの付着が見られる。布留甕ではないが併行期の須恵器を伴わない4世紀代の遺物である。

SK13（図版140・141；197）

（197）は複合土器かと思われる特殊な器形の土師器である。小型器台の受部に扁平な球状の体部を乗せた形のもので、小型器台と丸底壺が合体した形状になっている。受部との継ぎ目には若干の段ができている。口縁部を欠くが、直立もしくは外反して立ち上がるものと推定される。外面にはハケ調整後のミガキが見られ、内面には粘土紐痕が顕著に残り、有機物の付着が見られる。外面はハケ整形ののちナデ調整を加え、精製品のように仕上げている。

SK16（図版140・141；198～203）

土師器ばかりが出土している。（198）・（199）は甕口縁部である。くの字口縁で（198）は緩やかに屈曲し、（199）は外傾する口縁部で頸部が強く曲がっている。（200）～（203）は底部で、（200）・（201）は上げ底になっており、（202）・（203）は突出平底である。外面タタキ成形の（201）・（202）やハケ整形の（200）がある。

SK17（図版140・141；204・205）

（204）は外面に装飾を施す珍しいタイプの土師器高杯柱状部である。櫛状工具で扇形文を描いている。裾に向かって広がっていくものである。

（205）は須恵器杯蓋である。口縁端部近くの破片である。外傾する口縁部で、端部は丸い。

SK18（図版140・141；206～208）

3点の土師器を図化している。（206）は高杯杯部で椀形をしている。内湾する体部で口縁部は水平に広がる。端部は丸い。

（207）は高杯脚部である。中空の筒部で裾部に向かって広がっていき、裾近くで変化し広がっていく。内面はヘラケズリで外面はタタキメを残す珍しいものである。（208）は底部で上げ底になっているが、端部だけが高台のようになっている。

SK19（図版140・141；209・210）

（209）は土師器甕である。くの字状に屈曲して開く口縁部はわずかに内湾し、端部を内側に肥厚する。肩部内面に指押さえ痕が残る。

（210）は土師器壺口縁部である。ほぼ直線的に外傾して開く直口である。

SK21（図版140·141；211～217）

（211）·（212）·（214）は土師器甕である。くの字状に屈曲して開く口縁部はわずかに内湾し、端部を内側に肥厚する。体部外面、（212）では口縁部内外面にもハケ調整痕が残る。（214）は破片のため、上下の判断に迷うが、ユビ押さえ痕のつき具合、二次焼成の受け具合から、図示したように重心が低い位置に偏っていたと思われる。体部外面上半にはハケ目が顕著で、ほぼ全面にスス・炭化物の付着が見られる。

（213）は土師器鉢である。内湾する体部から屈曲して外方へ開く口縁部がつく。内外面にはハケ調整が施される。

（215）·（216）は土師器高杯である。椀状の杯部に屈曲して開く脚部がつく。（215）では口縁部がわずかに外反する。（216）では口縁部がわずかに内側に肥厚され、脚部には円孔が2方に穿たれている。杯部、脚部外面にはヘラミガキが施され、脚柱部内面には絞り目、ヘラケズリが見られる。（216）は二次焼成を受けている。

（217）は須恵器杯身である。重ね焼き痕が観察できる。

SK23（図版142·143；218～225）

（218）·（219）は土師器壺である。（218）は細身の算盤玉状の体部から外反気味に開く口縁部がつく。内外面共にハケ調整が見られ、体部下半に焼成後の穿孔が見られる。古墳時代初頭に所属すると思われる。（219）は球形の体部に外反して開く短い口縁部がつく。

（220）～（223）は弥生土器と思われる。（220）は壺の大きく開く口縁部である。端部を垂下し、端面に2条の凹線をめぐらせ竹管文を押捺した円形浮文を貼り付ける。（221）は壺底部で、わずかに中心部が浮く平底である。（223）は器台脚部である。鼓状に外反する体部から脚端部が大きく反り返って開く。4方に2段の円孔が穿たれている。ヘラ圧痕、ハケ目の痕跡が見られる。

（224）は土師器甑である。内湾気味の体部から、ほぼ直立する口縁部が続く。端部を内側に肥厚する。内外面共にハケ調整が施され、把手の抜け落ちにより円孔の周囲にもハケにより放射状にナデつけられた痕跡がある。

（225）は須恵器壺である。外反して開く口縁部で、端部を上下に肥厚している。

以上の遺物から弥生土器は含まれるものの、おおむね6世紀前半の土坑と思われる。

SK28（図版142·143；227～231）

（228）は二重口縁を有する大型の壺で、筒状の頸部から大きく外反し、屈曲して内傾気味に立ち上がる口縁部を持っていたと思われるが、立ち上がり部は剥離して欠落している。胎土には金雲母を含んでいる。

（227）はくの字状に屈曲して開く口縁部をさらに屈曲直立させた二重口縁である。端部を内側に肥厚している。肩部外面にはハケ調整痕が残る。山陰系の甕と思われる。

（229）は屈曲して口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部を内側に肥厚する布留甕である。

（230）は内湾する椀状の体部から屈曲して開く小さな口縁部がつく精製の鉢である。

（231）は高杯の脚部である。脚端部はわずかに内面に肥厚している。脚柱部内面には絞り目が残り、外面には粗いミガキによる面取りが見られる。円孔が1個残存している。

SK29（図版142·143；232·233）

（232）は小型丸底壺である。球形の体部から口縁部が内湾気味に立ち上がる。体部上半には絞り目

痕が残り、胎土は精良である。

(233) はV様式系の甕の完形品である。倒卵形の体部に口縁部がくの字状に屈曲し、端部が上方へ引き上げられている。わずかに残った小さな底部が認められる尖底で、分割成形の甕である。他に同様の甕体部が出土している。

SK42（図版144·145；**240～242**）

(240) はくの字状に屈曲して内湾気味に開く口縁部の甕である。口縁端部は内側に肥厚され、布留甕の特徴を示す。

(241) は鉢である。椀状の体部からわずかに屈曲して二重口縁状に立ち上がる。

(242) は高杯杯部である。屈曲して口縁部が外反して大きく開く。受け部外面にハケ調整が見られる。

SK45（図版144·145；**245～249**）

(245) は筒状の頸部から屈曲して外反しながら立ち上がる大型の二重口縁壺である。屈曲部は突出し、口縁端面には浅い沈線様の溝がめぐらされている。外面にはハケ調整痕、内面にはユビ整形痕が残る。

(246) は甕である。球形の体部からくの字状に屈曲して口縁部が内湾気味に開く。端部はわずかに外方へ引き出される。体部外面にはハケ調整、内面にはヘラケズリが施され、外面にはススの付着が見られる。

(247) は高杯脚部である。脚柱部から屈曲して水平に近く大きく開く。上端部には杯部の剥離痕、脚柱部内面には絞り目が見られる。

(248)・(249) は小型丸底壺である。半球状の体部から、内湾気味に開く口縁部が立ち上がる。いずれも精良な胎土による精製品で、(248) 外面にはヘラミガキが見られる。(249) は体部下半にヘラケズリ後ナデ仕上げが施されており、ススの付着が見られる。

SK61（図版144·145；**251**）

(251) は土師器甕である。くの字状に屈曲して中ふくらみ気味に立ち上がり、端部を外方へ引き出す。体部外面にハケメ、内面に指押さえ痕が残る。

SK64（図版146·147；**256～284**）

遺物は中央部分にまとまって出土している。土師器甕・甑と須恵器杯身・杯蓋・甕・無頸壺・高杯、ミニチュア土器、土錘、羽口、滑石製小玉（J18）、砥石（S11・S14）が出土している。

(256) ～ (262) は土師器甕である。(256) ～ (258) は口縁部が外反して開き、ハケ調整が施される。(259)・(260) は口縁部が屈曲して立ち上がる山陰系の二重口縁を持つ甕である。(261)・(262) は内湾気味に開く口縁部で、布留系のものと思われる。

(263)・(264) は手づくねのミニチュア鉢で、いずれも底部は不安定である。

(265) は強い二次焼成を受けており、赤変および剥離が顕著なもので、製塩土器と思われる。不安定な平底から立ち上がる体部はわずかに外反する。内面にはユビ押さえ、外面にはタタキ様の痕跡が残る。

(266) は甑の把手部分である。やや扁平で、先端が尖る。ユビ押さえ痕が顕著であるが、下方にはハケ目も見られる。

(267) ～ (269) は須恵器杯蓋である。(267)・(269) では稜線が明瞭で、内湾する口縁部が続く。

(269) はほぼ直立する口縁部を持つが、稜線は不明瞭である。いずれも端部は外方へ尖る。

(270) は須恵器甕の口縁部である。大きく外反して開く口縁端部直下に突帯を付している。

(271) ～ (277) は須恵器杯身である。いずれも内傾して立ち上がる口縁部である。(272) では受け部に重ね焼き痕、自然釉が見られる。(274) は他に比べて小型のもので、受部も水平方向に大きく突出する。あるいは壺等の蓋になるのかもしれない。

(278) は須恵器有蓋高杯の杯部と思われる。受部はほぼ水平に突出し、その下方に櫛状工具の刺突による列点文が施されている。

(279) は高杯脚部で、下方へ引き出された脚端部に1条の凹線がめぐらされる。透孔の痕跡あり。

(280) は内傾気味に短く立ち上がる口縁部を持つ短頸壺である。端部は外方に尖る。

(281) は外方へ開く脚部である。端部は肥厚され、外面には自然釉がかかる。

(282)・(283) は土錘である。いずれも円筒形であるが、(282) は長さ12.2cm、幅3.8cmと細く長い形である。

(284) は羽口である。ハの字状に開き、上端にはガラス質の付着が見られる。表面には簀の子で巻いて整形した痕跡が残っている。

SK65 (図版144・145；**252～255**)

上面に土師器甕と高杯が数個体置かれている。布留式の土器である。

(252)・(253) は甕である。球形の体部からくの字状に屈曲した口縁部が立ち上がる。(253) の口縁部は内湾気味で端部は内側に肥厚され、布留甕の特徴を示す。

(254) は高杯の杯部、(255) は脚部である。(254) の杯部は緩やかなカーブで開き、中心部には粘土充填の痕跡を残す。(255) の脚部は屈曲して開き、内面には絞り目、ケズリ痕が残る。

SK66 (図版148・149；**285・286**)

(285) は球形の体部からくの字状に屈曲して口縁部が内湾気味に開き、端部を内側に肥厚した、布留0式の精練された土器である。体部外面はハケ調整、内面はヘラケズリにより、器壁を薄く仕上げている。体部内面の底部には炭化物の付着が見られ、外面全面にスス及びスス状炭化物の付着が見られる。(286) は二重口縁を持つ山陰系の甕で、二次焼成による赤変、ススの付着が見られる。

SK67 (図版148・149；**287・288**)

土師器壺が2点出土している。(287) は筒状の頸部から外反して立ち上がる口縁部、肩部内面には指押さえ痕が残る。(288) は大きく上下に肥厚した口縁部端面に櫛状工具による刺突文を綾杉状に施し、竹管文円形浮文を貼り付ける。

SK68 (図版148・149；**289・290**)

(289) は土師器鉢である。半球状の体部に屈曲して立ち上がる二重口縁がつく。底部を欠くが、丸底または脚台がつくタイプのものと思われる。体部外面にハケメ、内面にヘラケズリが見られる。

(290) は土師器高坏の脚部である。屈曲して開く脚端部は角張る。円孔が1個残存する。

SK71 (図版148・149；**291**)

(291) は土師器壺口縁で、大きく外方に開く口縁の端部を上下に大きく肥厚している。端面・内面に櫛描き直線文・波状文を施し、円形浮文の剥離した痕跡も確認できる。端部には刻み目が巡らされている。

SK72（図版148･149；**292～294**）

土坑上面には土師器高杯が3個以上集中して置かれていた。（292）は皿状に開く杯部である。脚部との接合部には、外面にハケ目、内面に工具による刺突が見られる。（293）は屈曲して脚端部が大きく開くもので、（294）はラッパ状に大きく開く脚部である。いずれも上端には粘土充填の痕跡が見られる。

SK75（図版148･149；**295**）

（295）は須恵器高坏である。椀状の坏部から外反する口縁端部が続く。外面下端に櫛状工具による刺突文が施される。

SK77（図版148･149；**297**）

（297）は須恵器ハソウの口縁端部である。外面下端に櫛描き波状文が施されている。

SK79（図版148･149；**296**）

（296）は薄手、小型の製塩土器である。筒状の体部から、わずかに外反する口縁部が続く。

SK80（図版150･151；**305～323**）

土師器に限られ、壺・甕・小型丸底壺・鉢の器種がある。

（305）・（306）は壺である。（305）は筒状の頸部から屈曲して開く二重口縁の壺で、ヘラミガキによって仕上げられている。（306）は球形の体部に外反して開く口縁部が続く。内面のユビ押さえ痕が顕著で、外面はヘラミガキによる。体部下半にはススの付着が見られる。

（307）～（315）は甕である。（311）は球形の体部からくの字状に屈曲して口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部を内側に肥厚する。外面ハケ目、内面ヘラケズリの布留甕である。（307）は内湾気味に開く口縁の下部に叩き出しの痕跡が残る。（308）～（310）は外反する口縁部で、外面にはタタキ目、内面にはハケ目又はユビ押さえ痕が残る。（310）の口縁端部には1条の凹線がめぐり、一部に刻み目が施される。（313）は端部が上方へ引き上げられ、端面に2条の凹線がめぐらされる。（312）・（315）は倒卵状の体部に尖り気味の底部、外面にタタキメが残る。（315）の体部内面には有機物の付着、外面体部下半にはススの付着が見られる。

（316）～（320）は小型丸底壺である。概ねやや扁平な体部に口縁部が外反気味に開くものであるが、（318）ではほぼ球形の体部である。体部内面にはユビ頭痕、口縁部内面及び外面にはハケ調整痕が残る。（316）の内面には有機物の付着がある。（320）は外面にミガキの痕跡もありていねいな作りで、雲母細粒を多く含むことから、搬入品の可能性もある。

（322）は半球状の体部の鉢で、内外面共にていねいなヘラミガキが施されている。

SK84（図版152～157；**324～359**）

出土遺物は土師器だけで、小型丸底壺を主体に二重口縁壺・甕・高杯が使用されている。

（324）は屈曲して立ち上がる壺である。口径は若干小さめである。

（326）はやや歪な球形の体部から口縁部が外反して開く甕である。ユビ成形とハケ調整痕が顕著に残っている。体部外面にはススの付着が見られる。

（325）・（327）～（351）は小型丸底壺である。いずれもやや扁平気味の体部であるが、口縁部は大きく立ち上がるもの（327）・（328）、短いもの（351）まで多様である。（328）は体部中程に1個の円孔が穿たれており、ハソウになるかもしれない。（327）も口縁部は類似するが体部の重心は下に片寄る。口縁部内外面・体部外面にはハケ調整が施されるものが多く、体部下半にはヘラケズリが施されるものもある。体部内面は概ねユビ成形・ユビナデによるものであるが、ヘラ状工具痕が残るものもある。

(332)・(336)・(351)では底部に植物繊維様の圧痕が見られ、(329)・(332)・(333)・(339)・(341)ではススの付着が見られる。

(352)～(359)は高杯である。(352)は浅い皿状の杯部で口縁端部がわずかに外反する。内面には工具痕が残り、二次焼成により赤変している。(353)もほぼ同様の形態であるが、口縁端部に浅い沈線様の溝がめぐらされる。中央部には粘土充填がある。(354)・(355)では共に杯部が若干深くなるが、(355)では中央部に粘土充填が見られるのに対し、(354)では脚部に杯部を付加した剥離痕が観察できる。両者の杯部外面にはハケ目、(354)の脚部ではその上から強いミガキが施されている。(356)・(357)ではほぼ水平な受け部から、口縁部が屈曲、外反して大きく立ち上がる。屈曲部はしっかりと画され、厚手の大型品である。外面はハケ目、内面はナデによる。(357)では破断面も含めて二次的な被熱の跡が見られ、ススの付着もある。(358)では口縁部がさらに大きく開く。(359)は屈曲して開く脚部で、脚柱部外面にはミガキ、内面には絞り目、ヘラケズリ、また外面上端部には杯部の剥離の痕が見られる。

SK111(図版156・157；**363～365**)

(363)は土師器鉢である。椀状の体部からわずかに外反する口縁端部が続く。胎土は精良で、平らに作られた底部にはヘラ状工具による平行する圧痕が残る。

(364)は須恵器鉢である。口縁部が内湾してしぼむコップ状の鉢で、把手の貼り付け部が上下に残っている。細かい櫛描き波状文が2帯重なって施文されている。底部はヘラ切り後ナデが施されている。

(365)は土師器高杯である。椀状の杯部の口縁端部はわずかに内側に肥厚される。脚部は屈曲気味に開き、3方に円孔が穿たれている。脚部内面には絞り目痕、外面にはヘラミガキが見られる。二次焼成による赤変があり、脚端の一部にススの付着が見られる。

SK121(図版156・157；**369**)

土師器が何点か出土しているが、図化できたのは(369)の小型丸底壺のみである。ほぼ球形の体部に口縁部が外方へ立ち上がるもので、体部下半にはヘラケズリが見られる。

6．落ち込み出土土器(図版158・159・164・165・182・183)

SX01(図版158・159；**370～393**)

出土遺物は全体に広がっているが、須恵器・韓式土器を包含しているのは北側の集中部分のみに限られる。それ以外の部分では土師器に限られており、遺構の時期は布留Ⅱ期かと思われる。北側部分の遺物は埋没時期を示しているものと思われ、古墳築造時ではないかと思われる。手捏ね土器と小型精製土器が多いのは遺構の性格を表している可能性が高い。

(371)・(372)は土師器壺である。(371)は屈曲して立ち上がる二重口縁の壺である。口縁屈曲部は突出し、端部は肥厚し内側に傾く。体部外面にハケ目、内面にヘラケズリを施す。化粧土の上塗りがあり、搬入品かと思われる。(372)は口縁部がほぼ直線的に外傾して立ち上がり、端部でわずかに内湾し内側に肥厚する。体部外面にハケ目、内面にヘラケズリを施す。

(376)～(378)は土師器の丸底壺である。(376)・(377)は小型品で、やや扁平な球形の体部から口縁部が大きく立ち上がる。(377)の底部近くには小円孔があり、焼成後に施されたものと思われる。378は肩の張った球形の体部から、口縁部が外傾して立ち上がる。体部外面にはハケ調整が施され、下半にススの付着が見られる。

（370）・（373）～（375）は土師器甕である。（370）は屈曲して立ち上がる二重口縁の甕である。端部は肥厚され丸く収まる。（373）は同様に口縁が屈曲して立ち上がり、外面に5～6条の疑凹線が施されている。頸部内面にはヘラケズリが見られる。（374）の口縁部はくの字状に屈曲して開き、口縁端部を内側に肥厚した布留系の甕である。（375）の体部は肩が張り、厚手で短頸壺としてもいいかもしれない。内面にヘラケズリが施される。

（379）～（383）は土師器高杯である。（379）は椀状の体部から緩やかに外反する口縁部が続き、端部に凹線状の溝がめぐる。（380）・（381）ではほぼ水平な受部に屈曲して口縁部が大きく立ち上がる。（382）では緩やかなカーブで開く杯部に中膨れ状の脚柱部から屈曲して開く裾部が続く。脚柱部内面には絞り目、ヘラケズリ痕が見られる。（383）はラッパ状に開く脚部で、内面にケズリ、外面にミガキが見られる。二次焼成を受けており、あるいは羽口として転用したものかもしれない。

（384）は小さな脚台を持つ製塩土器である。体部外面にはタタキが施されている。

（385）は小片ではあるが、おそらく手焙り形土器である。半円形の覆い部の縁は断面T字形に拡張されていたものと思われる。覆い部内外面にはハケ調整が施される。

（386）は須恵器高杯である。端部がわずかに外反する椀状の杯部である。脚部は剥離している。内面には自然釉がかかり、砂粒が付着している。

（387）は須恵器のおそらくハソウ口縁部である。口縁部近くで屈曲し、さらに外方へ開いている。外面には櫛描き波状文が3帯施文されているが、上段のそれは幅の狭い工具によっている。

（388）は須恵器の外反する小さな口縁部で、装飾壺の一部かと思われる。

（390）～（392）は手づくねのミニチュア鉢である。

（393）は土師器甑の把手であるが、極めて扁平なものである。

共に砥石（S15）も出土している。（別項で詳述）

SX04（図版164･165；**441～451**）

（441）は土師器甕である。外傾する口縁の端部をわずかに外方へ引き出す。

（442）は器台の筒状の体部である。外反して開く脚部が続く。円孔が4方向に3段穿たれている。外面はハケ調整による。

（443）は土師器甑の把手である。断面はやや扁平で上方へ反る。

（444）・（445）は須恵器杯蓋である。稜線があり、口縁部の立ち上がりがしっかりしている。TK10ぐらいであろう。

（446）は小型の須恵器蓋である。受部を大きく外方へ突出させる。

（448）は口縁部がわずかに外反する椀形の須恵器である。外面に櫛描き波状文が施文され、一部に自然釉の付着がある。

（449）は壺の外反する口縁部、（450）は器台の一部と思われ、いずれも外面に櫛描き波状文が施されている。

（451）は須恵器ハソウである。扁平で肩の張る体部から、口縁部が外反気味に立ち上がる。体部中位に円孔を穿つ。

共に滑石製紡錘車（J1）･砥石（S21）･鉄製品（M4）も出土している。（別項で詳述）

SX06（図版182･183；**533～548**）

土師器と土錘に限られる。土師器も高杯・杯が多く、祭祀的な遺構ではと思われる。精製小型の土器

が多い。土師器しかないが、時期は須恵器を伴う6世紀代まで下ると考えられる。

(533) は外傾して立ち上がる口縁部を有する壺である。外面にハケ調整が見られる。

(534) はくの字状に屈曲して開く口縁部の端部を内側に肥厚する布留系の甕である。外面はハケ調整、内面はヘラケズリにより、器壁が薄く仕上げられている。

(535) は外反して開く短い口縁部を持つ小型の壺で、体部内面にはヘラケズリが施される。

(536) は口縁部が内湾してすぼまる鉢である。

(537) は椀状の体部に口縁端部を短く外反させる杯である。二次焼成を受けている。

(538) ～ (546) は高杯である。屈曲部を持たない椀形の杯部で、(541) では端部が外反する。(539)・(540) の杯部は浅く、口縁端部はわずかに内側に肥厚されている。いずれも内面に放射状の暗文が施される。脚部は裾部が屈曲して開くものが大半である。(545) は屈曲がなく開き、3方に円孔が穿たれている。(545)・(546) には二次焼成による黒変、ススの付着がある。

(547) は円筒状の土錘である。長さ10.1cmと長く、器壁は薄い。

(548) は宝珠つまみを持つ土師器蓋である。

SX07 (図版182·183；**549～551**)

出土遺物は少なく、また時期にもばらつきがある。

(549)・(551) は土師器の甕である。(549) はくの字状に屈曲する口縁部を持つ布留期の甕である。(551) は倒卵形の体部から外反して開く口縁部が続き、端部が肥厚される。体部外面に縦方向のタタキを有する

(550) は径の小さな杯身で立ち上がりが外湾する古式 (TK23？) のものである。

共に鉄製品 (M3) も出土している。(別項で詳述)

7．古墳 (祭祀遺構) 出土土器 (図版160～181；**394～440·452～532**)

SX03 (図版160～165；**394～440**)

遺物は全体に広がっているが、西側部分に濃密に出土している。煮沸具である甕・甑・竈が多いのが特徴である。また、そこには須恵器杯も多く見られる。

(394) ～ (398)・(405) ～ (407) は土師器甕である。(394) では外面にタタキメがあり、くの字状に屈曲した口縁部の端部は肥厚され、古い様相を示す。(394)・(395) 以外は二次焼成、ススの付着が見られ、(406) では内面に炭化物の付着もある。(405) ～ (407) は長胴の大型品で、(407) の口縁部は外反して大きく開く。(408) 等の甑と共用して煮沸具として用いられたものであろう。

(399) は扁球状の体部に短く外反して開く口縁部がつく甕形で厚手の鉢である。

(400) は手づくねのミニチュア鉢で、底部に1箇所、細い竹管程度の貫通孔がある。故意に穿たれたものかどうか？

(401)・(402) は底部が外へ踏ん張る上げ底状になった鉢である。(402) の口縁端部はわずかに外反し、二次焼成を受ける。

(403)・(404) は底の丸い椀状の鉢で、どちらも二次焼成を受けている。

(408) ～ (413) は土師器の甑である。外傾する体部に直線的に口縁部が続き、対応する2方向に上に反る把手がつく。(411) ～ (413) の把手は扁平である。(408) は内外面ともハケ調整、(409) ではヘラケズリによる。

（414）・（415）・（420）～（423）・（429）・（430）・（436）は須恵器杯蓋である。稜線は確認可能な程度、口縁端部は外側に尖る。（422）は特に深く、大型品である。天井部にヘラ記号の刻まれるものがあり、（414）・（415）では交差、（429）・（430）では平行する。（420）では内面に当て具痕が残っており、（421）には自然釉がかかっている。

（416）～（419）・（424）～（428）・（431）・（432）は須恵器杯身である。内傾する口縁部が立ち上がり、口縁端部は外側に尖るものが主で、受け部は若干上向きである。（418）・（425）・（432）には自然釉がかかる。（431）・（432）にはヘラ記号が刻まれる。

（433）は須恵器大型甕の口縁部である。端部を肥厚し、外面に櫛描き波状文を施す。

（437）は須恵器短頸壺である。肩の張る扁平な体部から、内傾して短く立ち上がる口縁部が続く。

（438）はやや扁平な球形の体部から、外反して立ち上がる口縁部が続く須恵器ハソウである。体部中位に円孔が穿たれる。

（439）は紡錘形の土錘である。下端を欠くが、長さ11.3cm、最大幅4.65cmを測る。

（440）は上部が若干細くなる円柱状の土製品である。中実で重く、激しく二次焼成を受け、赤変・黒変が見られる。製鉄作業に使われたと思われる支脚状の製品である。

共に砥石（S7·S20）も出土している。（別項で詳述）

SX05（図版166～181；**452～532**）

（452）・（453）は壺である。（452）は筒状の頸部から屈曲して大きく開く口縁部がつき、端部はわずかに肥厚されている。厚手で大型の壺である。（453）は外傾する口縁部はていねいに作られ、表面には朱が塗布されている。

（454）～（461）は甕である。（454）はくの字状に屈曲して開く口縁部は内湾し、端部を内側に肥厚する布留甕である。（455）・（457）・（458）は二次焼成を受け、赤変・ススの付着が見られる。（459）～（460）・（461）は長胴の大型品で、（459）の肩部には上面をほぼ水平にした受け部が付けられている。

（462）～（469）は甑である。内湾しつつほぼ直立して立ち上がる体部の中程、対応する2箇所に把手が付加される。底部には（463）・（465）では真ん中に橋状の粘土紐をおいて両側に半円形の孔が2個、（464）では真ん中に1個とそれを取り囲むように5個、計6個のややいびつな円孔が穿たれている。図化し得なかった破片等の中には前者のタイプは他にもあったようである。把手はいずれも上向きで、反り返るものが大半であるが、その形態は、先端の尖るものや丸く収めるもの、断面が円形のものや扁平なものなど多種である。（464）では直線的にのびる把手の上面側にV字状に深く刻みを入れた、韓式系の特徴を示している。

（470）・（471）は小型丸底壺で、やや扁平な球形の体部に外傾して開く口縁部がつく。（471）の外面は大半が黒斑で覆われる。

（472）・（473）は半球形で丸底の杯である。器表面はヘラミガキでていねいに仕上げられる。

（474）は手づくねのミニチュア鉢、（475）は厚手の鉢である。二次焼成を受けている。

（476）は竈である。内湾して上方ですぼまるドーム状の体部で、前面に庇が半円形に付加される。把手は側面にあり、上方に延びる。

（477）～（493）は須恵器杯蓋である。稜線は明瞭で端部が外側に尖るものが多い。（486）・（488）～（490）の天井部にはヘラ記号が施される。（486）・（488）では2本が十字に、（489）では1本、

(490) では3本が交差になっている。(477)・(482)・(490)・(491) には自然釉がかかっている。

(494) ～ (515) は須恵器杯身である。口縁は内傾して立ち上がり、端部は外側に尖るものと、丸く収めるものがある。(494)・(497)・(501)・(505)・(509) の内面には当て具痕、(512)・(515) の底面にはヘラ記号が見られる。(505) には重ね焼き痕が残っており、自然釉のかかるものも多い。

これら杯蓋・杯身の時期はMT15～TK10くらいに比定できる。

(516) はつまみのある蓋で、櫛状工具による刺突列点文が施される。

(517) ～ (519) は須恵器高杯の脚部である。(519) は低脚のものである。(517) では2方に方形透孔を、(518)・(519) では3方に円孔が穿たれている。(518) には自然釉がかかっている。

(520) ～ (526) は須恵器甕である。やや肩の張る球形の体部に外反する口縁部が立ち上がり、端部を上下に肥厚する。外面にはタタキの後カキ目が施され、内面には同心円状の当て具痕が残る。(522)・(526) は大型品で、口縁部外面に櫛描き波状文を施している。(525) はほぼ完形で、体部外面下半には黒変、内面底部には工具による圧痕が見られる。

(527)・(528) は壺のほぼ球形の体部である。(527) では外面に自然釉が付着し、下半に被熱の痕跡がある。

(529) ～ (531) はハソウである。玉葱状の体部から外反して大きく立ち上がる口縁部を屈曲させ、端部が内湾して立ち上がる。(530) では体部中位、(531) では口縁端部外面に櫛描き波状文をめぐらせる。(530) の内面には有機物の付着が見られる。

(532) は扁平な体部から外反して短く立ち上がる口縁部が続く壺である。口縁端部は外方に肥厚されている。

共にメノウ製の勾玉 (J6)・滑石製の双孔円板 (J12)・砂岩製の玉砥石 (S29)・砥石 (S19)・台石 (S33) も出土している。(別項で詳述)

8．包含層出土遺物 (図版184～251；552～1134)

包含層からは多数の遺物が出土している。弥生土器、土師器 (土師器とした中にも弥生土器を含む可能性大)、須恵器、土製品、木器、石器、玉類、鉄器、自然遺物がある。全出土量の7割近くが包含層出土の遺物である。興味深いのが、遺構の集中した東半よりも遺構の少ない西半の方が遺物の集中度が高い点である。BC-2区を中心に稠密な出土状況を示している。このような土器の集中は担当者としてはじめての経験であった。

1．弥生土器

壺 (552) ～ (558)

弥生土器かと思われる口縁部は7点図化している。(552) は口径12.7cmに復原できる壺口縁部で、頸部から外反する口縁部になる。端部は内外に肥厚しており、端面となる。そこに竹管文の付いた円形浮文が添付されている。径8mm前後の小さな浮文である。にぶい黄褐色を呈しており、細かな砂粒を多く含む。ユビ整形ののちヨコナデで仕上げられている。

(553) は復原径15.3cmと極端に大きな口径にはならないが、器壁の厚い大型壺になろうかと思われる。頸部から外反する口縁部で、端部は折り返して作っている。下側に肥厚させた状態になっている。端部は平坦に近く、2条の凹線文が施文されている。端面の凹線上に竹管文付きの円形浮文が装飾されている。径13mmとやや大きく肉厚である。2個と取れた痕跡が1個見られる。横は開いているので、

3個1単位の可能性も十分に考えられる。表面磨滅顕著で技法不明であるが、ヨコナデと思われる。にぶい褐色を呈しており、やはり多くの砂粒を含んでいる。口径の7分の1の破片で残存高2.3cmを測る。(554) は端部に近い部分の破片である。復原径17.6cmを測る (553) と似たタイプの壺である。やや直線的に延び、端部は断面三角形になっている。端部は折り返して作っており、下側に肥厚したようになっている。端面には2個の竹管文付きの円形浮文が施文されている。単位があるか、全体に等間隔に施文されていたかは不明である。他と同じく竹管文の幅は小さい。端部上端に設定されており、径12mm前後の浮文である。にぶい橙色をしており、砂粒多く含む。磨滅しているが、ヨコナデであろう。

(555) は外反する口縁部で端部近くがより外側に開いている。端部は折り返しており、断面形は三角である。端部は面でなく、やや丸みを持つ.。竹管文付きの円形浮文が痕跡1個を含めて4個あり、全体に施文されているようである。径12mm、厚さ3mmの浮文である。2条の凹線も見られ、端部中央に浮文が付けられている。砂粒以外に径5mmの小石粒も含んでいる。残存高は2.4cmで、にぶい橙色を呈している。ヨコナデである。

(556) は頸部の残った破片で、頸部14.2cm、口径22.4cm、残存高7.1cmを測る。頸部は内面に明瞭な稜線を持たないもので、大きく外反している。端部は下方に折り曲げ、大きく肥厚させている。端部には等間隔に2条の凹線文状のクシ描き直線文が施文されている。口縁部が大型であることもあって、部分的に大きくひずんでいる。その上に径18mmの大きな竹管文付きの円形浮文が1個付加されている。ハケ整形・ナデ仕上げののちにヘラミガキで丁寧に調整している。外面は縦方向、内面は横方向のミガキである。にぶい橙色をしており、砂粒を含む。

(557) は上記とは異なり、さらに古く中期の様相を示している。口縁部の破片で復原径13.6cm、残存高1.6cmを測る。直立する頸部から外反し端部近くで屈曲する。屈曲してから水平に近くなり端部となる。端部は内外にだが、特に外側が下方に大きく肥厚している。端部に浅い3条の凹線文が認められる。端部内側に櫛先の列点文が巡らされている。内面は浅黄橙、外面は灰白色をしている。砂粒を少量含むが胎土は緻密である。

(558) は端部が内外に大きく肥厚する口縁部である。直線的に端部に向かって広がっている。復原径は出せないが20cmを越える大型になろうかと思われる。端部に4条の凹線があり、端部内面にも刺突文の痕跡が見られる。調整不明だが、ヨコナデであろう。

2．土師器

壺 (559) ～ (586) ・ (593)

上記7点は弥生時代の遺物と考えられるが、以下は確実に古墳時代になる壺である。

(559) は直口壺口縁部である。内傾する体部から明瞭な稜線を持って外傾する口縁部になる。くの字の口縁部で、端部は丸い。端部内側直下に浅い沈線状の窪みがある。口縁部は中央付近の器壁が最も厚くなっている。色調はにぶい黄橙で精緻な作りであるが、粘土紐の継ぎ目は看取される。体部外面は細かい (7本／cm) ハケ整形、内面はヘラケズリされている。口縁部はヨコナデで仕上げている。口径13.0cmに復原され、残存高は5.0cmを測る。胎土は全体的には精良だが、砂粒を少量含んでいる。

(560) も直口壺口縁部である。内湾する体部から頸部で口縁部と接続する。シャープではないが、明瞭な内面の稜線を経て直線的に広がる口縁部となる。端部は丸く、器壁は中央が最も厚くなっている。体部内面はユビ成形で、そのまま痕跡を残している。頸部の継ぎ目は明瞭で、粘土紐が確認できる。口縁部はヨコナデで仕上げる。酸化粒などの砂粒を少量含み、浅黄橙から黄灰色をしている。

(561) も直口壺口縁部である。内湾する体部から不明瞭な頸部となり、直線的に外傾する口縁部となる。端部は肥厚しており丸く納める。ヨコナデ仕上げと思われるが、磨滅しており明らかでない。口縁部を中心に2次焼成を受けている。橙色を呈し、クサリ礫を含んでいる。

(562) は壺の口縁部と体部上半で、口径15.9cm、残存高8.9cmを測る。現状の残存下端がほぼ最大腹径にあたる部分であろうと思われる。最大腹径22.2cmになる。体部内面はユビ成形から粗いヘラケズリ、外面はタタキ成形ののちハケ成形である。内面には粘土紐の継ぎ目が残されている。器壁の厚さはまばらである。内湾する体部から甘い頸部となり、外傾する口縁部になる。口縁部も厚く歪である。口縁部内面はハケ整形で、それからヨコナデで調整している。ヨコナデが行われているが、外面には粘土紐の継ぎ目が見られる。砂粒を含み、灰黄褐色をしている。外面には黒斑が残されている。

(563) は底部を欠く壺である。体部内面はユビ成形ののちナデ整形しているが、粘土紐の継ぎ目が多く認められる。外面はナデ整形である。口縁部もユビ成形ののちヨコナデがなされている。やはり粘土紐の残る粗雑な作りである。体部は球形で丸くなる頸部から外反する口縁部になる。端部は丸い。口径13.8cm、最大腹径21.8cm、残存高9.3cmを測る。色調はにぶい橙からにぶい黄橙で、砂粒を含む。口縁部は完存しているが、体部は3分の2ほど残っている。2次焼成を受けており、外面は赤変・剥離し、煤付着している。

(564) は口径17.8cmと大きめの口縁である。内湾する体部から直線的に開く口縁部になる。頸部の稜線は甘い。端部は丸くなっている。体部内面はユビ成形からナデ調整、外面は磨滅しており技法不明である。口縁部はヨコナデで仕上げる。にぶい褐色を示し。頸部下内側に指頭圧痕を顕著に残す讃岐地方からの搬入品と考えられる。

(565) も壺で体部上半から残存している。復原径14.1cmで、残存高6.6cmを測る。内湾する体部から明瞭な稜線を持たない頸部から僅かに外反する口縁部となる。端部は丸く肥厚している。端部内側直下が沈線状に窪んでいる。体部内面はハケ整形ののちユビ調整で、外面はハケ整形である。口縁部内面はハケ整形がなされており、ヨコナデで仕上げている。内面はにぶい橙、外面は橙をしている。砂粒を含む。

(566) は口径19.4cmを測る大型の壺口縁部である。僅かに内湾する体部から、微妙に内湾する口縁部となる。口縁部と体部は接続されたようで、頸部で擬口縁状になっている。粘土紐の継ぎ目が明瞭に看取される作りである。体部内面は板ナデで整形され、外面はユビ成形ののち板ナデ整形されている。口縁部も板ナデ整形されているが、粘土紐の残る粗雑な作りである。煤付着しており、金雲母などの砂粒を含み、にぶい橙色をしている。

(567) も大型の直口壺である。内湾する体部からくの字の口縁部となる。口縁部は直線的に外傾する。端部は外側に肥厚することによって上方が平坦な端面となっている。体部内面はヘラケズリ、外面はハケ整形である。口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部内面には指頭圧痕が顕著に残っている。

(568) は布留傾向を示す内湾する口縁部で、端部は内側に肥厚している。くの字となり、体部は直線的に広がる。体部内面はヘラケズリののちナデ仕上げ。外面は磨滅しているが、ヨコナデであろう。

(569) も布留期の土器である。内湾する体部から明瞭な稜線にならない頸部となり、直線的に広がる口縁部になる。口縁部は緩やかなS字状で、端部は内側に肥厚している。ヨコナデ仕上げである。体部内面はヘラケズリののちナデ仕上げ。外面はハケ整形である。体部残存部下端に黒斑が認められる。

(570) は18.0cmを測る大型の壺口縁部である。直線的に開く口縁部で頸部がかろうじて残されてい

る。ヨコナデ仕上げである。端部は内側に肥厚している。口縁部の長いものである。内面は明瞭な稜線ではない。砂粒を多く含み、浅黄橙を呈している。

(571) は球形の体部を持つ底部を欠いた壺である。底部近くまで残存しているが、内面は湾曲したままであり内面は球形であろう。突出の平底が付くものと思われる。最大腹径28.0cmで残存高27.2cmと球形に近い数字を示している。頸部は屈曲し内傾してから外反する。端部は丸い。内面はハケ整形でナデ調整を加える。灰色から灰白を呈しており、胎土には小石粒を多く含む。

(572) は口縁部を欠いている。ドーナツ状の上げ底になった突出平底から下膨れの球形の体部に続く。湾曲度も下半は平ためで、上半の方が急である。頸部は緩やかな稜線である。内面はユビ成形から下半はハケ整形、全体にユビ調整を加える。外面もユビ整形ののち粗いヘラミガキで仕上げるが、粘土紐の痕跡が明瞭に見られる。底径4.9cmで底部再成形でユビの痕跡が残っている。にぶい黄橙で、金雲母などの砂粒を含んでいる。

(573) も口縁部を欠いている壺である。底径5.2cmを測る上げ底でない突出平底である。下膨れの算盤玉状の体部で、粘土紐の継ぎ目が明瞭である。最大腹径34.8cmと幅広である。残存高は24.7cmを測る。内外面ともにユビ成形ののち板ナデによって整形している。外面はハケ整形ののちヘラミガキが施されている。頸部近くはヨコナデが施されている。砂粒と小石粒を含み、にぶい橙を呈する。

(574) 二重口縁壺で時期の遡る壺である。内湾する体部から直立する頸部になる。口縁部は稜線を持って大きく外傾し、端部は内外に肥厚する。体部内面はユビ成形からハケ整形を行いユビで調整を加えて仕上げている。外面はハケ整形ののちヘラミガキを行っている。口縁部はヨコナデで丁寧に仕上げている。頸部下の肩部にヘラ先の刺突文が巡っている。口径12.5cm、頸部径8.4cm、最大腹径19.6cmを測る。砂粒を少量含むが緻密な胎土で、焼成も良好な精製品である。にぶい黄橙から橙をしている。

(575) は器高の高い楕円球形の体部から甘い稜線の頸部に続き、直立してから外反する口縁部となる壺である。底部は再成形でユビ成形されている。底径4.5cmを測る上げ底の突出平底で、ユビ成形からユビ調整を行っている。体部内面もユビ成形の痕跡が見られる。外面はタタキ成形からナデが行われている。体部上半は磨滅が著しく技法不明である。口縁部はヨコナデである。

(576) は二重口縁壺の口頸部である。内面はナデが認められ、外面はヨコナデで仕上げている。外反する頸部から擬口縁となり、さらに直立して端部に続くものと思われる。端部は残存していない。口縁部はさらに大きく外反するタイプになろうかと思われる。器壁は厚めであるが、山陰地方からの搬入品と思われる。砂粒含み、にぶい黄橙からにぶい橙を呈している。

(577) は二重口縁の直口する壺である。直立する頸部が外反し、擬口縁になる。明瞭な稜線を持たずに僅かに外反する。端部は角張りぎみでやや反る。内面はハケ整形、外面もハケ整形ののちヨコナデ仕上げ。擬口縁部分にはナデの痕跡が見られる。口径19.8cmに復原されるが、径の割りに口縁部が高い。にぶい橙色で残存高は8.6cmを測る。砂粒を多く含み、2次焼成を受けている。

(578) は小型の二重口縁の壺である。歪に屈曲しており、頸部から外反しそこから内傾ぎみに直立する。端部は内外に肥厚する。肥厚することによって、上面に端面が形成されている。ヨコナデ仕上げしている。砂粒含み、にぶい橙色を呈している。

(579) は二重口縁の直口壺である。頸部の器壁は厚く外反し、突帯状の突出部が強いヨコナデによって作り出されている。そこから直立ぎみに外傾して肥厚する端部に至る。体部内面はヘラケズリと思われる。口縁部はヨコナデである。粘土紐の継ぎ目が残っている。

(580) は口縁部の深い壺である。頸部は丸く屈曲し、直線的に広がり擬口縁となる。そこから内湾して丸く全体に肥厚した端部へとつながる。擬口縁部周辺は強いヨコナデによって変化している。両側が凹んでいる。全体的にヨコナデであるが、内面は板ナデも施されていたかもしれない。にぶい黄橙でクサリ礫などの砂粒以外に最大7mmの石粒も含んでいる。口径19.5cm、残存高7.1cmを測る。

(581) は肩のやや張る球形の体部から屈曲して頸部を丸く作り出している。外反してから、直立ぎみに外傾する口縁部となる。端部は内側に大きく肥厚した布留期の特徴を示している。口頸部は器肉が厚めである。体部内面はヘラケズリで、外面はハケ整形である。口縁部はヨコナデで仕上げる。端部から体部にかけて黒斑が見られる。浅黄橙で、砂粒を多く含む。

(582) は小型の壺である。体部から屈曲して頸部となり、外傾してから二重口縁になる。角度を直口に近くやや内湾して立ち上がる。端部は尖りぎみに丸く、僅かに外方に反っている。器壁は厚めである。砂粒を多く含み、色調はにぶい橙から浅黄である。ヨコナデで仕上げている。搬入土器の可能性が高い。

(583) は内湾する球形の体部から大きく外反する頸部につながる。体部内面はユビ成形のままで、一部ナデ仕上げしている。外面は表面磨滅しているが、ヘラミガキかと思われる。外反する頸部から変化点を持って外傾するように延びていく.端部は内外ともにだが内側に特に肥厚させている。口縁部はヨコナデである。クサリ礫などの砂粒を多く含み、にぶい橙色を呈する。口径11.85cm、残存高5.8cmを測る。

(584) は大型の二重口縁壺で底部と口縁部を欠いている。径の大きな倒卵形の体部で、底は丸底である。接地面のある丸底と思われる。最大腹径は26.9cmを測り、体部器高の中位から少し上に位置している。頸部は甘い稜線で、外方に傾くように開いている。さらに外傾して擬口縁部になり、そこから直立ぎみに広がると思われるが、端部までは残存していない。体部内面はヘラケズリで、頸部近くのみナデで調整を加えている。外面はハケ整形ののちヘラミガキで丁寧に仕上げている。擬口縁部にもハケの痕跡が残っている。頸部から口縁部にかけては内面はヘラミガキ、外面はハケ整形ののちヘラミガキである。口縁部上半はヨコナデ仕上げ。残存高30.0cmを測り、焼成は良好である。砂粒を少量含むが、精良な胎土である。浅黄橙色を呈している。

(585) は底部を欠く大型の壺である。肩の張る倒卵形の体部で、粘土紐の継ぎ目が残っている。強いユビ成形によって内面は作られている。外面はハケ整形である。緩やかに内湾しており、頸部は高く器壁も厚い。屈曲して外反しつつ広がり直立ぎみに外傾して端部になる。端部は角張りぎみであるが、外側に肥厚させている。口縁部はヨコナデ、内面底近くに有機質が付着している。口径15.2cm、残存高27.7cm、最大腹径27.0cmを測る。にぶい黄橙をしており、金雲母などの砂粒を含む。外面に煤が付着している。

(586) は大型の壺口縁部の一部である。二重口縁の上半だけの破片である。内外に肥厚する端部から直立する口縁部になる。僅かに内傾しており、擬口縁部で剥離している。剥離面に刻み目が巡らされており、接合するための作業であろうか。内面は横方向のハケ整形で、全体にヨコナデがなされている。下部も器壁が厚くなっている。砂粒多数と角閃石の細粒が含まれている。指頭圧痕は明瞭ではないが、讃岐産の大型壺の口縁部であろう。色調はにぶい橙である。

(593) は最も大きな壺である。底部を欠いているが、ほぼ全容が想像できるものである。二重口縁壺である。体部中位に最大腹径49.8cmを持つ球形の体部である。頸部は稜線とならない頸部が屈曲し、

外反して口縁部へと続く。擬口縁部は上部口縁部と接続され大きく外側に突き出している。上半は僅かに内傾するものの直立し、端部は外側へ尖らせている。内面はユビ成形ののちハケ整形で、ハケは不定方向に多条に施している。外面もハケ整形である。口縁部はヨコナデで仕上げている。ハケメは5本／cmと粗いものである。擬口縁部は強いヨコナデが認められる。体部に黒斑が認められる。底部は突出平底かと思われる。口径23.4cm、残存高51.7cmを測る。にぶい橙から赤橙をしており、砂粒と小石粒を含んでいる。

小型壺（587）～（592）・（594）～（607）

（587）は内湾する体部で球形となる。小型丸底壺で、明瞭なシャープな稜線を持って内湾する口縁部になる。頸部は鋭利で、口縁端部は丸く僅かに外側に反っている。体部内面はユビ成形からユビ仕上げを行う。外面は横方向のヘラミガキで仕上げている。口縁部はヨコナデで仕上げてから外面は細かい横方向のヘラミガキが施されている。内面は横方向のハケ整形である。にぶい黄橙を呈し、少量の砂粒を含んでいる。口径7.1cm、残存高11.2cm、最大腹径11.2cmを測る精製の小型丸底壺である。

（588）は小型の壺で丸底ではない。僅かに上げ底となった4.1cmの平底で、緩やかに内湾する体部に続いている。底は厚めで、器壁もやや厚い。最大腹径は8.3cmで頸部は大きく内側に入らない。緩やかな頸部で、口縁部につながる。残存高5.95cmを測る。

（589）は丸底で口縁部を欠いている。尖りぎみの丸底で、球形に近い形状をしているが上半は直線的である。内面はユビ成形で指頭圧痕が明瞭に残っている。粘土紐も見られる。頸部内面は明らかな稜線を持っている。最大腹径9.4cm、残存高6.75cmを測る。クサリ礫を含んでいる。

（590）は口縁部のやや短い壺である。球形の体部から不明瞭な頸部となり、くの字に外傾する口縁部となる。端部は尖っている。体部はユビ成形ののちナデで仕上げている。指頭圧痕と粘土紐が明瞭に残っている。口縁部はヨコナデである。完形品で底部付近は損傷している。金雲母などの砂粒を含み、浅黄橙をしている。粘土紐の継ぎ目も残されているが、粗い印象はない。

（591）は小型丸底壺で底部の一部を欠いている。球形の体部から外傾する口縁部に続く。頸部の稜線は甘くなっている。口縁部は直線的で、中央が膨らんだ形状をしている。端部は丸い。少しいびつな形状である。内面はユビ成形でナデ調整を加える。口縁部はヨコナデ。口径7.7cm、器高8.75cm、最大腹径9.3cmを測る。クサリ礫を多く含み、浅黄橙を呈している。

（592）も小型丸底壺で底部の一部を欠いている。球形の体部から内湾する口縁部に続く。頸部は不明瞭な稜線である。口縁部の器壁は薄い。体部内面はヘラケズリで、外面はハケ整形である。口縁部はヨコナデ仕上げ。口径8.8cm、器高8.5cm、最大腹径9.85cmを測る。黒斑が見られる。砂粒多く含み、色調は灰黄から黄灰色である。

（594）は他よりさらに小型の丸底壺である。球形の体部からくの字に曲がる頸部となる。底部は欠いているが丸底である。表面磨滅している。クサリ礫含む。

（595）は球形の体部から短い口縁部になる。口縁部上部を欠いている。丸底で器壁の厚さにはばらつきがある。ナデ成形から外面はヘラケズリがなされている。口縁部のみヨコナデが施されている。頸部はくの字に曲がるが明瞭な稜線ではない。浅黄橙で砂粒多く含む。

（596）は頸部の長い丸底壺である。底部は丸底であるが、接地面のある安定した形状で、緩やかな稜線の頸部で屈曲して外反する。端部は丸く仕上げている。体部内面はユビ成形ののちハケ整形されている。外面もハケ整形されてから、体部はナデ調整が口縁部はヨコナデが行われている。頸部のみ残っ

ている。ハケ原体は10～13本／cmの細かいものである。底部付近に黒斑があり、また2次焼成を受けている。クサリ礫などの砂粒多く含み、にぶい橙をしている。口径は9.3cm、器高11.2cm、最大腹径9.95cmを測る。

（597）は底部の厚い小型丸底壺である。球形の体部から外傾する口縁部につながる。口縁部は中央が膨らんでおり、端部は丸い。頸部の稜線は甘い。内面はユビ成形の後ナデで仕上げる。外面は複数方向のハケ整形である。口縁部は内面ハケ整形ののち全体にヨコナデ。2次焼成を受け、浅黄橙をしている。

（598）は口縁部が内湾する薄手の精製品である。体部はやや扁平な球形である。頸部の稜線は甘い。体部内面はヘラケズリののちナデ調整を加え、外面はハケ整形ののちナデ調整を加える。口縁部はヨコナデである。にぶい褐色をしており、搬入品かとも思われる。口径は9.1cm、器高8.0cm、最大腹径9.6cmを測る。

（599）は球形の体部からやや外反する口縁部に続く。球形で肩が張っている。口縁部は中央が膨らんだもので、端部は丸い。体部内面はユビ成形からナデ仕上げ。外面はハケ整形である。口縁部はヨコナデでやや長めである。底部は丸底で、体部下半に黒斑が見られる。口径は7.8cm、器高10.8cm、最大腹径10.0cmを測る。にぶい橙から灰白を呈し、砂粒を含んでいる。

（600）は扁平な体部の小型壺である。丸底を意識したとは想像できるが、接地面が広く平底ふうになっている。体部はユビ成形の後ナデ仕上げ。口縁部はヨコナデ。算盤玉状の体部で最大腹径のところで変化しており、粘土紐を継いでいる。口径は7.5cm、器高7.8cm、最大腹径8.3cmを測る。

（601）は口縁部を欠いた底から頸部までの破片である。体部は下膨れの球形で最大腹径5.4cmを測る。磨滅のため、成形技法は不明であるがナデ仕上げと思われる。頸部はくの字で稜線は明瞭でない。外傾する口縁部になり、口径の方が最大径となる口の開く小型丸底壺になる。胎土は精良で精製品である。にぶい橙を呈する。

（602）はやや肩の張る球形の体部から屈曲して僅かに外反する口縁部に続く。口縁部は中央が膨らんでいる端部が尖るものである。口縁部は長めである。体部内面はユビ成形ののちナデ調整。ユビ成形は押圧するだけでなく、長めにナデ掻いている。口縁部はヨコナデ。にぶい黄橙からにぶい橙を呈しており、クサリ礫などの砂粒を含む。口径は8.2cm、器高10.45cm、最大腹径10.1cmを測る。

（603）は体部上半から口縁部の破片で精製品である。口径が最大径となる体部が小さい丸底壺である。体部上半は内湾するものの直立ぎみで頸部になる。内面の稜線はシャープで、内湾する口縁部になる。端部は丸く尖っている。砂粒少量含むが胎土は良好である。口径9.6cm、残存高4.6cm、最大腹径6.6cmを測る。内面は灰色で、外面は灰黄から橙色をしている。

（604）も体部より口縁部の大きい小型丸底壺である。半球状の体部で最大腹径7.25cmを測る。内面の頸部稜線はシャープで、口縁部は直線的に開いて延びる。口縁部はヨコナデで、体部外面はヘラミガキである。残存高7.1cmで、精良な胎土である。

（605）も薄手に焼き上げられた精製品で、口径は10.9cm、器高.8.15cm、最大腹径8.6cmを測る。内湾する半球形の体部で最大腹径が中位より上にある。頸部の稜線は明瞭で、屈曲して直線的に外側に開いている。端部は丸い。体部内面はユビ成形からユビ調整を行う。外面は口縁部も含めてハケ整形してから、ヨコナデ・ヘラミガキで丁寧に仕上げている。胎土は精良で、橙から明赤褐色をしている。

（606）は内湾する体部で、頸部は甘い稜線である。器壁が厚くなっている。口縁部は外反ぎみに延

びる。端部は上方につまみ上げる。体部内面はユビ成形ののちナデ仕上げ、外面も同様である。口縁部はヨコナデである。砂粒を含んでおり、灰白から灰色をしている。

(607) は下膨れの扁平な体部から大きく直線的に開く口縁部となる。体部外面には軽い稜線がある。これは外面下半がヘラケズリされることのよって生じたものである。内面はユビ成形ののちナデで仕上げている。頸部はくの字に屈曲しており、僅かに内湾しているが直線的に延びる。端部は僅かに湾曲して外側に尖らす。口縁部はヨコナデである。橙色で、砂粒を含む。口径11.2cmを測る。

底部 (608) ～ (618)

(608) は僅かに底面が上がる平底の底部である。体部は内湾する。黒斑があり、表面磨滅している。砂粒多く含み、底径は4.0cm、残存高4.0cmを測る。

(609) は突出平底で、底部が2cmほどと高い。底面内面は平たく広がり球形に開くものと思われる。大型の壺底部である。底径は4.0cm、残存高4.0cmを測る。

(610) は平底で外反する体部につながる。底部中央が窪んでいるが、上げ底ではない。内面はユビ成形で僅かにユビ調整を加えている。底径6.6cm、残存高3.05cmを測る。

(611) は不安定な平底である。突出平底で、体部は大きく外反する。底径5.5cm、残存高4.6cmを測る。底部再成形で外面には指頭圧痕が明瞭に残る。その後ナデ調整を加える。外面には黒斑が認められ、底面には木の葉の痕跡が残っている。二重に木葉痕が見られる。

(612) 突出平底で、底面はタタキを施す底部である。外面はタタキ成形ののち縦方向のハケメを施している。内面は板ナデで整形している。

(613) はやや不安定な平底で、体部は直線的に広がっている。外面はハケ整形でナデ調整を加えている。内面と底面はナデ仕上げである。底径5.4cm、残存高3.15cmを測る。やや大きめの石粒を含む。

(614) は上げ底になった突出平底である。中央部分が上がっており、体部は内湾する。底面には木葉痕が残っている。底径6.1cm、残存高2.8cmを測る。内外面ともナデ整形している。

(615) は不安定な平底である。中央部分が僅かに尖ったようになった突出平底である。底部再成形で外面には指頭圧痕が見られる。体部は内湾ぎみに開いている。底面にヘラ状の圧痕が残っている。内外面ともにナデ整形している。底径4.75cm、残存高3.9cmを測る。橙色からにぶい黄橙をしており、砂粒多く含む。

(616) は底面中央が大きく上がる特殊なタイプの底部である。ドーナツ状の極端な底部か甑になるのかと思われる。内面はハケ整形でユビ調整を加える。底面は平坦で体部は内湾している。底径7.0cm、残存高3.01cmを測る。やや器肉は厚めである。

(617) は大きく内湾する体部から突出平底である。重心の低い印象を受ける。底部中央が丸く上げ底になっている。外面はハケ整形で、内面は板ナデである。底面もナデ仕上げである。底径5.9cm、残存高5.05cmを測る。細かい砂粒を多く含む。

(618) は底面が平坦な底部である。底径8.7cm、残存高4.0cmを測る。平たい底部から直線的に内湾する体部となる。外面は斜め方向のハケ整形で、内面はユビ成形ののちナデ仕上げである。2次焼成を受けており、内面に輪状に痕跡が認められる。剥離痕のようで、重ねて焼成したのであろうか。外面は橙、内面はにぶい橙をしており、砂粒を多く含んでいる。

甕

(619) は体部と底部が接合しないが、色調や形態・胎土などから同一個体と考えられる甕である。

底部は高さのある突出平底でない湾する体部に続く。倒卵形の体部で甕体部中位より上の方に最大腹径16.6cmを持っている。緩やかにない湾しつつ稜線を有する頸部で屈曲して外反する口縁部となる。僅かに外反するが短く、端部は丸く尖っている。底部はヘラ状工具の圧痕がタタキ目のように残っており、内外ともにナデ整形している。体部上部はユビ成形ののち外面はハケ整形・ナデ仕上げ、口縁部はヨコナデ仕上げを行っている。口径14.0cm、底径4.4cmを測り、器高は19.2cmに復原できる。にぶい赤褐で砂粒を含む。

(620) はくの字甕である。底部は平底で、器高の高い倒卵形の体部となり、緩やかに屈曲して外反する口縁部になる。端部は尖りぎみで丸くなる。底部はユビ成形で作り出されており、指頭圧痕が見られる。底径3.2cmの平底で、内面は底部分が下がっており器肉は薄くなっている。体部はユビ成形ののちナデ整形が行われている。粘土紐は明瞭に見られる。外面にも粘土紐の継ぎ目は見られる。頸部は明瞭な稜線を持たない。口縁部はヨコナデである。口径15.9cm、器高22.6cm、最大腹径18.3cmを測る。橙色で砂粒を多く含む。

(621) は短い口縁部を持つ甕で、体部下半を欠いている。内湾する体部から如意状に短く外反する口縁部となる。頸部は甘い。体部はナデ整形で、口縁部はヨコナデ仕上げである。口径15.8cm、残存高12.9cm、最大腹径17.6cmを測る。体部外面に使用時に付いたと思われる円形の痕跡が見られる。用途などは不明である。砂粒を含み、にぶい橙色をしている。遺構面上層の包含層出土であるが、時期は弥生時代と考えられる。

(622) は口径と体部の最大腹径がほぼ同じの甕である。平底から外反し、直立ぎみに内湾して頸部に至る。緩やかな稜線となる頸部から外傾する口縁部になる。端部は角張りぎみに丸く納める。底部は上げ底の突出平底である。体部外面の下半は左上がりの、上半は右上がりのタタキ成形である。タタキの方向を変えていることからも分割成形であることが判る。口縁部までタタキメが及んでおり、口縁部も再成形によるものである。タタキ成形したのち折り曲げて口縁部にしたものである。体部内面はナデ整形であるが、粗い仕上げで粘土紐が明瞭に看取される。口縁部はヨコナデ仕上げである。底径4.6cm、口径11.8cm、器高14.7cmを測る。浅黄橙で砂粒を含む。

(623) はくの字甕で体部上半と口縁部が残っている。体部外面は縦方向のハケ整形である。7本／cmの細かいハケである。内湾する体部から僅かに外反する口縁部になる。端部は丸い。2次焼成を受けている。口縁部はヨコナデが施されている。焼成は良好で、にぶい橙を呈している。砂粒少量含むが、胎土は精良である。口径13.2cm、残存高5.95cmを測る。

(624) もくの字甕である。ユビ成形ののちナデ仕上げが行われている。口縁部は折り曲げて作り出したものと思われる。頸部周辺に顕著に指頭圧痕が見られる。内面は板ナデで調整を加えている。内湾する体部から外反する口縁部になる。端部は尖っている。口径13.3cm、残存高8.5cmを測る。

(625) は内湾する体部から稜線を持つ頸部となり、僅かに内湾する口縁部に続く。端部は丸く納めている。器壁は全体的に厚めである。頸部はヨコナデによって凹んでいる。内面はユビ成形からナデが行われている。口縁部はヨコナデが行われている。口径11.8cm、残存高6.5cmを測る。明赤褐で砂粒含む。

(626) は球形の体部から明瞭な稜線を持つ頸部から直線的に開く口縁部となる。端部は角張る。体部内面はユビ成形ののちナデで仕上げている。粘土紐の継ぎ目が明らかで、指頭圧痕も多く残されている。下半はヘラケズリで仕上げている。外面はハケ整形がなされている。ただ、非常に粗いことから貝

殻状の施文具で整形されたものと思われる。口縁部はヨコナデ仕上げである。口縁部中央が膨らんでいる。灰黄褐を呈し、砂粒を含んでいる。口径13.6cm、残存高15.0cmを測る。

(627) は粗雑なつくりの甕口縁部である。内湾する体部から僅かに外反する口縁部になる。端部は丸い。体部内面はユビ成形で指頭圧痕が多く明瞭に認められる。口径12.75cm、残存高8.5cmを測る。器壁は厚めで、色調はにぶい黄橙で、砂粒を多く含む。

(628) は内湾する体部から甘い稜線となる頸部から外反する口縁部となる。端部は丸く外側に反っている。体部内面はユビ成形ののちナデ仕上げ。外面はハケ整形である。口縁部内面はハケ整形が施されてからヨコナデで仕上げている。
口径14.8cm、残存高5.9cmを測る。

(629) は器壁の厚い体部外面タタキ成形された甕口縁部である。直線的に内傾した体部から大きく外反する口縁部になる。端部は角張る。頸部の稜線は甘い。口縁部はヨコナデである。口径19.5cm、残存高4.8cmを測る。にぶい橙で小礫・砂粒を含む。口縁部に黒斑が認められる。

(630) は口径21.3cmと大型の甕口縁部である。頸部から大きく外傾する。器壁の厚さは歪で、器表も平滑ではない。端部は角張り外側に肥厚する。ヨコナデで仕上げるが、口縁部にも粘土紐の継ぎ目が明瞭に見られる。強く焼けており、内面に有機質が付着している。砂粒と小石粒を含んでいる。

(631) はくの字になる口縁部で、頸部の稜線は比較的シャープである。器壁は厚いが丁寧な作りの甕である。僅かに内湾ぎみで、端部は外側に張り出した方形をしている。体部も直線的に広がる。磨滅して口縁部のヨコナデ以外成形技法は不明であるが、形態からは内面はヘラケズリが施されていたと思われる。砂粒を多く含み、淡橙をしている。口径20.4cm、残存高4.8cmを測る。

(632) は内湾する体部から直線的に広がる口縁部となり、端部は角張りぎみに丸い。内面はユビ成形からナデ仕上げ、外面はハケ整形からナデ調整を加える。口縁部はヨコナデである。内面には粘土紐の継ぎ目がみられ、頸部は緩やかな形である。頸部は強いヨコナデで凹んでいる。口径16.2cm、残存高5.5cmを測る。にぶい橙からにぶい黄橙を呈しており、砂粒を少量含んでいる。

(633) はくの字に口縁部を折り曲げて作った甕で、体部は僅かに内湾し、口縁部は外反する。端部は角張りぎみに丸い。体部内面はユビ成形ののちナデ整形、外面は縦方向のハケ整形、口縁部はハケ整形ののちヨコナデ仕上げである。ハケ原体は5本／cmの粗いものである。口径24.1cm、残存高9.5cmを測る。焼成は良好である。内面は黒褐、外面は橙をしている。

(634) も体部内面はユビ成形ののちナデ整形、外面は縦方向のハケ整形、口縁部はハケ整形ののちヨコナデ仕上げである。ハケ原体は7本／cmと細かいものを使用している。長胴甕のような体部が内湾しているものの垂下するタイプで、口縁部は外反する。端部は丸い。にぶい黄橙である。

(635) は球形の体部から短く外反する。端部は丸い。体部内面はヘラケズリで外面はハケ整形である。ハケは縦方向ののち斜め方向に施している。口縁部はヨコナデ仕上げである。2次焼成を受けており、橙を呈している。砂粒を多く含んでいる。口径16,1cm、残存高13.1cm、最大腹径22.8cmを測る。

(636) はやや肩の張った球形から外傾する口縁部になる。端部は内側に僅かに肥厚して端面をなしている。頸部は緩やかで明瞭な稜線を持たない。体部内面はユビ成形からナデを行い、外面はハケ整形からユビ仕上げを行うが磨滅が著しい。口縁部はヨコナデである。布留傾向甕である。口径13.8cm、器高21.9cm、最大腹径21.0cmを測る。浅黄橙からにぶい橙を呈しており、砂粒を多く含む。

(637) は内湾する体部から外反する口縁部になる。端部はつまみ上げるように丸く仕上げている。

頸部は丸く器壁はこの部分だけやや厚い。体部内面はユビ成形からナデ仕上げ。外面は斜め方向のハケ整形で、口縁部はヨコナデ仕上げを行っている。口径21.6cm、器高18.1cmを測る。

（638）は肩が張るような内湾する体部から短く外反する口縁部になる。端部は尖りぎみに丸くなっている。磨滅が著しく焼成は甘い。体部外面はハケ整形で、口縁部はヨコナデである。口径20.4cm、残存高10.6cmを測る。にぶい橙色で砂粒を含む。

（639）は薄く仕上げられた内湾する体部から外傾する口縁部である。頸部の稜線は甘い。口縁部は中央が膨らんでおり、端部は尖りぎみに丸くしている。体部内面はユビ成形で指頭圧痕と粘土紐の継ぎ目が明瞭に残っている。口縁部はヨコナデで仕上げている。口径14.8cm、残存高13.75cmを測る。

（640）は内湾する体部から頸部となり短く外反する。端部は上方につまみ出している。体部内面はハケ整形、外面はタタキ成形を行い、ナデ調整を一部加える。口縁部は外面ハケ整形で、ヨコナデ仕上げである。外面には煤付着している。口径16.6cm、残存高9.2cmを測る。庄内期の甕と思われる。

（641）は体部内湾しており、稜線を持つ頸部から直線的に外側に広がる口縁部である。体部は球形であるが、最大腹径が中位より高い位置にあるようである。内面はヘラケズリ、外面はハケ整形である。口縁部はヨコナデで仕上げる。内面は直線で外面は中央が厚く両端が薄くなる器壁である。端部と頸部が強いヨコナデを行った結果であろうか。端部は外側につまみ出すように肥厚している。口径14.5cm、残存高14.3cm、最大腹径20.8cmを測る。橙からにぶい黄橙で砂粒を含んでいる。器壁は薄く仕上げられている。庄内期の甕である。

（642）は大型の鉢である。口径37.0cm、残存高32.0cm、最大腹径37.2cmを測る。体部は僅かに内湾するが上半は直立ぎみである。頸部は僅かに凹み、折り曲げた外傾する短い口縁部が付けられる。端部は角張っている。体部内面はユビ成形からナデ仕上げ、外面はユビ成形ののち貝殻状の施文具で調整している。ハケ原体より粗くなっている。ただ、上半の方が粗く、下半の方が細かくなっており、２種の原体を使っていることが明らかである。体部には粘土紐の継ぎ目が明瞭に見られる。口縁部はヨコナデである。浅黄橙をし、砂粒を含んでいる。

（643）は内湾する体部から緩やかに湾曲する頸部になり、内湾して立ち上がる口縁部になる。器壁は薄く仕上げられている。体部内面はヘラケズリ、外面はハケ整形が施され、口縁部はハケ整形ののちナデで調整しヨコナデが行われている。口縁部は二重口縁のようにはならないが、受け口状になっている。端部は丸く上方を向いている。口径12.0cm、残存高5.7cmを測る。

（644）は端部が肥厚する布留傾向の甕口縁部である。頸部外面がヨコナデによって凹んでいる。内傾した体部から内湾ぎみに外傾する口縁部になる。端部は内側に肥厚し、上部が端面になっている。ヨコナデで仕上げている。頸部内面はユビ調整が認められる。口径13.6cm、残存高4.8cmを測る。

（645）は内傾する体部から屈曲し、内湾する口縁部になる。端部は僅かに内側につまみ出しており、上に端面を作っている。２次焼成を受けている。体部内面は指頭圧痕が見られる。口径16.6cm、残存高4.4cmを測る。表面磨滅しているが、ヨコナデと思われる。

（646）は内傾する体部から内湾する口縁部に屈曲してつながる。体部内面はヘラケズリを行い、頸部付近はユビ成形である。外面はハケ整形で、器肉の厚さは歪である。端部は面となり内側につまみ出している。黒斑が外面に認められる。口径15.4cm、残存高6.6cmを測る。

（647）は球形の体部から鋭く屈曲して口縁部に続く。口縁部は内湾ぎみに外傾するもので、端部は内側に肥厚している。内面はヘラケズリ、外面はハケ整形、口縁部はヨコナデであろうが、器表の磨滅

が著しい。2次焼成を受けている。焼成は良好でにぶい橙を呈する。砂粒を少量含む。口径12.2cm、残存高8.0cmを測る。布留0期の甕であろう。薄く仕上げられた製品である。

(648) は肩の張る球形の体部から大きく屈曲して内湾する口縁部に続く。口縁部はさらに端部に向かってつまみあげている。端部はバチ形になる。体部内面はヘラケズリで、外面はハケ整形である。口縁部は内面ハケ整形ののちヨコナデが施されている。口縁部は折り曲げて作っており、ユビ成形が認められる。口径11.9cm、残存高10.0cm、最大腹径17.3cmを測る。にぶい橙で砂粒を含む。

(649) は直線的に延びる体部から内傾する口縁部になる。頸部が強くヨコナデされており、そのことによって凹んでおり、口縁部が直立ぎみになっている。端部は内側に肥厚させている。表面磨滅のため不明であるが、ヨコナデ仕上げと思われる。口径16.5cm、残存高4.3cmを測る。

(650) は口径14.8cm、残存高10.1cmを測る庄内期の甕である。体部は内湾し、頸部内面に明瞭な稜線を持って直線に広がる口縁部になる。体部は球形に近く、内面はヘラケズリ、外面はハケ整形ののちナデで仕上げる。口縁部はヨコナデである。頸部の稜線はシャープで、内面は平滑である。端部は内側に僅かにつまみ出している。浅黄橙で砂粒を含んでいる。

(651) は内湾する体部から大きく屈曲し、僅かに内湾する口縁部になる。端部は微妙に肥厚しており丸くなっている。体部は球形で非常に薄く仕上げられている。内面はヘラケズリで、外面は縦方向のハケ整形ののち横方向のハケを施している。口縁部はヨコナデで、頸部は強いヨコナデを施し凹んでいる。にぶい橙で、砂粒を含んでいる。口径12.35cm、残存高7.4cmを測る。

(652) は山陰系の口縁部である。体部から屈曲し外反する。稜線を持って直立ぎみに外反する。上半には擬凹線が5条以上施されている。ヨコナデであり、端部は欠失しているが尖るものと思われる。砂粒を多く含み、残存高3.3cmを測る。推定口径が8.4cm前後と小さいことから、壺とした方が妥当かもしれない。

(653) は頸部が直立し二重口縁となり、内傾する壺口縁部である。緩やかに屈曲しており、明瞭な稜線を持たない。ヨコナデで仕上げている。端部は外側に尖るように仕上げている。クサリ礫を多く含み、浅黄橙を呈している。口径10.15cm、残存高2.85cmを測る。

(654) は二重口縁の壺口縁部である。頸部から僅かに外傾し、変化して斜め上方へ直線的に延びる。端部は内外に肥厚している。ヨコナデで仕上げられている。砂粒を含み、焼成良好である。にぶい黄橙からにぶい橙をしている。口径13.6cm、残存高4.5cmを測る。

(655) も二重口縁壺口縁部である。緩やかに外反する頸部から変化点を持って外傾する口縁部になる。端部は丸い。ヨコナデ調整である。口径12.4cm、残存高4.1cmを測る。

(656) は直線的に内傾する体部から、大きく屈曲する頸部になる。稜線を持って僅かに外反して丸い端部になる。端部は外側に少しつまみ出している。体部内面ヘラケズリ、外面ナデ調整である。口縁部はヨコナデである。浅黄橙で砂粒多く含む。

(657) は直線的に頸部に延びる体部で、口縁部は直線的に外傾する。端部は内側に肥厚し、上部は端面となっている。口縁部外面には突帯状の変化点がある二重口縁になっている。体部内面はユビ成形・ヘラケズリののちユビ調整を加える。外部はハケ整形で、口縁部はヨコナデである。頸部は強いヨコナデで凹んでいる。小石粒と砂粒を含み、焼成は良好である。口径13.0cm、残存高4.7cmを測る。

(658) はS字甕の口縁部である。非常に薄く仕上げられている。体部は直線的に延び、屈曲して水平ぎみにS字状になって口縁端部に続いている。端部はやや外側につまむように肥厚している。体部内

面はユビ成形からナデ仕上げを行う。外面は粗い縦方向のハケメが見られる。口縁部はヨコナデである。布留併行期の濃尾平野からの搬入品と考えられる。口径14.0cmで残存高2.8cmを測る。灰白色で砂粒を含む。

(659) は内湾する体部から屈曲して外反し、それから上方へつまみ出している。端部は丸い。先の短い二重口縁壺である。体部内面は板ナデ整形で、外面は平行のタタキ成形から一部ナデ整形している。口縁部はヨコナデである。口径16.7cm、残存高6.2cmを測る。にぶい橙で砂粒を多く含む。丹波産の土師器で搬入されたものと思われる。

(660) は球形の体部から内面の頸部稜線が明瞭になって、内湾ぎみに外傾する口縁部である。端部は内側につまみ出すように肥厚している。体部内面はユビ成形で一部ヘラケズリが見られる。外面はハケ整形である。強く被熱しており、表面剥離が顕著である。口縁部はヨコナデである。橙色で砂粒を含む。最大腹径17.0cmで、体部中央に位置している。頸部周辺は強いヨコナデによって凹んでいる。口径11.5cm、残存高15.8cmを測る。庄内期の特徴を残しているが、布留0期とする方が妥当か。

(661) はやはり内湾する体部からくの字になり外傾する口縁部になる。体部内面はヘラケズリ、外面はハケ整形で口縁部はヨコナデである。口縁部は全体には直線であるが、微妙に屈曲している。端部は丸く肥厚している。口径12.4cm、残存高8.3cm、最大腹径15.0cmを測る。金雲母などの砂粒を含み、にぶい黄橙を呈する。布留傾向の特徴を持っている甕である。

(662) は内湾する体部からくの字となり、内湾する口縁部に続く。端部は内側に肥厚し端面となる布留期の特徴を表している。体部内面はヘラケズリ、外面は縦方向から横方向のハケ整形で、口縁部はヨコナデである。頸部はヨコナデによって凹んでいる。口縁部には粘土紐の継ぎ目が残っているが、体部は薄く仕上がっている。口径13.2cm、残存高10.2cm、最大腹径18.0cmを測る。にぶい橙で砂粒を含む。

(663) は内傾する体部から内湾する口縁部にくの字に続く。頸部の稜線は明瞭ではない。体部内面はユビ成形からナデ仕上げ、外面はハケ整形である。口縁部はヨコナデである。内面は指頭圧痕が明瞭である。口径13.9cm、残存高6.7cmを測る。外面には黒斑が見られる。端部は内側に肥厚している。

(664) は僅かに内湾するが直線的な体部からくの字になって内湾する口縁部である。端部は肥厚しており、内側に向かった端面となっている。体部内外面ともユビ成形ののちハケ整形している。口縁部内面はハケ整形でそれからヨコナデを施している。口径16.8cm、残存高5.4cmを測る。

(665) は球形の体部から稜線を持って屈曲する頸部、それから内湾する口縁部で、端部は内外に肥厚する。器壁は薄く丁寧に作っている良品である。体部内面はヘラケズリで薄く削っており、外面は縦方向ののち横方向のハケ整形を行っている。口縁部外面も横方向のハケメが見られ、その後ヨコナデで仕上げている。クサリ礫などの砂粒を含み、焼成は良好である。にぶい橙からにぶい黄橙をしている。口径15.1cm、残存高13.8cm、最大腹径21.5cmを測る。布留期の甕で、若王寺遺跡で最も精製に作られる甕である。

(666) も布留期の甕である。内湾する体部から外傾し、端部付近で内湾ぎみになる口縁部である。端部は内外に肥厚しており、特に内側に顕著である。体部内面は強いユビ成形で、外面はハケ整形である。口縁部はヨコナデであるが、粘土の継ぎ目を残している。頸部内面の稜線は良好である。橙を呈しており、焼成は良好である。1mm前後の砂粒を含んでいる。口径15.2cm、残存高12.2cm、最大腹径24.6cmを測る。

（667）は肩の張る球形の体部で、頸部付近は内傾し、内湾する口縁部が続く。端部は僅かに内外に肥厚しているが、大きなものでない。内面はユビ成形、外面はハケ整形である。口縁部はヨコナデである。口径15.8cm、残存高9.1cmcmを測る。灰黄で砂粒を含む。

（668）は口縁部の大きい甕である。口径20.4cm、残存高8.1cmを測る。内傾する体部から明瞭な稜線の頸部から外傾する口縁部になる。口縁部の内面は直線的に平滑であるが、外面は頸部付近と端部下が凹んでいる。中央部の器壁が厚い。端部は肥厚しており、上側が面となっている。口縁部が6cm余りと長いことが特徴である。体部外面は横方向のハケ整形、内面はヘラケズリののちナデ仕上げである。口縁部はヨコナデ。にぶい黄橙を呈しており、砂粒を含む良好な焼成状態を示している。

（669）は内湾する体部の甕である。内湾するものの肩の張った形状をしている。口縁部は僅かに内湾するが直線的であり、端部は内外に肥厚する。体部内面はユビ成形からヘラケズリを行い、ハケ整形している。外面はハケ整形で、口縁部はハケ整形ののちヨコナデで仕上げている。頸部は屈曲しているが、内面にはナデで仕上げられている。口径15.6cm、残存高15.8cm、最大腹径24.0cmを測る。灰黄をしており、砂粒を含む。

（670）は内湾する体部からほぼ直線的に外傾する口縁部である。頸部稜線は甘く、端部は肥厚しているが端部下が両側からつままれることにより凹んでいる。特に内面は凹線状になっている。体部内面はユビ成形ののちハケ整形、外面はハケ整形である。口縁部はヨコナデ仕上げ。外面に植物付着の痕跡が残されている。籠などの痕跡であろうか。口径13.8cm、残存高9.6cm、最大腹径18.0cmを測る。細砂を含み、にぶい黄橙を呈する。

（671）は球形の内湾する体部から内湾する口縁部になる。頸部は甘く明瞭でない。口縁部は緩やかに内湾し、端部は上方から外側に向けてつまみ出している。口径14.6cm、残存高13.7cm、最大腹径22.8cmを測る。体部内面はヘラケズリで頸部近くはナデ整形を加える。外面はハケ整形である。口縁部はヨコナデである。口縁部には黒斑が認められる。焼成良好で、にぶい黄橙をしている。

（672）は球形の体部から稜線を持つ頸部に、直線的に外側に開く口縁部となる。端部は内側に肥厚している。頸部の内面は屈曲部が大きい。体部内面はヘラケズリ、外面はハケ整形である。口縁部はヨコナデ仕上げ。ハケ整形は縦方向から横方向に行っている。外面は2次焼成によって赤変している。口径13.8cm、残存高15.6cm、最大腹径20.8cmを測る。にぶい橙から明褐灰を示すが、断面も含めて赤変したり黒くなっている部分もある。金雲母などの砂粒を含み、焼成は良好である。

（673）は肩の張る楕円形か球形になる体部から頸部で屈曲し、外傾する口縁部になる。端部は内側に肥厚しており、上部が面となっている。体部下半の形状から尖り底に近い丸底になるのではと思われる。体部内面はヘラケズリで、外面は縦方向ハケ整形から横方向のハケで仕上げる。口縁部内面はハケ整形で、その後ヨコナデで仕上げている。外面肩部に籠目の痕跡かと思われるものが付いている。（670）とは確実に別個体であるので、吊り下げられて使用された土器も若王寺遺跡では多くあったのであろうか。灰黄褐からにぶい黄橙をしており、砂粒を含んでいる。口径14.0cm、残存高18.2cm、最大腹径24.4cmを測る。

（674）は平底で外面タタキ成形、内面ユビ成形がなされている。底面は平たく、突出せずに外傾している。タタキは平行タタキである。底面は板目状の圧痕が認められる。

（675）は底部の器壁の厚い平底である。底径は3.0cmと小さめで、残存高3.9cmを測る。底部から体部に続き内湾している。外面は右上がりのタタキ成形で、内面はハケ状工具で整形している。上からみ

ると螺旋状になった整形でハケ状としたが粗く、貝殻を原体としたかもしれない。にぶい橙で、砂粒を含む。

（676）は平底から直線的に外側に開いていく体部に続く。底部は中央が上げ底になり、周囲は平坦である。僅かに突出している。外面は右上がりのタタキ成形で、内面はナデである。底径5.05cm、残存高5,9cmを測る。砂粒を含み、褐色をしている。

（677）は平底から外側に大きく直線的に開く体部である。内面と底面はナデ整形、外面はハケ整形である。底径5.0cm、残存高5.5cmを測る。

（678）は高台状に周辺部に突帯が再成形によって作られた底部である。指頭圧痕が多く残っている。外面は右上がりのタタキ成形で、内面はユビ成形からナデ調整を加える。底部もユビ整形しており、体部上側はヨコナデがなされている。底径3.5cmを測る。

（679）は大型の底部である。ドーナツ状に上げ底になった平底で、底径5.7cmを測る。突出していない底からやや内湾する体部となる。外面は細めの平行タタキである。内面はナデが施されているようであるが、磨滅している。黒斑が認められる。底面はナデ仕上げ。

（680）は木葉痕のある突出平底で直線的に開く体部である。底部上部はユビ成形されている。外面は平行タタキで、内面はナデ調整である。5.1cmを測る底部である。

（681）は上げ底になる平底である。内面は底は丸く外傾していく。内面はハケ整形だが、磨滅顕著である。底径5.35cm、残存高2.8cmを測る。

（682）は端部が三角形の突帯状なり、上げ底となっている。体部は内湾している。器壁は非常に薄くなっている。外面はユビ成形が見られる。底径5.3cm、残存高2.65cmを測る。

（683）は高台状の底部で底中央から器壁を厚くしつつ外側に延びている。端部は尖りぎみに丸い。内面は底は平たくそこから直線的に広がる。底径4.2cm、残存高2.8cmを測る。

（684）は上げ底の平底から内湾する体部になる。体部内面はケズリに近い板ナデが施されたのち、ハケ整形されている。外面はハケ整形ののちナデ仕上げである。底部は再成形である。砂粒多く含み、焼成は良好である。外面は橙をしており、内面はオリーブ黒である。２次焼成を受けている。

（685）は丸底の大型の底部である。接地面が広いもので、２次焼成を受けている。内面はユビ成形からナデ整形を行っている。外面はハケ整形である。橙で砂粒を多く含む。

（686）は脚台である。円板充填法で甕本体と接合していたかと思われる。脚部は裾広がりに緩やかに広がっている。端部は角張り、両側に肥厚している。端面は２条の凹線になっている。内面は絞り目が見られナデ整形、外面はハケ整形からナデ調整し、端部周辺はヨコナデである。底内面もナデ仕上げである。中央付近に４方に円孔が存在する。裾部径11.4cm、残存高6.9cmを測る。

鉢（687）～（693）

（687）は大型の鉢である。ほぼ完形で大きめの平底である。体部下半は緩やかに僅かに内湾するが直線的に延び、最大腹径の肩部で内側に曲がり頸部へとなる。頸部は緩やかに曲がって外反する口縁部になる。端部は角張る。体部外面はタタキ成形である。平行タタキである。内面はハケ整形からヘラミガキで仕上げている。口縁部はヨコナデで仕上げる。口縁部は歪んでいる。体部下半に黒斑がある。口径30.8cm、器高25.0cm、底径7.5cm、最大腹径31.0cmを測る。口径と最大腹径がほぼ同じ大きさである。灰白で砂粒を多く含む。

（688）は二重口縁の鉢で精製品である。直立に近い外傾する口縁部で、端部は角張り、外側に肥厚

している。頸部は小さく鋭く曲がっている。体部は肩の張る倒卵形である。下半は急激にすぼまっていく。底部は欠いているが、尖り底か丸底と思われる。小石粒僅かに含むが胎土は良好である。口径27.8cm、残存高21.8cm、最大腹径30.0cmを測る。ユビ成形ののち内面は横方向の細かいハケ整形である。口縁部はヨコナデで、頸部は強いヨコナデである。にぶい橙からにぶい黄橙をしており、搬入品と思われる。

(689) は製塩土器の可能性のある脚台付きの鉢である。僅かに上げ底となる平底から内湾する体部となる。底部はユビ成形によって形成されている。ナデ整形が加えられている。体部は底はユビ成形からナデ調整、内外面は磨滅のため不明であるが、ナデ調整は行われている。外面はにぶい黄褐、内面は黄灰で、焼成は良好である。小石粒少量と砂粒多数含んでいる。残存高11.55cmを測る。製塩土器にすると体部の球形が著しく、底部からすると外傾するタイプ（脚台Ⅱ）になろうかと思われる。体部は脚台Ⅳに近く齟齬がある。

(690) はやはり脚台の付く鉢である。上げ底で端部が外方につまみ出すもので、端部は尖りぎみに丸い。底部は再成形でユビ成形で作っている。体部は内湾する。底径5.7cmで、残存高8.3cmを測る。外面はにぶい黄褐、内面は灰黄を呈しており、砂粒を多く含む。

(691) は小型の鉢である。口径13.0cm、器高7.0cm、底径3.1cmを測る。器高の高い底部で、平底である。底部から内湾する体部になり、口縁端部はさらに内側に向かっている。端部は丸い。全体的に歪みが大きく精製とは言えない。粘土紐の継ぎ目も明瞭である。にぶい黄橙をしており、砂粒を含んでいる。表面磨滅しているが、ユビ成形ののちナデ調整をしている。

(692) は底部の小さい鉢で、底径3.8cmで残存高が5.4cmを測る。口径は30cmにもなろうかと思われる。底部は上げ底で底部の端部は丸くなっている。底部中央が欠失しており、中央の穿孔があったかもしれない。体部残存端は擬口縁部で割れている。高杯の接合のような技法が使われている。にぶい橙で細砂を少量含むが精製されている。表面磨滅が著しい。

(693) は平底から内湾する体部になり、くの字に屈曲した外反する口縁部となる。端部は内外に肥厚しているが、内側の方が大きく出ている。短い口縁部で、頸部内面の稜線は比較的明瞭である。底部はユビ成形で作っており、体部内面はナデ整形ののちナデ調整を加えている。外面は縦方向のハケ整形からナデならびにミガキで仕上げている。口縁部はヨコナデである。口径25.7cm、器高15.0cm、底径4.6cmを測る。砂粒を含み、にぶい黄橙を呈する。外面に黒斑が認められる。

小型鉢・椀 (694) ～ (707)

(694) は口径10.8cm、器高5.9cm、最大腹径10.8cmを測る精製の小型鉢である。口径と最大腹径が同じ値を示すもので、丸底である。底部の一部を欠いている。重心の低い丸底で、内湾する体部から短く外反する口縁部になる。端部は丸い。赤色酸化粒などの砂粒を含み、橙をしている。焼成もやや甘く、そのこともあって残存状態は悪い。表面磨滅しており、技法は不明である。

(695) は内湾する体部から、そのまま延びて尖りぎみの端部に続く。底部が器壁が最も厚く、口縁部にいくほど薄くなっている。口径10.3cm、器高5.2cmを測る。体部下半は1方向のナデ仕上げが見られる。全体的にはヨコナデで仕上げられている。口縁部近くに黒斑がある。

(696) は手捏ねふうの鉢である。底部は明らかな平底ではないが、それに近い接地面の広い丸底で、体部は内湾する。口縁端部は丸い。端部付近が最も厚くなっている。ユビ成形でナデ調整を加えている。砂粒多く含み、にぶい黄橙を呈している。内面の方が丁寧に仕上げられている。口径8.7cm、器高

4.5cmを測る。

（697）は残存高4.5cmを測る鉢の体部である。外面は縦方向から横方向のハケ整形で肩部にヘラ先？（工具原体）で施文した刺突文が並んでいる。内面はナデ仕上げであろう。内湾するもので、にぶい黄橙をしており、砂粒を含んでいる。表面磨滅が著しい。

（698）は平底ぎみの接地面の大きい丸底から内湾する体部で直立ぎみに延び、口縁部は非常に短く外傾するように折って形成している。口径10.1cm、器高5.15cmを測る。内面はユビ整形からナデ仕上げ。外面はユビ整形で、下半は未調整でそのまま指頭圧痕を残している。口縁部はヨコナデで仕上げている。底部外面に線状の圧痕が4～5本残されている。砂粒含み、にぶい橙をしている。

（699）は丸底の浅い鉢である。内湾する体部から尖りぎみの端部に続く。外面に粘土紐の継ぎ目が残っている。口径10.9cm、器高3.8cmを測る。2次焼成を受けており、製塩土器の可能性がある。内面は灰黄、外面はにぶい橙から灰白で、小石粒多く含む。

（700）は丸底から内湾し、緩やかに屈曲する頸部になる。外傾する口縁部が付き、端部が上につまみ上げている。体部はナデ仕上げ。外面はさらにヘラミガキで丁寧に仕上げているようである。にぶい橙で良好な胎土で精製品である。焼成良好である。表面磨滅している。

（701）は丸底で頸部の稜線が明瞭で水平に近く開いており、さらに立ち上がり外反して口縁部となる。端部は丸い。丁寧な仕上げであるが、表面磨滅している。内面ナデ仕上げ、口縁部はヨコナデである。口径14.4cm、器高5.0cmを測る。橙で砂粒を含む。

（702）は内湾する体部から二重口縁状となる。明瞭な頸部の稜線から上方へ延び、さらに変化して外反する。内外面ともナデ仕上げで、口縁部はヨコナデである。内外面ともナデ整形で、口縁部はヨコナデである。口径15.0cmで残存高5.6cmを測る。口径が最大径になる。橙を呈しており、金雲母などの砂粒を少量含んでいるが、胎土は精良である。焼成も良好の精製品である。

（703）は浅い器高になる鉢で、やはり精製品である。浅めに内湾する体部から二重に屈曲する口縁部である。頸部の稜線は鋭くはない。水平ぎみに広がり、さらに外反し、端部は丸くなっている。ナデ整形ののちヘラミガキをしている。口縁部はヨコナデである。内面は灰黄、外面は灰黄からにぶい橙をしている。口径16.6cm、残存高4.8cmを測る。小石粒を僅かに含むが、胎土は良好である。

（704）は内湾する体部から短い口縁部になる椀である。口縁部は1cmに満たない短いもので、端部は尖っている。頸部が最も器壁が厚い。内外面ともにナデ仕上げで、口縁部はヨコナデで仕上げている。口径13.0cm、器高5.9cmを測る。にぶい橙をしており、砂粒を含む。

（705）は脚台部である。僅かに上げ底となった平底で、体部は内湾する。底部はユビ成形で指頭圧痕が周縁に残っている。内外面・底面ともにナデ仕上げである。底径4.3cm、残存高3.1cmを測る。にぶい黄橙を呈しており、砂粒を含む。焼成良好である。

（706）も脚台である。底径7.6cm、残存高4.3cmを測る。直線的な体部底から脚台部になっている。底から外反ぎみに広がっている。器壁は体部の方が厚さが際立っている。ユビ成形ののち端部と内面はナデ調整を行っている。砂粒を含み、灰白からにぶい橙をしている。

（707）は脚台としたが、土師器で新しい時期（6世紀代）の高杯かもしれない。緩やかに内湾する体部に細く直線的に延びる裾部が付く。やや歪んでいる。接続部は中実である。細砂を含むが胎土は良好である。底径7.4cmで残存高5.3cmを測る。

坩堝（708）

ユビ成形によって作られている。直線的に広がる体部である。端部は尖りぎみに丸い。口径11.5cm、残存高5.1cmを測る。器壁は1.3cm前後と非常に厚く、強く火を受けている。明確に坩堝と断定はできないが、可能性が高いと考えている。砂粒は多く含む。

甑（709）～（722）

（709）は底部である。焼成前の穿孔を中央に施している。底部は不安定な平底で、外反する体部に続く。底部の角は丸くなっている。径８mm前後の穿孔をしており、上下から孔を開けている。内面にはヘラで放射状の圧痕が見られる。外面はナデ整形である。底径3.6cm、残存高3.8cmを測る。小石粒を含む。

（710）は外面タタキメで内面はナデ整形である。タタキは上方が右上がりで、下部は平行タタキである。平底から直線的に開く体部である。底部と体部との接合部は平滑ではなく変化している。底面には木の葉の痕跡が見られ、斜め方向に穿孔が１ヵ所見られる。中央から外側に向かって焼成前に開けている。底径4.4cm、残存高8.5cmを測る。橙からにぶい黄橙で、砂粒を含む。

（711）は鉢形の甑の完形品である。突出平底から内湾する体部に続き、口縁部はそのまま延び角張りぎみに丸い端部となる。底部は不安定な底で底面は粗いナデで仕上げている。底部横は再成形の指頭圧痕が見られる。体部外面は平行タタキののち板ナデで仕上げている。粘土紐の継ぎ目が明瞭に残っている。内面は底部付近はユビ成形で、それ以外はハケ整形である。端部はヨコナデである。底部は中央から外側に向かって焼成前に穿孔している。底部中央は上げ底になっており、底部はドーナツ状のようにしているが、凹みが穿孔の失敗かもしれない。口径18.1cm、器高15.35cm、底径4.65cmを測る。全体的に粗い作りである。砂粒多く含み、橙をしている。

（712）は端部が丸く内傾する体部である。直線的に底部に向かっている。内面は粘土紐の継ぎ目が明瞭で指頭圧痕も顕著に見られる。口縁部付近のみ横方向のハケ整形が認められる。外面は縦方向のハケ整形である。端部はヨコナデで仕上げる。外面やや下がってから外反する把手が付いている。断面は歪な隅円方形である。ユビ成形しナデで仕上げている。にぶい橙をしている。

（713）は緩やかに如意状に開く口縁部である。直立する体部から外傾する口縁部で、端部は角張る。外面は粗いハケ整形である。２次焼成を受けており、砂粒を含む。内面は橙で、外面は明赤褐である。口径23.2cm、残存高13.3cm、最大腹径22.1cmを測る。

（714）は口縁部で僅かに外側に開く。外傾しており、端部は内側に尖っている。外面はハケ整形で、内面と口縁部はナデ仕上げである。口径25.0cm、残存高7.2cmを測る。にぶい橙から橙を呈しており、小石粒を少量含んでいる。焼成は良好である。

（715）～（720）は甑の把手である。全体的にはユビ成形からナデ調整を加えている。把手が中心の破片であることから、径を出すことは困難である。また、体部の傾きも確実なものでないことを断っておく。

（715）の体部は内湾し、把手は外反している。黒斑が認められる。砂粒含み、橙からにぶい橙を呈している。中央部の断面は歪な隅円長方形である。体部内面も斜め方向のナデで仕上げている。

（716）は体部が外傾し、把手は短く大きく上方へ延びている。内面はハケ整形である。断面の形状は円形に近い。橙で、砂粒を含んでいる。残存高7.7cmである。

（717）は把手が中空になっている。端部を欠く把手である。真横から下方に向かっているようであ

る。把手の接続はユビ成形ののちナデとハケ整形である。内面は橙からにぶい褐で、外面はにぶい橙から褐灰である。残存高6.0cmを測る。

（718）は外傾する体部で把手との接続部も含めて、外面はハケ整形である。把手は水平から外反して上方へ上がっている。断面形状は上部が湾曲した幅広の皿状になっている。端部は尖っている。幅広で上方へ延びている。残存高6.1cmである。外面はにぶい橙で、内面は黄灰である。

（719）は細長く大きく上方へ外反する把手である。シャープなつくりで、外反している。端部は鋭く尖っている。断面形状は丸い。体部は内湾する。外面は2次焼成により強く被熱しており、赤変している。煤も付着している。残存高5.7cmを測る。

（720）は把手のみの破片である。体部との接続でホゾ状に中央が突出している。把手は斜め上方へ延び、途中から外反している。先は丸い。断面形状は歪な円形である。残存高4.8cmを測る。にぶい橙を呈しており、クサリ礫などの砂粒を多く含む。

（721）は甑の底部である。底部端から内側部分で、破片からは3方向に孔が開いている。中央の円孔が残っているとすれば、中央の円孔の径は大きなものに復原される。径が大きすぎるように思え、中央まで達していないのではないかと思われる。底部の下面はハケ整形で、内面はヘラケズリである。孔の端面はナデで仕上げている。残存高1.4cmで、橙からにぶい橙をしている。焼成は良好で、砂粒を含んでいる。

（722）は中央の円孔部分と底部端部まで残っている甑底部である。中央の孔は径4cm前後に復原される。中央に円孔があり、周辺に3ヵ所の半円形の透孔があるものと想定している。残存高は1.1cmと僅かしか残っていない。底面はハケ整形で、内面はナデ仕上げである。にぶい橙で、砂粒を含んでいる。

竈（723）

竈前面の鍔部分の破片である。底部や上部ではなく、中間部分の破片である。2cm余り出た鍔部分で、弧を描いて上方になる付近の破片と思われる。残存高11.9cm残っている。後部の器壁は薄めである。前面の端部は角張っている。ユビ成形ののちナデ調整している。

高杯（724）～（813）

（724）は図上で完形の高杯である。杯部で約半分、脚台で約4分の1残っている。円板充填法で脚台と杯部は接合されている。接合部に沈線状の窪みが見られる。脚台部は筒部が直立し、裾部は裾広がりに開いている。直線的に広がり、端部は角張りぎみである。杯部は浅めで底は平たく水平に近く広がり、内湾して変化点になる。大きく外反して口縁部となる。端部は角張りぎみに丸く納めている。外反する変化点の上に1条の凹線が存在する。全体的には弥生時代後期の特徴を残している。裾部には1ヵ所しか残存していないが、透孔が認められる。残存度からみて3方透孔と思われる。脚部内面はナデ整形で、外面はヘラミガキが見られる。杯部外面もヘラミガキである。口縁部はヨコナデで仕上げている。口径25.55cm、器高16.25cm、底径14.6cmを測る。浅黄橙で、クサリ礫などの砂粒多く含んでいる。

（725）は杯部の破片である。端部を欠いている。水平に開く下半から僅かに外反する上部になる。外面下半はユビ成形からナデ調整している。内面はナデ整形している。上部はヨコナデ仕上げである。残存高5.2cmを測る。にぶい橙で、砂粒を含む。

（726）も杯部下半の破片である。脚台部との接続は中空である。水平に開いてから外反する杯部である。変化点は稜線になっている。外面は6本／cmのハケ整形で、内面と上半はヨコナデで仕上げている。残存高4.4cmを測り、小石粒を少量含む。内面は浅黄橙、外面は黄灰からにぶい橙を呈している。

(727) は脚部である。ラッパ状に広がっており、外面は緩やかに広がっているが、内面には稜線をもっている。内面には絞り目があり、裾部はヨコナデで仕上げている。外面はヘラミガキで仕上げている。焼成はやや甘く、小石粒を少量含んでいる。内面は浅黄橙で、外面はにぶい橙である。裾径9.1cm、残存高6.2cmを測る。

(728) は杯部の接続部から外傾して広がっている裾部で、屈曲して大きく開いている。端部は尖っている。変化点の内面の稜線は明確である。内面ヘラケズリ、外面ヘラミガキで仕上げている。裾部はユビ成形からユビ整形を行い、ナデ調整を加えている。

(729) はラッパ状に広がる脚部で、裾が内面に稜線を持って変化している。直線的に広がり、端部は尖る。内面はヘラケズリで裾近くはナデ整形である。端部はヨコナデで、外面はヘラミガキである。内面の粘土紐が螺旋状に継ぎ目が見られる。裾部径9.0cm、残存高6.2cmを測る。

(730) は緩やかに広がる裾部になる。脚部は中実である。内面はヘラケズリである。外面もヘラケズリの痕跡が僅かに認められるが、ナデで調整している。裾端部は角張る。クサリ礫などの砂粒多く含む。裾部径10.0cm、残存高6.2cmを測る。

(731) は中実の脚部で僅かに開きながら延びており、内面は明瞭な稜線を持って外側に直線で開いている。内面はヘラケズリで、端部周辺はヨコナデで仕上げている。端部は角張る。脚部はヘラで整形されており、面取りしたかのようになっている。裾部径10.95cm、残存高7.8cmを測る。クサリ礫などの砂粒多く含む。

(732) は (729) と同じように粘土紐の継ぎ目が螺旋状に見られる。同じ技法 (作者) が行ったのであろうか。内面は上方の筒部内面がヘラケズリで裾部内面はハケ整形である。外面はヘラミガキ、端部周辺はヨコナデである。裾部径9.4cm、残存高5.8cmを測る。にぶい橙を呈し、砂粒を含んでいる。

(733) は低脚の高杯である。小型で口径11.2cm、器高6.9cm、裾部径7.2cmを測る。杯部内面はユビ整形からヘラミガキがなされている。外面も同様である。口縁部はヨコナデ仕上げである。脚部内面はヘラケズリで、外面はユビ整形からヘラミガキである。裾部はヨコナデで仕上げる。脚台の接合部は中実になっている。柱状部は直に近く広がり、途中で変化した外反する裾部になる。杯部は内湾し、緩やかにS字に屈曲して外反する。端部は丸い。にぶい黄橙で、砂粒を含む。丁寧な仕上げの高杯である。

(734) は杯部のみ残存している。口縁部が外反しており、端部は丸く尖っている。体部は内湾しており、口縁部との間には甘い稜線が存在する。脚部との接合は円板充填によっている。脚部は中空であろう。体部外面は細かいハケ整形で、その後全体的にヘラミガキで丁寧に仕上げている。口径13.6cm、残存高5.65cmを測り、クサリ礫など砂粒多く含む。色調は浅黄橙をしている。

(735) は特殊な器形の高杯筒部である。緩やかに広がり、裾部に続いている。途中に突帯が巡らされており、その端部には刻み目が施されている。裾部に続く内面は直線的に延びている。筒部は中央部に僅かに空間があり、へら先で開けたか、製作時に突き刺した痕跡なのであろうか。裾部内面には放射状にヘラ先による圧痕がある。内面はナデ調整をしている。残存高8.6cmを測る。

(736) は筒部で、中実になっている。直立に近く下がっており裾近くで外反する。内面には絞り目が見られる。全体にはナデ調整である。残存高8.95cmで、浅黄橙をしている。

(737) は杯部で椀形の内湾するもので端部は丸くなる。筒部との接合はユビ成形によるものである。杯部はヨコナデ仕上げである。浅黄橙から灰白を呈し、小石粒を少量含む。口径14.8cm、残存高5.15cmを測る。

（738）は内湾する杯部で端部は内側に肥厚している。ナデ整形ののち、口縁部はヨコナデを行っている。接合部はユビ成形で、中実の柱状部に続く。残存高5.0cm、口径14.0cmである。

（739）は椀（鉢）形の高杯で、平たい下半から内湾する体部になり、端部は丸い。口径15.4cm、残存高4.55cmを測る。クサリ礫などの砂粒を含む。

（740）は椀形高杯の図上完形品である。内湾する杯部で端部は丸く納める。ユビ整形ののちヨコナデで仕上げている。完形の鉢に脚台を付けた状態である。接合部は脚台部の円形部だけで、筒部は中空になっている。筒部はまっすぐ僅かに開きつつ下がり、裾部で大きく開いている。裾部の器壁は厚くなっており、端部は丸い。内面はヘラケズリ、外面はハケ整形からヘラミガキを施している。裾部内面はハケ整形である。口径13.45cm、裾部径10.4cm、器高12.1cmを測る。浅黄橙で砂粒を含む。

（741）は内湾する杯部で端部は尖りぎみである。浅めの杯部で底は平坦である。脚部は鈍角で広がり、屈曲して裾広がりに開く。端部は尖っている。杯部はユビ成形で底部はナデ整形を行い、口縁部はヨコナデで仕上げる。脚部内面はヘラケズリ、下部はハケ整形で、外面はヘラミガキである。端部周辺はヨコナデで仕上げる。両部分の接合は円板充填法により、ナデで成形し調整を加えている。口径13.7cm、裾径10.2cm、器高11.0cmを測る。にぶい橙で、少量の砂粒は含むが胎土は精良である。

（742）は椀形高杯で、内湾する杯部で端部は丸い。筒部は細めで新しい要素を持つ。緩やかに広がり変化点から大きく開く。内面の稜線は明瞭である。内面はヘラケズリで成形しナデ調整を行う。橙で砂粒を含む。口径13.7cm、裾径10.8cm、器高13.2cmを測る。

（743）は口径14.45cm、裾径9.7cm、器高11.3cmを測る。椀形の杯部で、内湾して端部は丸く、僅かに内側に肥厚ごみである。脚部は円錐形で、杯部に突き刺して接合している。緩やかに広がり、さらに大きく開くが稜線は明確ではない。口縁部はヨコナデ仕上げ。脚部内面はヘラケズリで、外面はハケ整形からヘラミガキ、裾部はヨコナデで仕上げる。内面は橙からにぶい橙、外面は橙から褐灰を呈している。小石粒をやや多く含んでいる。

（744）は椀形の杯部で、内湾して口縁部になる。端部は肥厚ぎみで丸く納めている。口径12.7cm、残存高3.2cmを測る。浅黄橙で、胎土は良好である。

（745）も精製土器である。椀形になり、端部は尖っている。口径13.2cm、残存高4.0cmを測り、浅黄橙で胎土は精良である。

（746）は底部の平たい椀形の杯部である。内湾しており、端部は尖っている。底部は器壁が厚い。ユビ成形ののちナデ整形し、口縁部はヨコナデで仕上げる。杯部内面は接合時の工具の圧痕が残っている。脚部は接続部が細く輪状になっている。緩やかに広がって、角度を変えてさらに平たく外傾する。端部は尖っている。内面はヘラケズリで、外面はヘラミガキである。裾部内面はハケ整形で、裾端部はヨコナデである。作りはさほど丁寧に思えないが、化粧土を塗布することによって丁寧な仕上げに見える。口径13.5cm、裾径10.2cm、器高10.55cmを測る。胎土は精良だが、小石粒少量含む。浅黄橙から橙をしている。

（747）は器壁の非常に薄い杯部を持つ椀形高杯である。内湾する杯部で深めである。底部分の器壁は厚い。端部は丸く内側につまみ出している。脚部は細く広がっており、裾近くで水平に近く広がっている。杯部はヨコナデで仕上げており、底部分は仕上げのナデが見られる。脚部内面はヘラケズリで、外面はヘラミガキ、裾部はヨコナデ。口径12.9cm、裾径10.4cm、器高12.05cmを測る。浅黄橙から橙を呈している。

（748）は口縁部を欠いている。椀形の杯部で内湾している。内面はナデ整形・調整で、外面は磨滅が著しい。脚部は接合部から直線的に広がり、変化して僅かに外反しつつ広がっていく。内面はヘラケズリ、裾部はヨコナデで、方形の端部になっている。端面には凹線状の窪みがある。裾径9.8cm、残存高9.7cmを測る。

（749）は直立ぎみに立ち上がる口縁部から内湾する体部となる杯部である。器壁は厚めで杯に似た器形の杯部になっている。内外ともにナデで仕上げている。筒部は直立し、裾部に開くところで欠けている。内面は絞り目が見られる。口径14.0cm、残存高11.5cmを測る。外面に黒斑が認められる。

（750）は直線的に近い内湾する体部で口縁部へ直線で続く。端部は角張りぎみで、内面に段を作っている。筒部は裾部に向かって広がっている。内面はヘラケズリがなされている。杯部はナデ整形とヘラミガキが見られる。口径16.5cm、残存高12.8cmを測る。橙で砂粒を含む。

（751）は杯部だけである。内湾してから口縁部は外反する。端部は丸く納めている。器壁は薄く緩やかな線を描いている。口径18.8cm、残存高5.5cmを測る。浅黄橙をしている。

（752）は深い大型の高杯である。内湾する体部から口縁部は斜め上方へ短く外傾する。２次焼成を受けており、成形技法は磨滅のため不明である。やや軟質で橙を示し、砂粒を僅かに含むが胎土は精良である。口径20.0cm、残存高6.3cmを測る。

（753）は内湾して口縁部が緩く外反している。端部は尖っており外側に開いている。口縁部はヨコナデで仕上げる。口径14.2cm、残存高3.5cmを測る。橙から浅黄橙で砂粒を少量含む。

（754）は口縁端部が短く外反するもので体部は直線的な内湾をしている。端部は尖っている。脚部は杯部に突き刺すように接続している。斜め下方に開き変化して広がっている。端部は細いは角になっている。内面はヘラケズリで杯底部は未調整のままである。裾部はヨコナデである。口径15.0cm、裾径11.3cm、器高11.3cmを測る。小石粒を含むが、胎土は精良である。

（755）は水平に広がってから外傾する杯部である。端部は丸い。内面はハケ整形で、口縁部はヨコナデである。脚部は直下するように延び、裾部は開いている。外面はヘラケズリののちミガキで仕上げている。内面もヘラケズリののちナデを僅かに加える。裾部内面はハケ整形で外面のハケ原体より細かい。口径15.4cm、残存高13.4cmを測る。にぶい黄橙で、砂粒を含む。

（756）は水平に広がる杯部で、脚部は斜め下方に直線的に延びている。変化点の部分で割れている。内面はヘラケズリ、外面はヘラミガキである。残存高8.1cmで胎土は精良である。

（757）は内湾する杯部で端部は丸く仕上げている。底部が上に上がっている。口縁部付近の器壁は薄いが底部分は逆に厚くなっている。外面はユビ成形で、その後全体にヨコナデが施されている。脚部はラッパ状に緩やかに開いている。内面には絞り目が見られ、下半はユビ成形から部分的にナデ調整である。外面は縦方向のヘラミガキで仕上げている。筒部は大きく上部まで切り込まれており、杯部底の厚さは５mmと薄くなっている。器壁が厚い底部を大きく刳り込む特殊な形態である。接合部分は外側から強いユビ押さえが見られる。口径13.6cm、裾径9.75cm、器高10.8cmを測る。橙でクサリ礫などの砂粒を含んでいる。

（758）は円板充填の接続を行っている。斜めに直線に延びてから、僅かに外反するように外傾する口縁部になる。端部は丸い。口径16.2cm、残存高6.1cmを測る。

（759）は内湾して口縁部付近で短く外反する。端部は丸く尖っている。ヨコナデで仕上げている。口径14.8cm、残存高5.1cmを測る。

（760）はやはり内湾してから外側に開く杯部で端部は丸く、端部内側が凹んでいる。ナデ整形で、口縁部はヨコナデである。口径16.4cm、残存高5.1cmを測る。明赤褐で砂粒を含む。

（761）は水平に近く延びてから明瞭な変化を持たずに外反する口縁部である。端部はつまみ出したように丸く、端部直下に凹みを持つ。内面は板ナデで口縁部はヨコナデである。外面はヘラミガキである。口径15.2cm、残存高5.3cmを測る。柱状部を杯底部に付けている。

（762）は大型で内湾する体部から短く外反する口縁部になる。端部は角張っている。ナデ整形から口縁部はヨコナデ仕上げ。口径20.7cmで、残存高7.7cmを測る。にぶい橙で砂粒を含む。

（763）は湾曲して、端部下で水平に近く外反する口縁部になる杯部である。浅黄橙から橙をして小石粒を少量含んでいる。円板充填法で接続している。筒部は径が小さい。

（764）は円板充填法で接続しており、底部の器壁が厚いもので、水平から外販している口縁部になる。端部は尖っている。外面は筒部上面の接続部のみハケ整形がされている。にぶい橙から黄灰で、砂粒を含む。口径19.0cm、残存高6.3cmを測る。

（765）は器高の高い高杯である。水平ぎみに広がるしこから外反する口縁部になる。端部は尖っている。体部に1条の凹線が見られる。内面はナデ整形、外面はハケ整形で、口縁部はヨコナデである。脚部は斜め下方に長く広がり変化点で直線的に開く。筒部内面はヘラケズリ、外面はハケ整形である。裾部はハケ整形ののちナデ仕上げ。口径15.7cm、裾径11.5cm、器高14.6cmを測る。にぶい黄橙で、砂粒含む。

（766）は杯部のみで、平坦に延びた底部から兆区線的に開く口縁部となる杯部である。トン部は尖っている。表面磨滅で技法不明である。口径15.0cm、残存高6.0cmを測る。円板充填で接合しており、筒部は中空であろう。焼成は良好で胎土は砂粒を含む。浅黄橙をしている。

（767）は直線に開く口縁部から水平となる杯下部である。杯部に脚部が接して付けられている。表面磨滅しているが、ナデ調整かと思われる。口径17.2cm、残存高6.2cmを測る。橙色である。

（768）は外傾する杯部下半から外反する口縁部に続く。端部は丸い。内面はハケ整形ののちナデ調整を加えている。外部は細かいハケ整形からナデで調整している。口径16.2cm、残存高5.7cmを測る。焼成は良好で、橙をしている。砂粒を少量含んでいる。黒班が残されている。

（769）は平坦な底部から外傾する口縁部になる杯部である。端部は角張りぎみである。脚部はラッパ状に広がっていく。ナデ整形ののち口縁部はヨコナデを施す。筒部は内面ナデで、外面ヘラミガキである。口径16.2cm、残存高10.8cmを測る。にぶい黄橙から明赤褐をしており、砂粒を含んでいる。円板充填である。

（770）は平坦な底から外反する口縁部になる。端部は丸い。ナデ整形ののち口縁部はヨコナデで仕上げている。下面には炭化した有機質が付着している。筒部内面は大きく刳っている。口径15.3cm、残存高6.3cmを測る。にぶい褐色で、砂粒を含んでいる。

（771）は器高の高い高杯である。裾広がりになる脚部から水平に開き明瞭な稜線を持たずに外傾する口縁部に続く。端部は角張る。杯部はヨコナデで仕上げており、内面底部分のみ仕上げナデが見られる。脚部は内面ヘラケズリで、外面ヘラミガキである。裾部はヨコナデである。杯部に脚部を突き刺すように接続している。口径15.9cm、器高14.4cm、裾径11.65cmを測る。砂粒含み、外面はにぶい黄橙から黄灰を、内面は浅黄橙から灰黄をしている。焼成は良好である。表面磨滅著しい。

（772）の脚部はラッパ状になるもので、緩やかに裾端部に向かって広がっていく。端部は角張る。

杯部は水平に延びてから僅かに外反する口縁部になる。端部は丸い。接続は円板充填である。脚部には円形の3方透孔がある。脚部内面はヘラケズリで、下半と外面はハケ整形ののちヨコナデで仕上げている。口径15.2cm、器高8.8cm、裾径11,7cmを測る。浅黄橙で砂粒を含む。

(773) は丁寧な作りの杯部である。外面はハケ整形で、内面はハケ整形ののち細かいヘラミガキがなされている。ヘラミガキも1方向ではなく、2方向から行われている。明瞭な屈曲点のない杯部で、内湾してから歪に外傾する。端部は丸い。クサリ礫など砂粒を多く含み、焼成は良好である。浅黄橙から黒褐をしている。口径15.85cm、残存高5.8cmを測る。

(774) は平たい底部から僅かに外反する口縁部になる杯部で、端部は尖っている。内外面ともにヘラミガキで仕上げられている。端部のみヨコナデである。底面は放射状のミガキで、内面は縦方向の外面は横方向のミガキである。脚部は器高の高いもので、1ヵ所のみ円孔が穿かれている。3方向かと思われる。内面はヘラケズリで裾部に近い部分はハケ整形である。外面は横方向のヘラミガキがあり、ナデ調整も見られる。口径15.95cm、残存高13.8cmを測る。にぶい黄橙をしている。

(775) は裾部と杯部が接合していないが、同一個体と思われるので図上で復原した。杯部は底が小さめで平たく、変化して大きく外傾するもので、端部は丸い。直線的な形状で逆台形の杯部である。柱状部は細く輪状の筒となり緩やかに開き、裾部で外反する。裾部の器壁は薄く、端部は丸い。円形の透孔が1ヵ所見られるが単位は不明である。表面磨滅が顕著で、技法も不明である。ナデ整形で端部周辺はヨコナデで仕上げていると思われる。器高13.0cmに復原され、口径16.7cm、裾径9.7cmを測る。円盤充填で接合しており、柱状部内側の円板には押さえたものか刺突の痕跡が残っている。胎土は精良で、橙をしている。

(776) は底は平たく外傾する口縁部となり、端部で僅かに外反する丸く尖っている。内外面ともにユビ成形からハケ整形・ナデ仕上げを行っている。端部はヨコナデである。裾部はラッパ状に開き、裾端部付近で外反する。端部は下方につまみ出している。内面は絞り目が残っており、ユビ成形がなされている。外面はヘラで成形してから、ハケ整形。ナデ仕上げである。端部はヨコナデである。裾部に小さい円孔が開けられている。3方向の透孔で1cm未満の規模である。口径17.0cm、器高8.9cm、裾径13.1cmを測る。接合は筒部を杯部に差し込んでいる。胎土は非常に精良で、明赤褐をしている。

(777) は杯部が脚部と比べると小さい高杯である。杯部は平たい下半から外傾する口縁部となり、端部は丸い。脚部は中実でラッパ状に広がる。裾部に向けて外反し、端部は尖っている。内面はヘラケズリで下半はハケ整形である。外面と杯部全体もハケ整形からナデ調整が加えられている。接合は筒部が杯部に突き刺しており、その部分のみユビ成形がされている。口径13.3cm、器高13.5cm、裾径11.0cmを測る。

(778) は裾部の破片で大型である。緩やかに外反している。端部は角張る。内外面ともにハケ整形からナデ調整されている。内面上部には絞り目が見られる。外面はヘラミガキで仕上げているが、下方は磨滅している。端部周辺はヨコナデである。接合部に近いところに透孔が認められる。外面から内側に開けられた3方向の円形透孔である。接続は円板充填法である。残存高8.3cm、裾径14.8cmを測る。にぶい黄橙で、砂粒を多く含んでいる。

(779) は杯部のみの破片である。口径21.8cmと大きく、残存高6.6cmを測る。外傾し、端部近くで外反するもので端部は丸い。ユビ成形からナデ調整で、端部周辺はヨコナデである。

(780) は水平に開き、変化して外傾し端部付近で外反する。端部は角張りぎみである。底部分の器

壁は厚く、稜線は明瞭である。ユビ成形からナデ調整で、端部周辺はヨコナデである。円板充填によっている。浅黄橙で砂粒を含んでいる。焼成良好である。

（781）は筒部で割れているが、かろうじて筒部内面は絞り目が見られる。水平に広がり突帯状に付き出している。擬口縁状になり大きく外傾する。端部は外反し丸く納めている。ユビ成形から外面はハケ整形を行い、ナデ調整を加える・口径20.7cm、器高7.3cmを測る。にぶい橙から明赤褐をしている。

（782）は大きな杯部で口径20.75cm、残存高13.5cmを測る。深さが7cmと深い。平坦な底部から外反する口縁部に続く。端部付近はさらに開く。端部は丸い。ユビ成形からナデ仕上げ、外面はヘラミガキがなされている。脚部は裾広がりとなる中空で、絞り目が内面に見られる。

（783）は僅かに内湾する底から外反する口縁部になる。端部は残存していない。筒部は外開きになる。内面ヘラケズリで外面はナデである。杯部外面はユビ成形からハケ整形となる。ヨコナデも認められる。残存高11.95cmあり、色調は橙で砂粒多く含む。

（784）は内湾する底から大きく外反する口縁部になる。端部はユビ成形で作り出しており、つまみ出している。角張っている。筒部は杯部と比べると低い。中実で外側に広がり、裾部で大きく広がっている。端部は下方につまみ出している。内面はヘラケズリで裾部はヨコナデで仕上げる。外面はナデ整形・調整である。口径19.9cm、器高15.35cm、裾径13.0cmを測る。クサリ礫などの砂粒を多く含む。

（785）は大型の杯部で、内湾ぎみに水平に開く底部から直線的に広がり端部手前で外反する口縁部になる。端部は丸く納めている。ユビ成形ののちナデ整形・調整を行っている。口縁部はヨコナデである。外面には指頭圧痕が明瞭に残っている。内面は浅黄橙で、外面は橙で一部黒色をしている。胎土は小石粒を含むが精良である。口径23.7cm、残存高8.25cmを測る。

（786）は椀形で外反する杯部の完形品である。内湾する底部で明瞭な稜線を持たずに口縁部に続いている。大きく延びて外反する口縁部で端部は丸い。柱状部はラッパ状に広がり、裾近くで水平に近く角度を変えている。直線的に広がり、裾端部は下方につまみ出している。端面になっており、浅い凹線状になっているところは、甕の口つくりに共通したものがありそうである。そうならば、庄内期の終わり頃（布留0期）の土器であろうか。筒部内面の粘土紐は螺旋状に作っている。内面はユビ成形からヘラケズリで、裾部はヨコナデ仕上げである。外面はヘラミガキである。杯部内面はナデ仕上げで、外面はナデ調整で、口縁部はヨコナデである。円板充填で接続している。口径19.8cm、器高16.8cm、裾部径14.9cmを測る。にぶい橙を呈しており、砂粒を含んでいる。

（787）はラッパ状に開く脚部である。外方に広がってから、内面に稜線を持って外側に開く。直線的に延びており、端部は丸くなり、下方に肥厚している。ナデ仕上げで、外面はヘラミガキである。焼成良好で、色調は外面灰白から浅黄橙、内面灰白である。小石粒を少量含んでいる。残存高7.4cm、裾径13.6cmを測る。内面には粘土紐の継ぎ目が明瞭に見られる。

（788）は外反する裾部である。内面に稜線を持たずに開いている。裾端部でなく、内側で下に付き、端部は上方に上がっているような感じを受ける。内面はユビ成形からヘラケズリを行っている。端部周辺はヨコナデである。残存高6.3cm、裾径11.9cmを測る。砂粒多く含む。

（789）はラッパ状に開く裾部で、器壁は厚めである。裾部は内外ともにハケ整形が認められる。裾部でさらに開いて端部は尖りぎみである。残存高7.1cm、裾径11.55cmを測る。にぶい橙をしている。

（790）は外側に開きさらに裾部が直線的に広がる脚部で中空であろうか。内面はヘラケズリ、外面はユビ整形。ナデ仕上げである。裾部の変化点付近にユビ成形の跡が明らかである。裾内面はハケ整形

で、端部はヨコナデである。残存高7.4cm、裾径12.4cmを測る。

（791）は裾が大きく広がるタイプで、脚部の器高が低めである。緩やかに大きく開いている。端部は尖っている。内面はユビ成形で、絞り目が残っている。端部周辺はヨコナデで仕上げている。残存高7.15cm、裾径14.6cmを測る。にぶい黄橙を呈している。

（792）はクサリ礫を多く含んでいる。焼成は良好で橙をしている。外側に広がり変化点で屈曲して外反する。ユビ成形でケズリを行っている。残存高6.25cm、裾径11.6cmを測る。

（793）は筒部の幅が狭い脚部で、外反しながら広がっている。内面に稜線を持って変化し、水平ぎみに直線に延びている。端部は丸い。内面はヘラケズリ。外面はヘラミガキで仕上げている。残存高6.95cm、裾径11.3cmを測る。橙で砂粒を多く含んでいる。

（794）は外側に広がってから緩やかに外反し端部の丸い裾部である。内面はヘラケズリ、外面はヘラミガキで仕上げている。裾内面はハケ整形である。細砂を僅かに含むが胎土は精良である。にぶい橙を呈している。焼成は良好で、丁寧な仕上げに見える。

（795）は緩やかに外反する裾部で端部は丸い。内面はヘラケズリ。外面はヘラミガキで仕上げている。端部はヨコナデである。残存高6.1cm、裾径11.5cmを測る。にぶい橙でクサリ礫などの砂粒を多く含んでいる。

（796）は杯部に脚部を取り付けたもので杯部は水平に広がっている。脚部は裾広がりになり、裾近くで外反する。杯内面はヘラミガキ、脚内面は絞り目や粘土紐の継ぎ目が見られ、ヘラケズリで成形している。外面はハケ整形ののちヘラミガキで仕上げる。端部はヨコナデである。残存高8.4cm、裾径8.8cmを測る。橙からにぶい橙を呈しており、クサリ礫などの砂粒を多く含んでいる。

（797）は小型の脚部である。残存高5.65cm、裾径8.6cmを測る。灰白から橙をしており、クサリ礫などの砂粒を多く含んでいる。直立ぎみに広がり明瞭な稜線ではなく面状の変化部を持って直線に外側に延びる裾部につながる。裾端部は丸い。

（798）はラッパ状の脚部で変化点で地に接している。裾の開く部分は底部状に接地している。端部は丸く、その付近の器壁は厚い。内面はヘラケズリ。外面はヘラミガキで仕上げている。端部はヨコナデである。残存高6.7cm、裾径9.5cmを測る。浅黄橙である。

（799）はラッパ状に開くもので端部は丸い。変化点の上付近に透孔が認められる。３ヵ所あり、外側から内側に穿孔している。透孔の下部分は器壁が厚くなっている。内面はヘラケズリ。外面はヘラミガキで仕上げている。端部はヨコナデである。残存高6.9cm、裾径10.7cmを測る。にぶい橙を呈している。

（800）は緩やかに外反する脚部である。内面には絞り目が残っている。外面はハケ整形からヘラミガキで仕上げる。端部はヨコナデである。灰白からにぶい黄橙をしている。

（801）はラッパ状に開くもので、端部は丸い。裾部との変化点でやや凹んでおり、上下ともに膨らみ延びている。内面はヘラケズリ、外面はヘラミガキである。内面下側はハケ整形ののちナデ仕上げである。クサリ礫を含み、浅黄橙からにぶい橙をしている。残存高6.75cm、裾径10.65cmを測る。

（802）は裾広がりとなるもので、裾部は底につくように低くなっている。筒部は細くエンタシス状になる。内面ヘラケズリで、端部付近はヨコナデである。残存高6.3cm、裾径10.3cmを測る。にぶい橙で砂粒を含む。

（803）は裾広がりとなり、裾部の変化点はほとんど地についている。内面には明瞭な稜線が認めら

れる。端部は丸い。内面ヘラケズリで、中空になろうと思っている。残存高6.1cm、裾径10.3cmを測る。裾部に黒斑がある。砂粒を含み、にぶい橙を呈している。

（804）は内面ヘラケズリ、外面ヘラミガキで、端部周辺はヨコナデで仕上げている。筒部は下方に広がっており、裾部はさらに水平に近く開いている。変化点付近が器壁が最も厚くなっている。残存高6.0cm、裾径10.4cmを測る。黒斑があり、にぶい橙をする。

（805）は脚部で、杯部との接合面には斜め方向のハケメを残している。脚部を突き刺して接合する際の作業であろうか。直線的に広がってから、裾部は外反する。端部は角張っている。内面は絞り目残りヘラケズリ、外面はヘラケズリののちヘラミガキで仕上げている。下半はハケ整形も行っている。裾端部はヨコナデで仕上げる。残存高8.05cm、裾径9.9cmを測る。砂粒含み、橙色をしている。

（806）はラッパ状に開く裾部である。変化点で器壁が厚くなり、内面に甘い稜線を有する。内面はヘラケズリで、外面はヘラミガキである。残存高6.8cm、裾径10.1cmを測る。

（807）はやや小型の脚部である。裾広がりとなり、直線的に広がってから外反する。端部は下方に尖りぎみに丸く納める。内面は絞り目残りヘラケズリで下半はハケ整形が行われ、外面はヘラミガキである。端部周辺はユビ成形ののちヨコナデで仕上げている。指頭圧痕が外面に認められる。裾部成形の必要技法であろうか。内面に甘い稜線を持っている。外面上部の杯部との接合にもハケ整形を行っており、その痕跡が残っている。残存高5.9cm、裾径8.3cmを測る。砂粒を含み、にぶい橙をする。

（808）は裾部が水平に近く外傾するもので裾部の変化点の器壁が最も厚くなっている。残存高2.4cm、裾径11.1cmを測る。ヨコナデ仕上げで、クサリ礫含む。

（809）は僅かに湾曲しながら外側に開き、さらに外反する裾部である。端部は上方に尖りぎみである。内面には絞り目がありヘラケズリがある。裾部はヨコナデである。残存部端に杯部との剥離痕が見られ、脚部を杯部に突き刺して作るものである。筒部上部にもナデが見られることから、中空である。残存高6.7cm、裾径10.8cmを測る。にぶい黄橙を呈しており、砂粒を含む。

（810）は直線的に広がってから、内外に変化点を持って角度を変えて外傾する裾部へ続く。端部は下方に肥厚ぎみにつまみ出している。甕の口作りと同じ技法である。内面はヘラケズリで外面はヘラミガキ、裾部はヨコナデである。残存高7.4cm、裾径10.5cmを測る。橙で砂粒を含む。中空になる脚部である。杯部との接続部が観察できることから、杯部に脚部を突き刺した技法であることが明らかである。また、残存部上端に被熱の痕跡が明瞭である。ガラス滓が付着していないことから、確定はできないが、羽口に転用した可能性が推測される。

（811）はラッパ状に広がる脚部である。内面に稜線を有している。内面は粘土紐の継ぎ目が赤らかでヘラケズリ成形、外面はヘラミガキである。端部周辺はヨコナデ仕上げである。裾端部は角張り、面に凹線状の窪みがある。僅かに内側に肥厚ぎみである。甕の口縁部の作りに共通するものがある。残存高9.0cm、裾径13.6cmを測る。橙を呈し、砂粒を含んでいる。焼成は良好である。円板充填で接続する。

（812）は直線的に広がり、緩やかに変化し外傾する。変化点の器壁が最も厚くなっている。端部は尖っている。内面はナデ整形で、下側は7本／cmの細かいハケ整形である。外面はヘラミガキで、裾部はヨコナデで仕上げている。2次焼成を受けており、小石粒を少量含む。残存高6.3cm、裾径10.1cmを測る。内面は浅黄橙からにぶい橙で、外面は灰白から浅橙を呈している。

（813）は杯部の接続部である。水平に広がっている。下面に2ヵ所の刺突が見られる。接続時の支えに使われた痕跡かと考えている。杯部に接続の粘土継ぎ目痕跡が認められないことから、杯部に支柱

を立て型作りに近い方法を採用したものと思われる。橙で砂粒を含んでいる。残存高1.4cmを測る。

器台（814）～（819）

（814）は直線的に広がっていく器台上台部である。端部下部に粘土を付加して端面としており、端面に装飾を施している。端部下部のみユビ成形からナデ整形を行い端部周辺はヨコナデ調整を加え、全体的にヘラミガキで丁寧に仕上げている。竹管文付きの円形浮文を等間隔に配置している。端面の幅を越えない小さい浮文である。浮文の間には上下2段に竹管文を3個ずつ施文している。6個の竹管文と円形浮文が単位となって、端面を巡っている。口径29.6cm、残存高3.0cmを測る。浅黄橙で砂粒を含む。

（815）は小型の精製器台である。両端ともに欠いている筒部の破片で、大きくくの字となるシャープなつくりである。屈曲部は面となっており、内面の稜線が明瞭である。残存高4.0cmを測る。胎土は精良で、橙を呈している。内面はナデ調整である。

（816）は脚台である。大型の土器のもので、時期も遡るかもしれない。残存高7.7cm、裾部径9.5cmを測る。体部は内湾する丸底で、内面はナデ整形、外面はハケ整形である。脚台部は緩やかな変化を持って外側に開いている。端部は尖っている。内面は細かいハケ整形で、外面と体部との接続部はナデ整形である。端部はヨコナデ仕上げ。にぶい橙で砂粒含む。

（817）は小型器台である。上台は皿形で内湾している。端部は丸く納めている。下台も内湾して端部は尖っている。接続部は中実になっており、中央はヘソ状に凹んでいる。口径8.55cm、器高7,0cm、裾部径は9.3cmを測る。下台外面はハケ整形である。にぶい橙で、砂粒含む。

（818）は小型器台で、上台は内湾し端部は上方につまみ上げている。端部は丸くヨコナデで仕上げている。外面は細かいヘラミガキが施されている。下台は直線的に外傾しており、端部付近で外反しており尖らせている。中央上位に透孔を3ヵ所開けている。円孔で外側から穿孔している。器壁は薄くなっている。外面はヘラミガキである。口径9.0cm、器高7.5cm、裾部径10.6cmを測る。胎土は精良で、橙をしている。

（819）は下台部の破片である。直線的に広がっている。端部は尖りぎみに丸い。外面に上台との剥離面がみられる。その内側だけヘラケズリがなされており、それ以外はナデ仕上げである。橙で砂粒を含む。残存高6.1cm、裾部径12.1cmを測る。

3．土師器・須恵器以外の土器・土製品

製塩土器（820）～（824）

4点とも脚台式の製塩土器である。（820）（821）は体部である。ともに平行タタキで内面はナデ調整である。歪なことから径は不確実であるが、（821）は6.0cmの口径と復原できる。残存高は5.4cmである。図化していない破片も10数片あり、ほぼ同じような外面タタキメで、内面ナデ仕上げである。器壁も薄くなっている。直線的に延びていることから、脚台Ⅱ式の範疇かと思われる。にぶい橙を呈し、砂粒を少量含んでいる。

（822）は脚台部である。小さい手捏ねの脚台部である。底径3.85cmで、上げ底になっている。端部は丸くなっており、内湾ながら歪になって上になる。体部は内湾し、ナデ整形している。脚台部はユビ成形で指頭圧痕が残っている。黄灰をしており、砂粒含む。残存高3.7cmを測る。

（823）は（822）よりさらに小さい脚台部である。僅かに内湾するが直線的に延びる脚台で、端部は丸い。体部はほとんど残存していないが、水平に近く広がっている。脚台部の高さがあり中実状になっている。大きく広がる脚台Ⅳ式の製塩土器である。底径3.0cm、残存高2.35cmを測る。

（824）は器壁の厚い小さい脚台である。底径3.95cm、残存高2.4cmを測り、脚台部は内湾している上げ底である。端部は丸く仕上げており、脚台部はユビ成形している。

イイダコ壺（825）

釣鐘状になる把手部ではないかと考えている。最大幅9.0cmある大型になる土製品である。頭が角張っており、下に円孔が存在する。孔も端部しか残っていないので、大きさは不明である。頭部には植物繊維の圧痕が付いている。橙を呈し、砂粒を含んでいる。

文様片（826）～（839）

（826）（827）は壺口縁部である。（826）は二重口縁の端面に上下２段の波状文を描いている。流麗な波状文ではなく、１度描いた部分に重ねるように施文している。下の波状文から上の波状文に施文している。４本単位の原体である。砂粒を含む橙を呈している。ヨコナデで仕上げている端面に施文している。

（827）も二重口縁の端面に施文している。山部が直線となった山形文に近い波状文になっている。６本単位の櫛原体である。ヨコナデののち内外ともにヘラミガキで仕上げている。外反する二重口縁に施文している。端部は上方につまみ上げている。２条の波状文帯の下に２本の凹線がみられる。にぶい橙で砂粒を含んでいる。

（828）は器台の上台部端面の一部である。端面上半は欠いている。直線的に開く上台と想像され、大型の器台であろう。波状文の上に円形浮文が付加されている。波状文は波状の狭い接している文様である。円形浮文には竹管文が加えられている。

（829）～（831）は壺肩部に施文された文様片である。（829）はヘラで施文された刺突文である。最大腹径の上部に施文されたと思われる。（830）は大型の竹管文で、円形スタンプ文と呼称される文様である。やはり肩部に３個残存している。内面ヘラケズリで器壁厚い。にぶい黄橙で砂粒多く含む。（831）は大型の体部に施文された大きな波状の波状文である。ハケ状工具で上下に大きく施文している。波間は狭く重複して施文している。７条１単位の施文具である。体部は内湾し、内部はなで整形、外面はハケ整形である。外面に黒斑が認められる。現状の破片では壺か甕かは判然としない。金雲母などの砂粒を含んでいる。

（832）～（839）は韓式土器の格子タタキの拓本である。すべて土師質の軟質の土器である。

土製品（840）～（844）

（840）は歪な形状であるが、皮袋形土製品である。全体的にユビ成形ののちナデで仕上げている。手捏ね状で丁寧な仕上げではない。片側の下端部を欠失している以外はほぼ完形である。全体像は小型丸底壺を扁平にし、両側に脚部のように付加した形となっている。正面からみた縦断面は不安定な丸底から内湾する球形の体部をしている。短い直立する口縁部がつく。端部は丸い。横断面は口縁部と体部は同じだが、底部が平坦になっている点が異なっている。両端に角状に突起がついている。突起状部もユビ成形によって作っている。器高6.7cmで最大幅は10.2cmを測る。体部は幅9,0cm、奥行き6.6cmである。縦断面の底径は2.0cmを測る。灰白を呈しており、砂粒を含んでいる。指頭圧痕が全面に残っている。

（841）はユビ成形ののちナデ整形・調整している。手捏ねしているものの仕上げは丁寧である。断面管状になり、片側が丸く閉塞している。指などを芯にして形作ったものと思われる。最大の幅3.5cmで、高さ3.6cmを測る.端部が幅・高さともに小さい値で中央にいくほど数値が大きくなっていく。浅黄

橙をしており、砂粒を含んでいる。何かを模した土製品であるが、何かは断定できない。容器の模造品か、芦屋市三条岡山遺跡出土のアザラシ形の土製品などが似ている類例である。

（842）はユビ成形で作った棒状の土製品である。柄状と思われ、スプーン状製品かと思われる。残存長7.2cmで、断面は1.5×1.6cmを測る。片側が細くなっていく。

（843）は男根状土製品である。完存しておらず、接続していたようである。直線的で比較的リアルに表現している。断面中央が管状に空いており、意図があるのであろうか。接続部があることと合わせて単品でなく一部であるとする理由である。残存長8.5cm、幅2.5cmを測る。中央の孔は径0.8cm前後である。基部径は幅2.2cm前後である。灰色で、砂粒を含んでいる。

（844）は土製の匙かと思われる製品である。ユビ成形で作ってからナデ仕上げを行う。柄部分の器壁が厚く、底部分は薄くなっている。残存部6.5×5.1cmあり、残存高4.2cmを測る。砂粒を含み、浅黄―灰白―黄灰―にぶい橙と場所によって色調が異なっている。全体像は匙とする方が妥当と思われる。破片であることから断定はしかねるが、深さがあることと遺跡の性格を考慮すると、取瓶ではないかと考えている。

ミニチュア土器（845）～（859）

手捏ねのミニチュアが多数を占める。（845）は完形の小さい鉢で、口径3.6cm、器高1.7cmを測る。ユビ成形の凹凸のままであり、口縁部にナデ調整が加えられているだけである。手捏ねながら胎土は精良で、にぶい橙をしている。焼成も良好である。

（846）はほぼ完形の鉢である。手捏ねであるが、ナデ調整を加えている。口径2.5cm、器高2.0cmを測る。にぶい赤褐で砂粒を含んでいる。

（847）も（846）と似たほぼ完形の鉢である。やはり手捏ねであるが、ナデ調整を加えている。口径2.9cm、器高2.1cmを測る。にぶい橙で砂粒を含んでいる。黒斑が口縁部にある。

（848）は手捏ねの鉢でユビ成形のままに近い。端部以外は未調整である。完形で、口径3.0cm、器高2.9cmを測る。にぶい黄橙で砂粒含んでいる。

（849）は手捏ねの鉢であるが、小型の底部にも似る。端部が歪になっているが、この部分が口縁端部と思われる。底面は調整している。口径4.8cm、器高3.6cm、底径3.0cmを測る。内面はユビでなでている。にぶい橙で砂粒を含んでいる。焼成も良好である。

（850）は底部分である。口縁部を欠く鉢底部と思われる。残存高1.9cmを測る。手捏ねによっている。にぶい橙からにぶい黄橙で、砂粒多く含んでいる。

（851）は平底で直立する体部になる鉢である。やや内傾する体部で端部は丸い。底径3.1cmを測る不安定な平底で、器高3.6cmを測る。口径3.7cmで、底部やや上部に4.3cmの最大腹径を持つ。下膨れの形状で、にぶい黄橙で砂粒含む。外面に黒斑を持っている。

（852）は壺のミニチュアであろうか。その底部の破片である。手捏ねながらナデ調整を加えている。不安定な平底で、内湾する歪な体部である。底径2.4cmで、残存高3.0cmを測る。酸化粒を含み、明赤褐からにぶい黄橙を呈している。底部は完形で、焼成良好である。

（853）は手捏ねの鉢である。平底で直立する体部で口縁部は内湾し、端部は丸い。ユビ成形ののちナデ整形し、端部周辺はヨコナデである。指頭圧痕が多く残っている。底面に黒斑が見られる。小石粒少量含み、焼成良好である。内面は浅黄橙から灰白、外面は灰白から灰をしている。口径4.3cm、器高4.0cm、底径4.2cmを測る。

（854）は丸底の手捏ね鉢である。口径3.9cm、器高3.7cmを測る。ユビ成形ののち部分的にナデ調整を行っている。内湾する体部で、口縁端部は丸くなっている。端部下が器壁も厚く最大腹径5.3cmになっている。にぶい黄で、クサリ礫の砂粒含んでいる。

（855）は手捏ね鉢で歪な仕上げである。ユビ成形で部分的にナデ調整を行っている。口径4.2cm、器高4.4cmを測る。歪な平底から内湾する体部で、丸く納める端部が直立する。口縁部も歪になっている。

（856）は平底で内湾する体部になり、短く外反する口縁部になる。底部は平坦で大きい。底部の端が器壁が最も厚くなっている。ナデ整形で口縁部はヨコナデである。底部には仕上げナデが施されている。底部が大きく器高が低いことなど、韓式土器の特徴を多く持っており、韓式土器のミニチュアかと思われる貴重な例である。口径5.15cm、器高5.2cm、底径3.55cmを測る。小石粒多く含み、にぶい黄橙から灰白を呈する。

（857）は壺のミニチュアである。口径4.0cm、残存高2.9cmを測る。内湾する体部から外反する口縁部になる。端部は尖りぎみである。内面はユビ成形、外面はナデ整形、口縁部はヨコナデである。

（858）は小型丸底壺であるが、器形が小さいことからミニチュアとした。内面ユビ成形で外面と口縁部はナデ仕上げである。内面には指頭圧痕が多く残っている。内湾する球形の体部から外傾する口縁部になる。端部は肥厚している。口径5.1cm、器高6.4cmを測る。浅黄橙から橙をしており、小石粒を僅かに含む。

（859）は不安定な平底から歪に内湾する体部で短く外反する口縁部になる。手捏ねの甕で、ユビ成形で作られており、部分的にナデがなされている。内外面ともに指頭圧痕が多く残っている。口径6.7cm、器高5.85cm、底径4.3cmを測る。黒斑が外面にあり、口縁部は歪である。胎土は精良で、橙から黄灰を呈する。

韓式土器（832）～（839）・（860）～（862）

（832）～（839）は軟質の体部の破片である。多くは2次焼成を受けている。にぶい橙をし、砂粒を含んでいる。金雲母も含んでいる。外面格子タタキ、内面ナデ整形である。格子タタキメの形状は似ている。大きさに微妙な差はあるが、細かい格子のタタキ原体である。

（860）は甑体部である。体部だけでは韓式土器とは言えないが、把手部にある切れ目から韓式土器とした。体部は緩やかに内湾するもので、ハケ整形ののちナデも調整が行われている。把手の接続はユビ成形・ナデ仕上げによっている。把手は上方へ反っている。幅広の把手で、その断面形状も皿形になっている。その上面に2本のヘラで切れ目を入れている。下まで貫通せず、途中までで止まっている。残存高11.8cmで把手は幅5.0cm、長さ3.8cmを測る。にぶい橙で砂粒を含んでいる。

（861）（862）も把手部である。（861）は中央に1本の切れ目がある。大きく上方に湾曲する把手である。把手の下側が残存していないが、穿孔は下まで及んでいるようである。長さ1.2cm、幅0.4cmの長楕円形の穿孔である。砂粒多く含み橙をしている。

（862）は幅の広い把手中央に1本の切れ目がある。下まで貫通していない穿孔である。体部に接する部分まで残っていない。ユビ成形ののちナデ整形されている。幅5cmで上方に外反する。残存高は3.4cmを測る。細砂含み、にぶい黄橙である。色調や胎土は他の土器と変化はない。

羽口（863）～（866）（1135）（1136）

図化したものは6点であるが、出土点数は50点以上みられる。小片となったものが多く、径も復原できない。また、ガラス滓が付着している破片も多い。面取りをしたのち簀巻き状に整形したと思われる

特殊な外面の特徴を示している。第２次調査で出土した大型の羽口は出土していない。

（863）は残存長9.7cmで先端は黒褐から緑黒になっている。0.7～1.5cmの変化のほとんどない空間を置いて、その外側は赤変している。先端にはガラス滓が付いている。先端の幅は5.3cmで残存部端の幅は6.7cmである。中央に孔があり、端部で2.3cm、残存部で3.2cmの円形となる。中央でなく少しずれて穿孔されている。ナデ整形されている。内面の方が丁寧な仕上げである。砂粒を含んでいるが胎土は良好である。にぶい橙から灰黄を呈している。外面には若王寺遺跡の羽口の特徴である。緩やかな稜線が見られる。甘い稜線で成形時についたものであろう。

（864）は端部の残っていない破片である。赤変部分が認められることから、端部に近い部分であろう。内面はナデ整形・調整が外面はユビ成形とケズリがみられる。残存長8.1cmを測る。にぶい黄橙で砂粒を含む。穿孔の大きさは大きく器壁が1.5cmほどある。

（865）は残存長9.7cmを測り、強く被熱している。先端は4.35cmの径で、2.2cmの円孔がある。先端から2cm前後がガラス滓の付着した釉がついたようになっている。徐々に広がっており、残存部では径5.5cmで孔の径2.5cmを測る。橙から灰白を呈している。外面にはヘラ状工具によるケズリが見られ、甘い稜線がある。

（866）は残存長10.6cmあり、径は先端部で4.8cm、円孔の径2.4cmを測る。残存部では6.5cm、円孔の径3.3cmを測る。先端のガラス滓付着部分は少ないが、他の羽口より全体が強く被熱している。ヘラ状工具でケズリが施され面となっている。小石粒を少量含み、橙から灰白、にぶい赤褐をしている。

土錘（867）～（914）

細かく分けることは出来るが大きくはすべて管状土錘である。時期的なことを考慮すれば、有孔土錘が少なからず出土していてもよいが遺構から１点出土しているだけである。逆に有孔土錘を保有しないのが遺跡の特徴といえるかもしれない。

管状土錘であるが、大きさの大小や形態の差がある。下記のように分類できる。

①（867）～（869）は上下の径が小さくなるタイプである。細かい数値は計測表に譲るが、長さ８cm前後である。ユビ成形からナデ整形するもので円孔の径は余り変化しない。にぶい黄橙から橙をしており砂粒を含む。

②（870）（872）～（874））（879）（914）はやはり平面形で中央部分の幅が広く両端が小さくなるものである。ユビ成形からナデ調整を部分的に加えている。指頭圧痕が残るものも多数ある。孔の径が変化しないのも小型のものと同じである。成形技法も同一なのであろう。（870）では最大径が4.5cmで短部が２cm前後の差がある。

③（871）は平面形態は上記のものと同じであるが、穿孔が明らかに両側から行っている。中央付近が径0.7cm、両端が1.2cmになっている。技法も同じであるが、ナデ調整が多く丁寧な仕上がりになっている。金雲母などの砂粒多く含みにぶい黄橙をしている。

④（875）～（877）（902）（903）はユビ成形ののちナデ調整を加え、穿孔の径が余り変化しないものである。両側から穿孔したと思われる。隅が丸くなっているが、平面形が隅円長方形になるものである。３点だけだが黒斑があるのが特徴である。

⑤（878）は長さ12.7cmと大型の土錘である。技法は①と同じであるが、調整に板ナデを行っていることが異なっている。黒斑が見られる。円孔は大きめで径２cm前後である。

⑥（880）（881）の両端は平たく平面形状の中央が膨らんでいるものである。円孔が非常に大きいの

が特徴である。器壁が1cm未満と薄いものである。両端がやや厚くなっている。内面に指頭圧痕が多く残っている点も特徴である。にぶい黄橙で砂粒を含んでいる。大きな芯に巻いたものかもしれないが、粘土紐の継ぎ目は確実に指摘できない。

⑦（882）～（886）は④と同じ技法で長さが短いタイプである。黒斑は認められない。指頭圧痕が多く残っているものとないものがある。色調は灰白から橙と変化がある。

⑧（887）（894）は平面形状が隅円方形でユビ成形ののち格子タタキによって成形されている。穿孔は中央部分に1.5cm前後で両側から開けている。端面にも格子タタキがみられる。端面とその周辺に多くタタキメが施されている。中央付近が微妙に窪んでいる。砂粒含み、灰白から灰黄をしている。

⑨（888）は中央が窪むタイプで両端は平坦である。円孔の径が大きいのが特徴である。技法は他と同じで、ユビ成形ののちナデ整形を行う。

⑩（889）（900）は④と技法など同じであるが、幅が狭いのが特徴である。細長いタイプである。また、黒斑はない。

⑪（890）～（893）は⑥と同じ平面形であるが、円孔の径が小さい。また、（890）など端部に紐ずれの痕跡が多いのも特徴である。

⑫（895）は小型で細長いタイプである。平面形態は長方形で中央に直線的な円孔を設ける。ユビ成形からナデ整形を行う。端面はより多くナデ整形を行っている。

⑬（896）は粘土の継ぎ目が観察されるものである。芯に粘土を巻きつけて作ったものと考えている。何メ方向に歪んで粘土紐が認められる。ユビ成形で形作り、縦方向にナデて仕上げる。

⑭（897）～（899）（901）　（904）～（907）（911）は④と⑤の中間の大きさである。

⑮（908）～（910）（912）は⑭より1回り大きいもので技法は同じである。④と違うのは黒斑であり、⑤よりも中央が凹んでいない。

⑯（913）（914）は土錘の平面形は異なっているが、外面に木の葉を巻いていることで共通している。外面に木葉痕が残っている。

4．須恵器

杯蓋（915）～（956）

杯蓋は古いもの（大庭寺―TK73）からTK10までの範囲と考えている。（915）は内湾する体部で、天井部に列点文―沈線―列点文の装飾を施している。文様帯からに湾曲し、突帯を張り出す。丸く突出させており、やや上方に向いている。端部はそとがわにつまみ出したシャープな口つくりである。口径14.5cmで、残存高3.85cmを測る。灰から灰白で精良な胎土である。

（916）は直線的に天井部から延びており、稜線を持って僅かに内湾する口縁部になる。端部は丸い。天井部に文様帯がある。（915）とほぼ同じ列点文―直線文―列点文の文様構成である。直線文はカキメである。稜線の下に凹線状の凹みがある。口径17.9cm、残存高5.05cmと大きい。列点文の方向は逆で、上は右から左に、下は左から右に施文している。

（917）（918）は口径が12cmに満たずに器高4.4cmと小型で高い器形で古相を示している。器壁も薄く仕上げており、端部はそとがわにつまみ出している。天井部はロクロケズリである。ナデとの稜線は極端に際立っていない。灰白で細砂を僅かに含んでいる。

（919）～（921）（924）～（928）（931）～（935）は体部に稜線を持つタイプである。13.5cm～

14.5cmで、器高は5cm前後を測る。稜線の下が凹線になっている。内面に同心円タタキが残っているものも多くある。外面成形時の当て具痕である。(934)(935)は口径の大きい(15cm)ものである。(934)は天井部が平坦で稜線が鋭い。

(922)(923)(929)(930)は稜線を持たないタイプである。内湾する体部で緩やかに曲がっている。14.5cmの口径で、器高の高いものと低いものがある。

(936)～(955)は器高が低くなり、湾曲するものである。口径の大きいものと小さいものがある。ロクロケズリの範囲が天井部に限られているものと、体部近くまで及んでいるものがあるが、時期差とは思われない。口縁端部も直立するものと外側に反るようにつまみ出すものがある。天井部が凹んでいるものも数点みられる。ヘラ記号が天井部に施されているものある。内面に同心円タタキが残っているものもある。

杯身(957)～(1018)

(957)は湾曲する低い体部で内湾する短い立ち上がりとなる。扁平なタイプになるものである。立ち上がりは短く内傾し、端部は角張る。受部は水平に短く延びる。端部は尖り、受部自体が三角形の突帯状になっている。体部上部に細かい12条の波状文が巡っている。底部にはヘラケズリがあり、ナデ調整している。内面も多方向の仕上げナデが見られる。口縁部はロクロナデで仕上げている。灰白から灰色で砂粒を含んでいる。口径8.45cm、器高5.1cmを測る。

(958)(959)(984)は小型で立ち上がりが外反する杯身である。シャープなつくりではあるが、端部は丸く納めている。

(960)～(963)(965)～(972)は立ち上がりが内傾するもので、端部は丸く納めるものと僅かに肥厚するもの、端部を尖らすものに分けられる。底部はロクロケズリで、内面の仕上げナデは多方向と1方向がある。ヘラ記号が施されているものもある。(971)のように口径が大きく器高も高く、端部が鋭いものもある。

(964)(973)(974)は扁平な体部であるが、口縁端部は鋭く丁寧な仕上げである。底面も平坦で古相を示すものと思える。

(975)～(983)(985)～(988)(990)は湾曲する体部と底部で、口縁部は内傾もしくは内湾するものである。ロクロケズリは施されているが平坦にはなっていない。立ち上がりの端部も外側につまみ出しているものが多い。尖らせているものもある。ヘラ記号があるものもある。同心円タタキが内面に残されているものがある。蓋と同じく成形時の当て具の痕跡と思われる。

(989)は大型の身で内湾する体部で、立ち上がりは僅かに外反するが直線的に内傾する。端部は角張りぎみである。受部は短くやや肥厚して丸くなっている。水平に近い。口径14.9cm、器高5.6cmと大型である。

(992)(997)～(1000)は大型で端部は外面につまみ出すものは少なく、尖らすものが多い。

(1001)は平坦な杯身で底部が上がっている。立ち上がりは内傾し端部は肥厚ぎみに丸い。受部は短く外反する。2次焼成を受けて焼けひずみがある。

(1012)は平坦な底部から硬く直線的に受部へと延びている。受部は短く端部は尖っている。立ち上がりは内傾し、外側をつまみ出している。器壁が厚く重厚感がある。内面に当て具の痕跡認められる。口径12.5cm、器高3.9cmである。

高杯（1019）～（1027）

（1019）～（1021）は有蓋高杯の蓋である。円形のボタン状のつまみを付けている。（1021）は大型の高杯蓋である。（1022）は杯部で体部に凹線が認められる。（1023）～（1026）は脚部である。透孔は円孔と方形がある。（1024）には両方が存在する。（1026）は三角形の透かしが4ヶ所見られる。透孔の下に突帯が巡っている。端部は断面三角形の尖ったシャープなものである。灰色で丁寧な作りである。（1027）はほぼ完形品で、杯部は湾曲している。体部に凹線がある。

甕（1028）～（1033）

（1028）～（1030）は体部である。外面は細かいハケ整形で、内面はナデ仕上げである。内面に絞り目も残っている。（1031）～（1033）は口縁部が残っており、古い様相を示している。（1033）は外面下半に格子タタキが見られる。口縁端部は細く尖らせている。

小型壺（1034）～（1054）

（1034）は小型の壺で丸底である。底面はヘラケズリがみられる。（1035）は扁平な無頸壺で、生焼けである。端部は丸く短い。（1036）～（1038）は壺用蓋である。（1036）は内湾する体部でシャープな作りである。（1037）は欠失しているがつまみ部が付く可能性が高い。反りは鋭く外反している。（1038）は天井部が平坦なもので、口縁部は直立する。天井部に列点文がらせん状に施文されている。肩部は張り出し稜線を持っている。（1039）も無頸壺の口縁部である。ロクロナデである。（1040）は小型壺の口縁部で直線的に延び、端部は外側に尖らせている。僅かに内湾し、丸底壺の口縁部であろうか。（1041）（1042）は波状文で装飾された壺である。細かい波状文である。（1043）は体部上部にヘラ描き刺突文状に施文されている。ヘラ記号としておく。脚台の付く小型壺と想定している。（1044）（1045）は小型壺の底部で平底である。底面から体部下部はヘラケズリがみられる。（1046）～（1048）は口縁部である。（1049）（1050）は台付壺の脚台部・底部である。（1051）は口縁部を欠いた壺の底部から体部である。扁平な球形をしており、肩が張っている。外面上半にはカキメが見られる。下半はロクロケズリで、内面はユビ成形ののちロクロナデである。（1051）は球形の体部で肩部に4条の波状文がある。底は残っていないが、脚台がつくのではと思っている。（1053）は装飾壺である。口縁端部と脚部を欠いている。残存高21.8cmを測る。長頸部には凹線の間に波状文帯を設けている。下から2条—2条—3条—2条以上になっている。体部はカキメで2本のヘラ記号がある。下半にはタタキメがみられる。（1054）は台付長頸壺で、頸部・口縁部は残っていない。体部は肩の張った内湾するもので、外面下半はタタキ成形で肩部はカキメが施されている。底部はナデ成形でそれ以外はロクロナデである。外面底部にもタタキメが見られる。体部に脚部を付加しており、その部分に突帯が1条巡っている。脚部は外湾し、屈曲して内湾して端部は角張り端面となる。上部に方形の透孔が屈曲部に三角形の透孔が存在する。ともに4方にあるが交互にずらしている。透孔を開けた部分はともに波状文で装飾している部分である。上は高さのある細かい波状文で、下は低い細かい波状文である。単位が10条かと思われるが不確実である。脚台は歪んでおり、ロクロナデで整形している。

大型壺・甕（1055）～（1076）

（1055）～（1062）も壺か甕の破片である。（1055）は体部内面は同心円のタタキ成形、外面は縦方向のタタキからカキメを施す。外反する口縁部で、端部は上方に肥厚している。外面には上下2段に列点文を施文している。左上がりの同じ方向に施文している。（1056）（1062）は口縁部外面に波状文が施されている。細かい波状文である。（1063）は細かい波状文帯を2帯持つもので、後記する器台などと同

じグループの土器であろう。上下2帯は波状文の方向が逆になっている。下は左から右に、上は右から左に施文している。細かい単位であるが、18条単位で、上は2回ほどこしているかと思われる。

（1064）も口縁端部を欠いているが、端面に波状文を施す壺である。外面は格子タタキである。（1069）は装飾壺である。途中で変化点のある外反する口縁部から内湾する体部につながる。屈曲部の頸部内面の稜線は甘い。口縁部から肩部にかけて装飾している。口縁部は上が波状文と縦方向の直線文の組み合わせがあり、突帯を隔てて下は横方向の直線文と波状文が施されている。頸部には中央に波状文を置き上下に細かい竹管文帯を形成する。上は1列、下には2列を配している。その下へ波状文2帯、そして竹管文帯となる過飾ぎみの壺である。施文具は3条の櫛状工具で、装飾模様が華麗なわりに作りは余り丁寧とはいえない。（1071）・（1072）も波状文で装飾している。

（1065）～（1068）は大型の土器で球形から楕円形を呈している。体部はいびつなものが多い。内面は同心円文、外面は格子か縦方向のタタキで成形されている。カキメが施されるものもある。

その他の器種（1078）～（1085）

（1078）は鉢で内湾して口縁部が短く開く。底部は平底ぎみである。外面にはヘラケズリが見られ、それ以外はロクロナデである。（1079）も鉢で底部が平坦である。直線的に広がる体部で肩部から内側に屈曲し外反する。四角になる端部である。灰色で砂粒を含む。

（1081）はカップ形となる把手の付く鉢である。器高は高めになりそうで、残存高7.1cmを測る。ユビ成形からロクロナデで仕上げる。凹線が3条ある。（1082）も小型の鉢で把手が付くかもしれない。体部に列点文が見られる。

（1083）はすり鉢である。底部に穿孔は見られない。体部下半にはカキメが施される。（1084）もすり鉢で図上で完形になっている。器高15.35cm、口径13.0cmを測る。底部は不安定な平底と緩やかな丸底の中間形態で中央が出た底部である。底面に穿孔はない。体部は緩やかに広がっていくもので、口縁部は外反している。端部は外側に肥厚する。体部外面はほぼ全面カキメが見られる。

（1085）は樽形瓶（俵壺）と呼ばれる土器で両側は面になっている。底部に似たつくりをしている。両側ともにつまみ出した端部で尖っている。自然釉が付着している。

器台（1077）・（1086）～（1093）

脚台の径が小さく長いものと径が大きく短いものに分かれる。

（1077）は脚部の破片であるが、文様などから器台脚部と思われる。端面上部には方形の透孔が認められる。その下にはカキメが施され、中央に1条の波状文が残存部上端にも波状文が認められる。現状では半月状にみえるが、波状文の一部と思われる。全体はロクロナデである。

（1086）は脚台の長いものである。同一個体と考えたので接合面はないが、復原した。口径25.6cm、器高25.2cmを測る。1段4方の透孔が3段穿孔されている。長方形の透孔で、ほぼ同位置に設定されている。その間に波状文が見られるが鮮明ではなく、消されている。上台との接合面は剥離痕が明瞭である。端部は外側をつまみ上げ、内側に肥厚している。

（1087）は上台底部である。幅の広い脚の短いタイプである。内湾する底部で、脚台は直線的に広がっていく。脚台は方形の透孔があり波状文が施されている。上台は下から列点文・波状文・凹線・波状文となっている。全体にロクロナデである。

（1088）は脚台の長いものである。外反していく部分である。三角形の透孔が2段4ヶ所に設けられている。波状文が巡らされている。

（1089）・（1091）は幅の広いタイプの上台部である。内湾してから口縁部は外側に広がっている。（1089）は波状文と凹線文が、（1091）は格子状と鋸歯文・凹線文・列点文で装飾されている。斜格子は鋸歯文を2段重ねた形になっている。斜行する直線も上下で方向を変えている。文様帯は3帯あり、上帯は小さい鋸歯文を2段重ねたもので、上は原則的に右上から左下に描き（1個だけ逆）、下は左上から右下に描いている。中帯は大きい鋸歯文を左から右に、下帯は2段で中くらいの大きさで上は左から右と右から左を交互にしており、下は左から右3個で右から左1個の4個単位になっている。口径は（1089）が41.6cm、（1091）は35.4cmを測る。整形はロクロナデである。

（1090）はほぼ完形となるもので幅の広い脚台である。器高36.3cm、口径38.6cm、裾部径32.8cmを測る。上台部は内湾する半球形の体部から大きく短く外傾する口縁部になる。端部は下側に尖っている。ロクロナデで内面に自然釉が付着している。文様は上から波状文—2条突帯—2条波状文—2条突帯—波状文—2条突帯—波状文となっている。下の波状文だけ緩やかで他とは異なっている。脚台部は直線的に延びており端部は尖っている。文様は4帯となっており、上から1帯は方形の透孔で波状文が、2帯は大きな方形透孔で波状文が、3帯は方形の透孔と円形の透孔で、上下2条の波状文が、4帯は円形の貫通していない刺突文と波状文が設けられている。3帯は2条の波状文の間に円形の透孔が設定されている。外面にも自然釉が付着している。この土器の破片は比較的広範囲に散らばっていた。調査区の西端から中央付近から出土し、接合されている。

（1092）は径の小さいもので脚台である。頸部から外反し直立ぎみに垂下していくもので、端部は方形で突帯を外側につけている。上から3条の波状文と方形透孔—2条突帯—小さい方形透孔と波状文—2条突帯—波状文—突帯—（波状文—2条突帯—波状文）－2条突帯—波状文—2条突帯—波状文—2条突帯—波状文になっている。頸部にも透孔と波状文が認められる。透孔の数は断定できないが間隔が広いものは4方、狭いものは8方のようである。

（1093）も脚部である。外傾する体部で端部付近は外反する。方形の透孔と波状文がセットになっている。波状文は切れ切れの部分もあり、扇形文のようにみえる部分もある。下から2段目まで透孔があり、大型のものの特徴であろうか。北西部分に集中して出土している。精良な胎土で灰を呈している。器高15.5cmで裾部径31.4cmを測る。

その他（図版248～251；**1100～1134**）

いずれも小破片のため器種の明確ではないものもあるが、椀・杯蓋・壺・甕・器台が出土している。

（1100）・（1101）は椀と思われる。体部はやや内湾して立ち上がり、外面には沈線で画された細かい櫛描き波状文が2帯施文されている。

（1102）は壺と思われる。内湾する体部の外面には平行タタキ目が残り、7～8条を1単位とする櫛描き波状文が1帯施文されている。

（1103）は杯蓋と思われる。内湾する天井部の外面には、沈線で画された櫛状工具の刺突による列点文が施文されている。

（1104）～（1106）はいずれも屈曲する壺の肩部と思われ、（1107）は内湾する壺の肩部と思われる。（1104）の外面には沈線と櫛状工具の刺突による列点文が施文されており、自然釉の付着も見られる。（1105）の外面には沈線で画された櫛状工具の刺突による列点文が施文されている。（1106）の外面にはヘラケズリ、凹線様の強いロクロナデが見られ、櫛状工具の刺突による列点文が施文されている。（1107）の内面には同心円文の当て具痕が、外面には格子状タタキ目とカキ目が見られる。

（1108）・（1109）は器台である。（1108）は内湾する受部の外面に3～4条を1単位とする櫛描き波状文が1帯と櫛状工具の刺突による列点文が施文されている。（1109）はハの字状に開く脚部外面に5条を1単位とする櫛描き波状文が2帯施文されている。

（1110）は甕である。大きく外反して開く口縁部の外面には突帯が貼り付けられ、明瞭な櫛描き波状文が施文されている。

（1111）は壺である。外反して開く口縁部の外面には突帯が貼り付けられ、櫛描き波状文が施文されている。

（1112）～（1114）は外反して開く甕の口縁部である。（1112）の口縁端部は肥厚され、外面には櫛描き波状文2帯が一部重なって施文されている。（1113）の口縁部外面には突帯で画された2帯の櫛描き波状文が施文されている。（1114）の口縁端部は肥厚され角張っている。外面には1帯の櫛描き波状文が施文されており、まばらに自然釉が見られる。

（1115）～（1120）は壺の口縁部と思われるが、いずれも端部は欠損している。（1115）の口縁部は屈曲して立ち上がり、外面には突帯と沈線で画された1帯の櫛描き波状文が施文されている。（1116）の口縁部は外傾しており、外面には突帯で画された2帯の櫛描き波状文が施文されている。（1117）の口縁部は外傾しており、外面には突帯で画された3帯の明瞭な櫛描き波状文が施文されている。（1118）の口縁部は外反して開いており、外面には突帯で画された2帯の櫛描き波状文が施文されている。

（1119）・（1120）は壺である。（1119）の口縁部は内湾気味に立ち上がり、外面には並列する2条の沈線、1帯の櫛描き波状文、櫛状工具の刺突による列点文が施文されている。

（1120）の口縁部は外反して開いており、外面には1条の直線文で画された2帯の櫛描き波状文と櫛描き直線文2帯が一部重なって施文されている。

（1121）は器台である。内湾する受部の外面には櫛状工具の刺突による列点文が施文されている。

（1122）～（1129）は壺の口縁部と思われるが、いずれも端部は欠損している。（1122）・（1123）・（1127）・（1129）の口縁部は外傾している。（1122）の外面には1条の沈線と1帯の櫛描き波状文が施文されている。（1123）の内面には薄く自然釉が見られ、外面には沈線で画された3帯の櫛描き波状文が施文されている。（1127）の外面には3帯の小刻みな櫛描き波状文が施文されている。（1129）の外面には非常に細かい櫛描き波状文が施文されている。（1124）・（1125）の口縁部は外反して開いている。（1124）の外面には2帯の小刻みな櫛描き波状文と櫛状工具の刺突による列点文が1条の沈線で画されている。（1125）の外面には突帯で画された3帯の櫛描き波状文が施文されている。（1126）・（1128）の口縁部は外反して開き、屈曲して立ち上がっている。（1126）の外面には波状文のような櫛描き文が施文されている。（1128）の外面には2条の並列する沈線で画された列点文のような3帯の櫛描き文が施文されている。

（1130）・（1132）・（1134）は器台である。（1130）はハの字状に開く脚部で、矩形と台形の透孔が段違いで交互に配される。矩形の透孔のある段には小刻みな櫛描き波状文が施文され、台形と思われる透孔のある段とは2条の沈線で画されている。（1132）は内湾する受部の内面に同心円文の当て具痕が見られる。外面には平行タタキ目が残っており、3条の沈線で画された2帯の櫛描き波状文が施文される。（1134）はハの字状に開く脚部で、矩形の透孔が3方に配される。各々の段は突帯で画され、櫛状工具の刺突による列点文に一部重なるように1帯の櫛描き波状文が施文されている。

（1131）・（1133）は甕である。（1131）の口縁部は外傾しており、外面には自然釉が見られ、突帯

で画された2帯の櫛描き波状文が施文される。(1133) の口縁部は外反しており、外面には沈線で画された3帯の櫛描き波状文が施文される。また外面全体に自然釉が薄くかかっている。

5．その他の時代の遺物

包含層からは古墳時代以降に遺物も出土している。

(1094) は備前焼壺口縁部である。口径26.15cm、残存高8.05cmを測る。全体にユビ成形ののちナデ整形を行う。口縁部はロクロナデである。褐灰からにぶい赤褐をしており、砂粒含んでいる。

(1095) は瓦器椀である。口径12.95cm、残存高3.25cmを測る。内湾する体部で内面にミガキが認められる。重ね焼きの痕跡残る。ナデ整形で、端部のみヨコナデ。

(1096) (1097) は瓦器椀高台部である。ともに磨滅著しい。(1098) は瓦器羽釜の鍔部である。内傾する口縁部で端部は角張る。鍔は1cm余りと僅かである。端部は丸い。(1099) は瓦器三足鍋脚部である。鍋本体との接続部近くの破片である。断面は円形である。

(2) 第4次本発掘調査出土土器

SD02 (図版276・277；**1139**)

土師器鉢が出土している。半球形の体部から、口縁部が内湾して開く。端部がわずかに外反する。

SD04 (図版276・277；**1140～1143**)

(1140) は甑の底部で、中心部の若干大きなものを取り囲んで多数の円孔が穿たれており、15個残存している。(1141) は角状に上に反ってつく把手である。

(1142)・(1143) は須恵器杯である。(1143) は口縁部が大きく内傾し、受け部が外方へ突出する。(1143) の口縁部はわずかに外反する。

SK02 (図版276・277；**1137・1138**)

底面から離れた上層から、土師器と共に土錘・釣針などが出土している。

(1137) は土師器高杯の杯部である。ほぼ水平な受け部に屈曲して直線的に大きく開く口縁部が続く。口縁端部は肥厚される。中央部には粘土充填が見られる。

(1138) は紡錘形の土錘である。ユビナデ痕が顕著に残る。

包含層出土遺物 (図版276・277；**1144～1154**)

(1144) は厚手の二重口縁壺である。端部を肥厚させ、わずかに外方へ引き出す。内面に強い被熱の痕跡がある。(1145) はくの字状に屈曲して開く口縁部の端部を内側に肥厚した布留系の甕である。(1146) の底面には十字にしたヘラ記号が施されている。

(1147) ～ (1149) は土師器高杯である。(1147) は椀状の体部から緩やかに外反して開く口縁部が続き、二次焼成を受けている。(1148)・(1149) は裾部が屈曲して開く脚部である。(1149) の上端部は被熱しており、羽口に転用されたものかもしれない。

(1150) は小型丸底壺である。扁球形の体部から外傾する口縁部が立ち上がる。

(1151) ～ (1153) はミニチュア土器である。(1151) は平底でわずかに屈曲して口縁部が立ち上がる。(1152) は内面にヘラ状工具の圧痕が放射状に残る。(1153) は外方へ開いて立ち上がるが、把手がついて匙状のものであった可能性がある。

(1154) は甑である。わずかに外傾して開く口縁端部を内側に肥厚する。

(1155) は須恵器杯蓋である。稜線は明瞭で外傾する口縁端部は外側に尖る。(1156) は口縁が内傾

する杯身である。

（1157）は有蓋高杯である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。3方に方形の透孔の痕跡が残る。

（1158）・（1159）は短頸壺である。肩の張る扁球状の体部に口縁部が短く立ち上がる。

（1160）は外反する口縁部の端部を肥厚し、上方へ引き上げる。外面に自然釉がかかる。

（1161）は台付壺である。球形の体部に、ハの字状に開く脚台がつく。脚部には三角形の透孔が3方に穿たれ、櫛描き波状文が施される。

（1162）は土錘である。円筒形を呈し、黒斑が見られる。

（3）出土石器・石製品

概要

若王寺遺跡では石器・石製品も多数出土しており、滑石製品・砥石が組成の主体を占めている点が本遺跡における特徴である。石器・石製品の大部分は原位置を遊離した遺物であり、遺構に伴う遺物は少数である。さらに石器・石製品を出土した遺構を概観するならば、柱穴・溝のほか古墳の外周をなす可能性があるSX03・05など、使用後における石製遺物の廃棄や二次的な利用を想起させる場合がほとんどである。

本報告書では、87点を図示して記載する。なお石器の計測値は、第3表に記載する。

1．滑石製紡錘車（図版252·253；J1～J3）

いずれも断面が台形状を呈し、中央に円孔が穿たれている。

J1はC-6区のSX03より出土した。径4.3cm、厚さ9mmを測り、下半を欠損する。上面に円形に、それから周囲に向かって放射状に深い線刻がある。

J2はB-4区の包含層より出土したもので、径3.5cm、厚さ1.5cmを測る。厚さがあり、斜面部分には粗いケズリの製作痕をとどめて線刻も施されていないことから、未製品であるのかもしれない。

J3はA-2区の同じく包含層から出土した。径4.35cm、厚さ1.05cmを測り、3点の中では最も大きく重い。上面には不規則な鋸歯様の、下面には直弧文を意識したような直線と曲線の組み合わせの線刻が見られる。上下面共に浅く細い線刻である。

2．玉類（図版252·253；J4～J7、図版254·255；J17～J53）

J4・J5は滑石製の勾玉で、共にSE06より出土している。J4は長さ1.65cm、厚さ4mm、重さ0.77gを測り、表面に削痕、円孔周辺に紐ずれ痕が残る。J5は長さ1.65cm、厚さ2.5mm、重さ0.55gを測り、やや扁平なものである。

J6はメノウ製の勾玉で、SX05より出土している。長さ2.65cm、厚さ8mmを測る。表面はていねいに磨いて仕上げられている。古墳に伴うと思われる遺構からの出土で、祭祀にかかわったものと思われる。

J7は第4次調査区の包含層出土の滑石製管玉である。下端を欠損しており、現存長9.3mmを測る。上下二方向からの穿孔がなされている。表裏面・孔内には擦痕が顕著に認められる。

J17～J53は滑石製の臼玉である。大半がC-2区の包含層の土器密集部からの出土である。径は4mm前後で、中央部に稜線を持って算盤玉状を呈するものと、単純な筒状で稜線を持たないものとがある。

3．有孔円板（図版252·253；J8～J16）

J8～J16は滑石製の有孔円板である。出土遺構は観察表に示すとおり、第3次調査区北西部分とSX05

を中心とする古墳の周囲である。径は1.7cm～2.9cmを測り、J15のみ１孔、他は２孔が穿たれている。J8･J12･J13ではほぼ正円形で、２孔の位置もバランス良く配置されている。J4は横に長い楕円形で、２孔も両脇に片寄っている。

４．打製石器

石鏃（図版256･257；S1）

S1は、C-2区のⅢ層（包含層）中で見られた土器密集部より出土した、サヌカイト製の有茎式石鏃である。先端部約１／４を欠損するが、わずかに丸みを帯びた両側縁をとどめる。茎部の抉りは、やや不規則な剥離痕を見せつつも、概ね左右対称形を呈し、茎下端部は丸く仕上げられている。

二次加工は表裏両面ともに縁辺部に限られており、身部中央には素材剥片の剥離面をとどめている。図左面においては二次加工がやや粗大であるのに対し、右面の身部では細かな剥離痕の連続が認められ、表裏において対照的な様相を示す。

５．磨製石器

石鏃（図版256･257；S2）

S2は、C-3区のⅢ層（包含層）より出土した粘板岩製（？）磨製石鏃である。茎部と先端部をわずかに折損している。身部の両側縁は丸みを帯びたなめらかな曲線を描き、精緻な左右対称形をなしている。茎部の抉りも、同様になめらかな曲線を見せる。身部は両面ともに丁寧な研磨が施され、中央には外形と相似形の平坦な面が形成されている。また先端部中央には、研磨によって弱い稜線（鎬）が形成されている。

不明磨製石器（図版256･257；S3）

S3は、C-5、B-2区のⅢ層（包含層）出土の粘板岩製磨製石器（？）である。最大厚1.4cmを測るやや厚手の素材の両面を研磨したものであるが、縁辺の半ばあるいはそれ以上を欠くため、器種の判断は困難である。図上縁は、剥離の後に両面ともに丁寧な研磨が施される。また左図の右側端部には、打撃痕が密集している。これらの打撃痕が、本遺物の加工ないしは本来の機能によって付着したものか、あるいは二次的な転用によって形成されたものかについては、判断の根拠に欠けており言及し難い。

６．石製品

石錘（図版256･257；S4）

S4は、B-7区の包含層より出土した、石錘である。連続的な敲打によって、楕円形を呈する亜円礫の長軸を周回するように、紐かけのための溝を形成しているほかには、敲打・研磨ともに認められない。

球状石製品（図版256･257；S5）

S5はC-6区のSP264より出土した、ほぼ鶏卵大の球状石製品である。図の裏面は破断面となっているが、これが人為的なものか否かについては明らかにできなかった。他の器表面には顕著な加工痕および使用痕は観察されないため、河川の円礫にごくわずかな整形を施した程度であったと思われる。

本遺物自体が何らかの実用的な機能を有すると考えるよりは、柱穴内より出土したという状況を重視すべき遺物かもしれない。

砥石（図版256･257；S6～S32・S34）

S6は、C-5区の包含層より出土した。微細な結晶を多く含む、黒色緻密な石材を用いており、図上端には自然面をとどめる。図の裏面は破断面であり、砥石表面が剥落したものと判断した。

図上縁と右側縁がほぼ直角をなすことから、本来は長方形を呈するものと推定される。石材が硬質で

あるためか擦痕はわずかしか認められないが、器表面は極めて平滑であり、仕上げ砥として用いられたものと思われる。

S7は、SX03のd区より出土した。S6と同様の微細な結晶を多く含む、黒色緻密な石材を用いている。図の裏面は破断面であり、わずかに砥面をとどめるにすぎない。石材は硬質で、やはり擦痕はわずかしか認められない。図右側面の欠損面から、遺存する器表面（砥面）に続く二条の擦痕が認められることから、破断後、錘等として二次的に使用された可能性が考慮される。

S8は、A-3区の包含層より出土した。断面形は不規則な多角形を呈するが、本来は方形断面の面取りをおこなったものかもしれない。器表面の大部分に研磨痕が認められる。なお図下端はほぼ平坦に加工された砥石の一端であるが、上端は破断面である。詳細には同定できないが、灰白色を呈する比較的細粒の石材を用いている。

S9は、調査区内で表面採集された、上下両端を欠く砥石である。扁平な素材の両平坦面を砥面として用いている。砥面には多方向の擦痕が観察される。詳細には同定できないが、灰色を呈する比較的細粒の石材を用いている。

S10はB-4区のⅢ層（包含層）より出土した。上下両端を欠くが、直方体状を呈していたと考えられる砥石である。ほぼ全器表面に研磨による擦痕が認められ、各砥面は使用によりわずかな凹面となっている。灰白色を呈する比較的細粒の石材を用いている。

S11は、A-6区のSK64より土器群Bとともに出土した。下端を欠くが、側面は全周をとどめている。断面形は不規則な多角形を呈し、もっとも広い平坦な面は砥面として用いられていない。灰白色を呈する比較的細粒の砂岩用いており、研磨による擦痕はほとんど観察できない。

S12はC-5区のⅢ層（包含層）より出土した、砥石の断片である。2面に砥面をとどめており、使用による擦痕とわずかな凹みが観察される。詳細には同定できないが、灰白色を呈する比較的細粒の石材を用いている。

S13はC-4区のⅢ層（包含層）より出土した、扁平な砥石である。図左縁および下縁は破断面である。表裏両面と図右縁に使用による顕著な擦痕をとどめている。灰色を呈する比較的細粒の石材を用いている。

S14はA-6区のSK64より土器群Bとともに出土した。不整六面体を呈し完形であることから、本来がやや不整形な礫素材であった可能性が考慮される。長軸に沿う4面が砥面として用いられており、顕著な擦痕と線状の傷をとどめる。図の網点部は被熱によって変色している。

S15はC-7区のSX01（a）より出土した。遺存する側縁が緩やかな弧状を呈することから、扁平な礫を用いたものと思われる。砥面には使用による擦痕とわずかな凹みが観察される。灰色を呈する比較的細粒の石材を用いている。

S16はC-5区のⅢ層より出土した。側縁が弧状を呈することから、礫を用いた砥石と考えられる。裏面は全面が破断面である。砥面には弱い凸面をなし、長軸方向に延びる擦痕が観察される。灰白色を呈する比較的細粒の石材を用いている。

S17はC-5区のⅢ層（包含層）より出土した。大型・扁平な素材を用い、その表裏と図左側面を砥面として用いている。砥面には使用による擦痕が認められるほか、特に表裏両面は顕著な凹面となっている。右側面と弧状をなす上側面には、素材を整形した痕跡をとどめている。灰白色を呈する石材を用いている。

S18はB-3区のⅢ層（包含層）より出土した、大型の砥石である。上側縁は弧状を呈するが、他の縁辺は概ね直方体状に整形されている。長軸に沿う4面が砥面として使用されており、擦痕とともにV字形を呈する深い傷痕が付着している。上面は使用により凹面をなす。灰白色を呈する石材を用いている。

S19はC-6区のSX05中央部分より出土した。裏面全面が破断面であるほか、上下両端も折損しているため、本来の形態は不明である。表面と両側面が砥面として使用されており、擦痕と顕著な傷痕が認められる。

S20はC-7区のSX03より出土した、不整形な六面体状を呈する砥石である。上側面を除く各面に、使用による擦痕が観察される。灰白色を呈する比較的細粒の石材を用いている。

S21はA-6区のSX04より出土した、砥石の断片である。表面と直交する二側面をとどめており、その形状から直方体状の砥石であったものと推定される。

S22はC-3区の包含層より出土した。図上端は折損面であるが、下端は本来の器面をとどめているものと思われる。断面形は不整五角形を呈し、各面が砥面として使用されている。灰白色を呈する比較的細粒の石材を用いている。

S23はC-5区のⅢ層（包含層）より出土した。裏面は全面が破断面であり、表面と両側面、上側面に本来の器表面をとどめる。表面と両側面が砥面として使用されており、多方向の擦痕と顕著な傷痕およびわずかな凹みが観察される。灰白色を呈する比較的細粒の石材を用いている。

S24はC-7区のSP76より出土した砂岩製砥石である。断面形は厚い四辺形を呈し、3面が砥面として使用されている。砥面には多方向の擦痕が観察され、使用によって弱い凹面となる。

S25はB-2区のⅢ層（包含層）より出土した。上下両端と裏面全面が破断面であり、表面と両側面に本来の器表面をとどめる。表面と両側面が砥面として使用されており、多方向の擦痕が顕著に観察される。灰色を呈する比較的細粒の石材を用いている。

S26はC-5区のⅢ層（包含層）より出土した。断面形は厚い四辺形を呈し、表面と裏面の一部が砥面として使用されている。砥面には多方向の擦痕が観察され、使用によって弱い凹面が形成されている。

S27はA-4区より出土した、砥石の断片である。2面が砥面として使用されており、他の面は破損による破断面である。砥面には多方向の擦痕が観察でき、図左側の面が主要使用面であったと思われる。

S28はC-7区のSP76より出土した砂岩製砥石である。剥離・欠損面も多いが、表面には擦痕が多く見られる。図左上の面が、主要使用面と思われ、使用によって凹面が形成されている。

S29はC-6区のSX05より出土した砂岩製の玉砥石である。扁平な長方体様のものであったと思われ、下半を欠いている。表面には2条の細い溝が刻まれている。

S30はB-2区のSD44より出土した。断面は長方形に近い五角形を呈し、上面の2面に擦痕が観察できる。擦痕は左側の面に多く、主要使用面であったと思われる。

S31はB-4区のSP383より出土した泥岩製の砥石である。現状は長方体様をなしており、上面と右側面の2面が砥面として使用されており、他は破断面となっている。右側面の方が擦痕の密度が高く、主要使用面であったと思われる。表面に一部ススの付着が見られる。

S32はB-1区のⅢ層（包含層）より出土した。断面は台形状を呈しており、上面と下面の2面が砥面として使用されている。砥面には多方向の擦痕が観察され、使用によって弱い凹面となる。主要使用面は上面の方と思われる。

S34はC-2区のSD50より出土した。断面が長方形を呈し、上面と下面の2面が砥面として使用されて

いる。砥面には多方向の擦痕が観察される。両側面はいったんは破断面となっていたかと思われるが、一部にわずかな擦痕が見られ、この状態での使用もあったと考えられる。

7．破砕礫（図版260·261；S33）

S33は、SX03とSX05から出土したものが接合した。人為的な加工痕は観察されず、破断面を除く全器表面は自然面（亜角礫の礫面）である。SX05より出土した破片には、炭化物が付着しているほか被熱によると思われる剥離が認められる。これ自体が機能を持つものではなく、何らかの遺構の一部であった可能性があるものとして取り上げておく。

（4）出土木製品（図版262～271）

1．井戸（SE）出土木製品

SE09（図版262・263；**W1・W2**）

W1は、有孔の板材である。残存長33.0cm、幅11.65cm、厚さ1.0cm。下端は直線的に絶たれ、摩滅著しい上端近くの中央に2.2cmの隅丸方形の孔を穿つ。下端から12cm上から両側端にJ字状に抉りを入れている。

W2は、方形の曲げ物の把手と考えられる。長さ29.5cm、最大幅19.4cm、厚さ1.7cm。表面にやや幅広の加工跡をとどめる。上端の両端部は折損しており、同一個体と思われるが、完全に接合しない破片がある。両側面には刳りこみが施されている。上端両端附近に径２cmの円孔とその上下に径0.5cmの小孔を並べて左右対称に穿っていたものと思われる。下端中央部を弧状に刳りぬき、その中央部を１cm×4.5cmの長方形の切り込み（ほぞ？）を入れている。径0.5cmの小孔を切り込み上部から１cm離れた位置に穿つ。この切り込みに曲げ物の側板を差し込み、把手とする復元案があり、静岡県　山ノ花遺跡、三重県　六大A遺跡より類似品が出土している。（山田昌久『考古資料大観』第８巻　弥生・古墳時代　木・繊維製品　2003年　小学館）

W3は、出土地不詳の板材である。両端を欠く。表面に加工痕がみられる。上端附近に一部焼けこげ跡がみられる。残存長66.1cm、幅10.5cm、厚み2.2cm。

SE06（図版264～267；**W4・W5**）

W4・W5は一木をくり抜いた材を組み合わせた井戸枠である。W4の下端はほぼ平坦に仕上げられているが、W5は図面では中央よりやや左に段差を残したままで整形している。W4には、節の円孔がみられる。いずれも下半分の残りは良いが、上端は風化により傷んでいる。残存高はいずれも１m余りで、厚さは６cm程度である。W4・W5とも土圧により変形したものか、上面より見た形状は半円形より平坦な形である。

吉田生物研究所で保存処理を行った際に行った樹種同定の結果、材はスギである。

SK54（図版268・269；**W6**）

W6は一端を鈍く尖らせた円柱形の部材である。柱材か？芯持ち材の丸太の下端から15cmの部分で全周に抉りを入れ、それ以下は表面を全面工具で削り、円錐形に加工している。移動の際の縄かけのための加工であろうか。上端は風化により痩せている。残存長55.5cm、径18cmである。

2．ピット（SP）出土木製品（図版268～271；**W7～W12**）

ピットより、柱根・柱材等が出土している。

W7はSP383から出土した柱根である。断面形はややいびつで、残存長27.25cm、長径13.9cm、短径11.1cm。上端を水平に近い方向に切断している。上部の部分の残りはよいが、下は摩滅が著しい。

W8はSP06から出土した柱材である。断面形は正円に近い。表面の摩滅が著しい。上部にかすかに削り痕がみられる。残存長25.7cm、長径21.5cm、短径15.6cm。

W9は出土地不詳の柱根である。断面形は正円に近い芯持ちの丸太材である。下端は斧状の工具で切断したままである。下端から17cmぐらい上までの残りはよいが、それ以上の表面は上部ほど風化しており、上端は痩せて尖る。残存長59.8cm、直径15cm。

W10はSP292から出土した柱根である。節で曲がった材である。断面はわずかに楕円形の芯持ち丸太材である。下端は斧状の工具の切断痕を残す。上端は風化のため痩せて尖る。残存長60.8cm、直径8.7cm。

W11はSP483から出土した角材である。断面は台形を呈する。表面に上から下方向への削り痕がみられる。両端を欠くため、上下の別や端部の形状は不明である。残存長27.3cm、幅8.1cm、厚4.6cm。

W12はSP200から出土した丸材である。断面形がほぼ正円の芯持ち丸太材である。上端は水平にまっすぐに切断し、節以下は斜めに削り成形している。下端は斧状の工具の切断痕を残す。表面は比較的よく残り、風化による傷みはほとんどない。長31.0cm、直径6.7～6.5cm。

（5）出土金属製品（図版272・273）

金属製品の所属年代は、遺構から出土したものに限定される。

M1　第4次4区、SK02の灰色粘土層中から出土。断面が円形を呈する銅製の針金を曲げた環である。断面の径0.2cm、残存長2.05cm、残存径1.6cmを測る。用途等は不明である。

M2　B-7区、SK17より出土。内径0.2cm、外径0.5cm、残存長0.85cmを測る管状鉄製品である。上・下端を欠いている。用途等は不明である。

M3　C-1区、SX07より出土。縦・横の最大幅2.6cm×2.65cm、厚さ0.25cmを測る。長方形を呈する鉄製品である。端面を欠いている。用途等は不明である。

M4　B-7区、SX04より出土。縦・横の最大幅9.4cm×3.1cm、厚さ1.10cmを測る。長方形を呈する鉄製品である。上・下端を欠いている。用途等は不明である。

M5　C-1区、包含層中より出土。上部の最大横幅1.2cm、残存長2.1cm、厚さ上部で0.45cmを測る。下端部分を欠く鉄製品である。和釘（折釘）の頭部かと思われるが、確証はない。用途等は不明である。

M6　B-7区、包含層中より出土。残存長7.3cm、幅2.0cm、厚さ0.7cmを測る。錆化が進み、上・下端を欠いた鉄製品である。用途等は不明である。

M7　B-7区、包含層中より出土。残存長5.1cm、下端部近く最大幅5.0cm、断面は凸レンズ状を呈し、厚さ0.6cmを測る。上端は山形を呈し、下端部分を欠損する鉄製品である。用途等は不明である。

M8　B-1区、包含層中より出土。残存長4.9cm、幅2.1cm、厚さ0.5cmを測る。錆化が進み、上・下端を欠いた鉄製品である。用途等は不明である。

M9　排土中より出土。中央に円孔をもつ薄い円盤状を呈する鉄製品である。直径2.3cm、厚さ0.1cm、円孔の径0.3cmを測る。用途等は不明である。

M10　B-4区、包含層中より出土。残存長3.05cm、中央付近の幅0.5cm、厚さ0.3cm以上を測る。両端を欠損し、内側に内傾する鉄製品である。用途等は不明である。

M11　C-8区、側溝中より出土。残存長4.9cm、幅0.3cmを測る。先端が尖り、断面が円形を呈する棒状鉄製品が2本錆び付いたものである。釘かと思われる。

鉄滓（図版274・275）

鉄滓については、表3、若王寺遺跡出土鍛冶関連遺物観察表に詳述したので、ここでは簡単に記しておきたい。鉄滓の所属年代は、土器等から6世紀中頃以降と思われる。

M12　C-2区、SD44より出土。半分に割れた半円形の椀形鍛冶滓。

M13　A-3区、SP-505より出土。平面、不整四角形をした厚みのある椀形鍛冶滓の破片。

M14　A-6区、SK75より出土。平面、不整四角形をした厚みのある椀形鍛冶滓の破片。

M15　包含層中より出土。平面、不整四角形をした厚みのある椀形鍛冶滓の破片。

M16　B-3区、第Ⅲ層中より出土。平面、不整四角形をした厚みのある椀形鍛冶滓の破片。

M17　B-3区、第Ⅲ層中より出土。平面、円形をした小ぶりな椀形鍛冶滓。

M18　A-7区、SK12より出土。平面、不整五角形をしたガラス質滓。

M19　出土地不明。平面、楕円形の小ぶりな椀形鍛冶滓。

M20　C-1区、SD50より出土。羽口が炉に装入された状態で付着する鉄滓。

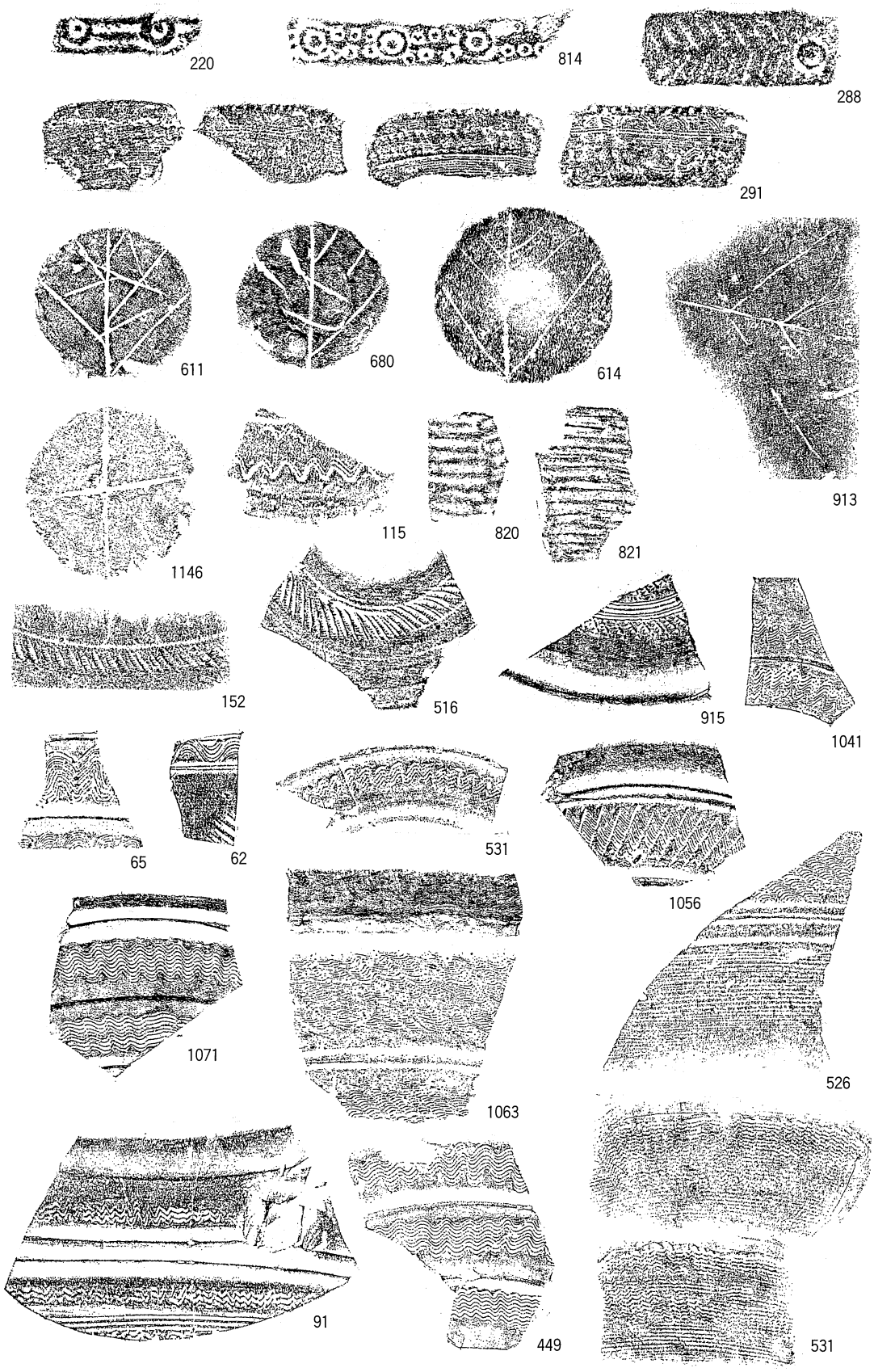
M21　C-1区、SD50より出土。平面、長方形の椀形鍛冶滓。

M22　C-1区、SD50より出土。平面、楕円形の小ぶりな椀形鍛冶滓。

M23　A-7区、SD04より出土。やや扇状になった炉壁の溶解物片。

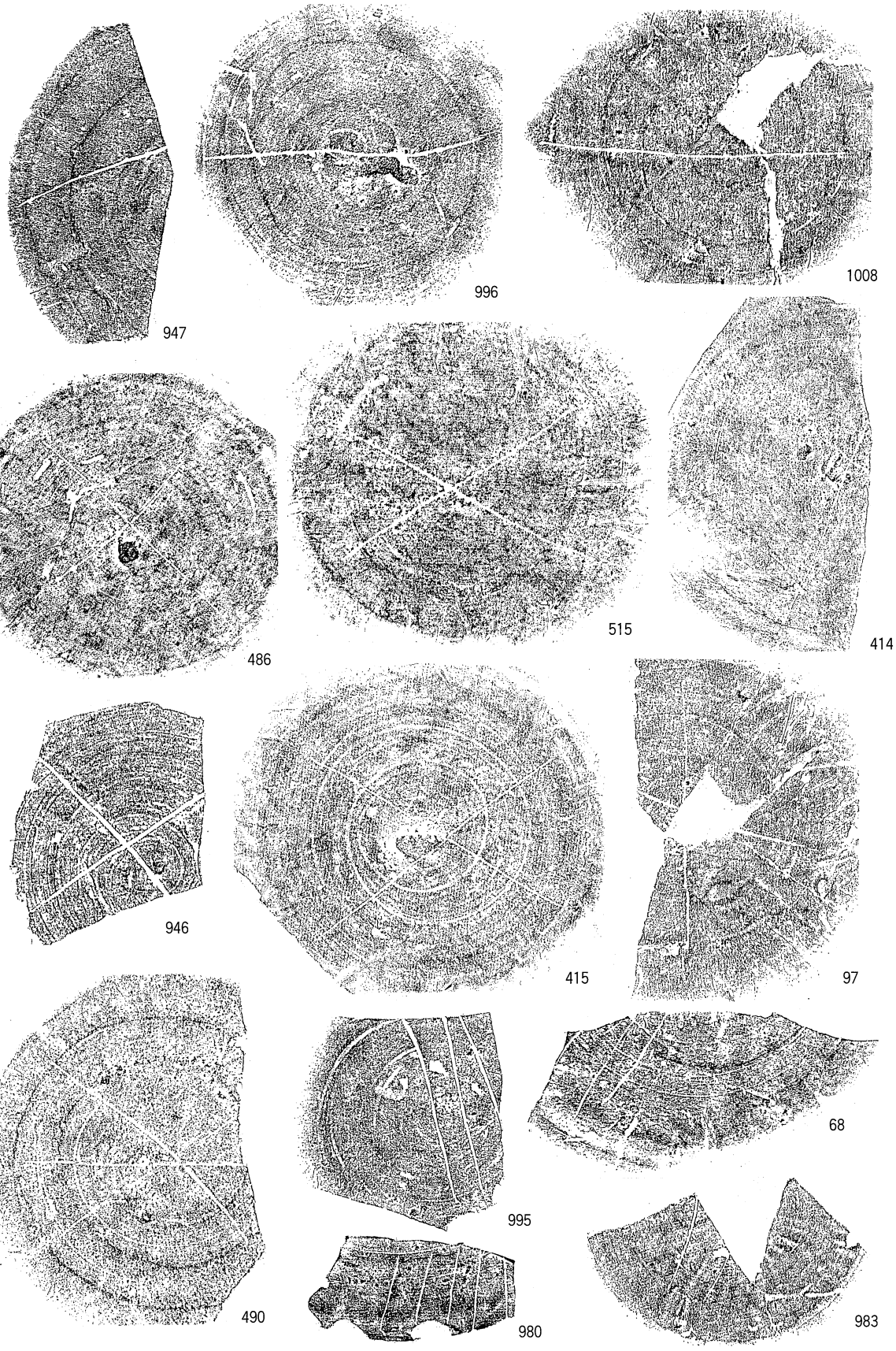
M24　C-5区、SE06より出土。平面、不整四角形をした厚みのある椀形鍛冶滓の破片。

M25　B-2区、第Ⅲ層中より出土。羽口先端下部の破片。



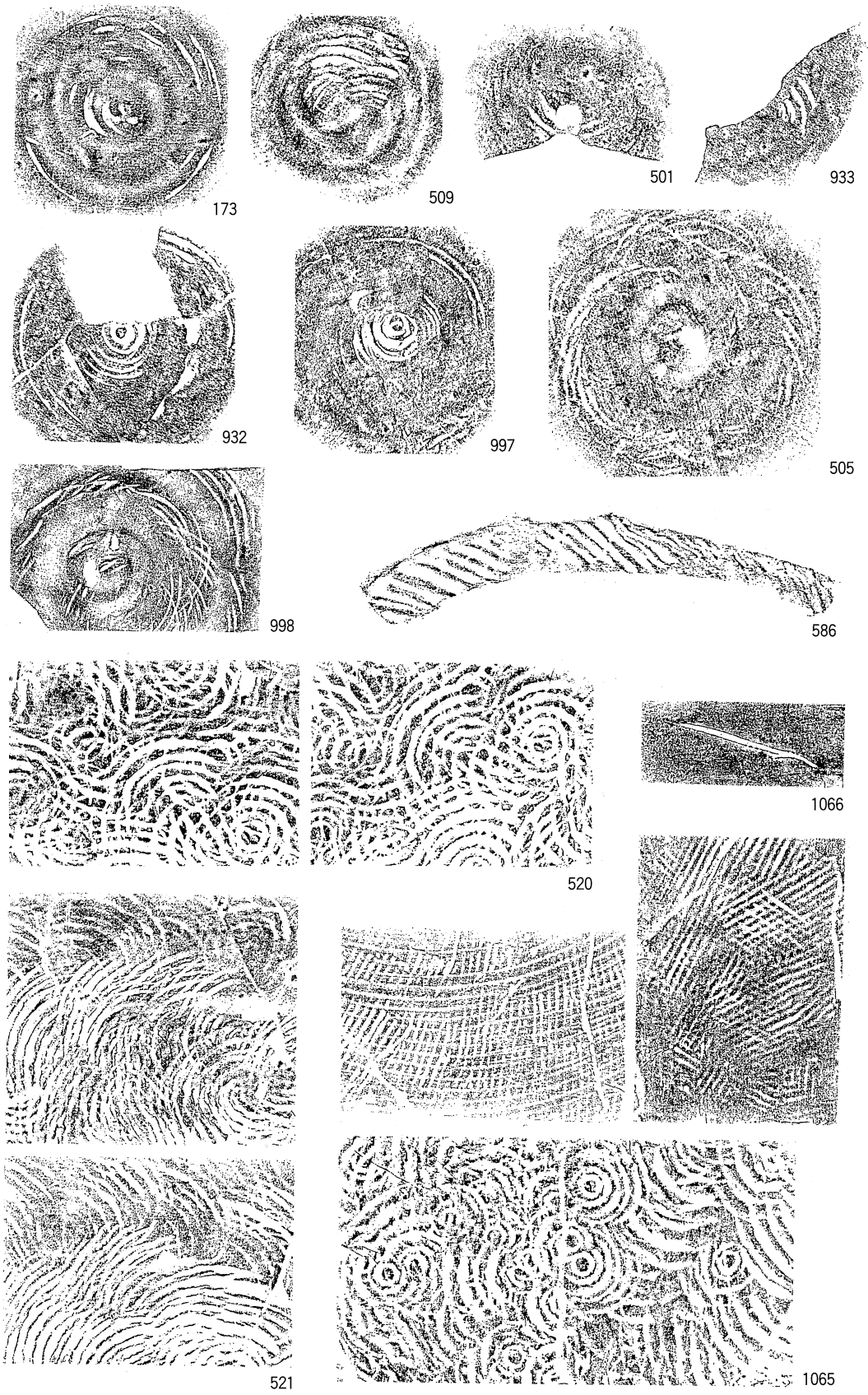
（図中の数字は各土器の報告番号）

第9図 出土土器拓影図(1)



（図中の数字は各土器の報告番号）

第10図 出土土器拓影図(2)



（図中の数字は各土器の報告番号）

第11図 出土土器拓影図(3)

第1表　土器・土製品観察表

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
122	1	399	SK47	土師器	壺（底部）	－	(1.60)	4.50	外面ナデ	平底	
122	2	400	SK47	土師器	甕（底部）	－	(2.60)	2.50	外面タタキからナデ	小さく不安定な平底、内湾する体部	
122	3	398	SK47	土師器	甕（底部）	－	(3.05)	(3.80)	外面ナデ	平底	内面一部に煤付着
122	4	66	SK07	土師器	壺	－	(40.40)	6.20	内面ユビ成形後ナデ？外面ハケ調整後ヘラミカキ？	倒卵形の体部、平底	
122	5	65	SK07	土師器	甕	(30.60)	(10.80)	－	内外面ともユビ成形後ヘラミカキ	内湾する体部で、口縁部は外反する、端部丸い	
122	6	363	SB09 (P13)	土師器	小型器台	8.20	8.30	(10.00)	受部外面ユビ成形後ナデ、脚部内面ヘラケズリ、外面ミカキ？	小さくほぼ平坦な受部、屈曲して開く脚部	
122	7	469	SP107	土師器	高杯（杯部）	(18.50)	(3.90)	－	磨滅のたメ調整不明	杯部の屈曲部分が剥離、端部わずかにつまみあげる	
122	8	483	SP347	土師器	底部	－	(2.35)	(4.60)	外面縦方向のハケ調整	平底	
122	9	346	SP361	須恵器	はそう	7.60	9.70	－	内外面ともロクロナデ、肩部内面ユビ押さえ	体部は肩が張り扁平、口縁は明瞭な稜線を持ち立ち上がる	
122	10	485	SP379	土師器	壺（口縁）	(14.70)	(4.80)	－	口縁部ヨコナデ、肩部内面ヘラケズリ？	ゆるくＳ字状に屈曲して開く口縁部、端部丸い	
122	11	443	SP476	土製品	土錘	3.20	8.70	4.30	ユビ成形後ナデ	円筒形	
122	12	488	SP424	土師器	甕（口縁）	(13.70)	(2.85)	－	口縁部ヨコナデ、肩部内面にユビ押さえ	くの字状に屈曲して開く口縁、端部内側に肥厚	
122	13	487	SP421	須恵器	甕（口縁）	(26.20)	(2.70)	－	ロクロナデ	外反して開く口縁部、外面に１条の突帯を貼り付ける	緑色自然釉
122	14	489	SP424	須恵器	甕（口縁）	(20.40)	(4.60)	－	ロクロナデ	外反して開く口縁部、端部を上下に肥厚	
124	15	353	SP130	土師器	高杯（脚部）	(6.30)	－	(9.55)	内面上半ヘラケズリ、外面上半ヘラミカキ、端部ヨコナデ	屈曲して開く脚部、中実	穿孔三箇所
124	16	352	SP130	土師器	高杯（脚部）	－	(10.00)	(12.80)	内面上半ヨコナデ・ヘラケズリ、外面上半ヘラミカキ、端部ヨコナデ	らっぱ状に開く脚部、端部を内側に肥厚	外面下半に細かい磨き
124	17	472	SP197	土師器	甕（口縁）	(16.40)	(4.65)	－	口縁部ヨコナデ、肩部内面にユビ押さえ	くの字状に屈曲して内湾気味に開く口縁、端部内側に肥厚	
124	18	336	SP197	土師器	ミニチュア鉢	5.60	3.80	－	ユビ成形後ナデ、手づくね	内湾して立ち上がる体部、底部は不安定	
124	19	476	SP240	土師器	鉢	(13.80)	(6.35)	－	口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ後縦方向のハケ調整	内湾する体部から屈曲して開く口縁	外面下半黒変
124	20	477	SP240	土師器	鉢	(11.80)	(6.50)	－	磨滅のたメ調整不明	内湾する体部から屈曲して開く口縁	
124	21	358	SP240	土師器	高杯（杯部）	(13.60)	(5.60)	－	磨滅のたメ調整不明	屈曲して内湾気味に立ち上がる杯部、口縁端部はわずかに外反する	
124	22	364	SP264	土師器	甕	15.80	(15.30)	－	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整、肩部内面ユビ押さえ・絞り目？外面広い間隔で櫛状工具による刺突文	球形の体部から、くの字状に屈曲して開く口縁、端部内側に肥厚	外面に煤付着
124	23	365	SP264	土師器	甕	(14.60)	(22.00)	－	口縁部ヨコナデ、体部内面上半ヘラケズリ、下半ユビ押さえ、外面ハケ調整	球形に近い体部から、くの字状に屈曲して開く口縁、端部内側に肥厚	外面に煤、炭化物付着。二次焼成による赤変。内面に煤か炭化物付着
124	24	355	SP264	土師器	甕	13.30	(19.80)	－	口縁部ヨコナデ、体部内面上半ヘラケズリ、下半ユビ押さえ、外面ハケ調整	球形の体部から、くの字状に屈曲して開く口縁、端部内側に肥厚	外面全面に煤付着。二次焼成による剥離
124	25	360	SP264	土師器	小型丸底壺	(9.50)	(7.90)	－	口縁部ヨコナデ、体部内外面ともナデ?	球形の体部から、内湾気味に立ち上がる口縁	二次焼成
124	26	349	SP264	土師器	小型丸底壺	(7.60)	8.70	－	口縁部ヨコナデ、外面縦方向のハケメ後ヨコナデ、体部内面上半ケズリ、下半ユビ成形後ナデ、外面上半斜メ方向のハケメ、下半板ナデ後ナデ	算盤玉状の体部から、ほぼ直立する口縁	体底部一部黒変、煤付着
124	27	361	SP264	土師器	小型丸底壺	(9.90)	(7.70)	－	口縁部ヨコナデ、外面縦方向のハケメ、体部ナデ？	球形の体部から、内湾気味に立ち上がる口縁	
124	28	478	SP264	土師器	鉢	(8.60)	(4.45)	－	内面ユビ押さえ	椀状に内湾する体部	
124	29	348	SP264	土師器	高杯（杯部）	(19.65)	(4.55)	－	内外面ともヨコナデ	屈曲して立ち上がる杯部、口縁端部は外反して開く	外面全体的に黒変。内外面一部に煤付着
124	30	359	SP264	土師器	高杯（杯部）	(23.60)	(6.50)	－	内外面ともヨコナデ、外面一部にユビ押さえ・ハケメ	屈曲して大きく立ち上がる杯部	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地	種別	器種	口径	器高	底径	技法　他	形態の特徴	備　考
			遺構・土層			(cm)	(cm)	(cm)			
124	31	440	SP264	土製品	土錘	4.30	8.80	5.40	ユビ成形後ナデ、板ナデ状工具で調整	円筒形、器壁薄い	二次焼成
124	32	439	SP264	土製品	土錘	4.70	9.20	5.50	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	二次焼成
124	33	441	SP264	土製品	土錘	4.50	8.70	5.55	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	二次焼成
124	34	479	SP264	須恵器	杯蓋	(14.80)	(3.90)	−	内外面ロクロナデ、外面天井部ヘラケズリ	内湾する体部わずかに稜線、端部外側に尖る	
126	35	351	SP265	土師器	小型丸底壺	(9.85)	10.65	−	口縁部ヨコナデ、体部外面上半ハケ調整後ヨコナデ、下半ケズリ、内面ヨコナデ後丁寧な仕上げナデ	球形の体部から、くの字状に屈曲して開く口縁、端部内側に肥厚	
126	36	350	SP265	土師器	小型丸底壺	(10.90)	(6.75)	−	口縁部ヨコナデ、内面ハケ調整、体部外面上半ヨコナデ、下半ヘラケズリ？、内面ユビ押さえ後ヨコナデ	球形の体部から、内湾気味に開く口縁	二次焼成
126	37	344	SP499	土師器	壺（口縁）	(15.20)	(8.80)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ消し、外面ユビ押さえ後ナデ	屈曲して立ち上がる二重口縁、端部水平に肥厚	
126	38	343	SP499	土師器	高杯（脚部）	−	(6.00)	10.20	内面上半絞り目、下半ユビ押さえ、外面ヘラミカキ	らっぱ状に開く脚部、端部わずかに肥厚	
126	39	342	SP499	土師器	ミニチュア土器	(4.10)	(3.20)	−	ユビ成形後ナデ、底部に仕上げナデ、手づくね	椀状の体部	
126	40	442	SP502	土製品	土錘	4.00	8.70	4.55	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	
126	41	453	SP502	土製品	土錘	3.20	9.40	4.30	ユビ成形からタタキ後ナデ、外面と端面にタタキ	円筒形	
126	42	466	SP20	土師器	甕（口縁）	(12.80)	(4.30)	−	口縁部ヨコナデ	内湾気味に開く口縁、端部内側に肥厚	
126	43	490	SP428	土師器	甕（口縁）	(14.90)	(4.00)	−	口縁部ヨコナデ、内面ハケ調整後ナデ゛、肩部内面ヘラケズリ	内湾気味に開く口縁、端部わずかに外反	
126	44	492	SP482	土師器	甕（口縁）	(15.60)	(3.70)	−	口縁部ヨコナデ、肩部内面にユビ押さえ	内湾気味に立ち上がる口縁、端部内側に肥厚	
126	45	468	SP93	土師器	鉢	(24.70)	(4.00)	−	口縁部ヨコナデ	内湾して立ち上がる体部から外反して開く口縁、端部肥厚	
126	46	482	SP339	土師器	鉢	(26.70)	(4.40)	−	ヨコナデ	内湾して立ち上がる体部からわずかに屈曲して開く口縁	
126	47	337	SP445	土師器	高杯（杯部）	(13.70)	(5.20)	−	口縁部ヨコナデ、坏部内外面ともナデ？ヘソ状粘土充填の痕跡	椀状の杯部	
126	48	338	SP459	土師器	高杯	13.70	12.10	−	磨滅のため調整不明	わずかに屈曲して立ち上がる杯部、脚部はらっぱ状に開く	二次焼成による赤変。脚部、粘土を螺旋状に積み上げ痕
126	49	491	SP428	土師器	小型丸底壺	(8.80)	(4.80)	−	磨滅のため調整不明	球形の体部から、内湾気味に立ち上がる口縁	
126	50	471	SP153	土師器	鉢	(7.30)	(5.10)	−	磨滅のため調整不明	椀状に内湾する体部	
126	51	473	SP209	土師器	高杯（脚部）	−	(2.95)	(9.50)	脚柱部内面ヘラケズリ	屈曲して開く脚部	穿孔1個の一部残存
126	52	474	SP217	土師器	高杯（脚部）	−	(1.50)	(10.60)	磨滅のため調整不明	屈曲して開く脚部、薄手	
126	53	475	SP226	土師器	壺（底部）	−	(1.90)	(3.80)	磨滅のため調整不明	平底（中央ややくぼむ）	
126	54	481	SP333	土師器	壺（底部）	−	(2.20)	5.50	体部外面縦方向のハケ調整、内面くもの巣状のハケメ	平底（中央ややくぼむ）	
126	55	480	SP291	土師器	壺（底部）	−	(1.90)	5.75	磨滅のため調整不明	平底（ドーナツ状上底）	
126	56	486	SP411	土師器	甕（底部）	−	(1.30)	(4.80)	外面平行タタキ	平底（中央ややくぼむ）	
126	57	467	SP28	土師器	甕（底部）	−	(3.55)	(4.00)	外面縦方向の板ナデ	平底	
126	58	334	SP02	須恵器	杯蓋	11.30	4.00	−	内外面ロクロナデ、外面天井部ヘラケズリ	内湾する体部、稜線不明瞭、端部外側に尖る	
126	59	356	SP541	須恵器	杯身	(13.80)	(3.70)	−	内外面ロクロナデ	内湾する体部、受部ほぼ水平、立上がり内傾し端部外側に尖る	
126	60	357	SP503	須恵器	杯身	(13.80)	(4.20)	−	内外面ロクロナデ、外面底部ヘラケズリ	内湾する体部、受部やや上向き、立上がり内傾する	
126	61	347	SP233	須恵器	杯身	(13.30)	(4.30)	−	内外面ロクロナデ、外面底部ヘラケズリ	内湾する体部、受部やや上向き、立上がり内傾する	
126	62	362	SP256	須恵器	壺	−	(3.25)	−	内外面ロクロナデ、外面下半平行タタキ、櫛描き波状文	内湾する体部上半部	
126	63	484	SP360	土師器	底部	−	(2.00)	(5.60)	磨滅のため調整不明	平たい底部で輪高台は外方へ踏ん張る	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
126	64	470	SP149	須恵器	短頸壺	(7.60)	(2.90)	−	ロクロナデ	短く直立して立ち上がる口縁、端部に一条の沈線	
126	65	335	SP194・195	須恵器	壺？	−	(3.80)	−	ロクロナデ、凹線で画された櫛描き波状文	外反して開く口縁	
128	66	19	SD03	土師器	甑	−	(11.10)	−	ナデ・ハケ整形後ヨコナデ、	内湾する体部で、取っ手は上方へ反る、体部に挿入して接合	煤付着
128	67	15	SD03	須恵器	杯蓋	(13.30)	4.90	−	ロクロナデ、外面天井部ヘラケズリ	天井部丸く稜線明瞭、口縁部内湾し、端部丸い	
128	68	2	SD04 a区	須恵器	杯身	(13.10)	(4.35)	(9.30)	ロクロナデ、外面底部ヘラケズリ	内湾する体部、受部ほぼ水平、立上がり内傾し端部外側に尖る	底部にヘラ記号
128	69	1	SD04	須恵器	杯身	(14.20)	(4.20)	−	ロクロナデ	直線的な体部から内傾する立上がり、受部上向き	
128	70	1561	SD10	土師器	甕（口縁）	(16.00)	(2.50)	−	外面ヨコナデ	外反して開く口縁、端部丸い	
128	71	1565	SD10 b区	土師器	甕	(16.40)	(12.40)	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ調整、内面ナデ？	球形の体部から屈曲し外反して開く口縁	2次焼成、外面に煤付着
128	72	3	SD11	土師器	甕	(14.40)	(16.20)	−	内面ヘラケズリ、外面ハケ整形、口縁部ヨコナデ	球形の体部から屈曲し内湾して開く口縁部、端部内側に肥厚	煤付着
128	73	4	SD11	土師器	鉢	(21.70)	(9.60)	4.20	ナデ整形後ヨコナデ、底部は貝殻で整形	不安定な平底、体部は僅かに内湾し中位に稜線を持つ	
128	74	1566	SD11	弥生土器	壺（底部）	−	(2.90)	6.40	内外面ともナデ、内面中央にヘラ圧痕	ドーナツ状上底	
128	75	12	SD14 a区	土師器	甕	(17.90)	(15.60)	−	ハケ整形後ヨコナデ、ナデ	倒卵形の体部から屈曲し外反する口縁部、端部丸い	
128	76	6	SD14 c，d区	土師器	小型丸底壺	−	(7.10)	−	ユビ成形後ナデ、ヨコナデ	球形の体部から屈曲して開く頸部	黒斑あり
128	77	7	SD14 c，d区	土師器	小型丸底壺	(8.55)	9.65	−	ユビ成形後ナデ、ヨコナデ、外面ハケ整形	最大腹径が上位にあるやや扁平な体部、口縁部は外反する	黒斑あり
128	78	5	SD14 e区	土師器	小型丸底壺	−	(6.78)	−	ユビ成形後ナデ、ヨコナデ	扁平な球形の体部から外反して開く頸部	煤付着
128	79	8	SD14 c，d区	土師器	高杯（脚部）	−	(6.30)	(11.25)	脚柱部内面絞り目、外面仕上げナデ	屈曲して開く裾部、柱状部は内傾	
128	80	1567	SD14 b区	土師器	壺（底部）	−	(2.80)	6.60	外面にユビ押さえ痕	外方へ踏ん張って開く底部、中央部やや窪む	
128	81	1563	SD14	土師器	甑（把手）	−	(4.40)	−	ユビ成形後ナデ	上方に延びる	黒斑あり
128	82	1562	SD14	須恵器	杯蓋	(15.10)	(4.05)	−	ロクロナデ、外面天井部ヘラケズリ	天井部丸く稜線明瞭、口縁部内湾し、端部丸い	
128	83	11	SD14 a区	須恵器	杯身	(12.40)	(2.95)	−	ロクロナデ	内湾気味の体部で立上がりは内傾し端部尖る、受部丸い	
128	84	1564	SD14 d区	須恵器	鉢	(14.00)	(8.30)	−	ロクロナデ	外傾して開く長い口縁部、端部丸く肥厚	
128	85	1569	SD14 b区	須恵器	甕？	(45.00)	(1.80)	−	ロクロナデ	外反して開く口縁部、端部下方に肥厚して垂下	
128	86	444	SD14	土製品	土錘	3.50	8.70	4.25	ユビ成形後ナデ	円筒形	二次焼成。黒斑
128	87	20	SD15	土師器	小型丸底壺	(12.45)	7.75	−	ナデ整形後ヨコナデ	椀状の体部から屈曲し、内湾して開く口縁部	
130	88	14	SD16	土師器	高杯（脚部）	−	(6.80)	12.00	ハケ整形後ヨコナデ、ナデ、外面ヘラミガキか	中空の直立気味の脚柱部から屈曲して大きく開く裾部	2次焼成
130	89	9	SD16	土師器	製塩土器	−	(2.00)	(4.60)	ユビ成形後ナデ	小さな脚台で、外方へ開き、端部丸い	2次焼成
130	90	1568	SD16	土師器	甑（把手）	−	(4.40)	−	ユビ成形後ナデ	上方に延びる	煤付着
130	91	13	SD16	須恵器	把手付鉢	(12.80)	(6.75)	−	ロクロナデ、外面波状文、凹線・直線文	僅かに内湾する体部に内傾して立ち上がる口縁部、端部丸い、把手上端のみ残る	
130	92	10	SD16	土製品	土錘	−	(5.20)	−	ユビ成形後ナデ	円筒形	
130	93	454	SD16	土製品	羽口	3.30	(7.70)	(4.80)	ユビ成形後ナデ	円筒状	端部にガラス質付着

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
130	94	16	SD18 c区	須恵器	杯蓋	(14.90)	4.05	−	ロクロナデ、外面天井部ヘラケズリ、内面不定方向の仕上げナデ	天井部丸く稜線不明瞭、口縁部内湾し、端部外側に尖る	
130	95	17	SD18 c区	須恵器	杯蓋	(16.00)	4.35	−	ロクロナデ、外面天井部ヘラケズリ゛、内面1方向の仕上げナデ	天井部丸く稜線明瞭、口縁部外反し、端部尖る	
130	96	1550	SD25 c区	須恵器	杯蓋	(14.10)	5.30	−	ロクロナデ、外面天井部ヘラケズリ	天井部丸く稜線明瞭、口縁部内湾し、端部外側に尖る	
130	97	18	SD25 c区	須恵器	杯身	11.75	(6.20)	−	ロクロナデ、外面底部ヘラケズリ	内湾する体部で、立上がりは内傾し端部角張る、受部は上向き	底部にヘラ記号、96とセット
130	98	24	SD27	土師器	高杯（杯部）	(18.95)	(5.70)	−	ハケ整形後ヨコナデ	緩やかにカーブして開く杯部で、端部は外側に尖る	煤付着
130	99	25	SD27	須恵器	杯身	(13.10)	4.80	7.60	ロクロナデ、外面底部ヘラケズリ	内湾する体部で、受部は上方に延びる、立上がりは内傾し端部丸い	
130	100	26	SD27	須恵器	杯身	13.30	4.70	4.10	ロクロナデ、外面底部ヘラケズリ	内湾する底部、受部はやや上向き、立上がりは内傾し端部丸い	
130	101	29	SD31	須恵器	はそう	−	(6.70)	−	ロクロナデ、内面ユビナデ	球形の体部	体部中位に円孔1個、自然釉
130	102	23	SD33	土師器	壺（口縁）	(18.30)	(5.70)	−	ユビ成形からハケ整形・ナデ、刻み目・波状文	外反する口縁部で、端部上下に肥厚	
130	103	21	SD33	土師器	鉢	(17.50)	5.80	−	ハケ整形後ヨコナデ	椀状の体部、屈曲して開く口縁部、端部丸い	
130	104	1554	SD33	土師器	壺（底部）	−	(2.20)	(4.80)	外面平行タタキ後縦方向の板ナデ	平底	
130	105	22	SD33	土師器	甕	(16.00)	(22.90)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、底部ユビ押さえ痕、外面縦方向のハケ調整	球形の体部からくの字状に屈曲して開く口縁部、端部丸い	内面一部に煤状炭化物付着
130	106	27	SD35	須恵器	杯蓋	(16.10)	(4.45)	−	ロクロケズリ後ロクロナデ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾し、端部丸い	
130	107	1555	SD36 a区アゼ付近	土師器	小型丸底壺	−	(4.80)	−	内面板ナデ、外面一部ヘラミガキの痕跡	半球形の体部、屈曲して外方に開く口縁部	
130	108	28	SD36	土師器	甕	(14.40)	(15.55)	−	ユビ成形・ヘラケズリ、ハケ整形後口縁部ヨコナデ	球形の体部、くの字状に屈曲して開く口縁部、端部内側に肥厚	
130	109	1553	SD41 a区	土師器	甕（口縁）	(15.70)	(3.70)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヨコ方向、外面縦方向のハケ調整	体部から屈曲して内湾気味に広がる口縁部、端部内側に肥厚	
132	110	1557	SD44 e区	土師器	甕	(14.80)	(3.00)	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ調整	体部から屈曲して内湾気味に広がる口縁部、端部内側に肥厚	
132	111	1552	SD44 e区	土師器	甕	(12.20)	(3.85)	−	口縁部ヨコナデ	体部から屈曲して内湾気味に広がる口縁部、端部内側に肥厚	
132	112	33	SD44 c，d区	須恵器	甕（口縁）	(13.00)	(2.50)	−	タタキ後ロクロナデ	大きく外反する口縁部、端部内外に肥厚	生焼け
132	113	1556	SD44 c，d区	土師器	壺	(22.90)	(3.70)	−	口縁部ヨコナデ、外面に6条の櫛描き波状文2帯	外傾して開く口縁部	
132	114	1558	SD44 e区	土師器	甕	(11.90)	(4.10)	−	内面ヨコナデ	内湾する体部から屈曲して内湾気味に開く口縁部、端部丸い	
132	115	1560	SD44	土師器	壺？	−	(2.85)	−	ヨコナデ、櫛描き波状文	外反して開く口縁部	
132	116	1559	SD44 e区	土師器	甑（把手）	−	(3.70)	−	ユビ成形後ナデ？	上方に延びる	
132	117	34	SD44 g区	土師器	鉢	(53.40)	(30.00)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ハケ調整、外面上半ヘラミガキ、下半タタキ・ハケ調整後ナデ	椀状の体部、外傾して開く口縁部、端部肥厚	黒斑
132	118	1551	SD44	須恵器	杯蓋	(12.90)	(3.45)	−	ロクロナデ	天井部丸く、口縁部内湾し、端部外側に尖る	
132	119	30	SD44 c，d区	須恵器	杯蓋	(10.20)	(2.65)	−	ロクロナデ、外面天井部ヘラケズリ	器高低い、内湾する口縁部、端部丸い、稜線外側に突出する	121とセット
132	120	32	SD44 e区	須恵器	杯身	(9.70)	(4.10)	−	ロクロケズリ、静止ケヅリ後ロクロナデ、内面仕上げナデ	内湾する体部で、立上がりは内傾、端部角張る、受部シャープ	
132	121	31	SD44 e区	須恵器	杯身	(9.10)	(4.35)	−	ロクロケズリ、静止ケヅリ後ロクロナデ	内湾する扁平な体部で、立上がりは大きく内傾、端部角張る	119とセット
132	122	35	SD45	須恵器	樽形はそう	−	(3.30)	−	ロクロナデ、櫛描波状文	短辺内側に窪む、上下ともに直線的	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
132	123	450	SD45	土製品	土錘	3.60	(7.70)	3.90	ユビ成形後ナデ	円筒形	二次焼成
132	124	1546	SD48 b区	土師器	甕	(11.50)	(5.85)	−	口縁ヨコナデ、体部内面板ナデか	内湾する体部から外反して開く口縁部、端部丸い	
132	125	39	SD48	土師器	高杯（杯部）	(15.60)	(4.60)	−	ハケ整形後ヨコナデ	内湾する杯部で屈曲して外方に開く口縁部	
132	126	43	SD48 b区	土師器	甕	−	(11.00)	2.60	ヘラケズリ、外面貝殻でハケ状に整形	底部やや上げ底、卵形の体部	
132	127	40	SD48	土師器	鉢	(26.00)	17.30	4.10	ユビ・ハケ整形後ヨコナデ	不安定な平底、体部は内湾し口縁部は外反する、端部わずかに上方へ引き上げる	
132	128	42	SD48	土製品	支脚	−	(6.95)	6.55	ユビ成形後ナデ	底面平滑、底部やや突出してから湾曲する、低い支脚	
134	129	37	SD49	土師器	高杯	13.00	(5.40)	−	ユビ成形後ユビ調整・ヨコナデ	内湾し端部丸い、脚部との接合痕跡であるｸｼ刺突あり	
134	130	36	SD49	土師器	高杯（杯部）	19.60	(5.90)	−	ユビ・ハケ整形後ヨコナデ	緩やかにカーブして開く杯部、口縁端部外反する、底部に接合痕	
134	131	38	SD49	土師器	高杯（脚部）	−	(7.30)	11.20	内面ヘラケズリ、脚端部ヨコナデ	屈曲して開く脚部、端部丸い	
134	132	45	SD50 b区上層	土師器	小型丸底壺	(6.95)	8.35	−	ユビ成形後ナデ、口縁部ヨコナデ	やや扁平な体部に外反する口縁部	黒斑
134	133	44	SD50 a区	土師器	小型丸底壺	(8.35)	8.05	5.15	ユビ成形後ナデ、手づくね	内湾する体部から外方へ開く口縁部	強く被熱、黒斑
134	134	1547	SD50 b区上層	土師器	甑（把手）	−	(41.00)	−	磨滅のためﾒ調整不明	上方に延びる	
134	135	1549	SD50 c区上層	土師器	甑（把手）	−	(4.45)	−	磨滅のためﾒ調整不明	上方に延びる	
134	136	1548	SD50 a区	土師器	甑（把手）	−	(5.35)	−	磨滅のためﾒ調整不明	上方に延びる	
134	137	448	SD50	土製品	土錘	1.50	(6.50)	1.50	ユビ成形後ナデ	両端に円孔	
134	138	449	SD50	土製品	土錘	2.80	(7.15)	3.65	ユビ成形後ナデ	円筒形	
134	139	447	SD50	土製品	土錘	3.80	9.00	4.55	ユビ成形後ナデ	円筒形	
134	140	446	SD50	土製品	土錘	3.10	9.00	4.20	ユビ成形後ナデ	円筒形	
134	141	55	SD50	須恵器	杯蓋	(14.90)	(4.90)	−	ロクロナデ、外面天井部ヘラケズリ	内湾する天井部から直線的に外傾する、端部は外側に尖る	
134	142	57	SD50	須恵器	杯蓋	(13.90)	(4.60)	−	ロクロナデ、外面天井部ヘラケズリ	内湾し稜線不明瞭、端部尖る	
134	143	56	SD50	須恵器	杯蓋	(16.00)	(3.95)	−	ロクロナデ、外面天井部ヘラケズリ	器高低く内湾する体部、口縁部内湾し端部外側に尖る	
134	144	48	SD50 b区	須恵器	杯蓋	(13.85)	3.55	−	ロクロナデ、外面天井部ヘラケズリ	天井部水平で内湾して口縁部に、端部尖る	
134	145	46	SD50 c区上層	須恵器	蓋	−	(3.45)	−	ロクロナデ、外面天井部ヘラケズリ、内面１方向の仕上げナデ	ボタン状のつまみ部から天井部に続く	
134	146	1544	SD50 b区上層	須恵器	杯身	(12.20)	(3.30)	−	ロクロナデ、外面底部ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部は上向き	
134	147	54	SD50 c区上層	須恵器	杯身	(13.90)	(4.65)	(4.10)	ロクロナデ、外面底部ヘラケズリ、内面１方向の仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	
134	148	1545	SD50 c区上層	須恵器	杯身	(11.40)	4.60	−	ロクロナデ、外面底部ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部は上向き	
134	149	50	SD50	須恵器	杯身	13.05	4.80	−	ロクロナデ、外面底部ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部上向き	
134	150	53	SD50 b区下層	須恵器	杯身	(13.90)	(4.15)	(8.00)	ロクロナデ、外面底部ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり外反、端部尖る、受部は上向き	
134	151	52	SD50 a区	須恵器	はそう（口縁）	(13.70)	5.30	−	ロクロナデ、外面櫛状工具による刺突列点文	直線的に開く口縁部で端部近くで屈曲する、端部は角張る	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
134	152	49	SD50 d区	須恵器	はそう	−	(9.75)	−	ロクロナデ、外面体部下半ヘラケズリ、櫛状工具による刺突列点文・沈線文	球形の体部から直線的に立ち上がる口縁部	体部中位に円孔1、自然釉
134	153	47	SD50 d区	須恵器	はそう	−	(7.35)	−	ロクロナデ、外面体部下半ヘラケズリ	扁平な球形の体部	体部中位に円孔1
134	154	60	SD50 d区	須恵器	甕	(14.50)	(24.00)	−	口縁部ロクロナデ、体部内外面ともタタキ	球形の体部、口縁部わずかに外反し端部上方につまみ上げる	
134	155	51	SD50 a区	須恵器	甕	(27.10)	(5.20)	−	口縁部ロクロナデ、体部内外面ともタタキ	頸部短く、口縁部外反し端部肥厚する	
134	156	59	SD50 b区上層	須恵器	甕	(16.80)	(13.20)	−	口縁部ロクロナデ、体部内面タタキ、外面タタキ後カキ目	内湾する体部から外反する口縁部、端部肥厚	
136	157	305	SE01	土師器	甕	(13.70)	(17.30)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面平行タタキ後縦方向のハケメ	球形の体部から屈曲して外方に開く口縁部、端部丸い	二次焼成。剥離、赤変が顕著。外面に煤付着
136	158	306	SE01	土師器	甕	−	(10.80)	3.00	体部内面ユビ成形後ナデ、輪積み痕、外面平行タタキ後粗いミカキ	球形の体部、小さく不安定な底部	外面に煤付着
136	159	308	SE02	土師器	甕（口縁）	(17.70)	(4.30)	−	口縁部ヨコナデ	外方に開く口縁、わずかに屈曲して二重口縁様、端部内側に肥厚	外面に二次焼成？
136	160	307	SE02	土師器	甕（口縁）	(20.70)	(3.60)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ケズリ？	屈曲して外方に開く口縁部、端部外側に尖る	
136	161	310	SE02	土師器	ミニチュア土器	3.30	4.00	−	ユビ成形後ナデ、手づくね	球形に近い体部、口縁端部内傾し丸い	
136	162	309	SE02	土師器	高杯（脚部）	−	(5.80)	(10.80)	内面脚部ケズリ、外面ミカキ？裾部ユビ成形後ナデ、端部ヨコナデ	ラッパ状に開く脚部、中実	円孔は3方に穿つ
136	163	312	SE03	土師器	壺（底部）	−	(2.50)	4.60	内外面ともナデ、内面中央部に爪状圧痕	平底	底面に植物の押圧痕
136	164	458	SE05	須恵器	壺（口縁）	(15.20)	(4.70)	−	ロクロナデ、外面カキ目調整	筒状の頸部からわずかに外反して開く口縁部、端部を肥厚	
136	165	313	SE05	須恵器	甕（口縁）	(23.00)	(3.90)	−	ロクロナデ	外反して開く口縁部、端部を肥厚	
136	166	459	SE06	土師器	甕（口縁）	(18.80)	(2.90)	−	ユビ成形後ハケ調整	大きく開く口縁部、端部丸い	
136	167	317	SE06	土師器	甕	17.40	(10.00)	−	口縁部ヨコナデ、内面横方向のハケメ、体部内面ユビ成形後ケズリ、一部にハケメ、外面ハケ調整	内傾する体部から屈曲して外方へ開く口縁部、端部丸い	
136	168	324	SE06	土師器	小型丸底壺	−	(6.00)	−	ユビ成形後ナデ、内面上半粘土ひも痕、下半ユビ押さえ痕顕著	丸い底部からわずかに内湾して立ち上がる体部	外面底部から体部にかけて黒斑
136	169	460	SE06	土師器	底部	−	(1.60)	4.40	磨滅のたメ調整不明	平底	
136	170	321	SE06	土師器	甑	(24.80)	(17.95)	−	ユビ成形後ナデ	わずかに内湾する体部に直立する口縁部が続く、端部丸い	
136	171	323	SE06	須恵器	杯身	(13.40)	(4.90)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がりほぼ直立、端部丸い、受部ほぼ水平	
136	172	314	SE06	須恵器	杯身	(12.70)	4.90	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	
136	173	316	SE06	須恵器	杯身	12.75	4.90	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	内面に当て具の痕跡
136	174	315	SE06	須恵器	壺	10.50	12.20	−	ロクロナデ、体部外面カキ目、底部外面ヘラケズリ、内面多方向の仕上げナデ	やや扁平な球形の体部から外反して立ち上がる口縁部	
136	175	322	SE06	須恵器	壺	−	(20.40)	−	ロクロナデ、体部外面上半カキ目、下半タタキ後ハケメ？内面下半にユビ押さえ痕。口縁外面凹線文・ヘラ状工具による刺突文	球形の体部から外反して立ち上がる口縁部	外面灰かぶり
138	176	367	SE07	土師器	甕	13.90	20.20	−	口縁部ヨコナデ（ナナメに抜いている）、体部外面ハケ調整後ナデ、内面ユビ成形後下半部ケズリ	球形の体部、口縁部外反して開き（折り曲げて成形か）、端部上方に引き上げる	外面ほぼ全面にべっとりと煤付着
138	177	318	SE07	土師器	高杯（脚部）	−	(6.65)	(9.30)	脚柱部内面絞り目、外面縦方向のハケ調整、裾部内外面ともヨコナデ	屈曲して開く脚部	穿孔は推定三箇所
138	178	319	SE08	須恵器	杯蓋	(13.20)	(4.05)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、口縁部内湾し、端部丸い	
138	179	320	SE08	須恵器	杯身	(15.80)	(3.05)	(8.20)	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	外面に釉付着、重ね焼き痕？
138	180	463	SE09	土師器	甕（口縁）	(17.60)	(4.00)	−	ヨコナデ	内湾気味に立ち上がる口縁部、端部内側に肥厚	口縁部外面に煤付着
138	181	461	SE09	土師器	甕（口縁）	(16.00)	(2.20)	−	ヨコナデ	外反して開く口縁部、端部肥厚して端面を形成	口縁部外面に煤付着
138	182	462	SE09	土師器	甕（口縁）	(17.00)	(2.75)	−	ヨコナデ	内湾気味にカーブして開く、端部外側に引き出す	口縁部外面に煤？付着

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
138	183	465	SE09	土師器	甕（口縁）	(26.50)	(2.55)	−	ヨコナデ	外反して開く口縁	
138	184	330	SE09	土師器	小型丸底壺	(6.10)	6.30	−	口縁部ヨコナデ、体部ユビ成形後ナデ	底の平たい球形の体部から外反気味に立ち上がる口縁部	外面に黒斑
138	185	331	SE09	土師器	小型丸底壺	6.60	(6.40)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面上半ユビ成形後ナデ、下半ヘラケズリ、外面上半ヨコナデ下半ハケ調整	球形の体部から外傾して立ち上がる口縁部	精製土器、外面に黒斑
138	186	332	SE09	土師器	小型丸底壺	(6.50)	(6.30)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面上半ユビナデ、下半ハケ調整、外面上半ハケ調整、下半ナデ	やや扁平ナ球形の体部から外傾して立ち上がる口縁部	
138	187	329	SE09	土師器	高杯	(16.00)	(12.50)	10.40	脚柱部内面ヘラケズリ、裾部ヨコナデ、ヘソ状粘土充填	ゆるやかに屈曲して外反気味に立ち上がる杯部、屈曲して開く脚部	
138	188	328	SE09	土師器	高杯	14.00	11.40	(10.90)	口縁部ヨコナデ、坏部ナデ,脚柱部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整後ヘラミカキ、脚裾部ヨコナデ、ヘソ状粘土充填の痕跡	椀状の杯部、口縁部外反気味に開く、端部丸い、屈曲してほぼ水平に大きく開く裾部	
138	189	327	SE09	土師器	高杯	(19.50)	15.00	(13.00)	口縁部ヨコナデ、坏部ハケ調整後ナデ、脚部ハケ調整後ナデ、脚柱部内面ヘラケズリ、端部ヨコナデ	杯部は屈曲して大きく外方へ開く、ラッパ状に外反して開く脚部、上下端部共わずかに内側に肥厚	内面螺旋状に暗紋
138	190	326	SE09	土師器	高杯（杯部）	(24.00)	(8.40)	−	立上がり部ヨコナデ、受部外面ユビ成形後ナデ	杯部は屈曲して明瞭ナ稜線をナし大きく外方へ開く	クサリ礫
138	191	464	SE09	土師器	高杯（裾部）	−	(2.45)	(10.90)	脚部ヨコナデ、脚柱部内面ヘラケズリ	屈曲して開く脚端部、下方へつまみ出し尖る	
138	192	333	SE09	須恵器	壺	(6.90)	(3.70)	−	ロクロナデ、頸部下端に6条の櫛描き波状文	外反して開く小ぶりの口縁	
140	193	62	SK02 北側側溝部	須恵器	杯蓋	14.00	5.40	−	ロクロナデ、外面天井部ヘラケズリ	天井部丸く稜線明瞭、口縁部内湾し、端部外側に尖る	
140	194	61	SK02 灰色粘土(壁掘割時)	土師器	高杯（杯部）	(14.20)	(5.30)	−	ナデ整形後ヨコナデ、内面仕上げナデ、脚部との接合部にユビ押さえ痕	椀形の杯部で、端部内側につまむ	円板部の継ぎ目で剥離
140	195	63	SK05	土師器	甕（口縁）	(18.90)	(4.30)	−	内面ナデ、外面ハケ整形、口縁部ヨコナデ	外反して開く口縁部、端部は上方につまみ上げ尖る	
140	196	64	SK05	土師器	甕	(14.20)	(15.00)	−	内面ハケ、外面タタキ後ハケ調整、口縁部ヨコナデ（叩き出し）	長胴の体部で、口縁部短く折り曲げる、端部丸い	煤付着
140	197	68	SK13	土師器	複合土器	−	(8.40)	−	内面と外面下半ナデ、外面上半ハケ整形後ヘラミカキ	玉葱状の体部、脚台が付く、円板充填	内面に有機物付着
140	198	370	SK16	土師器	甕（口縁）	(15.70)	(6.50)	−	体部外面横方向の平行タタキ	内湾する体部から外反して開く口縁部	
140	199	373	SK16	土師器	甕（口縁）	(17.60)	(2.70)	−	口縁部ヨコナデ、内面にハケメ痕、体部外面縦方向のハケ調整	ゆるく屈曲して開く口縁部、端部上端に1条の凹線	口縁端部黒変
140	200	371	SK16	土師器	底部	−	(2.15)	4.30	外面に平行タタキ	平底、中央部窪む	
140	201	372	SK16	土師器	底部	−	(3.10)	(2.70)	内面ナデ、外面平行タタキ	平底、中央部窪む	外面黒変
140	202	375	SK16	土師器	底部	−	(2.80)	(5.70)	外面に平行タタキ	平底	外面黒変
140	203	374	SK16	土師器	底部	−	(2.25)	3.85	内面ハケ調整、外面にユビ押さえ痕	平底	外面２/３黒変
140	204	1543	SK17	土師器	高杯（脚柱部）	−	(6.40)	−	脚柱部外面に櫛状工具による直線文、円弧文	外反して開く脚部	
140	205	376	SK17	須恵器	杯蓋	(11.70)	(2.45)	−	ロクロナデ	内湾気味に少し開く口縁部、端部外側に尖る	
140	206	379	SK18	土師器	高杯（杯部）	(13.60)	(4.20)	−	磨滅のため調整不明	椀状の体部、屈曲してほぼ水平に開く口縁部	
140	207	377	SK18	土師器	高杯（脚部）	−	(6.20)	(10.10)	脚柱部内面上端絞り目以下ヘラケズリ、外面平行タタキ後ナデ、裾部ヨコナデ	屈曲して大きく開く脚部	
140	208	378	SK18	土師器	底部	−	(2.35)	(4.20)	磨滅のため調整不明	上げ底状	
140	209	381	SK19	土師器	甕	(12.90)	(5.10)	−	肩部内面にユビ押さえ痕	くの字状に屈曲して内湾気味に開く口縁部、端部内側に肥厚	
140	210	380	SK19	土師器	壺（口縁）	(11.20)	(4.70)	−	口縁部ヨコナデ	外傾して直線的に立ち上がる口縁部	
140	211	74	SK21	土師器	甕	(15.60)	(5.50)	−	口縁部ヨコナデ、内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ整形	くの字状に屈曲して内湾気味に開く口縁部、端部内外に肥厚	
140	212	76	SK21	土師器	甕	(16.20)	(5.60)	−	体部内面ヘラケズリ、外面および口縁部ハケ整形、端部周辺ヨコナデ	内湾する体部からくの字状に屈曲して内湾気味に開く口縁部、端部内外に肥厚	
140	213	75	SK21	土師器	鉢	(22.00)	(10.30)	−	内外面ともハケ整形、口縁端部ヨコナデ	内湾する体部からくの字状に屈曲して直線的に立ち上がる口縁部	
140	214	77	SK21	土師器	甕（体部）	−	(13.50)	−	内面ユビ成形、外面ユビ成形からハケ	下膨れの倒卵形	煤付着、２次焼成

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
140	215	72	SK27	土師器	高杯	(15.00)	(11.10)	−	脚柱部内面ヘラケズリ、絞り目、他はユビ調整・ミカキ	椀形の杯部で端部反り丸い、脚柱部小さく裾部広がる	
140	216	73	SK21	土師器	高杯	24.70	11.90	10.60	脚柱部内面ヘラケズリ、裾部ハケ整形、他はユビ調整・ミカキ	浅い椀形の杯部で端部内側に肥厚、裾部は屈曲して開き端部丸い	円孔は2個？
140	217	382	SK21	須恵器	杯身	(11.20)	(3.40)	−	ロクロナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部ほぼ水平	外面に自然釉、重ね焼き痕
142	218	67	SK23	土師器	壺	(10.10)	18.35	4.80	内外面ともハケ整形、口縁部ヨコナデ	平底から胴の長い算盤玉状の体部、口縁部は外反する	体部下半に焼成後穿孔
142	219	1540	SK23	土師器	壺	(10.70)	(8.40)	−	内面肩部ユビ押さえ痕、以下板ナデ	内湾する体部から外反して開く口縁部、端部丸い	
142	220	385	SK23	弥生土器	壺（口縁）	−	(1.70)	−	垂下した端面に2条の凹線をメぐらし、竹管文円形浮文を貼り付ける	直線的に大きく開く口縁端部を肥厚し垂下させて端面を形成する	
142	221	384	SK23	弥生土器	壺（底部）	−	(3.40)	5.70	磨滅のたメ調整不明	平底	
142	222	383	SK23	弥生土器	底部	−	(3.40)	4.00	磨滅のたメ調整不明	平底、中央部くぼむ	
142	223	70	SK23	弥生土器	器台	−	(8.10)	(13.00)	ユビ成形からヘラ状工具・ハケ整形、ヨコナデ・ナデ	器高の低い器形で外反する裾部、端部丸い	円孔は4方に2段
142	224	71	SK23	土師器	甑	(23.80)	(18.00)	−	ユビ成形からハケ整形、口縁部ヨコナデ	筒状でわずかに内湾する体部、把手剥落	
142	225	69	SK23	須恵器	壺	(18.50)	(5.80)	−	ロクロナデ	外反する口縁部で端部上下に肥厚	
142	226	386	SK26	須恵器	杯身	(9.80)	(3.00)	−	ロクロナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部上向き	
142	227	87	SK28	土師器	甕	(13.60)	(6.00)	−	ハケ整形、口縁部ヨコナデ	直線的ナ体部から屈曲して開き、さらに屈曲して直立する二重口縁、端部内側に肥厚	
142	228	1541	SK28	土師器	壺	−	(4.50)	−	磨滅のたメ調整不明	筒状の頸部から大きく外反して開き、鋭角に屈曲して立ち上がる二重口縁と思われるが、立上がり部が剥落	
142	229	389	SK28	土師器	甕（口縁）	(13.70)	(3.90)	−	口縁部内面ヨコナデ	外傾する口縁部、端部を内側に肥厚	
142	230	388	SK28	土師器	鉢	(11.40)	(2.50)	−	ヨコナデ	椀状の体部、屈曲して小さく開く口縁部	
142	231	387	SK28	土師器	高杯（脚部）	−	(6.50)	(9.40)	脚柱部内面絞り目、外面縦に6面以上の面取り	外反して開く脚部	円孔残存１個
142	232	86	SK29	土師器	小型丸底壺	(6.40)	(6.60)	−	ユビ成形、絞り目、ナデ整形・調整	内湾する体部から外傾し、やや屈曲する口縁部、端部丸い	
142	233	116	SK29	土師器	甕	15.40	(22.40)	(2.80)	口縁部ヨコナデ、体部内面板ナデ、外面平行タタキ	倒卵状の体部、外反して開く口縁部、端部わずかに引き上げる	煤付着、底部2次焼成顕著
142	234	390	SK30	土師器	甕（口縁）	(14.10)	(1.65)	−	ヨコナデ、外面に1条の凹線	屈曲して立ち上がる二重口縁	
142	235	391	SK30	土師器	甕	(15.60)	(4.90)	−	内面口縁部ハケ調整、体部ナデ	外傾して立ち上がる口縁部、端部わずかに肥厚	
142	236	393	SK35	土師器	甕	(13.20)	(3.70)	−	ヨコナデ、内面にハケ調整	内湾気味に立ち上がる口縁部、端部内側に肥厚	外面に煤付着
142	237	392	SK35	土師器	甕（口縁）	(13.00)	(1.80)	−	ヨコナデ	外反して開く口縁部、端部外側に肥厚	
142	238	395	SK35	土師器	甕（口縁）	(15.40)	(1.95)	−	磨滅のたメ調整不明	外反して開く口縁部、端部上方に引き上げる	
142	239	394	SK35	土師器	鉢	(11.80)	(3.55)	−	磨滅のたメ調整不明	椀状の体部、口縁端部丸い	
144	240	397	SK42	土師器	甕（口縁）	(14.40)	(5.15)	−	ヨコナデ	内湾気味に立ち上がる口縁部、端部内側に肥厚	
144	241	396	SK42	土師器	鉢	(13.80)	(5.20)	−	ナデ	椀状の体部から外反して開き、屈曲して立ち上がる二重口縁	
144	242	78	SK42	土師器	高杯（杯部）	(18.80)	(5.70)	−	ユビ成形後下半外面はハケ整形、ヨコナデ	下半は僅かに内湾し、上半は屈曲して外反する、端部丸い	
144	243	84	SK44	土師器	高杯	−	(8.10)	(10.40)	ユビ成形後ナデ、ヨコナデ、脚柱部内面に絞り目	漏斗状に開く裾部	
144	244	85	SK44	土師器	ミニチュア鉢	2.90	2.75	−	ユビ成形後ナデ、手づくね	内湾する、器肉厚く端部丸い	
144	245	369	SK45	土師器	壺	(25.20)	(25.00)	(30.90)	口縁ヨコナデ、内面体部ユビ成形後ナデ、外面頸部〜体部ハケ調整	筒状に立ち上がる頸部から外反して開き、屈曲してさらに外反する二重口縁	雲母土器系
144	246	82	SK45	土師器	甕	(11.80)	(8.00)	−	口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリ、外面ハケ整形	内湾する体部で、口縁部も内湾気味、端部外側につまみ出す	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
144	247	81	SK45	土師器	高杯（脚部）	−	(9.35)	12.00	内面絞り目、裾部ヨコナデ	屈曲して直線的に開く裾部で端部尖る、筒部中央が膨らむ	
144	248	80	SK45	土師器	小型丸底壺	(10.70)	(7.60)	−	ユビ成形からナデ・ヨコナデ後ミカキ	内湾する体部から外方へ直線的に開く口縁部、端部丸い	
144	249	79	SK45	土師器	小型丸底壺	11.90	7.45	−	ユビ成形後、底部はヘラケズリ、ナデ・ヨコナデ	内湾する体部から外方へ内湾気味に開く口縁部、端部尖る	精製土器
144	250	83	SK51	土師器	ミニチュア鉢	(4.70)	(2.15)	−	ユビ成形後ナデ、手づくね	内湾する、端部丸い	外面に黒斑
144	251	126	SK61	土師器	甕	(12.20)	(7.30)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整	内湾する体部からやや内湾気味に開く口縁部、端部外側に尖る	煤付着
144	252	127	SK65	土師器	甕	(14.70)	(14.50)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整	球形の体部から屈曲して開く口縁部、端部丸い	
144	253	128	SK65	土師器	甕	13.45	(10.80)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整	球形の体部、屈曲して内湾気味に開く口縁部、端部内側に肥厚	
144	254	130	SK65	土師器	高杯（杯部）	−	(5.00)	−	磨滅のため調整不明	下半は僅かに内湾し、上半はゆるやかに外反する	
144	255	129	SK65	土師器	高杯（脚部）	−	(6.20)	10.30	脚柱部内面ヘラケズリ、外面ヘラミカキ？	屈曲して開く裾部で端部尖る	
146	256	409	SK64	土師器	甕	(17.70)	(6.95)	−	内面口縁部ヨコ方向のハケ調整、体部ナデ、外面ﾀﾃ方向のハケ調整	わずかに内湾する体部から外方へ直線的に開く口縁部、端部丸い	
146	257	412	SK64	土師器	甕	(18.70)	(11.60)	−	内面口縁部ヨコ方向のハケ調整、体部ナデ	わずかに内湾する体部から外反して開く口縁部、端部丸い	外面に黒斑
146	258	114	SK64	土師器	甕	(21.50)	(14.00)	(25.40)	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面ハケ調整	内湾する体部から外反して開く口縁部、端部丸い	
146	259	1539	SK64	土師器	甕（口縁）	(13.70)	(4.05)	−	口縁部ヨコナデ,内面肩部にユビ押さえ痕	屈曲して立ち上がる二重口縁、端部内側に肥厚	
146	260	408	SK64	土師器	甕（口縁）	(14.70)	(3.75)	−	内面ヨコナデ	屈曲して立ち上がる二重口縁、屈曲部尖る	
146	261	403	SK64	土師器	甕（口縁）	(13.60)	(2.20)	−	ヨコナデ	内湾気味に立ち上がる口縁部、端部内側に肥厚	
146	262	407	SK64	土師器	甕（口縁）	(14.30)	(3.20)	−	内面、横方向のハケ調整	内湾気味に立ち上がる口縁部、端部外側へ引き出す	
146	263	95	SK64	土師器	ミニチュア鉢	(3.80)	3.00	2.10	ユビ成形からナデ	平底から僅かに内湾する、端部丸い	
146	264	96	SK64	土師器	ミニチュア鉢	(5.40)	(3.00)	−	ユビ成形・調整	内湾する、端部丸い	黒斑
146	265	93	SK64	土師器	製塩土器	−	(5.90)	4.10	外面タタキ、内面ユビ成形後ナデ	丸底だが平たい底、体部直線的に開く	
146	266	94	SK64	土師器	甑（把手）	−	−	−	ユビ成形からナデ、ハケ整形	先の尖った把手、上方へ延びる	
146	267	406	SK64	須恵器	杯蓋	(14.10)	(3.75)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾し、端部外側に尖る	
146	268	405	SK64	須恵器	杯蓋	(13.40)	(3.75)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾し、端部外側に尖る	
146	269	91	SK64	須恵器	杯蓋	(13.80)	4.90	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	明瞭ナ稜線を持たナい、端部は外側につまみ出し尖る	
146	270	414	SK64	須恵器	甕（口縁）	(47.30)	(10.80)	−	ロクロナデ	外反する口縁部、端部に段をナす	外面に自然釉
146	271	411	SK64	須恵器	杯身	(10.80)	(4.05)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり外反気味に内傾、端部丸い、受部短い	
146	272	88	SK64	須恵器	杯身	(12.20)	5.10	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	立上がり内傾し端部丸い、受部は短く丸い、底尖り気味	外面に重ね焼の痕跡、自然釉
146	273	92	SK64	須恵器	杯身	(12.80)	4.90	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり外反気味に内傾、受部短い	
146	274	90	SK64	須恵器	杯身	8.70	3.30	−	ロクロナデ、底部ヘラ切り後ヘラ調整	受部水平で突出、立上がり内傾、底部は平たく体部直線的	蓋の可能性あり
146	275	413	SK64	須恵器	杯身	(10.90)	(3.35)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり外反気味に内傾し、端部外側に尖る	
146	276	89	SK64	須恵器	杯身	(11.30)	4.40	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり外反気味に内傾し、端部外側に尖る	
146	277	404	SK64	須恵器	杯身	−	(4.35)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	立上がりは内傾、受部は短く丸い	
146	278	1542	SK64	須恵器	高杯（杯部）	−	(4.20)	−	ロクロナデ	内湾する体部で立上がりほぼ直立、受部水平に延びる	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
146	279	410	SK64	須恵器	高杯（脚部）	－	(3.15)	(9.20)	ロクロナデ、脚端部に1条の凹線	外反して開く脚部、端部を下方へ引き出す	透かしの痕跡あり
146	280	402	SK64	須恵器	短頸壺	(10.80)	(3.00)	－	ロクロナデ	内傾気味に立ち上がる口縁部、端部外側に尖る	
146	281	401	SK64	須恵器	脚	－	(7.65)	(11.40)	ロクロナデ	外反気味に開く脚部、端部を肥厚	外面に自然釉
146	282	451	SK64	土製品	土錘	1.90	12.20	3.80	ユビ成形後ナデ	長い円筒形	
146	283	438	SK64	土製品	土錘	3.50	10.80	5.15	ヘラ調整	円筒形	
146	284	455	SK64	土製品	羽口	4.20	(12.90)	6.20	ユビ成形後ナデ?	円錐状	端部にガラス質付着
148	285	115	SK66	土師器	甕	(14.00)	21.50	19.90	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整	球形の体部から屈曲して内湾気味に開く口縁部、端部内側に肥厚	煤、炭化物付着
148	286	1532	SK66	土師器	甕	(16.30)	(4.70)	－	体部内面ユビ押さえ痕	内湾する体部から外反して開き、屈曲して立ち上がる二重口縁	煤付着、2次焼成
148	287	1526	SK67	土師器	壺	12.90	(5.45)	－	口縁部ヨコナデ、内面肩部ユビ押さえ	筒状の頸部からわずかに外反して開く口縁部、端部丸い	
148	288	131	SK67	土師器	壺（口縁）	(18.40)	(3.40)	－	口縁端部に櫛状工具により綾杉様刺突文・竹管文円形浮文貼付	内湾気味に開く口縁部、端部を上下に大きく肥厚し垂下	
148	289	132	SK68	土師器	鉢	11.60	(6.80)	－	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、肩部ユビ押さえ、外面ハケ後ナデ	内湾する体部から外反して開き、屈曲して立ち上がる二重口縁	煤付着
148	290	1530	SK68	土師器	高杯（脚部）	－	(2.80)	10.00	内面ナデ、端部にユビ押さえ、端面に１条の沈線	屈曲して開く裾部	円孔１個残存
148	291	1538	SK71	土師器	壺（口縁）	(23.10)	(2.85)	－	口縁部ヨコナデ、立上り部内外面に櫛描波状文・直線文、端部に刻み目	大きく外方に開く口縁部、端部を上下に大きく肥厚し垂下	
148	292	415	SK72	土師器	高杯（杯部）	(14.70)	(5.40)	－	口縁部ヨコナデ、基部にハケ調整	内湾気味に開く杯部、口縁端部は丸い	
148	293	417	SK72	土師器	高杯（脚部）	－	(7.20)	(10.50)	磨滅のため調整不明	屈曲して大きく開く脚部	
148	294	416	SK72	土師器	高杯（脚部）	－	(9.80)		内面ヘラケズリ	外反して大きく開く脚部	
148	295	1528	SK75	須恵器	高杯（杯部）	(10.80)	(3.20)	－	ロクロナデ、外面に凹線・櫛状工具刺突文	内湾して立ち上がる杯部、端部をわずかに外反させる	内面に自然釉
148	296	456	SK79	土師器	製塩土器	(5.80)	(4.20)	－	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	内湾気味の筒状の体部から、わずかに外反する口縁部、薄手	
148	297	1529	SK77	須恵器	はそう（口縁）	(9.80)	(2.30)	－	ロクロナデ、外面に凹線・櫛描波状文	内湾して立ち上がる口縁部、端部をわずかに外反させる	
148	298	431	SK86	土師器	甕（口縁）	(14.00)	(3.95)	－	内面ヨコナデ	くの字状に屈曲して開く口縁、端部を内側に肥厚	
148	299	147	SK88	土師器？	製塩土器？	－	(3.30)	5.70	内面ナデ、外面タタキ後ユビ成形により底部作り出す	外側に踏ん張って開く底部	二次焼成、煤付着
148	300	150	SK89	土師器	壺	(9.50)	(8.00)	－	口縁部ヨコナデ、内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ?	玉葱状の体部から外傾して短く立ち上がる口縁、脚台が付く？	内面に炭化物、外面二次焼成、煤付着
148	301	148	SK89	須恵器	杯蓋	(14.40)	(4.10)	－	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾気味、端部外側に尖る	
148	302	149	SK89	須恵器	杯身	(14.40)	(4.20)	－	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部やや上向き	
148	303	1531	SK94	土師器	壺	(16.20)	(5.35)	－	磨滅のため調整不明	筒状の頸部から外反し、屈曲して立ち上がる二重口縁、端部水平に肥厚	
148	304	151	SK95	土師器	高杯（杯部）	16.00	(6.60)	－	口縁部ヨコナデ、杯部内面ナデ、外面ユビ成形後ナデ、円盤充填	椀状の杯部から外反して開く口縁部、端部上方へ引き上げる	
150	305	120	SK80	土師器	壺	15.00	(8.20)	－	口縁部ヨコナデ、内面口頸部ヘラミカキ、肩部ユビ成形後ナデ、外面ヘラミカキ	筒状の頸部から外反して開き屈曲して立ち上がる二重口縁	
150	306	121	SK80	土師器？	壺	－	(17.20)	－	頸部外面ハケ調整後ナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ヘラミカキ	球形の体部から外反して開く口縁	煤付着
150	307	419	SK80	土師器	甕（口縁）	(15.70)	(2.50)	－	口縁部ヨコナデ、頸部外面にタタキメ（叩出し口縁）	外傾して開く口縁、端部丸い	
150	308	418	SK80	土師器	甕	(13.20)	(5.10)	－	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面タタキメ	内湾する体部から屈曲し、外反して開く口縁、端部丸い	
150	309	422	SK80	土師器	甕	(12.90)	(5.40)	－	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面タタキメ	内湾する体部から屈曲し、外反して開く口縁、端部丸い	
150	310	420	SK80	土師器	甕	(13.90)	(5.05)	－	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ハケ調整゛、外面タタキメ	外反して開く口縁、端部に1条の凹線＋刻み目	
150	311	118	SK80	土師器	甕	15.00	(20.20)	－	口縁部ヨコナデ、体部内面上半ユビ成形後ナデ、下半ヘラケズリ、外面ハケ調整	球形の体部からくの字状に屈曲して開く口縁、端部内面に肥厚	煤付着

図版No.	報告No.	実測番号	出土地	種別	器種	口径	器高	底径	技法　他	形態の特徴	備　考
			遺構・土層			(cm)	(cm)	(cm)			
150	312	421	SK80	土師器	甕	−	(15.30)	−	体部内面上半ナデ、下半ヘラケズリ、外面タタキ	倒卵状の体部、底部やや尖り不安定	外面黒変。
150	313	426	SK80	土師器	甕（口縁）	(11.70)	(1.80)	−	口縁部ヨコナデ、端部外面に2条の凹線	口縁端部を上方へ引き上げる	
150	314	427	SK80	土師器	甕（口縁）	(11.80)	(2.45)	−	磨滅のため調整不明	外反して開く口縁部、端部丸い	
150	315	117	SK80	土師器	甕	13.60	19.00	3.90	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面タタキ後ナデ、底部ケズリ後未調整	倒卵状の体部、外反して開く口縁、底部不安定	煤付着。内面に有機物
150	316	125	SK80	土師器	小型丸底壺	−	(7.40)	−	内面頸部ハケ調整、体部ユビ成形後ナデ、外面ナデ	やや扁平ナ球形の体部から外傾気味に立ち上がる頸部	内面に有機物付着、底部に植物圧痕
150	317	122	SK80	土師器	小型丸底壺	8.60	9.70	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面上半ナデ、下半ハケメ	やや扁平ナ球形の体部から外傾気味に立ち上がる口頸部	
150	318	123	SK80	土師器	小型丸底壺	7.00	9.10	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面上半板ナデ、下半ナデ、手づくね風	球形の体部から外傾気味に立ち上がる口頸部、端部丸い	黒斑
150	319	124	SK80	土師器	小型丸底壺	−	(9.60)	−	内面ユビ成形後ナデ、外面上半ナデ、下半ユビ成形後板ナデ	やや扁平ナ球形の体部	
150	320	1533	SK80	土師器	小型丸底壺	−	(6.15)	−	内面板ナデ、外面上半ヘラミカキ、ていねいナつくり	やや扁平ナ球形の体部、丸底だがわずかにくぼむ	雲母細粒多数含む
150	321	425	SK80	土師器	底部	−	(5.55)	4.50	内面ナデ、底部放射状に板状工具の痕跡、外面下半にハケ調整	直線的に外方へ開く体部、底部はドーナツ状上げ底で、少し外方へ踏ん張る	内面底部に板状工具の痕跡が放射状に残る
150	322	424	SK80	土師器	鉢	(14.60)	6.05	−	全体にヘラミカキ、外面下半は密、上半はやや粗い	半球状の体部、口縁端部は丸い	
150	323	423	SK80	土師器	竈？	(27.00)	(3.90)	−	内面ヨコナデ	外方へ開く口縁、端部上下に肥厚	
152	324	1527	SK84	土師器	壺	(12.10)	(4.65)	−	内外面ともに横方向のハケ調整	屈曲して上方へ立ち上がる二重口縁、端部丸い	
152	325	1535	SK84	土師器	小型丸底壺	(9.60)	(5.40)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ケズリ、外面ハケ調整	球形の体部から外傾して開く口縁部、端部丸い	
152	326	119	SK84	土師器	甕	(14.90)	24.00	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ユビ成形後ハケ調整	球形の体部から外反して開く口縁部、端部丸い	煤付着
152	327	108	SK84	土師器	小型丸底壺	(11.40)	13.60	−	口縁部ハケ調整後ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整後肩部・底部ナデ	やや扁平ナ球形の体部から外傾して開く口頸部、端部尖る	
152	328	109	SK84	土師器	小型丸底壺	(10.40)	14.90	−	口縁部ハケ調整後ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整後ナデ	やや肩の張る球形の体部から外傾して開く口頸部、端部尖る	肩部に焼成後（？）穿孔
152	329	138	SK84	土師器	小型丸底壺	(9.20)	10.80	−	口縁部ハケ調整、体部内面ユビ成形後ケズリ、外面ハケ調整	やや扁平ナ球形の体部、丸底だがわずかにくぼむ、外傾して開く口縁部、端部尖る	煤付着
152	330	139	SK84	土師器	小型丸底壺	−	(8.85)	−	口縁部ハケ調整、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整、下半ナデ	やや扁平ナ球形の体部から外傾して開く口縁	
152	331	429	SK84	土師器	小型丸底壺	−	(8.40)	−	体部内面ナデ	やや扁平ナ球形の体部から外傾気味に立ち上がる頸部	
152	332	102	SK84	土師器	小型丸底壺	7.60	10.30	−	口縁部ハケ調整後ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整後ナデ	やや扁平ナ球形の体部から外傾する口縁部、端部尖る	底部外面に植物繊維圧痕
152	333	135	SK84	土師器	小型丸底壺	(9.25)	10.62	−	口縁部ハケ調整後ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整後ナデ	やや扁平ナ球形の体部から外傾する口縁部、端部尖る	煤付着
152	334	133	SK84	土師器	小型丸底壺	9.50	8.90	−	口縁部ヨコナデ、内面ハケ調整、体部内面ユビ成形後ケズリ、外面ハケ調整後ナデ	やや扁平ナ球形の体部から外傾する口縁部、端部尖る	外面に黒斑
152	335	430	SK84	土師器	小型丸底壺	−	(7.30)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ハケ調整、外面ハケ調整	やや扁平ナ球形の体部から外傾する口縁部	
152	336	107	SK84	土師器	小型丸底壺	−	(7.70)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、底部に放射状ヘラ圧痕、外面ナデ	やや扁平ナ球形の体部から外傾する口縁部	底部外面に植物繊維圧痕
152	337	142	SK84 第1層	土師器	小型丸底壺	−	(5.10)	−	内面ユビ成形後板ナデ・ナデ、外面ハケ調整	算盤玉状の体部	
152	338	141	SK84 第2層	土師器	小型丸底壺	(9.20)	(9.85)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整	算盤玉状の体部から外傾する口縁部、端部丸い	
152	339	106	SK84	土師器	小型丸底壺	(8.30)	10.40	−	口縁部ハケ調整後ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面上半ハケ調整後ナデ、下半ケズリ後ナデ	肩の張る体部から外反して開く口縁部、端部丸い	煤付着？
152	340	137	SK84	土師器	小型丸底壺	(8.10)	9.40	−	口縁部ハケ調整後ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整後ナデ	やや扁平ナ球形の体部から外傾する口縁部、端部丸い	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地	種別	器種	口径	器高	底径	技法　他	形態の特徴	備　考
			遺構・土層			(cm)	(cm)	(cm)			
152	341	136	SK84	土師器	小型丸底壺	7.30	9.42	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ヘラ状工具によるナデ	やや扁平ナ球形の体部から外傾する口縁部、端部丸い	煤付着？
152	342	134	SK84	土師器	小型丸底壺	(8.10)	9.85	−	口縁部ヨコナデ、外面一部ヘラミカキ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整後ナデ	やや扁平ナ球形の体部から外傾する口縁部、端部尖る	
152	343	103	SK84	土師器	小型丸底壺	8.40	8.70	−	口縁部ヨコナデ、内面にハケ調整痕、内面ユビ成形後ナデ、外面上半ナデ、下半ヘラケズリ	算盤玉状の体部からわずかに外反する口縁部、端部尖る	
152	344	140	SK84	土師器	小型丸底壺	−	(7.60)	−	内面ユビ成形後ナデ、外面上半ナデ、下半ハケ調整	算盤玉状の体部	
152	345	428	SK84	土師器	小型丸底壺	−	(6.85)	−	体部内面ユビ成形痕、外面ハケ調整痕	やや扁平ナ球形の体部から外傾する口縁部	
152	346	104	SK84	土師器	小型丸底壺	8.40	8.30	−	口縁部ハケ調整後ヨコナデ、内面ユビ成形後ナデ、外面上半ナデ、下半ケズリ	やや扁平ナ球形の体部から外傾する口縁部、端部丸い	
152	347	99	SK84	土師器	小型丸底壺	7.80	8.60	−	口縁部ハケ調整後ヨコナデ、内面ユビ成形後ナデ、外面上半ハケ調整゛、下半ユビ成形後ナデ	やや扁平ナ球形の体部から外傾する口縁部、端部丸い	
152	348	98	SK84	土師器	小型丸底壺	8.30	9.30	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形・調整、外面板ナデ	球形の体部から外傾する口縁部、端部丸い	
152	349	100	SK84	土師器	小型丸底壺	7.00	8.40	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、下半ハケ調整、外面調整後ナデ	算盤玉状の体部から外傾する口縁部、端部尖る	
152	350	101	SK84	土師器	小型丸底壺	7.00	9.80	−	口縁部ハケ調整後ヨコナデ、体部ユビ成形後ナデ	球形の体部から外傾する口縁部、端部丸い	
152	351	105	SK84	土師器	小型丸底壺	18.20	9.60	−	口縁部ハケ調整後ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整後ナデ	球形の体部から外傾する口縁部、端部丸い	黒斑。植物繊維状の圧痕多数
156	352	143	SK84	土師器	高杯（杯部）	17.80	(5.10)	−	口縁部ヨコナデ、杯部内面ナデ、ヘラ圧痕・条痕、外面ユビ成形後ナデ	皿状の杯部から外反気味に開く口縁部、端部丸い	二次焼成
156	353	145	SK84	土師器	高杯（杯部）	15.90	(5.70)	−	口縁部ヨコナデ、杯部内面ナデ、外面ハケ調整後ナデ	皿状の杯部から外反気味に開く口縁部、端部丸い	
156	354	144	SK84	土師器	高杯	18.50	(11.20)	−	口縁部ヨコナデ、杯部内面ナデ、外面ハケ調整、脚部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整後ヘラミカキ	皿状の杯部から外反気味に開く口縁部、端部丸い、脚部外反して開く	
156	355	112	SK84	土師器	高杯（杯部）	(19.30)	(6.60)	−	口縁部ヨコナデ、杯部内面ナデ、外面ハケ調整	皿状の杯部から外反気味に開く口縁部、端部丸い	
156	356	111	SK84	土師器	高杯（杯部）	−	(6.20)	−	内面ユビ成形後ナデ、外面立上がり部ハケ調整後ヨコナデ、受部ハケ調整	屈曲して外傾する杯部	
156	357	110	SK84	土師器	高杯（杯部）	−	(6.20)	−	内面ナデ、外面立上がり部ハケ調整後ヨコナデ、受部ハケ調整	屈曲して外反し立ち上がる杯部	煤付着
156	358	146	SK84	土師器？	高杯（杯部）	(24.60)	(5.80)	−	口縁部ヨコナデ、内面板ナデ、外面ハケ調整後ヨコナデ	屈曲して外反し立ち上がる杯部、端部丸い	
156	359	113	SK84	土師器	高杯（脚部）	−	(7.50)	10.70	脚部内面上端絞り目、以下ヘラケズリ、外面ハケ調整後ヘラミカキ、脚端部ナデ	屈曲して開く脚端部、端部丸い	
156	360	1537	SK96	土師器	小型丸底壺	(13.10)	(4.70)	−	口縁部ヨコナデ、肩部外面ハケ調整	屈曲して立ち上がる二重口縁、端部丸い	煤付着
156	361	152	SK102	土師器	鉢？	8.70	5.70	8.50	ロクロナデ、体部外面下半ヘラケズリ、底部ヘラ切り後ユビ成形後ナデ	内湾して立ち上がる体部、屈曲して内側に入る口縁部、平底	煤付着。二次焼成
156	362	1536	SK107	土師器	小型丸底壺	(9.20)	(5.35)	−	口縁部内面から外面細かいヘラミカキ、体部内面ナデ	球形の体部から外傾する口縁部、端部丸い	
156	363	154	SK111	土師器	鉢	(10.20)	5.05	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面ユビ成形後ナデ	内湾する体部、わずかに外反する口縁部、端部外側にひねり出す	ヘラ状工具による圧痕
156	364	155	SK111	須恵器	把手付鉢	(6.60)	(7.20)	−	ロクロナデ、底部ヘラ切り後ナデ、外面に凹線・櫛描波状文	コップ状に内湾して立ち上る体部、端部丸い、把手の貼付け部が残る	工具圧痕
156	365	153	SK111	土師器	高杯	(13.10)	11.80	(10.00)	脚柱部内面絞り目、外面ヘラミカキ、接合部外面ユビ押さえ痕	椀状の杯部、端部丸くわずかに内側に肥厚、脚部外反して開く	脚端に煤付着、二次焼成、3方に円孔
156	366	452	SK111	土製品	土錘	2.00	8.60	4.00	ユビ成形後ナデ？	紡錘形	
156	367	1534	SK118	土師器	壺	(13.80)	(4.35)	−	口縁部内面ハケ調整後ヨコナデ	屈曲して立ち上がる二重口縁、端部内側に肥厚	
156	368	156	SK118	土師器	高杯（杯部）	−	(5.60)	−	磨滅のためメ調整不明、粘土充填	屈曲して外反気味に立ち上がる杯部	
156	369	157	SK121	土師器	小型丸底壺	−	(9.40)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面上半ナデ、下半ヘラケズリ	球形の体部から外傾して立ち上がる口頸部	
158	370	167	SX01	土師器	甕（口縁）	(14.60)	(6.20)	−	頸部ヨコナデ	屈曲してほぼ垂直に立ち上がる二重口縁、端部肥厚し丸い	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地	種別	器種	口径	器高	底径	技法　他	形態の特徴	備　考
			遺構・土層			(cm)	(cm)	(cm)			
158	371	161	SX01	土師器	壺	(18.80)	(7.30)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整	屈曲してほぼ垂直に立ち上がる二重口縁、端部水平に肥厚	化粧土上塗。搬入土器
158	372	158	SX01	土師器?	壺	(15.10)	(13.20)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ヘラケズリ、外面ハケ調整後ヨコナデ	外傾して立ち上がる口縁部、端部水平に肥厚	
158	373	176	SX01	土師器	甕	(13.80)	(3.10)	−	口縁部ヨコナデ、肩部内面ヘラケズリ？端部外面に疑凹線	屈曲してほぼ垂直に立ち上がる二重口縁、端部わずかに肥厚	
158	374	169	SX01	土師器	甕	(13.40)	(4.10)	−	口縁部ヨコナデ、肩部内面ユビ押さえ痕、外面ハケ調整？	外傾して立ち上がる口縁部、端部内側に肥厚	
158	375	165	SX01	土師器	甕	11.60	(7.60)	−	口縁部ヨコナデ、内面肩部ナデ、体部ヘラケズリ	肩の張る体部から外反して開く口縁部、端部丸い	
158	376	175	SX01	土師器	小型丸底壺	(9.00)	(6.70)	−	口縁部ヨコナデ、体部ユビナデ	球形の体部から外傾して立ち上がる口縁部、端部丸い	
158	377	170	SX01	土師器	小型丸底壺	−	(6.60)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面上半ハケ調整後ナデ、下半ヘラケズリ後ハケ調整後ナデ	やや扁平ナ球形の体部から外傾して立ち上がる口縁部	焼成後穿孔？
158	378	164	SX01	土師器	丸底壺	(9.50)	13.10	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整	やや扁平で肩の張る球形の体部から外傾して立ち上がる口縁部	外面体部下半に煤付着
158	379	171	SX01	土師器	高杯（杯部）	18.00	(5.50)	−	ユビ成形後ナデ、口縁端部に1条の凹線	皿状の杯部からわずかに外反して開く口縁部	
158	380	160	SX01	土師器	高杯（杯部）	(20.00)	(5.10)	−	磨滅のたメ調整不明	屈曲して外反気味に立ち上がる杯部、端部丸い	
158	381	159	SX01	土師器	高杯（杯部）	(23.40)	(7.50)	−	磨滅のたメ調整不明	屈曲して外方に立ち上がる杯部、外反して開く口縁部	
158	382	163	SX01	土師器	高杯	15.00	12.80	10.70	磨滅のたメ調整不明	椀状の杯部から外反気味に開く口縁部、端部丸い、脚部屈曲して開く	
158	383	162	SX01	土師器	高杯（脚部）	−	(6.90)	(10.70)	脚柱部内面ケズリ、外面ヘラミカキ	らっぱ状に開く脚部、端部丸い	二次焼成
158	384	168	SX01	土師器	製塩土器	−	(3.25)	(2.80)	体部外面タタキ、脚台部ユビ押さえ痕	椀状の体部、脚部外側に開く	
158	385	172	SX01	土師器	手焙り形土器	−	(8.30)	−	覆い部内外面ともにハケ調整	半円形覆い部の縁はT字形に拡張（内側部分は剥落）	
158	386	173	SX01	須恵器	高杯（杯部）	(14.60)	(5.60)	−	ロクロナデ	椀状の杯部、口縁端部丸い	内面に自然釉
158	387	174	SX01 a区	須恵器	はそう？	(13.00)	(7.50)	−	ロクロナデ、口頸部外面屈曲部に凹線、口縁部に1帯、頸部に2帯の櫛描波状文	外反する頸部から屈曲して外方へ開く二重口縁	
158	388	1506	SX01 a区	須恵器	装飾壺	(3.50)	(2.85)	−	ロクロナデ	外反気味に立ち上がる口縁部、口径小	
158	389	1504	SX01 a区	須恵器	壺	−	(3.60)	−	ロクロナデ	ほぼ直立して立ち上がる口頸部	外面に自然釉
158	390	166	SX01	土師器	ミニチュア鉢	−	(3.55)	−	ユビ成形後ナデ、手づくね	倒卵状の体部、不安定だが平底状	
158	391	178	SX01	土師器	ミニチュア鉢	3.60	2.40	−	ユビ成形後ナデ、手づくね	浅い椀状、ゆがみが大きい	
158	392	177	SX01	土師器	ミニチュア鉢	(7.40)	(4.60)	(3.40)	ユビ成形後ナデ、手づくね	内湾気味に外方へ開く体部、ゆがみが大きい	
158	393	1505	SX01 a区	土師器	甑？（把手）	−	(3.40)	−	ユビ成形後ナデ、接合部付近にハケ調整痕	上方に延びる、扁平	
160	394	1509	SX03 b区	土師器	甕	(20.10)	(8.50)	−	口縁部ヨコナデ、体部外面平行タタキ	内湾する体部から屈曲して開く口縁部、端部わずかに肥厚	
160	395	213	SX03	土師器？	甕	(18.40)	(4.50)	−	磨滅のたメ調整不明	外反して開く口縁部、端部丸い	二次焼成
160	396	182	SX03 b区	土師器	甕	(14.80)	(7.95)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整？	内湾する体部から外傾気味に立ち上がる口縁部、端部上方へ引上げる	
160	397	219	SX03 d区	土師器	甕	(13.70)	(9.70)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ハケ調整後ナデ、外面ハケ調整	内湾する体部から外傾して立ち上がる口縁部、端部丸い	二次焼成
160	398	216	SX03 d区	土師器	甕	(13.20)	(12.30)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ハケ調整、外面ハケ調整	内湾する体部から外反して立ち上がる口縁部、端部丸い	外面全面に煤付着
160	399	183	SX03 d区	土師器	鉢	(13.60)	11.40	8.00	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ナデ？	やや扁平ナ体部から外傾して開く口縁部、端部丸い、平底	
160	400	217	SX03 d区	土師器	ミニチュア鉢	(6.00)	5.00	(4.00)	ユビ成形後ナデ、手づくね	内湾気味に立ち上がる体部、ゆがみが大きい	底に細い竹管状に貫通孔？

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
160	401	212	SX03 a区	土師器	鉢（底部）	－	(2.70)	4.50	体部ナデ、底部ユビ成形	外側に踏ん張って開く上げ底状	
160	402	211	SX03	土師器	鉢	10.40	8.00	6.00	口縁部ヨコナデ、体部ユビ成形後ナデ、底部ユビ成形	椀状の体部にわずかに外反する口縁部、底部は外側に踏ん張って開く上げ底状	二次焼成？
160	403	457	SX03	土師器	鉢	(10.40)	(4.40)	－	ユビ成形後ナデ	椀状の体部	二次焼成
160	404	218	SX03 d区	土師器	鉢	12.10	6.00	－	口縁部ヨコナデ、体部ユビ成形後ナデ	椀状の体部、端部丸い	二次焼成
160	405	215	SX03 d区	土師器	甕	(21.40)	(9.40)	－	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整	内湾する体部から屈曲して開く口縁部、端部はわずかに上方へ引き上げる	二次焼成
160	406	223	SX03 d区	土師器	甕	19.90	(31.80)	－	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整	長胴形の体部から外反して開く口縁部、端部わずかに上方へ引き上げる	表面に化粧土塗布、外面に煤付着、内面に炭化物付着
160	407	222	SX03 d区	土師器	甕	(24.50)	(11.50)	－	口縁端部ヨコナデ、内面口縁部ハケ調整、体部ナデ、外面ハケ調整	内湾する体部から屈曲し大きく外反して開く口縁部、端部丸い	外面に煤付着
160	408	221	SX03 d区	土師器	甑	(22.00)	(18.40)	－	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ハケ調整後ナデ、外面ハケ調整、把手部ユビ成形後ナデ	外傾して開く体部、口縁部は直線的に続く、把手は2方、上方へ延びる	
162	409	214	SX03 d区	土師器	甑	(21.00)	(12.70)	－	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ヘラケズリ、把手部ユビ成形後ナデ	外傾して開く体部、口縁部は直線的に続く、把手は２方、上方へ延びる	
162	410	1513	SX03	土師器	甑（把手）	－	(4.80)	－	ユビ成形後ナデ	上方に延びる	
162	411	1515	SX03 c区	土師器	甑（把手）	－	(4.20)	－	磨滅のたメ調整不明	上方に延びる	
162	412	1514	SX03 d区	土師器	甑（把手）	－	(12.20)	－	体部外面ハケ調整、把手部ユビ成形後ナデ	上方に延びる、扁平ナ把手	
162	413	1516	SX03 d区	土師器	甑（把手）	－	(9.40)	－	体部内面ナデ、外面ハケ調整、把手部ユビ成形後ナデ、両側面にハケ調整痕	上方に延びる、扁平ナ把手	
162	414	197	SX03 a区	須恵器	杯蓋	(14.30)	4.30	－	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線不明瞭、口縁部内湾気味、端部外側に尖る	天井部にヘラ記号
162	415	196	SX03 d区, SX05 d区	須恵器	杯蓋	(15.70)	5.10	－	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線不明瞭、口縁部内湾気味、端部外側に尖る	天井部にヘラ記号
162	416	187	SX03 a区	須恵器	杯身	(11.80)	4.55	4.60	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部上向き	
162	417	185	SX03 b区	須恵器	杯身	12.80	5.10	－	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部ほぼ水平	
162	418	184	SX03	須恵器	杯身	(11.10)	(4.65)	－	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部ほぼ水平	外面に自然釉
162	419	179	SX03 d区	須恵器	杯身	(12.70)	(4.65)	－	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部尖る、受部上向き	
162	420	180	SX03 d区, SX05 d区	須恵器	杯蓋	14.30	4.50	－	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ・当て具痕	天井部丸く、稜線不明瞭、口縁部内湾気味、端部外側に尖る	419の蓋？内面に当て具の痕跡残る
162	421	191	SX03 d区, SX05 d区	須恵器	杯蓋	15.50	4.70	－	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線不明瞭、口縁部内湾気味、端部外側に尖る	外面に自然釉。二次焼成か？内面口縁一部に自然釉
162	422	192	SX03 d区, SX05 d区	須恵器	杯蓋	(18.60)	(6.60)	－	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線不明瞭、口縁部わずかに外反、端部外側に尖る	
162	423	200	SX03 d区	須恵器	杯蓋	(15.40)	3.70	－	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部平らでわずかに稜線、口縁部内湾気味、端部外側に尖る	
162	424	199	SX03	須恵器	杯身	12.80	5.10	－	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部やや上向き	
162	425	201	SX03 d区	須恵器	杯身	(12.80)	4.60	－	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部やや上向き	外面に薄く自然釉
162	426	188	SX03 a区	須恵器	杯身	(12.80)	(4.30)	－	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	
162	427	256	SX03 d区, SX05 d区	須恵器	杯身	(12.70)	4.20	－	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
162	428	190	SX03 d区, SX05 d区	須恵器	杯身	(14.00)	4.40	(3.40)	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	
162	429	1511	SX03	須恵器	杯蓋	−	(2.00)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸い	天井部にヘラ記号
162	430	1512	SX03 a区	須恵器	杯蓋	−	(2.90)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸い、わずかに稜線	天井部にヘラ記号
162	431	1510	SX03 d区	須恵器	杯身	−	(3.80)	−	ロクロナデ	内湾する体部で立上がり内傾、受部ほぼ水平	底部にヘラ記号
162	432	186	SX03 d区, SX05 d区	須恵器	杯身	(11.70)	(4.70)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部上向き	底部外面に自然釉。ヘラ記号
164	433	195	SX03 d区	須恵器	甕（口縁）	(50.20)	(3.70)	−	口縁部ロクロナデ、外面に櫛描波状文２帯・凹線	外反して大きく開く口縁部、端部を肥厚・垂下	
164	434	193	SX03	須恵器	甕	(17.00)	(8.75)	−	口縁部ロクロナデ、体部内外面タタキ、外面カキ目	内湾する体部から外反して開く口縁部、端部を肥厚	
164	435	181	SX03 a区	須恵器	壺	(16.40)	(10.75)	−	ロクロナデ	体部から外反して開く口縁部、端部を上方へ引き上げ、口縁直下に突帯	口縁部の一部に自然釉
164	436	194	SX03 a区	須恵器	杯蓋	(14.70)	(4.05)	−	ロクロナデ	天井部丸く、強いナデによりわずかに稜線、口縁部内湾気味、端部外側に尖る	
164	437	198	SX03	須恵器	壺	(7.20)	(5.00)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	扁平で肩の張る体部から内傾して立ち上がる短い口縁部､端部丸い	
164	438	189	SX03 a区	須恵器	はそう	−	(11.90)	−	ロクロナデ、外面体部中位にカキ目、底部に仕上げナデ	やや扁平ナ球形の体部から外反気味に立ち上がる口頸部	体部中位に円孔１個穿つ、全体に自然釉
164	439	437	SX03 a区	土製品	土錘	1.90	11.30	4.65	ユビ成形後ナデ？	紡錘形	
164	440	220	SX03 a区	土製品？	支脚？	−	13.00	9.20	ユビ成形後ナデ？	円筒状、上端が細くナる。	二次焼成
164	441	209	SX04 c区	土師器	甕	(18.40)	(8.20)	−	体部内面にヘラケズリ？	内湾する体部から外傾して開く口縁部、端部外方に尖る	
164	442	208	SX04 c区	弥生土器	器台	−	(12.65)	−	ハケ調整後ナデ？	筒状の体部から外反して開く脚部	円孔は４方に３段
164	443	1507	SX04	土師器	甑（把手）	−	(8.60)	−	ユビ成形後ナデ？	上方に延びる	
164	444	205	SX04	須恵器	杯蓋	(13.60)	(4.70)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラ切り後ヘラケズリ	天井部丸く、稜線不明瞭、口縁部外反気味、端部外側に尖る	
164	445	202	SX04 c区	須恵器	杯蓋	(15.10)	(4.80)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線不明瞭、口縁部内湾気味、端部外側に尖る	
164	446	207	SX04	須恵器	蓋	4.65	2.45	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線外側に大きく突出、口縁部外反気味	
164	447	204	SX04	須恵器	蓋（つまみ）	−	(1.60)	−	ロクロナデ、内面に仕上げナデ	平らナ天井部、中央の窪むボタン状のつまみ	
164	448	203	SX04	須恵器	椀	(9.80)	(5.35)	−	ロクロナデ、外面に櫛描波状文・凹線	内湾する体部からわずかに外反して開く口縁部、端部尖る	外面一部に自然釉
164	449	1508	SX04	須恵器	壺（口縁）	−	(7.40)	−	ロクロナデ、２条の突帯で画された櫛描波状文３帯	外反して大きく開く口縁部	
164	450	210	SX04	須恵器	器台	−	(5.00)	−	ロクロナデ、外面に櫛描波状文・凹線	外傾して開く脚部	
164	451	206	SX04 c区	須恵器	はそう	−	(10.10)	−	ロクロナデ、内面口縁部に絞り目、外面体部中位にカキ目、底部に仕上げナデ	やや扁平ナ球形の体部から外反気味に立ち上がる口頸部	体部中位に円孔１個、全体に自然釉
166	452	234	SX05	土師器	壺	(23.20)	(11.40)	−	口縁部ヨコナデ、内面ユビ成形後ナデ、外面ナデ	筒状の頸部から屈曲して外方に開く口縁部、端部わずかに肥厚	
166	453	1517	SX05	土師器	壺	(10.70)	(4.20)	−	口縁部ヨコナデ	外傾して開く口縁部	赤色顔料塗布
166	454	231	SX05 東半 b区	土師器	甕（口縁）	(12.65)	(3.90)	−	口縁部ヨコナデ、肩部内面ヘラケズリ	くの字状に屈曲して内湾気味に開く口縁部、端部内側に肥厚	
166	455	232	SX05	土師器	甕	14.60	(7.40)	−	口縁部ヨコナデ、内面ハケ調整、体部ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整	内湾する体部から外反して開く口縁部、端部内側に肥厚	二次焼成、外面に煤付着
166	456	228	SX05 西半 d区	土師器	甕？	(23.85)	(10.08)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整	内湾する体部から屈曲して開く口縁部、端部丸い	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
166	457	1519	SX05	土師器	甕	(21.60)	(10.50)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面ハケ調整	内湾する体部から外反して開く口縁部、端部丸い	二次焼成、外面に煤付着
166	458	233	SX05	土師器	甕	(14.50)	(20.50)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整	内湾する体部から外反気味に立ち上がる口縁部、端部丸い	二次焼成、外面に煤付着
166	459	302	SX05 西半	土師器	甕	(23.20)	(15.50)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面ハケ調整	内湾する体部から外反して開く口縁部、端部丸い、肩部にほぼ水平に受部	
166	460	286	SX05	土師器	甕	(19.60)	(37.00)	(4.20)	口縁部ハケ調整、体部内面ナデ、外面ハケ調整	長胴形の体部から外反して開く口縁部、端部丸い	黒斑
166	461	304	SX05 b区	土師器	甕	(21.40)	(39.10)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整	長胴形の体部から外反して開く口縁部､端部わずかに上方に引上げる	黒斑
168	462	1524	SX05 中央	土師器	甑（把手）	−	−	−	体部内外面ハケ調整、把手部ユビ成形後ナデ	内湾する体部から上方に延びる把手	
168	463	303	SX05	土師器	甑	25.00	28.00	−	内外面ハケ調整、把手部ユビ成形後ナデ	内湾する体部、ほぼ直立する口縁部、上方に延びる把手、底部に半円形の２孔	
168	464	366	（カードナし）	土師器	甑	(22.75)	26.30	11.20	内外面ハケ調整、体部内面下半・把手部ユビ成形後ナデ	内湾する体部、わずかに外反する口縁部、端部肥厚、上方に延びる把手（真ん中にV字状の溝）、底部に６個の円孔	
168	465	368	SX05	土師器	甑	25.90	27.40	10.50	内外面ハケ調整、体部内面・把手部ユビ成形後ナデ	内湾する体部、ほぼ直立する口縁部、上方に延びる把手、底部に半円形の２孔	
168	466	1523	SX05 中央 c区	土師器	甑（把手）	−	−	−	ユビ成形後ナデ？	上方に延びる	
168	467	1521	SX05 西半	土師器	甑（把手）	−	−	−	ユビ成形後ナデ？	上方に延びる、扁平	
168	468	1518	SX05	土師器	甑（把手）	−	(7.30)	−	ユビ成形後ナデ？体部外面はハケ調整	上方に延びる、扁平	
168	469	1522	SX05 東半 (旧SX02半分)	土師器	甑（把手）	−	−	−	ユビ成形後ナデ？	上方に延びる、角状	
168	470	230	SX05 東半 (旧SX02半分)	土師器	小型丸底壺	(7.60)	(9.20)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整	やや扁平ナ球形の体部から外傾して立ち上がる口縁部	
168	471	227	SX05 中央部分 c区	土師器	小型丸底壺	−	(6.88)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面・外面上半ユビ成形後ナデ、下半ヘラケズリ	やや扁平ナ球形の体部から外傾して立ち上がる頸部	全体的に黒色に変色
168	472	224	SX05	土師器	杯A	(11.30)	(5.60)	−	口縁部ヨコナデ、体部内外面ヘラミカキ、底部内面ユビ成形後ナデ	椀状の体部、口縁部直立、端部丸い	外面全体的に黒斑
168	473	225	SX05	土師器	杯A	(13.15)	(4.10)	−	内外面ヘラミカキ、底部内面ユビ成形後ナデ	椀状の体部、口縁部直立、端部丸い	
168	474	250	SX05	土師器	ミニチュア鉢	4.25	5.10	5.90	ユビ成形後ナデ、手づくね	椀状の体部、口縁部内傾、端部丸い	
168	475	229	SX05 西半 d区	土師器	鉢	(14.60)	(7.80)	−	ユビ成形後ナデ？	内湾気味に開く口縁部	二次焼成
170	476	285	SX05 中央部分 c区	土師器	竈	−	(38.20)	−	体部内面ヘラケズリ後ナデ、外面ハケ調整、庇・把手部ユビ成形後ナデ	内湾して上方ですぼまるドーム状の体部、庇部は前面に半円形につく、把手は上方に延びる	二次焼成、外面に煤付着
172	477	263	SX05 b区	須恵器	杯蓋	(14.10)	4.10	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部外傾し、端部外側に尖る	外面に自然釉
172	478	239	SX05 d区 西半分	須恵器	杯蓋	13.60	4.50	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾気味、端部外側に尖る	
172	479	238	SX04 d区	須恵器	杯蓋	13.20	4.80	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、凹線で画された明瞭ナ稜線、口縁端部外側に尖る	
172	480	260	SX05 d区	須恵器	杯蓋	(14.10)	(4.60)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線不明瞭、口縁部内湾気味、端部外側に尖る	
172	481	241	SX05 c区	須恵器	杯蓋	14.45	4.40	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾気味、端部外側に尖る	
172	482	264	SX05 中央 c区	須恵器	杯蓋	(14.20)	4.25	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線不明瞭、口縁部外傾し、端部外側に尖る	内外面共に一部灰かぶり
172	483	270	SX05 c区	須恵器	杯蓋	(14.70)	4.30	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部外傾し、端部外側に尖る	
172	484	249	SX05	須恵器	杯蓋	(17.00)	4.60	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾気味、端部外側に尖る	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
172	485	262	SX05	須恵器	杯蓋	(15.40)	4.85	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、凹線で画された稜線、口縁端部外側に尖る	
172	486	265	SX05 西半	須恵器	杯蓋	14.90	4.55	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線不明瞭、口縁部外傾し、端部外側に尖る	外面天井部にヘラ記号
172	487	247	SX05	須恵器	杯蓋	15.20	4.40	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾気味、端部外側に尖る	
172	488	237	SX05 西半	須恵器	杯蓋	(15.40)	4.55	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾気味、端部外側に尖る	外面天井部にヘラ記号
172	489	235	SX05	須恵器	杯蓋	14.10	4.50	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線不明瞭、口縁部内湾気味、端部外側に尖る	外面天井部にヘラ記号
172	490	248	SX05	須恵器	杯蓋	(14.50)	4.40	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、凹線で画された稜線、口縁部内湾気味、端部外側に尖る	外面天井部にヘラ記号、自然釉
172	491	283	SX05 b区	須恵器	杯蓋	(14.70)	4.95	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、凹線で画された稜線、口縁部内湾気味、端部尖る	外面に自然釉
172	492	266	SX05	須恵器	杯蓋	−	(3.40)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾気味	内面に渦巻き状の溝
172	493	261	SX05 d区	須恵器	杯蓋	(13.90)	4.70	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部台形状、稜線明瞭、口縁部内湾気味、端部外側に尖る	内面天井部に工具痕
172	494	267	SX05 西半(中央部)	須恵器	杯身	(10.60)	4.00	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ・当て具痕？	内湾する体部で立上がり内傾、端部上方へ引上げ丸い、受部ほぼ水平	内面に当て具の痕跡？
172	495	236	SX05	須恵器	杯身	10.45	5.00	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部上方へ引上げ丸い、受部ほぼ水平	外面にヘラ記号
172	496	257	SX05 (旧SX02部分東半)	須恵器	杯身	11.90	4.10	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部やや上向き	
172	497	269	SX05 b区	須恵器	杯身	(12.45)	5.15	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ・当て具痕？	内湾する体部で立上がり内傾、端部やや上方へ引き上げ丸い、受部ほぼ水平	外面体部に自然釉少し付着。内面に当て具の痕跡
172	498	242	SX05	須恵器	杯身	11.40	4.50	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部やや上向き	
172	499	255	SX05 d区	須恵器	杯身	12.90	4.80	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	
172	500	272	SX05 中央 c区	須恵器	杯身	(13.20)	4.70	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部短くほぼ水平	
172	501	246	SX05	須恵器	杯身	12.90	4.60	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ・当て具痕	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部やや上向き	内面に当て具の痕跡
172	502	252	SX05 c区	須恵器	杯身	13.00	4.40	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部上向き	
172	503	258	SX05 西半	須恵器	杯身	12.00	5.20	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部上向き	自然釉
172	504	271	SX05 c区	須恵器	杯身	(12.10)	5.00	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部上向き	
172	505	244	SX05	須恵器	杯身	12.30	4.80	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ・当て具痕	内湾する体部で立上がり内傾、端部やや上方へ引き上げ丸い、受部上向き	重ね焼きの痕跡。外面に自然釉。内面に当て具の痕跡
176	506	245	SX05	須恵器	杯身	12.30	5.10	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部やや上向き	
176	507	253	SX05 c区	須恵器	杯身	11.70	4.40	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部やや上向き	自然釉
176	508	240	SX05	須恵器	杯身	12.00	4.95	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部上向き	外面に自然釉
176	509	259	SX05 西半	須恵器	杯身	13.80	4.60	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ・当て具痕	内湾する体部で立上がりほぼ直立、端部外側に尖る、受部ほぼ水平	自然釉。内面に当て具の痕跡
176	510	282	SX05 c区	須恵器	杯身	(12.70)	(5.00)	2.00	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	
176	511	243	SX05	須恵器	杯身	12.35	4.50	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部ほぼ水平	
176	512	251	SX05	須恵器	杯身	12.00	4.00	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部ほぼ水平	底面にヘラ記号
176	513	254	SX05 西半	須恵器	杯身	13.10	4.80	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
176	514	268	SX05 中央部分 c区	須恵器	杯身	(12.90)	(4.55)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	
176	515	284	SX05 西半 d区	須恵器	杯身	(11.80)	5.50	2.20	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部上向き	外面に自然釉、底面にヘラ記号
176	516	278	SX05 中央 c区	須恵器	蓋	−	(3.70)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、つまみの周囲に櫛状工具による刺突列点文	天井部丸く、稜線明瞭、中央の窪むボタン状のつまみ付加	
176	517	279	SX05	須恵器	高杯（脚部）	−	(7.60)	10.00	ロクロナデ	ラッパ状に開く脚台、端部を肥厚	方形透孔２方に穿つ
176	518	436	SX05 西半	須恵器	高杯（脚部）	−	8.00	8.50	ロクロナデ	ラッパ状に開く脚台、端部を肥厚	外面に自然釉、円孔は３方に穿つ
176	519	226	SX05	須恵器	高杯（脚部）	−	(3.70)	−	ロクロナデ	ラッパ状に開く脚台	円孔は３方に穿つ
176	520	273	SX05 東半 b区	須恵器	甕	17.70	(19.10)	−	口縁ロクロナデ、体部内面当て具痕（同心円文）、外面タタキ後頸部以下にカキ目	内湾する体部から外反して開く口縁部、端部を上下に肥厚	
176	521	281	SX05 中央	須恵器	甕	−	(24.20)	−	ロクロナデ、体部内面当て具痕（同心円文）、外面格子タタキ後カキ目	やや肩の張る球形の体部、筒状に立ち上がる頸部	
180	522	1525	SX05 西半	須恵器	甕	(47.70)	(6.30)	−	ロクロナデ、外面に凹線・櫛描波状文	外反して大きく開く口縁部、端部を下方に垂下	
180	523	432	SX05 西半	須恵器	甕	(21.00)	(6.90)	−	口縁ロクロナデ、体部内面当て具痕（同心円文）、外面格子タタキ後カキ目	外反して開く口縁部、端部を少し肥厚	
180	524	435	SX05 西半	須恵器	甕	(17.50)	(7.60)	−	口縁ロクロナデ、頸部内面カキ目、体部内面当て具痕（同心円文）・ナデ、外面タタキ後カキ目	外反して開く口縁部、端部を肥厚	
180	525	280	SX05 東半 b区	須恵器	甕	14.60	22.40	−	ロクロナデ、体部内面当て具痕（同心円文）後ナデ、外面格子タタキ後カキ目	ほぼ球形の体部、外反して開く口縁部、端部を肥厚	外面体部下半黒斑か煤、内面底部に工具による圧痕、生焼け
180	526	1520	SX05 西半 d区	須恵器	甕	−	(11.00)	−	ロクロナデ、外面に櫛描波状文・４条の凹線・カキ目	大きく外反して開く口頸部	
180	527	275	SX05 西半 d区	須恵器	壺	−	(12.60)	−	ロクロナデ、体部下半内面ユビ成形痕、外面ヘラケズリ後ナデ？	ほぼ球形の体部	外面一部に自然釉、下半に被熱の痕跡
180	528	277	SX05 中央 c区	須恵器	壺	−	(14.90)	−	ロクロナデ、体部下半内面ナデ、外面ヘラケズリ、肩部にカキ目	やや扁平ナ球形の体部	
180	529	274	SX05	須恵器	はそう	(11.40)	(3.10)	−	ロクロナデ	外反気味の筒状の頸部から屈曲して立ち上がる二重口縁、屈曲部に２条の凹線	外面一部に自然釉。外面下半に被熱の痕跡
180	530	434	SX05 中央部分 c区	須恵器	はそう	−	(7.50)	−	ロクロナデ、外面下半ヘラケズリ後タタキ後ナデ、中位に櫛描波状文後上下に仕上げナデ	肩の張る球形の体部から外傾気味に立ち上がる頸部	内面体部下半に有機物付着か？
180	531	276	SX05 d区	須恵器	はそう	(11.70)	14.40	−	ロクロナデ、外面頸部～体部上半カキ目、下半タタキ後ヘラケズリ後ナデ、口縁部・頸部に櫛描波状文	肩の張る球形の体部から外反気味に立上がり屈曲して内湾気味に開く口縁部、端部肥厚	体部中位に円孔１個穿つ
180	532	433	SX05 中央部分 c区	須恵器	短頸壺	(7.20)	(6.20)	−	ロクロナデ、体部下半外面ヘラケズリ	扁平で肩の張る体部から外反気味に立ち上がる短い口縁部、端部外側に肥厚	
182	533	290	SX06	土師器	壺	(8.90)	(7.80)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面ハケ調整	肩の張る体部から外傾して立ち上がる口縁部、端部尖る	外面に黒斑
182	534	291	SX06	土師器	甕	(14.40)	(7.55)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整	内湾する体部、くの字状に屈曲して開く口縁部、端部内側に肥厚	外面に黒斑、
182	535	298	SX06	土師器	壺	9.05	(7.25)	−	口縁部ヨコナデ、内面一部にハケ調整痕、体部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整	肩の張る体部から外傾して立ち上がる口縁部、端部丸い	外面に黒斑。内面全体に黒褐色変
182	536	288	SX06	土師器	鉢	(12.20)	(5.50)	−	ユビ成形後ナデ？	椀状の体部、内湾してすぼまる口縁部、端部丸い	
182	537	294	SX06	土師器	杯	(13.90)	5.05	−	口縁部～体部外面ヨコナデ	椀状の体部、わずかに外反して開く口縁部、端部丸い	二次焼成
182	538	293	SX06	土師器	高杯（杯部）	(14.00)	(5.60)	−	口縁部～杯部外面ヨコナデ	椀状の杯部、端部丸い、脚部接合部は細く締まる	
182	539	292	SX06	土師器	高杯（杯部）	13.80	5.50	−	口縁部～杯部ヨコナデ、内面に放射状暗文、外面下半ヘラミカキ	椀状の杯部、端部内側に尖る、脚部接合部は細く締まる	
182	540	289	SX06	土師器	高杯（杯部）	(13.20)	(4.75)	−	口縁部～杯部ヨコナデ、内面に放射状暗文	椀状の杯部、端部内側に尖る、脚部接合部は細く締まる	
182	541	287	SX06	土師器	高杯（杯部）	(15.45)	(5.15)	−	口縁部ヨコナデ、杯部ナデ、脚柱部内面に絞り目	椀状の杯部、口縁端部わずかに外反して開く、脚部接合部は細く締まる	外面に黒斑
182	542	1503	SX06	土師器	高杯（脚部）	−	(6.35)	(10.60)	磨滅のためメ調整不明	屈曲して開く脚部、端部丸い	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
182	543	1501	SX06	土師器	高杯（脚部）	－	(6.10)	9.90	脚柱部内面ヘラケズリ	屈曲して開く脚部、端部丸い	
182	544	1502	SX06	土師器	高杯（脚部）	－	(5.80)	9.80	磨滅のたメ調整不明、一部にハケ調整痕	屈曲して開く脚部、端部丸い	
182	545	297	SX06	土師器	高杯（脚部）	－	(7.10)	(9.35)	脚柱部内面ヘラケズリ、外面ヘラミカキ、脚端部ヨコナデ	外反して開く脚部、端部丸い	円孔3方に穿つ、外面一部二次焼成、煤付着。黒変
182	546	296	SX06	土師器	高杯（脚部）	－	(7.40)	(9.80)	杯部ナデ、脚柱部内面ヘラケズリ・絞り目、外面ヘラミカキ、脚端部ヨコナデ	外反して開く脚部、端部丸い	外面一部二次焼成、煤付着
182	547	445	SX06	土製品	土錘	2.90	10.10	3.55	ユビ成形後ナデ？	円筒状、器壁薄い	
182	548	295	SX06	土師器	蓋	11.95	4.80	－	ロクロナデ、つまみ部ナデ	天井部丸く、稜線不明瞭、口縁部内湾気味、端部丸い、宝珠状のつまみ	
182	549	299	SX07	土師器	甕	(15.25)	(7.10)	－	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	内湾する体部からくの字状に屈曲して開く口縁部、端部丸い	
182	550	301	SX07	須恵器	杯身	10.40	4.80	4.60	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部短くほぼ水平	底部に焼成後の縁孔
182	551	300	SX07	土師器	甕	(18.45)	(22.10)	－	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面タタキ	内湾する体部から外反して開く口縁、端部を肥厚	
184	552	550	包含層	弥生土器	壺（口縁）	(12.70)	(2.60)	－	口縁部ヨコナデ、端面に竹管文円形浮文	外反して開く口縁部、端部を肥厚・垂下	
184	553	936	包含層	弥生土器	壺（口縁）	(15.30)	(2.30)	－	口縁部ヨコナデ、端面に沈線（半載竹管？）・竹管文円形浮文	外反して開く口縁部、端部を肥厚・垂下	
184	554	937	包含層	弥生土器	壺（口縁）	(17.60)	(1.65)	－	口縁部ヨコナデ？端面に沈線・竹管文円形浮文	外反して開く口縁部、端部を肥厚・垂下	
184	555	935	包含層	弥生土器	壺（口縁）	(18.60)	(2.40)	－	口縁部ヨコナデ？端面に凹線・竹管文円形浮文	外反して開く口縁部、端部を肥厚・垂下	
184	556	854	包含層	弥生土器	壺	(22.40)	(7.10)	－	口縁部ヨコナデ、内面・頸部外面ヘラミカキ、端面に沈線・竹管文円形浮文	外反して開く口縁部、端部を肥厚・垂下	
184	557	584	包含層	弥生土器	壺（口縁）	(13.60)	(1.60)	－	口縁部ヨコナデ、端面に擬凹線文・内面に櫛状工具による刺突列点文	外反して開く口縁部、端部を肥厚・垂下	
184	558	559	包含層	弥生土器	壺（口縁）	－	(1.65)	－	磨滅のたメ調整不明、端面に凹線・内面に櫛状工具による刺突列点文	外反して開く口縁部、端部を上下に肥厚	
184	559	842	包含層	土師器	直口壺	(13.00)	(5.00)	－	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ後ナデ、外面ハケ調整	外傾して開く口縁部、端部丸い	
184	560	691	包含層	土師器	直口壺	(9.20)	(6.95)	－	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ナデ	内湾する体部から外傾して開く口縁部、端部丸い	
184	561	915	包含層	土師器	直口壺	(10.75)	(8.75)	－	磨滅のたメ調整不明	内湾する体部から外傾して開く口縁部、端部丸い	
184	562	810	包含層 土器密集部	土師器	壺	15.90	(8.90)	－	口縁部ヨコナデ、内面ハケ調整残る、体部内面ユビ成形後ヘラケズリ、外面タタキ後ハケ調整	内湾する体部から外傾して開く口縁部、端部丸い	黒斑
184	563	807	包含層 土器密集部	土師器	壺	13.80	(9.30)	－	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整	内湾する体部から外半して開く口縁部、端部丸い	二次焼成、外面に煤付着
184	564	898	包含層	土師器	壺	(17.80)	(7.20)	－	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ	内湾する体部から外傾して開く口縁部、端部丸い	搬入土器
184	565	837	包含層	土師器	壺	(14.10)	(6.60)	－	口縁部ヨコナデ、内外面ハケ調整、体部内面後ナデ	内湾する体部から外傾して開く口縁部、端部内側に肥厚	
184	566	672	包含層	土師器	壺	(19.40)	(7.60)	－	口縁部ヨコナデ、体部内外面ともに板ナデ	外傾気味に立ち上がる口縁部、端部丸い、厚手大型品	口縁内面に煤付着
184	567	704	包含層	土師器	直口壺	19.30	(15.70)	－	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ヘラケズリ、外面ハケ調整	外傾して開く口縁部、端部外側に尖る	
184	568	836	包含層	土師器	壺	13.15	(5.55)	－	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ後ナデ	くの字状に屈曲して内湾気味に開く口縁部、端部内側に肥厚	
184	569	843	包含層	土師器	壺	(14.00)	(5.90)	－	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ後ナデ、外面ハケ調整	くの字状に屈曲して内湾気味に開く口縁部、端部内側に肥厚	黒斑
184	570	549	包含層	土師器	壺	(18.00)	(6.10)	－	口縁部ヨコナデ	外傾して開く口縁部、端部内側に肥厚	
186	571	573	包含層	土師器	壺	(15.00)	(27.20)	－	体部内面ハケ調整	球形の体部から外反して開く口縁、端部丸い	
186	572	919	包含層	土師器	壺	－	(21.30)	4.90	内面ユビ成形後ナデ、底部にハケ調整痕、外面粗いヘラミカキ	重心下方にある扁平ナ球形の体部、底部は突出しﾄﾞｰﾅｯ状上底	
186	573	962	包含層 土器群B	土師器	広口壺	－	(24.70)	5.20	内面板ナデ、外面ハケ調整後ヘラミカキ？底部外面にユビ成形痕	扁平ナ球形の体部、底部は突出する平底	内面全体に黒変、外面に黒斑

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
186	574	647	包含層	弥生土器	壺	(12.50)	(11.30)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ハケ調整、外面ハケ調整後ヘラミカキ、肩部にヘラ状工具による刺突列点文	内湾する体部から直立する頸部、屈曲して大きく開く口縁部、端部上下に肥厚	
186	575	896	包含層	土師器	壺	−	(23.25)	4.50	外面頸部ヨコナデ、体部下半タタキ後ナデ後ヘラミカキ、底部外面にユビ成形痕	球形の体部、直立する頸部から外反して開く口縁部、底部は突出しやや上底	黒斑
186	576	678	包含層	土師器	壺	−	(5.60)	−	口縁部ヨコナデ、頸部内面ナデ	外反して開く頸部から屈曲してほぼ垂直に立ち上がる二重口縁	搬入土器
186	577	806	包含層	土師器	壺	19.80	(8.60)	−	口縁部ヨコナデ、内面ハケ調整、頸部外面ハケ調整後ヨコナデ	外反して開く頸部から屈曲してほぼ垂直に立ち上がる二重口縁、端部ややくぼむ	二次焼成？
186	578	796	包含層 土器密集部	土師器	壺	(15.15)	(4.25)	−	口縁部ヨコナデ	外反して開く頸部から屈曲してほぼ垂直に立ち上がる二重口縁、端部内側に肥厚	
186	579	929	包含層	土師器	直口壺	(17.60)	(6.40)	−	口縁部ヨコナデ、頸部内面ナデ	外反して開く頸部から屈曲してほぼ垂直に立ち上がる二重口縁、端部内側に肥厚	
186	580	771	包含層	土師器	壺	(19.50)	(7.10)	−	口縁部ヨコナデ、頸部内面ナデ	内湾気味に開き屈曲してほぼ垂直に立ち上がる二重口縁、端部肥厚	
188	581	778	包含層	土師器	壺	(15.80)	(16.90)	−	口縁部ヨコナデ、頸部内面ナデ、体部内面ユビ成形後ヘラケズリ、外面ハケ調整	内湾する体部から外反し屈曲してほぼ垂直に立ち上がる二重口縁、端部内側に肥厚	
188	582	770	包含層	土師器	壺	(12.30)	(5.00)	−	口縁部ヨコナデ	外反して開く頸部から屈曲して内湾気味に立ち上がる二重口縁、端部丸い	煤付着、搬入土器？
188	583	790	包含層 土器密集部	土師器	壺	(11.85)	(5.80)	−	口縁部ヨコナデ、頸部内面ナデ、体部内面ユビ成形後ナデ？外面ヘラミカキ	内湾する体部から外反し屈曲して立ち上がる二重口縁、端部内側に肥厚	二次焼成
188	584	853	包含層	土師器	壺	−	(30.00)	−	口縁部ヨコナデ、内面頸部ヘラミカキ、体部ヘラケズリ、外面ハケ調整後ヘラミカキ	球形の体部からやや外傾して立ち上がる頸部、屈曲して開きさらに立ち上がる二重口縁	
188	585	811	包含層 土器密集部	土師器	壺	(15.20)	(27.70)	−	口縁部ヨコナデ、内面頸部ナデ、体部強いユビナデ、外面ハケ調整	倒卵状の体部から屈曲して開きさらに外傾気味に立ち上がる二重口縁	内面底部に焦げ付き？二次焼成
188	586	546	包含層	土師器	壺	(31.00)	(8.80)	−	口縁部ヨコナデ、内面ハケ調整、立上がり部剥離面に平行に刻み目	屈曲してわずかに内傾して立ち上がる二重口縁、端部水平に肥厚、厚手大型	讃岐産？内面に煤付着
188	587	892	包含層	土師器	小型丸底壺	7.10	(11.20)	(11.20)	口縁端部ヨコナデ、内面口縁部ハケ調整、体部ユビ成形後ナデ、外面ヘラミカキ	球形の体部から、内湾気味にほぼ直立する口縁部、端部わずかに外反し丸い	
188	588	1052	包含層	土師器	小型壺	−	(5.95)	4.10	内面・頸部外面ヨコナデ	算盤玉状の体部から外反する頸部、平底	
188	589	1054	包含層	土師器	小型丸底壺	−	(6.75)	−	体部内面ユビ成形後ナデ	扁平ナ球形の体部	外面一部黒変
188	590	779	包含層	土師器	短頸壺	9.90	15.50	−	口縁部ヨコナデ、体部ユビ成形後ナデ	球形の体部から外傾気味に立ち上がる口縁部、端部丸い	二次焼成、外面に煤付着
188	591	797	包含層 土器密集部	土師器	小型丸底壺	(7.70)	(8.75)	−	口縁部ヨコナデ、体部ユビ成形後ナデ？	球形の体部から内湾気味に立ち上がる口縁部、端部丸い	
188	592	916	包含層	土師器	小型丸底壺	(8.80)	(8.50)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整	球形の体部から内湾気味に立ち上がる口縁部、端部丸い	黒斑
190	593	961	包含層	土師器	壺	(23.40)	(51.70)	−	口縁部ヨコナデ、体部内外面ともハケ調整	球形の体部から外反して開き屈曲してほぼ垂直に立ち上がる二重口縁、屈曲部斜メ下方に張り出す、端部丸い	内面底部付近黒変、外面に黒斑、二次焼成
190	594	1069	包含層	土師器	小型丸底壺	−	(5.20)	−	磨滅のたメ調整不明	球形の体部から外傾気味に立ち上がる頸部	
190	595	917	包含層	土師器	小型丸底壺	−	6.80	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ヘラケズリ	球形の体部から外反して開く口縁部	内面に炭化物付着？
190	596	776	包含層	土師器	小型丸底壺	9.30	11.20	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ハケ調整、外面頸部にハケ調整痕	球形の体部から外反気味に開く口縁部、端部丸い	二次焼成、外面に黒斑
190	597	644	包含層	土師器	小型丸底壺	(8.80)	9.50	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整	球形の体部から外傾して開く口縁部、端部丸い	二次焼成
190	598	828	包含層	土師器	小型丸底壺	9.10	(8.00)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整	球形の体部から内湾気味に立ち上がる口縁部、端部丸い	二次焼成、搬入土器
190	599	780	包含層	土師器	小型丸底壺	7.80	10.80	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整後ナデ	球形の体部から外傾して開く口縁部、端部丸い	黒斑
190	600	579	包含層	土師器	小型丸底壺	(7.50)	7.80	−	口縁部ヨコナデ、体部内外面ともにユビ成形後ナデ	やや扁平ナ球形の体部から外反して開く口縁部、端部丸い	
190	601	683	包含層	土師器	小型丸底壺	−	(7.20)	(5.40)	ナデ？	やや扁平ナ球形の体部から外方に開く口縁部	
190	602	777	包含層	土師器	小型丸底壺	(8.20)	10.45	−	体部内面ユビ成形後ナデ？	球形の体部から外傾して開く口縁部、端部尖る	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
190	603	690	包含層	土師器	小型丸底壺	(9.60)	(4.60)	−	口縁部ヨコナデ	内湾して大きく開く口縁部、端部丸い	
190	604	687	包含層	土師器	小型丸底壺	−	(7.10)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ？外面ヘラミカキ	やや扁平ナ球形の体部から内湾気味に開く口縁部	
190	605	838	包含層	土師器	小型丸底壺	(10.90)	8.15	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整後ヨコナデ後ヘラミカキ	やや扁平ナ球形の体部から内湾気味に開く口縁部、端部尖る	精製土器
192	606	591	包含層	土師器	小型丸底壺	(10.00)	(5.40)	−	口縁部ヨコナデ、体部内外面ともユビ成形後ナデ	内湾気味に開く口縁部、端部内側に尖る	
192	607	829	包含層	土師器	小型丸底壺	(11.20)	8.20	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面下半ヘラケズリ	扁平ナ球形の体部、内湾気味に開く口縁部、端部わずかに外反	
192	608	1081	包含層	土師器	底部	−	(4.00)	(4.00)	磨滅のため調整不明	平底	黒斑
192	609	1064	包含層	土師器	底部	−	(2.55)	6.05	磨滅のため調整不明	平底	
192	610	1066	包含層	土師器	底部	−	(3.05)	6.60	内面にユビ押さえ痕	平底	
192	611	676	包含層	土師器	底部	−	(4.60)	5.50	内外面ともにナデ	平底	底面に木葉痕
192	612	1058	包含層	土師器	底部	−	(2.70)	−	内面板ナデ、外面ハケ調整、底部にタタキメ	平底	底面にタタキメ
192	613	1065	包含層	土師器	底部	−	(3.15)	5.40	内面ナデ、外面ハケ調整	平底	
192	614	973	包含層	土師器	壺（底部）	−	(2.80)	6.10	内外面ともにナデ	ややドーナツ状上底	底面に木葉痕
192	615	767	包含層	土師器	底部	−	(3.90)	(4.75)	外面ナデ、底部にユビ成形痕	平底	底面に圧痕
192	616	1053	包含層	土師器	底部	−	(3.00)	−	内面に一部ハケ調整痕	中央部大きくくぼむ上底	
192	617	1062	包含層	土師器	底部	−	(5.05)	(5.90)	内面板ナデ、外面ハケ調整	中央部大きくくぼむ上底	
192	618	673	包含層	土師器	底部	−	(4.00)	8.70	内面ユビ成形後ナデ?底部に輪状の剥落痕、外面～底面ハケ調整	大きく安定した平底	二次焼成？
192	619	748	包含層	土師器	甕	(14.00)	(19.20)	(4.40)	口縁部ヨコナデ、体部内外面ユビ成形後ナデ、内面一部ハケ調整痕、底部外面にヘラ状工具による圧痕	倒卵状の体部、くの字状に屈曲して開く口縁部、端部丸い、平底	
192	620	571	包含層	土師器	甕	(15.90)	(22.60)	3.20	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、底部外面にユビ成形痕	倒卵状の体部、くの字状に屈曲して外反する口縁部、端部尖る、平底	二次焼成
192	621	856	包含層	土師器	甕	(15.80)	(12.90)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面板ナデ	内湾する体部、外反して開く短い口縁部、端部丸い	黒斑
192	622	572	包含層	土師器	甕	(11.80)	14.70	4.60	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面タタキ後ナデ	倒卵状の体部、外傾気味に開く口縁部、底部突出するやや上底	
192	623	833	包含層	土師器	甕	(13.20)	(5.95)	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ調整	内湾する体部から外反して開く口縁、端部丸い	二次焼成
192	624	939	包含層	土師器	甕	(13.30)	(8.50)	−	口縁部ユビ成形後ヨコナデ、体部内面ナデ	内湾する体部から外反して開く口縁、端部丸い	
192	625	701	精査	土師器	甕	(11.80)	(6.50)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ	内湾する体部から内湾気味に立ち上がる口縁部、端部丸い	二次焼成
192	626	578	包含層	土師器	甕	(13.60)	(15.00)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、下半ヘラケズリ、外面貝殻による条痕？	球形の体部からくの字状に屈曲して開く口縁、端部丸い	外面に煤付着
192	627	895	包含層	土師器	甕	(12.75)	(8.50)	−	体部内面ユビ成形後ナデ	内湾する体部からくの字状に屈曲して開く口縁、端部丸い	
192	628	519	包含層	土師器	甕	(14.80)	(5.90)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整	内湾する体部からくの字状に屈曲して開く口縁、端部丸い	
192	629	576	包含層	土師器	甕	(19.50)	(4.80)	−	口縁部ヨコナデ、頸部外面タタキ	外反して開く口縁部、端部わずかにくぼむ	黒斑
192	630	703	包含層	土師器	甕	21.30	(4.70)	−	口縁部ヨコナデ	外方に大きく開く口縁部、端部肥厚	二次焼成、内面に有機物付着
194	631	518	包含層	土師器	甕	(20.40)	(4.80)	−	口縁部ヨコナデ	外方に大きく開く口縁部、端部外側に尖る	
194	632	520	包含層	土師器	甕	(16.20)	(5.50)	−	口縁部ヨコナデ、肩部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整	外方に開く口縁部、端部外側に尖る	
194	633	894	包含層	土師器	甕	(24.10)	(9.50)	−	口縁端部ヨコナデ、内面ハケ調整、外面ハケ調整後ナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整	内湾する体部から外反して開く口縁部	
194	634	832	包含層	土師器	甕	(20.00)	(12.60)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整	内湾する体部から外反して開く口縁部	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
194	635	739	側溝	土師器	甕	(16.10)	(13.10)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整	内湾する体部から外反して開く口縁部、端部丸い	二次焼成
194	636	645	包含層	土師器	甕	(13.80)	(21.90)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整？	球形の体部から外傾して開く口縁部、端部内側に肥厚	二次焼成、外面体部下半に煤付着
194	637	750	包含層	土師器	甕	(21.60)	(18.10)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整	球形の体部から外反して開く口縁部、端部丸い	外面に煤付着
194	638	740	側溝	土師器	甕	(20.40)	(10.60)	−	体部外面ハケ調整	内湾する体部から外反して開く口縁部、端部丸い	
194	639	586	包含層	土師器	甕	(14.80)	(13.75)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整	内湾する体部、くの字状に屈曲して開く口縁部、端部外側に尖る	
194	640	938	落ち２	土師器	甕	(16.60)	(9.20)	−	口縁部ヨコナデ、頸部外面・体部内面ハケ調整、外面タタキ	内湾する体部から外反して開く口縁部、端部わずかに引き上げる	外面に煤付着
194	641	859	包含層	土師器	甕	(14.50)	(14.30)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整後ナデ	球形の体部から内湾気味に開く口縁部、端部外側に尖る	外面に煤付着
196	642	798	包含層 土器密集部	土師器	鉢	(37.00)	(32.00)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ユビ成形後貝殻条痕	内湾する体部からゆるやかに外傾して開く口縁部、端部わずかに肥厚	黒斑
196	643	1068	包含層	土師器	甕	(12.00)	(5.70)	−	口縁部ヨコナデ、内面ハケ調整、体部内面ヘラケズリ外面ハケ調整	屈曲して受け口状に内湾して開く口縁部、端部丸い	
196	644	1050	包含層	土師器	甕	(13.60)	(4.80)	−	口縁部ヨコナデ	屈曲して内湾気味に開く口縁部、端部内側に肥厚	
196	645	575	包含層	土師器	甕	(16.60)	(4.40)	−	磨滅のため調整不明	屈曲して内湾気味に開く口縁部、端部内側に肥厚	二次焼成
196	646	514	包含層	土師器	甕	(15.40)	(6.60)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ヘラケズリ、外面ハケ調整？	屈曲して内湾気味に開く口縁部、端部内側に肥厚	黒斑
196	647	339	包含層	土師器	甕	(12.20)	(8.00)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整？	内湾する体部、くの字状に屈曲して開く口縁部、端部内側に肥厚	二次焼成
196	648	604	包含層	土師器	甕	11.90	(10.00)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整	内湾する体部から内湾気味に開く口縁部、端部内側に尖る	
196	649	1051	包含層	土師器	甕	(16.50)	(4.30)	−	磨滅のため調整不明	内湾する体部から内湾気味に開く口縁部、端部内側に肥厚	
196	650	577	包含層	土師器	甕	(14.80)	(10.10)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整	内湾する体部からくの字状に屈曲して開く口縁部	
196	651	830	包含層	土師器	甕	(12.35)	(7.40)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整	内湾する体部、くの字状に屈曲して開く口縁部、端部内側に肥厚	二次焼成
196	652	768	包含層	土師器	壺？	−	(3.30)	−	口縁部ヨコナデ、立上がり部外面に擬凹線	外反する頸部から屈曲して立ち上がる二重口縁	
196	653	769	包含層	土師器	壺	(10.15)	(2.85)	−	口縁部ヨコナデ	外反する頸部から屈曲して内傾する二重口縁	搬入土器
196	654	512	包含層	土師器	壺	(13.60)	(4.50)	−	口縁部ヨコナデ	外反する頸部から屈曲して立ち上がる二重口縁、端部肥厚	
196	655	558	包含層	土師器	壺	(12.40)	(4.10)	−	磨滅のため調整不明	外反する頸部から屈曲して立ち上がる二重口縁、端部丸い	
196	656	521	包含層	土師器	甕	(13.80)	(6.50)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ナデ	外反する頸部から屈曲して立ち上がる二重口縁、端部肥厚	
196	657	593	包含層	土師器	甕	(13.00)	(4.70)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ヘラケズリ？外面ハケ調整	くの字状に屈曲する頸部からさらに屈曲して立ち上がる二重口縁、端部肥厚	
196	658	858	精査	土師器	甕	(14.00)	(2.80)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整	くの字状に屈曲する頸部からＳ字状に屈曲して開く口縁、端部外側に肥厚	Ｓ字状口縁甕
196	659	791	包含層 土器密集部	土師器	甕	(16.70)	(6.20)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面板ナデ、外面平行タタキ	くの字状に屈曲する頸部から受け口状に屈曲して開く口縁、端部丸い	
196	660	340	包含層	土師器	甕	(11.50)	(15.80)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ヘラケズリ、外面ハケ調整	球形の体部から内湾気味に開く口縁部	二次焼成による剥離、赤変が顕著。煤付着
198	661	574	住居跡？ 西土器群	土師器	甕	(12.40)	(8.30)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整	球形の体部から内湾気味に開く口縁部、端部わずかに肥厚	外面に煤付着
198	662	698	包含層	土師器	甕	(13.20)	10.20	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整	球形の体部から内湾して開く口縁部、端部内側に肥厚	
198	663	585	包含層	土師器	甕	(13.90)	(6.70)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ?外面ハケ調整	くの字状に屈曲し内湾して開く口縁部、端部内側に肥厚	
198	664	692	包含層	土師器	甕	(16.80)	(5.40)	−	口縁部ヨコナデ、内面ハケ調整、体部内外面ユビ成形後ハケ調整	くの字状に屈曲し内湾して開く口縁部、端部内側に肥厚	
198	665	951	包含層	土師器	甕	(15.10)	(13.80)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整	球形の体部から内湾して開く口縁部、端部内側に肥厚	
198	666	809	包含層 土器密集部	土師器	甕	(15.20)	(12.20)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビナデ、外面ハケ調整	球形の体部から内湾して開く口縁部、端部内側に肥厚	口縁部内側一部に煤付着

図版No.	報告No.	実測番号	出土地	種別	器種	口径	器高	底径	技法　他	形態の特徴	備　考
			遺構・土層			(cm)	(cm)	(cm)			
198	667	605	包含層	土師器	甕	(15.80)	(9.10)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビナデ、外面ハケ調整	球形の体部から内湾して開く口縁部、端部内側に肥厚	体部外面一部に煤付着
198	668	652	包含層	土師器	甕	(20.40)	(8.10)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ後ナデ、外面ハケ調整	内湾する体部からくの字状に屈曲して大きく開く口縁部、端部内側に肥厚	
198	669	707	包含層	土師器	甕	15.60	(15.80)	−	口縁部ヨコナデ、内面ハケ調整、体部内面ユビ成形後ハケ調整後ヘラケズリ、外面ハケ調整	球形の体部から内湾して開く口縁部、端部肥厚	
198	670	706	包含層	土師器	甕	13.80	(9.60)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ハケ調整、外面ハケ調整	内湾する体部からくの字状に屈曲して開く口縁部、端部内側に肥厚	外面肩部に籠目状に植物質付着
198	671	950	包含層	土師器	甕	14.60	(13.70)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整	球形の体部から内湾して開く口縁部、端部わずかに外反	口縁部一部に煤付着
198	672	823	包含層	土師器	甕	(13.80)	(15.60)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整	球形の体部から内湾気味に開く口縁部、端部内側に肥厚	二次焼成
198	673	606	包含層	土師器	甕	(14.00)	(18.20)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケ調整	球形の体部から内湾気味に開く口縁部、端部内側に肥厚	外面に煤付着、肩部に籠目状に植物質付着
200	674	1060	包含層	土師器	底部	−	(2.90)	4.10	内面ユビ成形、外面タタキ	平底	底面に板目状圧痕
200	675	920	包含層	土師器	底部	−	(3.90)	3.00	内面板ナデ（ﾗｾﾝ状、貝殻？）、外面タタキ	平底	
200	676	1059	包含層	土師器	底部	−	(5.90)	5.05	外面タタキ	平底、中央部やや上げ底	
200	677	1063	包含層	土師器	底部	−	(5.50)	(5.00)	外面ハケ調整	平底	
200	678	696	包含層	土師器	底部	−	(4.20)	3.50	内面ナデ、外面タタキ後ナデ、底部ユビ成形後ナデ	底部つまみ出し上げ底	
200	679	933	包含層	土師器	底部	−	(5.90)	5.70	外面タタキ	平底、中央部上げ底	黒斑
200	680	688	包含層	土師器	鉢	−	(4.90)	5.10	内面ユビ成形後ナデ、外面タタキ	平底、ドーナツ状上げ底	底面に木葉痕
200	681	1061	包含層	土師器	底部	−	(2.80)	5.35	内面ハケ調整？	平底、やや上げ底	内面にハケの工具痕
200	682	845	包含層	土師器	甕	−	(2.65)	(5.30)	ユビ成形後ナデ	底部つまみ出しやや上げ底	
200	683	1067	包含層	土師器	底部	−	(2.80)	(4.20)	磨滅のため調整不明	底部つまみ出し外側に踏ん張る上げ底	
200	684	940	包含層	土師器	甕	−	(7.10)	5.80	内外面ともに板ナデ？	平底、中央部やや上げ底	二次焼成
200	685	702	精査	土師器	甕	−	(9.50)	−	内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整、底部ナデ	ボール状の丸い底部	二次焼成
200	686	900	包含層	土師器	脚台	−	(6.90)	(11.40)	脚部内面上半絞り目、下半ナデ、外面ハケ調整、脚端部ヨコナデ、粘土充填	ラッパ状に開く脚部、端部は肥厚し端面に凹線	4方に円孔を穿つ、端部に黒斑
200	687	852	包含層	土師器	片口鉢	(30.80)	25.00	(7.50)	口縁部ヨコナデ、体部内面ハケ調整後ヘラミカキ、外面タタキ	内湾する体部、外反して開く口縁部、端部丸い、注ぎ口	黒斑
200	688	582	包含層	土師器	鉢	(27.80)	(21.80)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ハケ調整	内湾する体部、外反して開き屈曲して立ち上がる口縁部、端部水平に肥厚	精製品
200	689	772	包含層	土師器	製塩土器	−	(11.55)	5.50	底部にユビ押さえ痕	内湾する体部、外側に踏ん張る脚台状の底部	
200	690	773	包含層	土師器	鉢？	−	(8.30)	(5.70)	底部にユビ押さえ痕	内湾する体部、外側に踏ん張る脚台状の底部	
200	691	855	包含層	土師器	鉢	13.00	7.00	3.10	内外面ともにユビ成形後ナデ	椀状の体部、口縁端部丸い、突出する平底	口縁部外面に黒斑
200	692	742	包含層	土師器	鉢？	−	(5.40)	(3.80)	磨滅のため調整不明	直線的に外方へ開く体部、立上がり部剥離、底部は上底状につまみ出す	
202	693	934	包含層	弥生土器	鉢	25.70	15.00	4.60	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ後ヘラミカキ？外面ハケ調整後ヘラミカキ？	内湾する体部からくの字状に屈曲して開く口縁部、端部肥厚し凹線	外面に黒斑
202	694	515	包含層	土師器	鉢	(10.80)	5.90	−	磨滅のため調整不明	椀状の体部、外反して開く短い口縁部、端部丸い	
202	695	844	包含層	土師器	鉢	10.30	5.20	4.70	内外面ともにユビ成形後ナデ？	椀状の体部、内湾する口縁部、端部丸い	二次焼成、黒斑
202	696	557	包含層	土師器	鉢	(8.70)	4.50	−	内外面ともにユビ成形後ナデ	椀状の体部、口縁端部丸い	
202	697	907	包含層	土師器	鉢？	−	(4.50)	−	内外面ともにユビ成形後ナデ、肩部に工具刺突痕	扁平ナ球形の体部から屈曲して開く口縁部	
202	698	908	包含層	土師器	鉢	(10.10)	5.15	−	口縁部ヨコナデ、体部内外面ともにユビ成形後ナデ	椀状の体部、外反して開く短い口縁部、端部丸い	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地	種別	器種	口径	器高	底径	技法　他	形態の特徴	備　考
			遺構・土層			(cm)	(cm)	(cm)			
202	699	684	包含層	土師器	鉢	(10.90)	(3.80)	(1.90)	内外面ともにユビ成形後ナデ	椀状の体部、口縁端部丸い	二次焼成
202	700	545	包含層	土師器	鉢	(13.20)	6.40	−	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	椀状の体部、外方に開く口縁部、端部上方に引き上げる	精製土器？
202	701	650	包含層	土師器	鉢	14.40	5.00	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ	椀状の体部、外方に開き受け口状に屈曲する口縁部、端部丸い	精製土器？
202	702	564	包含層	土師器	鉢	(15.00)	(5.60)	−	口縁部ヨコナデ、体部内外面ともにナデ	椀状の体部、外方に開き受け口状に屈曲する口縁部、端部丸い	
202	703	686	包含層	土師器	鉢	16.60	4.80	−	口縁部ヨコナデ、体部内外面ともにヘラミカキ	椀状の体部、外方に開き受け口状に屈曲する口縁部、端部丸い	
202	704	556	包含層	土師器	椀	(13.00)	5.90	−	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	椀状の体部、口縁端部内側に肥厚	
202	705	970	包含層	土師器	脚台	−	(3.10)	4.30	内外面ともにナデ、底部にユビ押さえ痕	底部つまみ出し外側に踏ん張る脚台状	
202	706	561	包含層	土師器	脚台	−	(4.30)	7.60	ユビ成形後ナデ	脚端部つまみ出し外側に踏ん張る	
202	707	1070	包含層	土師器	脚台	−	(5.30)	(7.40)	磨滅のためﾒ調整不明	内湾気味に開く脚部	
202	708	516	包含層	土師器	坩堝？	(11.50)	(5.10)	−	ユビ成形後ナデ	内湾気味に開く口縁部、端部丸い	二次焼成による剥離、赤変が顕著
202	709	899	包含層	土師器	甑（底部）	−	(3.80)	(3.60)	ナデ、内面に放射状にヘラ圧痕	平底、中央部に焼成前穿孔	
202	710	857	精査	土師器	甑	−	(8.50)	4.40	内面ナデ、外面タタキ	平底、中央部に焼成前穿孔	底面に木葉痕
202	711	774	包含層	土師器	甑	(18.10)	15.35	4.65	内面上半ハケ調整、下半ナデ、外面タタキ後板ナデ、底部ユビナデ	内湾して開く体部、口縁端部丸い、平底、焼成前穿孔が片寄った位置にあるが、中央部に未貫の刺突痕あり	
202	712	901	包含層	土師器	甑	(25.80)	(14.80)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整、把手部ユビ成形後ナデ	外傾して開く、口縁端部丸い、把手上方に延びる	
202	713	697	包含層	土師器	甑	(23.20)	(13.30)	−	体部外面ハケ調整	筒状の体部から外反して開く口縁部、端部わずかに肥厚	二次焼成？
204	714	669	包含層	土師器	甑	(25.00)	(7.20)	−	口縁部〜体部内面ヨコナデ、外面ハケ調整	内湾気味に立ち上がる体部、口縁端部丸い	
204	715	788	包含層 土器密集部	土師器	甑（把手）	−	−	−	体部内面ナデ、把手部ユビ成形後ナデ	上方に延びる	黒斑
204	716	680	包含層	土師器	甑（把手）	−	(7.70)	−	体部内面ハケ調整？把手部ユビ成形後ナデ	上方に延びる	
204	717	595	包含層	土師器	甑（把手）	−	(6.00)	−	ユビ成形後ナデ、一部にハケ調整	上方に延びる、先端部欠損、中空	黒斑
204	718	679	包含層	土師器	甑（把手）	−	(6.10)	−	ユビ成形後ナデ、外面把手周囲にハケ調整	上方に延びる、扁平	
204	719	971	包含層	土師器	甑（把手）	−	(5.70)	−	ユビ成形後ナデ	上方に延びる、細く角状	二次焼成、煤付着
204	720	966	包含層	土師器	甑（把手）	−	(4.80)	−	ユビ成形後ナデ	上方に延びる	
204	721	523	包含層	土師器	甑（底部）	−	(1.40)	−	内面ヘラケズリ？外面ハケ調整	3方に穿孔の痕跡	
204	722	972	精査	土師器	甑（底部）	−	(1.10)	−	内面ユビ成形後ナデ、外面ハケ調整	3方に穿孔の痕跡	黒斑
204	723	594	包含層	土師器	竈	−	(11.90)	−	ユビ成形後ナデ	T字状に付加された庇部	
204	724	864	包含層	弥生土器	高杯	25.55	16.25	(14.60)	口縁部ヨコナデ、杯部外面ハケ調整後ヘラミカキ、脚部内面ナデ、外面ヘラミカキ、円盤充填	内湾する杯部、屈曲して外反する口縁部、端部わずかに肥厚、筒状の脚柱部から外反して開く脚端部	円孔1個残存
204	725	924	包含層	土師器	高杯（杯部）	−	(5.20)	−	内面ナデ、外面立上がり部ヨコナデ、受部ユビ成形後ナデ	屈曲して外方に立ち上がる杯部、屈曲部下方に垂下	
204	726	689	包含層	土師器	高杯（杯部）	−	(4.40)	−	ナデ、受部外面にハケ調整	屈曲して外方に立ち上がる杯部	
204	727	694	包含層	土師器	高杯（脚部）	−	(6.20)	(9.10)	脚部内面上半絞り目、下半ナデ、外面ヘラミカキ、端部ヨコナデ	屈曲して外方に開く脚部	
204	728	799	包含層	土師器	高杯（脚部）	−	(6.10)	9.35	脚部内面上半ヘラケズリ、下半ナデ、外面ヘラミカキ、端部ユビ成形後ナデ	屈曲して外方に開く脚部	
204	729	510	包含層	土師器	高杯（脚部）	−	(6.20)	9.00	脚部内面上半ヘラケズリ、下半ナデ、外面ヘラミカキ、端部ヨコナデ	屈曲して外方に開く脚部	
204	730	1056	包含層	土師器	高杯（脚部）	−	(6.20)	(10.00)	脚部内面上半ヘラケズリ、下半ユビ成形後ナデ、外面ヘラミカキ？	屈曲して外方に開く脚部、端部下方に肥厚	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
204	731	1055	包含層	土師器	高杯（脚部）	−	(7.80)	10.95	脚部内面上半ヘラケズリ、外面ヘラミカキ？	屈曲して外方に開く脚部	
204	732	506	包含層	土師器	高杯（脚部）	−	(5.80)	9.40	脚部内面上半ヘラケズリ、下半ハケ調整、外面ヘラミカキ、端部ヨコナデ	屈曲して外方に開く脚部	
204	733	648	包含層	土師器	高杯	(11.20)	(6.90)	7.20	口縁部ヨコナデ、杯部内外面ともヘラミカキ、脚部内面ヘラケズリ、外面ヘラミカキ、端部ヨコナデ	屈曲し外反して立ち上がる杯部、屈曲して開く脚部、端部丸い	
204	734	932	側溝	土師器	高杯（杯部）	13.60	(5.65)	−	内外面ともヘラミカキ、外面脚部との接合部近くにハケ調整	椀状の受部から屈曲して外反気味に立ち上がる口縁部、端部丸い	
204	735	610	包含層	土師器	高杯(脚柱部)	−	(8.60)	−	脚柱部中心に支柱抜き痕（粘土充填）、以下内面放射状にヘラ圧痕、突帯にヘラ状工具による刻み目	外反して開く脚部、中位に断面三角形の突帯	
204	736	589	包含層	土師器	高杯（脚部）	−	(8.95)	−	脚部内面上半絞り目、下半・外面ナデ	筒状の脚柱部から外反して開く脚部	
206	737	695	包含層	土師器	高杯（杯部）	(14.80)	(5.15)	−	内外面ともヨコナデ、外面脚部との接合部近くにユビ押さえ痕	浅い椀状の杯部、口縁端部丸い	
206	738	563	包含層	土師器	高杯（杯部）	(14.00)	(5.00)	−	口縁部ヨコナデ、杯部内面ナデ？外面ユビ成形後ナデ	浅い椀状の杯部、口縁端部内側に肥厚	二次焼成
206	739	1057	包含層	土師器	高杯（杯部）	(15.40)	(4.55)	−	磨滅のため調整不明	浅い椀状の杯部、口縁端部丸い	
206	740	914	包含層	土師器	高杯	(13.45)	12.10	10.40	杯部ユビ成形後ヨコナデ、脚部内面上半ヘラケズリ、下半ハケ調整、外面ハケ調整後ヘラミカキ	浅い椀状の杯部、屈曲して開く脚部、両端部丸い	
206	741	501	包含層	土師器	高杯（脚部）	13.70	11.00	10.20	杯部ユビ成形後ヨコナデ、脚部内面上半ヘラケズリ、下半ハケ調整、外面ヘラミカキ、端部ヨコナデ	緩やかに屈曲する椀状の杯部、屈曲して開く脚部、両端部丸い	
206	742	674	包含層	土師器	高杯	(13.70)	(13.20)	(10.80)	脚部内面上半ヘラケズリ	椀状の杯部、屈曲して開く脚部、両端部丸い	
206	743	566	包含層	土師器	高杯	(14.45)	11.30	9.70	杯部ヨコナデ？脚部内面上半絞り目・ヘラケズリ、外面ヘラミカキ、端部ヨコナデ	椀状の杯部、屈曲して開く脚部、両端部丸い	二次焼成
206	744	552	包含層	土師器	高杯（杯部）	(12.70)	(3.20)	−	内外面ともヨコナデ	椀状の杯部、端部丸い	
206	745	562	包含層	土師器	高杯（杯部）	(13.20)	(4.00)	−	内外面ともヨコナデ	椀状の杯部、下方にわずかナ段、端部丸い	精製土器
206	746	569	包含層	土師器	高杯	(13.50)	10.55	10.20	杯部ユビ成形後ヨコナデ、脚部内面上半絞り目・ヘラケズリ、下半ハケ調整、外面ヘラミカキ、端部ヨコナデ	椀状の杯部、屈曲して開く脚部、両端部丸い	化粧土塗布、粗雑ナ作りだが丁寧に見える
206	747	565	包含層	土師器	高杯	(12.90)	12.05	(10.40)	杯部ユビ成形後ヨコナデ、脚部内面上半ヘラケズリ、外面ヘラミカキ、端部ヨコナデ	椀状の杯部、屈曲して開く脚部、両端部丸い	二次焼成
206	748	651	包含層	土師器	高杯	−	(9.70)	9.80	杯部内面ナデ、脚部内面上半ヘラケズリ、下半〜脚端部ヨコナデ	椀状の杯部、屈曲して開く脚部、端部肥厚	
206	749	942	落ち2	土師器	高杯	(14.00)	(11.50)	−	杯部ヨコナデ、脚部内面上半絞り目	椀状の杯部、屈曲してほぼ直立する口縁部、端部丸い、屈曲して開く脚部	二次焼成、黒斑
206	750	744	包含層	土師器	高杯	(16.50)	(12.80)	−	口縁部ヨコナデ、杯部ナデ、脚部内面上半ヘラケズリ	椀状の杯部、端部わずかに内側に肥厚、屈曲して開く脚部	
206	751	553	包含層	土師器	高杯（杯部）	(18.80)	(5.50)	−	口縁部ヨコナデ、杯部外面ユビ成形後ナデ	椀状の杯部、口縁部外反して開く、端部丸い	
206	752	555	包含層	土師器	高杯（杯部）	(20.00)	(6.30)	−	磨滅のため調整不明	椀状の杯部、口縁部外反して開く、端部丸い	二次焼成
206	753	554	包含層	土師器	高杯（杯部）	(14.20)	(3.50)	−	内外面ともヨコナデ	椀状の杯部、口縁部外反して開く、下方にわずかナ段、端部丸い	
206	754	567	包含層	土師器	高杯	(15.00)	11.75	(11.30)	杯部ヨコナデ、脚部内面上半ヘラケズリ、端部ヨコナデ？	椀状の杯部、口縁部外反して開く、下方にわずかナ段、端部丸い	
206	755	804	包含層 土器密集部	土師器	高杯	(15.40)	(13.40)	−	杯部ヨコナデ、内面中央部ハケ調整痕、脚部上半内面ヘラケズリ、外面ヘラケズリ後ヘラミカキ、下半内外面ともハケ調整	緩やかに屈曲する椀状の杯部、端部丸い、筒状の脚柱部から屈曲して開く裾部	円孔1個残存
206	756	700	包含層	土師器	高杯	−	8.10	−	脚部内面ヘラケズリ、外面ヘラミカキ	屈曲して立ち上がる杯部、屈曲して開く脚部	
206	757	912	包含層	土師器	高杯	13.60	10.80	(9.75)	杯部ユビ成形後ヨコナデ、脚部内面上半絞り目、下半ユビ成形後ナデ、外面ヘラミカキ、端部ヨコナデ	椀状の杯部、ﾗｯﾊﾟ状に開く脚部、両端部丸い	
208	758	897	包含層	土師器	高杯（杯部）	16.20	(6.10)	−	磨滅のため調整不明、粘土充填	椀状の杯部、端部丸い	
208	759	551	包含層	土師器	高杯（杯部）	(14.80)	(5.10)	−	杯部ヨコナデ・ナデ	緩やかに屈曲する椀状の杯部、口縁部外反して開く、端部丸い	
208	760	580	包含層	土師器	高杯（杯部）	(16.40)	(5.10)	−	杯部ヨコナデ・ナデ	緩やかに屈曲する椀状の杯部、口縁部外反して開く、端部内側に引き上げる	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
208	761	831	包含層	土師器	高杯（杯部）	(15.20)	(5.30)	－	杯部ヨコナデ･ナデ、外面下半ヘラミカキ？	椀状の杯部、口縁部外反して開く、端部丸い	
208	762	923	包含層	土師器	高杯（杯部）	(20.70)	(7.70)	－	杯部ヨコナデ･ナデ、粘土充填の痕跡	椀状の杯部、突帯状の段を持ち、口縁部内湾しながら端部外反して開く	
208	763	568	包含層	土師器	高杯（杯部）	(17.35)	(5.85)	－	杯部ヨコナデ･ナデ？脚部内面ヘラケズリ、粘土充填	椀状の杯部、口縁部外反して開く	
208	764	513	包含層	土師器	高杯（杯部）	(19.00)	(6.30)	－	磨滅のためﾒ調整不明、粘土充填	椀状の杯部、口縁部外反して開く、端部丸い	二次焼成
208	765	825	包含層	土師器	高杯	15.70	14.60	(11.50)	口縁端部～内面杯部ヨコナデ・ナデ、脚柱部内面ヘラケズリ、裾部ハケ調整、外面杯部～脚柱部ハケ調整	緩やかに屈曲する椀状の杯部、口縁部外反して開く、端部丸い脚柱部長く屈曲して開く、両端部丸い	
208	766	646	包含層	土師器	高杯（杯部）	15.00	(6.00)	－	磨滅のためﾒ調整不明、粘土充填	椀状の杯部、端部丸い	
208	767	743	包含層	土師器	高杯（杯部）	(17.20)	(6.20)	－	磨滅のためﾒ調整不明	椀状の杯部、端部にわずかﾅ凹線状くぼみ	
208	768	517	包含層	土師器	高杯（杯部）	16.20	(5.70)	－	口縁部ヨコナデ、杯部内外面ともハケ調整後ナデ	緩やかに屈曲して開く杯口縁部、端部丸い	内面に黒斑
208	769	745	包含層	土師器	高杯	(16.20)	(10.80)	－	口縁部ヨコナデ、杯部内外面ともナデ、脚部外面ヘラミカキ	緩やかに屈曲して開く杯口縁部、端部丸い	
208	770	925	包含層	土師器	高杯（杯部）	15.30	(6.30)	－	口縁部ヨコナデ、杯部内外面ともナデ	椀状の杯部、口縁部外反気味に開く、端部丸い	穿孔あり、外面に炭化物付着
208	771	846	包含層	土師器	高杯	(15.90)	14.40	(11.65)	口縁端部～内面杯部ヨコナデ、受部ナデ、脚柱部内面ヘラケズリ、外面ヘラミカキ、裾部ヨコナデ、粘土充填	椀状の杯部、口縁部外反気味に開く、脚柱部長く屈曲して開く、両端部外側に尖る	
208	772	827	包含層	土師器	高杯	(15.20)	(8.80)	11.70	脚部上半内面ヘラケズリ、下半ハケ調整、粘土充填	椀状の杯部、口縁部外反気味に開く、脚部ﾗｯﾊﾟ状に開く	3方に円孔
208	773	775	包含層	土師器	高杯（杯部）	15.85	(5.80)	－	口縁部ヨコナデ、杯部内面ハケ調整後ヘラミカキ、外面ハケ調整	緩やかに屈曲して開く杯口縁部、端部丸い	
208	774	930	側溝 東側溝	土師器	高杯	(15.95)	13.80	(11.65)	口縁部ヨコナデ、杯部内外面ヘラミカキ、下半外面ハケ調整、脚部内面上半ヘラケズリ、下半ハケ調整、外面ヘラミカキ、端部ヨコナデ	緩やかに屈曲して開く杯口縁部、脚柱部長く屈曲して開く	円孔1個残存（2方向？）
208	775	781	包含層	土師器	高杯	16.70	(13.00)	(9.70)	杯部内面ナデ	緩やかに屈曲して開く杯口縁部、脚柱部ラッパ状に開く	円孔1個残存
208	776	826	包含層	土師器	高杯	(17.00)	8.90	(13.10)	口縁部ヨコナデ、杯部内外面ともハケ調整後ナデ？脚部内面上半絞り目・ユビ成形、下半～端部ヨコナデ、外面ヘラミカキ後ハケ調整	緩やかに屈曲して開く杯部、わずかに外反する口縁部、脚柱部ラッパ状に開く、端部下方に尖る	円孔3方に穿つ
208	777	824	包含層	土師器	高杯	13.30	13.50	11.00	杯部外面ハケ調整、受部ナデ、脚部内面上半ヘラケズリ、下半・外面ハケ調整、端部ヨコナデ	屈曲して内湾気味に開く杯部、脚部ラッパ状に開く、両端部丸い	
208	778	649	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(8.30)	14.80	脚部内面上半絞り目、下半ハケ調整後ナデ、外面ヘラミカキ、端部ヨコナデ、粘土充填	外反してラッパ状に開く脚部、端部肥厚	円孔3方に穿つ
210	779	705	包含層	土師器	高杯（杯部）	(21.80)	(6.60)	－	口縁部～内面ヨコナデ、外面ユビ成形後ヨコナデ	内湾気味に開き、わずかに外反する口縁部	
210	780	922	包含層	土師器	高杯（杯部）	22.50	(8.20)	－	受部外面ユビ成形後ナデ	屈曲して大きく開く杯部、わずかに外反する口縁部、端部丸い	
210	781	590	包含層	土師器	高杯（杯部）	(20.70)	(7.30)	－	口縁部～内面ヨコナデ、外面ハケ調整、受部ユビ成形後ヨコナデ	屈曲して大きく開く杯部、わずかに外反する口縁部、屈曲部突出し、端部丸い	
210	782	893	包含層	土師器	高杯	(20.75)	(13.50)	－	口縁部ヨコナデ、外面ヘラミカキ、脚部内面ナデ・絞り目	屈曲して大きく開く杯部、わずかに外反する口縁部、端部丸い	
210	783	802	包含層 土器集中	土師器	高杯	－	(11.95)	－	杯部外面ハケ調整、脚部内面ヘラケズリ、外面ナデ	屈曲して大きく開く杯部、わずかに外反する口縁部	二次焼成
210	784	803	包含層 土器密集部	土師器	高杯	19.90	15.35	(13.00)	口縁～杯部外面ヨコナデ、脚部内面上半ヘラケズリ、下半～端部ヨコナデ、外面ナデ	屈曲して大きく開く杯部、わずかに外反する口縁部、脚部屈曲して開き、端部下方へ引き出し1条の凹線	
210	785	570	包含層	土師器	高杯（杯部）	(23.70)	(8.25)	－	ユビ成形後ヨコナデ	屈曲し内湾気味に立ち上がる杯部、外反する口縁部、端部丸い	黒斑
210	786	808	包含層 土器密集部	土師器	高杯	(19.80)	16.80	14.90	口縁～杯部外面ヨコナデ、内面ナデ、脚部内面上半ヘラケズリ、下半～端部ヨコナデ、外面ヘラミカキ	緩やかに屈曲して大きく開く杯部、わずかに外反する口縁部、脚部屈曲して開き、端部下方へ引き出し1条の凹線	脚端部の口作り布留0と同じ
210	787	583	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(7.40)	(13.60)	脚部内面上半ナデ、下半～端部ヨコナデ、外面ヘラミカキ	屈曲して開く脚部、端部下方に肥厚	
210	788	511	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(6.30)	11.90	脚部内面ユビ成形後ヘラケズリ	ラッパ状に開く脚部、端部丸い	
210	789	801	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(7.10)	(11.55)	脚部上半内面ヘラケズリ後ナデ､外面ナデ､下半内外面ハケ調整、端部ヨコナデ	屈曲して開く脚部、端部丸い	二次焼成、羽口に転用？
210	790	805	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(7.40)	12.40	脚部内面上半ヘラケズリ、下半ハケ調整、外面ユビ成形後ナデ、端部ヨコナデ	屈曲して開く脚部、端部わずかに肥厚	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地	種別	器種	口径	器高	底径	技法　他	形態の特徴	備　考
			遺構・土層			(cm)	(cm)	(cm)			
210	791	918	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(7.15)	(14.60)	脚部内面ユビ成形後ナデ・絞り目	屈曲して開く脚部、端部丸い	
210	792	1082	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(6.25)	(11.60)	脚部内面上半ヘラケズリ	屈曲して開く脚部、端部丸い	
210	793	835	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(6.95)	11.30	脚部内面上半ヘラケズリ	屈曲して開く脚部、端部丸い	
210	794	860	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(9.00)	12.60	脚部内面上半ヘラケズリ後ナデ、下半ハケ調整、外面ヘラミカキ？端部ヨコナデ	屈曲して開く脚部、端部丸い	
210	795	931	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(6.10)	(11.50)	脚部内面上半ヘラケズリ、下半ナデ、外面ヘラミカキ？端部ヨコナデ	外反して開く脚部、端部丸い	
210	796	913	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(8.40)	8.80	杯部内面ヘラミカキ、外面ユビ成形後ナデ、脚部内面上半ヘラケズリ、下半ナデ・絞り目、外面ハケ調整後ヘラミカキ、端部ヨコナデ	外反して開く脚部、端部丸い	
212	797	910	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(5.65)	8.60	脚部内面上半ヘラケズリ、下半ハケ調整、外面ヘラミカキ、端部ヨコナデ	屈曲して開く脚部、端部丸い	
212	798	503	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(6.70)	9.50	脚部内面上半絞り目・ヘラケズリ、下半ハケ調整、外面ヘラミカキ、端部ヨコナデ	屈曲して開く脚部、端部丸い	
212	799	507	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(6.90)	10.70	脚部内面上半絞り目・ヘラケズリ、下半ハケ調整、外面ヘラミカキ、端部ヨコナデ	屈曲して開く脚部、端部丸い	円孔3方に穿つ
212	800	699	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(7.50)	11.10	脚部内面上半絞り目、下半～端部ヨコナデ、外面ハケ調整後ヘラミカキ	屈曲して開く脚部、端部丸い	
212	801	911	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(6.75)	10.65	脚部内面上半ヘラケズリ、下半ハケ調整、外面ヘラミカキ、端部ヨコナデ	外反して開く脚部、端部丸い	
212	802	504	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(6.30)	10.30	脚部内面上半ヘラケズリ	屈曲して開く脚部、端部丸い	
212	803	509	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(6.10)	10.30	脚部内面上半ヘラケズリ	屈曲して開く脚部、端部丸い	黒斑
212	804	502	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(6.00)	10.40	脚部内面上半ヘラケズリ、下半ハケ調整、外面ヘラミカキ、端部ヨコナデ	屈曲して開く脚部、端部丸い	黒斑
212	805	800	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(8.05)	9.90	脚部内面上半絞り目、外面上半ヘラケズリ後ヘラミカキ、下半ハケ調整後ナデ？端部ヨコナデ	屈曲して開く脚部、端部わずかに肥厚	
212	806	505	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(6.80)	10.10	脚部内面上半絞り目・ヘラケズリ、外面ヘラミカキ	屈曲して開く脚部、端部丸い	
212	807	508	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(5.90)	8.30	脚部内面上半絞り目・ヘラケズリ、下半ハケ調整、外面ヘラミカキ、端部ヨコナデ	屈曲して開く脚部、端部丸い	
212	808	1083	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(2.40)	11.10	脚部内面ヘラケズリ、下半・外面・端部ヨコナデ	屈曲して開く脚部、端部丸い	
212	809	747	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(6.70)	(10.80)	脚部内面上半絞り目・ヘラケズリ、下半内外面ヨコナデ	屈曲して開く脚部、端部丸い	
212	810	675	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(7.40)	(10.50)	脚部内面上半絞り目、下半～端部ヨコナデ、外面ヘラミカキ	屈曲して開く脚部、端部肥厚に下方に引き出す	上端部被熱？羽口に転用？
212	811	746	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(9.00)	13.60	脚部内面上半絞り目・ヘラケズリ、下半～端部ヨコナデ、外面ヘラミカキ	屈曲して開く脚部、端部わずかに肥厚	
212	812	693	包含層	土師器	高杯（脚部）	－	(6.30)	(10.10)	脚部内面上半ナデ、下半ハケ調整、外面ヘラミカキ、端部ヨコナデ	外反して開く脚部、端部丸い	二次焼成
212	813	941	包含層	土師器	高杯	－	(1.40)	－	杯部内面ナデ、外面ヘラミカキ？充填部下面に工具による刺突痕	ほぼ平らナ杯受部	
212	814	547	包含層	弥生土器	器台	(29.60)	(3.00)	－	受部内外面ヘラミカキ？端部ヨコナデ、垂下部ユビ成形後ナデ、端面に竹管文円形浮文・竹管刺突文	直線的に大きく開く受部、端部下方に粘土紐を付加し垂下	
212	815	522	包含層	土師器	小型器台	－	(4.00)	－	脚部内面ナデ	くの字状に屈曲して上下に開く	
212	816	944	包含層	土師器	器台	－	(7.70)	(9.50)	体部内面ナデ、外面ハケ調整、脚部内面ハケ調整、外面ナデ、端部ヨコナデ	内湾する体部、脚部はハの字状に開き端部わずかに内湾する	
212	817	834	包含層	土師器	小型器台	(8.55)	7.00	(9.30)	脚部外面ハケ調整	皿状の受部、ハの字状に開く脚部	
212	818	943	包含層	土師器	小型器台	9.00	7.50	10.60	口縁部ヨコナデ、受部外面ヘラミカキ、脚部内面ナデ、外面ヘラミカキ？	皿状の受部、口縁端部上方へ引き上げる、ハの字状に開く脚部、端部わずかに外反する	円孔3方に穿つ
212	819	741	包含層	土師器	小型器台	－	(6.10)	(12.10)	内面上端ヘラケズリ	ハの字状に開く脚部、端部丸い	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
212	820	841	包含層	土師器	製塩土器	－	(3.80)	－	内面ナデ、外面タタキ	ほぼ直立する体部、薄手	
212	821	978	包含層	土師器	製塩土器	(6.00)	(5.40)	－	内面ナデ、外面タタキ	ほぼ直立する体部、薄手	
212	822	766	包含層	土師器	製塩土器	－	(3.70)	(3.85)	ユビ成形後ナデ、手づくね	内湾して立ち上がる体部、脚台が外側へ踏ん張る	
212	823	965	包含層	土師器	製塩土器	－	(2.35)	(3.00)	ユビ成形後ナデ？	ハの字状に開く小さナ脚部	製塩土器？
212	824	967	包含層	土師器	製塩土器	－	(2.40)	(3.95)	ユビ成形後ナデ	ハの字状に開く小さナ脚部	製塩土器
212	825	677	包含層	土製品	イイダコ壺	(9.00)	(2.90)	－	上面に植物の圧痕	上面がほぼ平らナ円形、円柱状で中空であった？	二次焼成顕著
216	826	1014	包含層 東側溝	土師器	壺	－	(4.30)	－	口縁部ヨコナデ、外面に櫛状工具による円弧文２帯	屈曲して外反する二重口縁、端部丸い	
216	827	1015	包含層	土師器	壺	－	(5.20)	－	口縁部ヨコナデ後ヘラミカキ、外面に櫛描波状文・浅い凹線	屈曲して外反する二重口縁、端部上方へ引き上げる	
216	828	1018	包含層	土師器	器台	－	(1.40)	－	口縁端部に櫛状工具による円弧文、竹管文円形浮文	口縁端部に付加され、垂下部分が剥離	
216	829	1016	排土	土師器	壺	－	(2.80)	－	外面肩部？にヘラ状工具による刻み目	内湾する肩部	
216	830	1017	包含層	土師器	壺	－	(6.00)	－	内面ヘラケズリ、外面肩部？に円形ｽﾀﾝﾌﾟ文	内傾する肩部	
216	831	1019	包含層	土師器	壺？	－	(8.50)	－	内面ナデ、外面ハケ調整、櫛状工具による施文？	内湾する体部	黒斑
216	832	1022	包含層	土師器 (韓式)	甕？	－	(4.50)	－	内面ナデ、外面格子タタキ	内湾する体部	
216	833	1025	包含層	土師器 (韓式)	甕？	－	(5.30)	－	内面ナデ、外面格子タタキ	体部	二次焼成
216	834	1026	包含層	土師器 (韓式)	甕？	－	(4.30)	－	内面ナデ、外面格子タタキ	内湾する体部	二次焼成、煤・炭化物付着
216	835	1023	包含層 遺構埋土	土師器 (韓式)	甕？	－	(5.90)	－	内面ナデ、外面格子タタキ	内湾する体部	二次焼成
216	836	1024	側溝	土師器 (韓式)	甕？	－	(3.30)	－	内面ナデ、外面格子タタキ	内湾する体部	
216	837	1027	包含層	須恵器? (韓式)?	甕？	－	(4.80)	－	内面ナデ、外面格子タタキ	内湾する体部	
216	838	1020	攪乱	土師器 (韓式)	甕？	－	(4.90)	－	内面ナデ、外面格子タタキ	内湾する体部	
216	839	1021	包含層 土器密集部	土師器 (韓式)	甕？	－	(7.60)	－	内面ナデ、外面格子タタキ	内湾する体部	
218	840	682	包含層	土製品	皮袋形土器？	－	(6.70)	－	ユビ成形後ナデ	扁球状の体部、ほぼ直立する頸部、底部２方向に角状の突起	
218	841	681	包含層	土製品	皮袋形土器？	－	－	－	ユビ成形後ナデ	円筒状の一端を丸く閉じる	
218	842	1071	包含層	土製品	匙形土器？	－	－	－	ユビ成形後ナデ？	細く長い角状	
218	843	671	包含層	土製品	祭祀具	2.50	8.60	－	ユビ成形後ナデ？	円筒状、先端部に段	
218	844	685	包含層	土製品	匙形土器	－	(4.20)	(1.60)	ユビ成形後ナデ？	椀状の体部、一方に柄がつく杓子状	
218	845	548	包含層	土師器	ミニチュア土器	3.60	1.70	－	ユビ成形後ナデ、手づくね	浅い椀状の体部、ミニチュア	
218	846	903	包含層	土師器	ミニチュア土器	2.50	2.00	－	ユビ成形後ナデ、手づくね	椀状の体部、ミニチュア	
218	847	902	包含層	土師器	ミニチュア土器	2.90	2.10	－	ユビ成形後ナデ、手づくね	椀状の体部、ミニチュア	黒斑、表面摩滅顕著
218	848	921	包含層	土師器	ミニチュア土器	3.00	2.90	－	ユビ成形後ナデ、手づくね	椀状の体部、ミニチュア	
218	849	608	包含層	土師器	ミニチュア土器	－	(3.60)	3.00	ユビ成形後ナデ、手づくね	椀状の体部、ミニチュア	
218	850	609	包含層	土師器	ミニチュア土器	－	(1.90)	2.70	ユビ成形後ナデ、手づくね	椀状の体部、ミニチュア	
218	851	749	包含層	土師器	ミニチュア土器	(3.70)	3.60	－	ユビ成形後ナデ、手づくね	平底から内湾気味に立ち上がる体部、ミニチュア	黒斑
218	852	588	包含層	土師器	ミニチュア土器	－	(3.00)	2.40	ユビ成形後ナデ、手づくね	平底から内湾して立ち上がる体部、ミニチュア	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地	種別	器種	口径	器高	底径	技法　他	形態の特徴	備　考
			遺構・土層			(cm)	(cm)	(cm)			
218	853	592	包含層	土師器	ミニチュア土器	(4.30)	(4.00)	−	ユビ成形後ナデ、手づくね	平底から内湾して立ち上がる体部、ミニチュア	黒斑
218	854	789	包含層	土師器	ミニチュア土器	3.90	3.70	−	ユビ成形後ナデ、手づくね	椀状の体部、ミニチュア	
218	855	794	包含層 土器密集部	土師器	ミニチュア土器	(4.20)	4.40	2.70	ユビ成形後ナデ、手づくね	椀状の体部、ミニチュア	
218	856	839	包含層	土師器	ミニチュア土器	(5.15)	(5.20)	3.55	ユビ成形後ナデ、手づくね	平底から内湾して立上がる体部、わずかに外反する口縁部、ミニチュア	韓式土器を模した？
218	857	560	包含層	土師器	ミニチュア土器	(4.00)	(2.90)	−	口縁部ヨコナデ、体部ユビ成形後ナデ、手づくね	内湾する体部、外反して立上がる口縁部、ミニチュア	
218	858	587	包含層	土師器	ミニチュア土器	(5.10)	(6.40)	−	口縁部ヨコナデ、体部ユビ成形後ナデ	球形の体部から外傾気味に立上がる口縁部、ミニチュア	
218	859	840	包含層	土師器	ミニチュア土器	(6.70)	5.85	(4.30)	ユビ成形後ナデ、手づくね	平底から内湾して立が上る体部、わずかに外反する口縁部、ミニチュア	黒斑、韓式土器を模した？
220	860	861	包含層	土師器 (韓式)	甑（把手）	−	(11.80)	−	体部内面ナデ、外面ハケ調整、把手部ユビ成形後ナデ	内湾気味に立ち上がる体部、上方に延びる扁平ナ把手、内面に2条の溝を刻む	
220	861	862	包含層	土師器 (韓式)	甑（把手）	−	−	−	ユビ成形後ナデ	上方に延びる扁平ナ把手、真ん中に細長い透かし孔	
220	862	607	包含層	土師器 (韓式)	甑（把手）	−	−	−	ユビ成形後ナデ	上方に延びる扁平ナ把手、内面に1条の溝を刻む	
220	863	969	包含層	土製品	羽口	−	(9.70)	−	内面ナデ、外面ユビナデ	下方に開く円筒形	上端黒変、下方赤変
220	864	655	包含層	土製品	羽口	−	(8.10)	−	内面ナデ、外面面取りがありヘラケズリ？	下方に開く円筒形	上部被熱
220	865	642	包含層	土製品	羽口	4.35	(9.70)	−	内面ナデ、外面面取りがありヘラケズリ？	下方に開く円筒形	上端黒変、ガラス質付着、下方赤変
220	866	643	包含層	土製品	羽口	−	(10.60)	−	内面ナデ、外面面取りがありヘラケズリ？	下方に開く円筒形	上端黒変、ガラス質付着、下方赤変
220	1135	1084	包含層	土製品	羽口	(9.90)	(5.10)	(5.60)	内面ナデ、外面ユビ成形後ナデ	下方に開く円筒形	上端部にガラス質付着
220	1136	M14	包含層	土製品	羽口	(5.60)	(3.80)	(4.60)	内面ナデ	下方に開く円筒形	上端部にガラス質付着、鉄滓付着（＝M20）
220	867	904	包含層	土製品	土錘	2.00	7.60	4.80	ユビ成形後ナデ	紡錘形	黒斑
220	868	795	包含層	土製品	土錘	2.30	8.35	4.40	ユビ成形後ナデ	紡錘形	
220	869	641	包含層	土製品	土錘	2.20	(5.95)	(4.50)	ユビ成形後ナデ	紡錘形	
220	870	524	包含層	土製品	土錘	2.20	9.00	4.50	ユビ成形後ナデ	紡錘形	
220	871	793	包含層 土器密集部	土製品	土錘	2.20	8.75	4.35	ユビ成形後ナデ	紡錘形	
220	872	785	包含層	土製品	土錘	3.10	(9.30)	4.30	ユビ成形後ナデ	紡錘形	
222	873	787	包含層	土製品	土錘	2.50	(9.20)	4.60	ユビ成形後ナデ	紡錘形	
222	874	786	包含層	土製品	土錘	2.30	11.10	5.10	ユビ成形後ナデ	紡錘形	黒斑
222	875	632	包含層	土製品	土錘	2.80	9.90	4.70	ユビ成形後ナデ	円筒形	黒斑
222	876	529	包含層	土製品	土錘	3.70	10.20	5.30	ユビ成形後ナデ	円筒形	黒斑
222	877	863	包含層	土製品	土錘	3.70	10.10	5.30	ユビ成形後ナデ	円筒形	黒斑
222	878	639	包含層	土製品	土錘	3.05	12.70	4.70	ユビ成形後ナデ・板ナデ	円筒形	黒斑
222	879	640	包含層	土製品	土錘	3.20	11.40	5.00	ユビ成形後ナデ	紡錘形	
222	880	654	包含層	土製品	土錘	4.60	8.60	5.50	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	黒斑
222	881	653	包含層	土製品	土錘	(4.80)	(9.00)	5.60	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	
222	882	635	包含層	土製品	土錘	4.05	6.15	4.30	ユビ成形後ナデ	円筒形	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地	種別	器種	口径	器高	底径	技法　他	形態の特徴	備　考
			遺構・土層			(cm)	(cm)	(cm)			
222	883	784	包含層	土製品	土錘	3.70	8.60	4.05	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	
222	884	633	包含層	土製品	土錘	3.30	7.50	4.60	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	
222	885	525	包含層	土製品	土錘	3.60	(6.90)	4.00	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	
222	886	526	包含層	土製品	土錘	3.70	7.80	4.40	ユビ成形後ナデ	円筒形	
222	887	638	包含層	土製品	土錘	2.85	8.50	3.30	ユビ成形後ナデ、上下端部に格子タタキ	円筒形	
222	888	906	包含層	土製品	土錘	3.45	8.80	3.60	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	
222	889	905	包含層	土製品	土錘	2.70	9.30	3.75	ユビ成形後ナデ	円筒形	
222	890	949	包含層	土製品	土錘	4.30	8.20	4.60	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	上端に紐ずれ痕
222	891	782	包含層 土器密集部	土製品	土錘	(3.90)	9.10	4.30	ユビ成形後ナデ	円筒形	上端に紐ずれ痕？
222	892	792	包含層 土器密集部	土製品	土錘	3.80	8.90	4.70	ユビ成形後ナデ	円筒形	黒斑
222	893	528	包含層	土製品	土錘	3.00	8.20	4.10	ユビ成形後ナデ	円筒形	外面中位に紐ずれ痕？
222	894	948	撹乱	土製品	土錘	3.50	9.00	4.40	ユビ成形後ナデ、上下端部に格子タタキ	円筒形	
224	895	637	包含層	土製品	土錘	3.30	8.60	3.70	ユビ成形後ナデ	円筒形	外面中位に紐ずれ痕？
224	896	626	包含層	土製品	土錘	2.90	9.00	3.35	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	
224	897	783	包含層	土製品	土錘	3.30	8.90	4.30	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	
224	898	527	包含層	土製品	土錘	3.80	(8.00)	4.30	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	二次焼成
224	899	629	包含層	土製品	土錘	3.10	10.10	4.20	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	黒斑、内面被熱
224	900	625	包含層	土製品	土錘	3.00	11.00	4.60	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	黒斑
224	901	621	包含層	土製品	土錘	3.10	(7.25)	3.40	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	黒斑
224	902	634	包含層	土製品	土錘	2.20	9.40	4.70	ユビ成形後ナデ	円筒形	黒斑
224	903	624	包含層	土製品	土錘	3.20	9.80	4.15	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	黒斑、外面中位に紐ずれ痕？
224	904	636	包含層	土製品	土錘	2.65	9.55	4.25	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	
224	905	618	包含層	土製品	土錘	3.40	9.55	4.30	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	二次焼成
224	906	620	包含層	土製品	土錘	3.40	10.50	4.50	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	上下端部に紐ずれ痕
224	907	623	包含層	土製品	土錘	3.40	10.25	4.20	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	外面中位に紐ずれ痕？
224	908	630	包含層	土製品	土錘	3.50	10.80	4.30	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	二次焼成による黒変
224	909	628	包含層	土製品	土錘	3.75	11.15	4.40	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	二次焼成
224	910	627	包含層	土製品	土錘	3.30	12.15	4.30	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	二次焼成、黒斑・煤付着
224	911	631	包含層	土製品	土錘	3.05	9.60	3.70	ユビ成形後ナデ	円筒形	二次焼成、上端に鉄分付着、羽口に転用？
224	912	622	包含層	土製品	土錘	2.60	11.55	3.35	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	二次焼成
224	913	617	包含層	土製品	土錘	3.80	11.70	4.30	ユビ成形後ナデ	円筒形、器壁薄い	黒斑、外面に木葉痕
224	914	619	包含層	土製品	土錘	2.40	10.50	4.10	ユビ成形後ナデ	円筒形	黒斑
226	915	721	包含層	須恵器	杯蓋	(14.50)	(3.85)	−	ロクロナデ、天井部外面に櫛状工具による２帯の刺突列点文	天井部丸く、稜線突出する、口縁部内湾し、端部外側に尖る	
226	916	665	包含層	須恵器	杯蓋	(17.90)	5.05	−	ロクロナデ、天井部外面に櫛状工具による２帯の刺突列点文	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾し、端部尖る	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
226	917	662	包含層	須恵器	杯蓋	(11.90)	4.40	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線不明瞭、口縁部内湾し、端部外側に尖る	
226	918	816	包含層	須恵器	杯蓋	(11.80)	4.25	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾し、端部外側に尖る	
226	919	874	包含層	須恵器	杯蓋	13.50	5.05	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾し、端部丸い	
226	920	661	包含層	須恵器	杯蓋	(13.50)	5.00	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部外傾し、端部丸い	
226	921	615	包含層	須恵器	杯蓋	(13.95)	(4.95)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部外傾気味、端部丸い	歪み大きい
226	922	751	包含層	須恵器	杯蓋	14.40	5.35	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部外傾し、端部外側に尖る	
226	923	733	包含層	須恵器	杯蓋	(13.80)	4.62	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線凹線により画する、口縁部外傾し、端部外側に尖る	
226	924	537	包含層	須恵器	杯蓋	(15.00)	4.50	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部外傾し、端部外側に尖る	
226	925	541	包含層	須恵器	杯蓋	(14.90)	(4.50)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部外傾し、端部わずかに外反する	自然釉
226	926	539	包含層　遺構検出精査	須恵器	杯蓋	(15.60)	4.60	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾し、端部丸い	
226	927	752	包含層	須恵器	杯蓋	14.20	4.70	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾し、端部外側に尖る	
226	928	875	包含層	須恵器	杯蓋	13.40	4.30	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部ほぼ直立し、端部外側に尖る	
226	929	871	包含層	須恵器	杯蓋	(14.25)	4.25	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾し、端部外側に尖る	内面に当て具の痕跡
226	930	602	包含層	須恵器	杯蓋	13.85	4.70	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾し、端部外側に尖る	
226	931	718	包含層	須恵器	杯蓋	(14.90)	(4.05)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部外傾し、端部外側に尖る	
226	932	714	包含層	須恵器	杯蓋	(14.85)	4.95	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ、口縁端部に工具痕	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾し、端部丸い	内面に当て具の痕跡
226	933	878	包含層	須恵器	杯蓋	(15.20)	(4.90)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部外傾し、端部外側に尖る	内面に当て具の痕跡
226	934	543	包含層	須恵器	杯蓋	(15.00)	(4.25)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部平坦、稜線明瞭、口縁部外傾し、端部外側に尖る	自然釉
226	935	880	包含層	須恵器	杯蓋	(14.80)	4.50	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾し、端部外側に尖る	
226	936	1045	包含層	須恵器	杯蓋	(14.50)	(5.00)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線不明瞭、口縁部内湾し、端部外側に尖る	
226	937	713	包含層	須恵器	杯蓋	14.95	5.10	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線不明瞭、口縁部内湾し、端部外側に尖る	
226	938	867	包含層	須恵器	杯蓋	(14.35)	5.10	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部外傾し、端部外側に尖る	
226	939	656	包含層	須恵器	杯蓋	(13.50)	3.40	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部凹み、稜線凹線による、口縁部内湾し、端部外側に尖る	内面に当て具の痕跡？
226	940	732	包含層	須恵器	杯蓋	(15.80)	(3.85)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部平坦、稜線不明瞭、口縁部内湾し、端部外側に尖る	
226	941	734	包含層	須恵器	杯蓋	14.70	4.45	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線凹線による、口縁部内湾し、端部外側に尖る	
226	942	613	包含層	須恵器	杯蓋	(14.60)	(4.45)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線凹線による、口縁部内湾し、端部外側に尖る	内面に当て具の痕跡？
226	943	879	包含層	須恵器	杯蓋	(13.80)	(4.00)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部外傾し、端部外側に尖る	
226	944	872	包含層	須恵器	杯蓋	(14.20)	4.50	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾し、端部外側に尖る	
228	945	753	包含層	須恵器	杯蓋	14.30	(4.20)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線凹線による、口縁部内湾し、端部外側に尖る	
228	946	974	包含層	須恵器	杯蓋	−	(1.50)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸い	天井部にヘラ記号
228	947	659	包含層	須恵器	杯蓋	(14.90)	(4.20)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部尖り気味、稜線凹線による、口縁部内湾し、端部外側に尖る	天井部にヘラ記号
228	948	761	包含層	須恵器	杯蓋	(14.50)	(3.60)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部外傾し、端部外側に尖る	内面灰かぶり？被熱？
228	949	1028	包含層	須恵器	杯蓋	(13.70)	(4.25)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線不明瞭、口縁部外傾し、端部丸い	
228	950	711	包含層	須恵器	杯蓋	(14.00)	3.95	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾し、端部尖る	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
228	951	1042	包含層	須恵器	杯蓋	−	−	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線不明瞭、口縁部外傾し、端部外側に尖る	
228	952	763	包含層	須恵器	杯蓋	(14.05)	(4.30)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線不明瞭、口縁部ほぼ直立し、端部外側に尖る	内面に当て具の痕跡？
228	953	877	包含層	須恵器	杯蓋	14.00	4.50	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾し、端部外側に尖る	
228	954	542	包含層	須恵器	杯蓋	(15.00)	4.80	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部内湾し、端部外側に尖る	
228	955	720	包含層	須恵器	杯蓋	(13.80)	(4.15)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部丸く、稜線不明瞭、口縁部内湾し、端部外側に尖る	内面に当て具の痕跡？
228	956	341	包含層	須恵器	杯蓋	(17.70)	(4.50)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線凹線による、口縁部内湾し、端部丸い	
228	957	821	包含層	須恵器	杯身	8.45	5.10	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ・ナデ、内面に仕上げナデ、肩部に櫛描波状文	内湾する体部で立上がり外反気味に内傾、端部肥厚、受部やや上向きに突出する	
228	958	1032	包含層	須恵器	杯身	(9.90)	4.25	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部やや上向き	
228	959	730	包含層	須恵器	杯身	(11.70)	(4.25)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部水平	自然釉、重ね焼き痕
228	960	817	包含層	須恵器	杯身	(13.00)	4.60	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	
228	961	813	包含層	須恵器	杯身	(11.90)	4.80	(5.60)	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	
228	962	536	包含層	須恵器	杯身	(13.00)	4.70	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	
228	963	818	包含層	須恵器	杯身	(12.20)	4.70	7.90	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部やや上向き	
228	964	812	包含層	須恵器	杯身	(12.80)	3.95	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	
228	965	758	包含層	須恵器	杯身	(12.40)	5.30	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部ほぼ水平	
228	966	762	包含層	須恵器	杯身	(12.50)	5.20	6.20	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部やや上向き	
228	967	712	包含層	須恵器	杯身	(13.10)	4.80	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部水平	
228	968	729	東側溝	須恵器	杯身	(12.90)	(4.85)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部上向き	
228	969	614	包含層	須恵器	杯身	(12.90)	(4.40)	5.20	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり外反気味に内傾、端部尖る、受部水平	底部外面にヘラ記号
228	970	1073	包含層	須恵器	杯身	(12.20)	−	−	ロクロナデ	内湾する体部で立上がり外反気味に内傾、端部尖る、受部上向き	
228	971	538	包含層	須恵器	杯身	(13.80)	5.70	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部尖る、受部上向き	
228	972	540	包含層	須恵器	杯身	12.80	5.00	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部ほぼ水平	内面に当て具の痕跡
228	973	544	包含層	須恵器	杯身	(13.60)	(3.90)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり外反気味に内傾、端部尖る、受部ほぼ水平	
228	974	716	包含層	須恵器	杯身	(12.80)	3.70	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	重ね焼き痕、外面灰かぶり
230	975	886	包含層	須恵器	杯身	12.60	5.10	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部上向き	
230	976	885	包含層	須恵器	杯身	(12.80)	4.30	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部ほぼ水平	
230	977	883	包含層	須恵器	杯身	(13.00)	4.80	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部ほぼ水平	
230	978	658	包含層	須恵器	杯身	(12.40)	4.00	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部尖る、受部上向き	
230	979	1076	包含層	須恵器	杯身	(12.90)	(5.30)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部ほぼ水平	
230	980	968	包含層	須恵器	杯身	(11.90)	(4.20)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部尖る、受部ほぼ水平	外面にヘラ記号
230	981	819	包含層	須恵器	杯身	(13.30)	4.80	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり外反気味に内傾、端部外側に尖る、受部上向き	
230	982	865	包含層	須恵器	杯身	−	(4.10)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり外反気味に内傾、端部外側に尖る、受部水平	
230	983	597	包含層	須恵器	杯身	(13.10)	(4.35)	9.70	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり外反気味に内傾、端部外側に尖る、受部上向き	底面にヘラ記号

図版No.	報告No.	実測番号	出土地	種別	器種	口径	器高	底径	技法　他	形態の特徴	備　考
			遺構・土層			(cm)	(cm)	(cm)			
230	984	1072	包含層	須恵器	杯身	(11.00)	(4.50)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり外反気味、端部丸い、受部ほぼ水平	内外面に鉄分付着
230	985	1030	包含層	須恵器	杯身	(11.80)	(4.45)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部上向き	内面に当て具の痕跡
230	986	1077	包含層	須恵器	杯身	(12.80)	(4.75)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり外反気味、端部丸い、受部ほぼ水平	
230	987	928	包含層	須恵器	杯身	−	(4.60)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり外反気味、受部上向きで丸い	内面生焼け
230	988	664	包含層	須恵器	杯身	(12.50)	5.00	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部ほぼ水平	生焼け
230	989	728	包含層	須恵器	杯身	(14.90)	5.60	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部やや上向き	
230	990	1074	包含層	須恵器	杯身	(12.70)	(3.80)	−	ロクロナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部上向き	
230	991	1034	包含層	須恵器	杯身	(14.00)	(4.70)	−	ロクロナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	内面に当て具の痕跡、外面に緑色自然釉
230	992	1041	包含層	須恵器	杯身	(16.80)	(4.70)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部やや上向き	
230	993	731	包含層	須恵器	杯身	(11.90)	(4.43)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部やや上向き	
230	994	1036	包含層	須恵器	杯身	(12.60)	(5.10)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部やや上向き	
230	995	663	包含層	須恵器	杯身	−	2.10	−	ロクロナデ、外面ヘラケズリ	内湾する体部	底面にヘラ記号
230	996	657	包含層	須恵器	杯身	11.90	4.00	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部ほぼ水平	底面にヘラ記号
230	997	715	包含層	須恵器	杯身	(13.40)	4.55	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部尖る、受部やや上向き	内面に当て具の痕跡
230	998	717	包含層	須恵器	杯身	(14.40)	5.30	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部尖る、受部水平	内面に当て具の痕跡、重ね焼き痕
230	999	1040	包含層	須恵器	杯身	(15.90)	(5.05)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部水平	
232	1000	756	包含層	須恵器	杯身	(12.80)	4.70	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部やや上向き	
232	1001	1039	包含層	須恵器	杯身	(13.90)	(4.10)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	
232	1002	1075	包含層	須恵器	杯身	(14.30)	(3.80)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり外反気味、端部丸い、受部やや上向き	
232	1003	1038	包含層	須恵器	杯身	(13.70)	(4.90)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部やや上向き	内面に当て具の痕跡、外面に緑色自然釉
232	1004	1037	包含層	須恵器	杯身	(13.40)	(4.80)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部ほぼ水平	
232	1005	1029	包含層	須恵器	杯身	(11.80)	(4.40)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部ほぼ水平	重ね焼き痕？（他の土器片釉着）
232	1006	815	包含層	須恵器	杯身	(13.20)	5.10	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	
232	1007	755	包含層	須恵器	杯身	(12.00)	4.40	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部水平	重ね焼き痕
232	1008	882	包含層	須恵器	杯身	14.40	5.30	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部やや上向き	底面にヘラ記号
232	1009	1035	包含層	須恵器	杯身	(11.70)	3.95	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部水平	
232	1010	660	包含層	須恵器	杯身	(12.70)	3.70	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部上向き	
232	1011	757	包含層	須恵器	杯身	(12.00)	(3.90)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部水平	重ね焼き痕
232	1012	945	包含層	須恵器	杯身	(12.50)	3.90	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部外側に尖る、受部上向き	内面に当て具の痕跡
232	1013	754	包含層	須恵器	杯身	(14.40)	4.00	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	重ね焼き痕
232	1014	884	包含層	須恵器	杯身	11.70	4.50	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	
232	1015	1031	包含層	須恵器	杯身	(12.90)	(4.00)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり外反気味、端部丸い、受部ほぼ水平	
232	1016	1033	包含層	須恵器	杯身	(12.60)	(3.90)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり外反気味、端部丸い、受部やや上向き	外面一部に自然釉、底面にヘラ記号
232	1017	719	包含層	須恵器	杯身	(12.30)	(3.80)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり外反気味、端部丸い、受部やや上向き	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
232	1018	881	包含層	須恵器	杯身	11.10	3.70	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	
232	1019	1046	包含層	須恵器	蓋	4.40	(1.80)	−	ロクロナデ	中央の窪んだボタン状のつまみ	
232	1020	598	包含層	須恵器	蓋	−	(3.05)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	中央の窪んだボタン状のつまみ、天井部丸い	
232	1021	869	包含層	須恵器	蓋	−	(4.00)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	中央の窪んだ大きナボタン状のつまみ、天井部丸い	
232	1022	1043	包含層	須恵器	高杯（杯部）	(13.70)	(4.40)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	椀状の杯部、口縁端部丸いが内面に1条の凹線、外面口縁下に1条の沈線	
232	1023	531	包含層	須恵器	高杯（脚部）	−	(7.60)	(8.30)	ロクロナデ	外反して開く脚部、端部丸い	円孔3方に穿つ
232	1024	1044	包含層	須恵器	高杯（脚部）	−	(3.75)	−	ロクロナデ	外反して開く脚部、端部やや肥厚するが丸い	外面に自然釉、円形・方形透かし各1箇所残る
232	1025	891	包含層	須恵器	高杯（脚部）	−	(5.70)	10.80	ロクロナデ、外面中位にカキ目	外反して開く脚部、端部上方に肥厚	円孔残存2個（推定3方）
232	1026	530	包含層	須恵器	高杯（脚部）	−	(6.50)	(9.80)	ロクロナデ、内面上端ヘラケズリ	外反して開く脚部、中位に突帯、端部下方に尖る	砲弾形透孔4方に穿つ、自然釉付着
232	1027	710	包含層	須恵器	高杯	11.70	11.05	7.75	ロクロナデ、杯底部外面ヘラケズリ	椀状の杯部、外面口縁下に1条の凹線、外反して開く脚部、端部丸い	
234	1028	1080	包含層	須恵器	はそう	−	(6.50)	−	ロクロナデ、外面体部下半ヘラケズリ	肩の張る球形の体部から外反気味に立ち上がる頸部	外面肩部から体部にかけて自然釉
234	1029	600	包含層	須恵器	はそう	−	(7.25)	3.70	ロクロナデ、外面体部下半ヘラケズリ後ナデ	肩の張る球形の体部	体部中位に円孔1個穿つ
234	1030	599	包含層	須恵器	はそう	−	(7.20)	−	ロクロナデ、内面頸部に絞り目、外面体部下半格子タタキ	算盤玉形の体部から外方に開く頸部	体部中位に円孔1個穿つ
234	1031	764	包含層	須恵器	はそう	(8.85)	10.45	−	ロクロナデ、外面体部下半ヘラケズリ後ナデ	肩の張る球形の体部から外反し屈曲して立ち上がる二重口縁	体部中位に円孔1個穿つ、二次焼成
234	1032	927	包含層	須恵器	はそう	(8.30)	9.60	−	ロクロナデ、体部内面・外面下半ナデ	扁平ナ球形の体部から外反し屈曲して立ち上がる二重口縁	体部中位に円孔1個穿つ、内面口縁屈曲部に自然釉
234	1033	601	包含層	須恵器	はそう	(9.20)	(10.70)	−	ロクロナデ、内面頸部に絞り目、体部下半に当て具痕、外面体部下半格子タタキ	肩の張る球形の体部から外反し屈曲して立ち上がる二重口縁	体部中位に円孔1個穿つ、二次焼成
234	1034	666	包含層	須恵器	小型丸底壺	(7.00)	6.70	−	ロクロナデ、外面体部下半ヘラケズリ	肩の張る球形の体部からほぼ直立する口縁部	
234	1035	616	包含層	須恵器	無頸壺	(8.60)	(4.85)	(6.00)	ロクロナデ	肩の張る扁平ナ球形の体部からほぼ直立する短い口縁部、端部丸い	
234	1036	760	包含層	須恵器	壺蓋	5.40	4.80	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線不明瞭、口縁部外反気味、端部外側に尖る	
234	1037	868	包含層	須恵器	蓋	(8.30)	(2.15)	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	天井部浅く稜線外方へ大きく突出、口縁部ほぼ直立し、端部尖る	
234	1038	820	包含層	須恵器	蓋	10.95	2.30	−	ロクロナデ、内面に仕上げナデ、天井部外面に櫛状工具による刺突列点文	天井部浅く、稜線外方へ突出、口縁部ほぼ直立し、端部丸い	
234	1039	888	包含層	須恵器	無頸壺	(7.40)	(3.80)	−	ロクロナデ	内湾する体部、ほぼ直立する短い口縁部	
234	1040	709	包含層	須恵器	小型壺	7.85	(3.30)	−	ロクロナデ	屈曲して内湾気味に開く口縁部、端部わずかに外反	自然釉付着
234	1041	977	包含層	須恵器	壺	(8.50)	(4.40)	−	ロクロナデ、外面に突帯で画された櫛描波状文2帯	内湾気味に立ち上がる口縁部、端部丸い	
234	1042	532	包含層	須恵器	壺？	−	(2.70)	−	ロクロナデ、外面に突帯で画された櫛描波状文3帯	内湾気味に開く口縁部	
234	1043	735	包含層	須恵器	小型壺	−	(5.70)	−	ロクロナデ、外面体部下半ヘラケズリ	玉葱状の体部	外面肩部にヘラ記号
234	1044	534	包含層	須恵器	小型壺	−	(2.80)	(3.20)	ロクロナデ、外面体部下半ヘラケズリ	平底、内湾して立ち上がる体部	
234	1045	889	包含層	須恵器	小型壺	−	(2.60)	(4.00)	ロクロナデ、外面体部下半ヘラケズリ	平底、内湾して立ち上がる体部、カップ状の把手下端が残る	
234	1046	736	包含層	須恵器	壺	(10.00)	(4.25)	−	ロクロナデ、口縁屈曲部に2条の凹線	外反気味の頸部、緩やかに屈曲して立ち上がる二重口縁	
234	1047	759	包含層	須恵器	壺	10.70	(4.30)	−	ロクロナデ	外反して開く口縁部、端部下方に反り丸い	
234	1048	890	包含層	須恵器	壺	−	(5.90)	9.40	口縁部ロクロナデ、体部内面ナデ、外面ハケ調整	内湾する体部から外反して立ち上がる口縁部、端部上方へ引き上げ受け口状	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
234	1049	737	包含層	須恵器	台付壺(脚台)	−	(3.20)	(8.30)	ロクロナデ、内面上半ヘラケズリ、屈曲部に2条の凹線	外反して開く脚部、さらに屈曲して外方に開く	円孔3方？に穿つ
234	1050	866	包含層	須恵器	底部	−	(1.90)	(8.45)	ロクロナデ、内面に仕上げナデ、底部ヘラ切り後ナデ	平たい底部、高台は両側に肥厚し踏ん張る	
234	1051	848	包含層	須恵器	壺	−	(10.90)	−	ロクロナデ、外面体部上半カキ目、下半ヘラケズリ	扁平ナ球形の体部	
234	1052	603	包含層	須恵器	壺	−	(10.80)	−	ロクロナデ、外面頸部カキ目、上半にヘラ描き沈線・櫛描波状文	玉葱状の体部	外面に自然釉
234	1053	926	側溝 北側溝	須恵器	装飾壺	−	(21.80)	−	ロクロナデ、外面体部カキ目、下半タタキ、頸部に櫛描波状文・ヘラ描き沈線	扁平ナ球形の体部から立上がり外反して開く口縁部	外面体部中位にヘラ記号、自然釉
234	1054	851	包含層	須恵器	台付長頸壺	−	(23.10)	15.20	ロクロナデ、内面底部ユビナデ、外面体部カキ目、下半タタキ、脚部に櫛描波状文	扁平ナ球形の体部、外反して開く脚部、体部との接合部に貼り付け突帯、脚端部は内湾し肥厚	方形と三角形透かし2段それぞれ3方に交互に穿つ
238	1055	611	包含層	須恵器	壺	(15.20)	(8.80)	−	ロクロナデ、体部内外面タタキ、外面はカキ目、頸部外面に櫛状工具による刺突列点文	内湾する体部から外反して開く口縁部、端部肥厚し上方へ引き上げる	
238	1056	975	包含層	須恵器	壺	(14.50)	(4.70)	−	ロクロナデ、外面に櫛描波状文	外反して開く口縁部、端部わずかに肥厚	
238	1057	667	包含層	須恵器	壺	(17.40)	(4.70)	−	ロクロナデ	外反して開く口縁部、端部肥厚し垂下	外面に自然釉
238	1058	1079	包含層	須恵器	壺	(15.50)	(3.45)	−	ロクロナデ、外面にカキ目	外傾して開く口縁部、端部肥厚	
238	1059	1047	包含層	須恵器	壺	(12.60)	(6.15)	−	ロクロナデ	外傾して開く口縁部、端部丸い	
238	1060	1078	包含層	須恵器	壺	(13.00)	(4.80)	−	ロクロナデ、体部内面タタキ	外反して開く口縁部、端部内側に肥厚	
238	1061	870	側溝	須恵器	壺	(14.60)	(5.10)	−	ロクロナデ	外反する頸部、屈曲して外方に開く二重口縁、端部外側に肥厚	
238	1062	953	包含層	須恵器	筒形器台？	(18.60)	(5.70)	−	ロクロナデ、立上がり部外面に2帯の櫛描波状文・凹線	外反する頸部から屈曲して外方に開く二重口縁	内面に自然釉
238	1063	596	包含層	須恵器	壺？(口縁部)	−	(6.20)	−	ロクロナデ、外面に2帯の櫛描波状文・凹線	外傾して開く口縁部、端部外方へ垂下	
238	1064	849	包含層	須恵器	壺	−	(7.30)	−	ロクロナデ・ユビナデ、外面肩部に格子タタキ、口縁立上がり部に櫛描波状文	内湾する体部から外反して開き屈曲して立ち上がる二重口縁	内外面一部に灰かぶり
238	1065	727	包含層	須恵器	甕	19.40	(32.35)	−	ロクロナデ、体部内面当て具痕(同心円文)、外面タタキ後カキ目	球形の体部から外反して開く口縁部、端部肥厚し内側に尖る	
238	1066	964	包含層 土器群B	須恵器	甕	20.00	34.00	−	ロクロナデ、体部内面当て具痕（同心円文）、外面タタキ後ナデ	球形の体部から外反して開く口縁部、端部肥厚し上方に引き上げる	頸部外面にヘラ記号、歪み顕著、底部近くに径約9cmの凹み
240	1067	765	包含層	須恵器	甕	(19.60)	(35.70)	−	ロクロナデ、体部内面当て具痕(同心円文)、外面タタキ後カキ目	球形の体部から外反して開く口縁部、端部肥厚し角張る	
240	1068	963	包含層 土器群B	須恵器	甕	(20.10)	(41.70)	−	ロクロナデ、体部内面当て具痕（同心円文）、外面タタキ後カキ目	球形の体部から外反して開く口縁部、端部肥厚し外側に折り返す	内外面に自然釉
242	1069	952	包含層	須恵器	装飾壺	(17.40)	(12.30)	−	ロクロナデ、口縁部〜肩部に波状文・直線文・竹管押捺文	内湾する体部から外反して開く口縁部、2本の突帯貼付、端部丸い	
242	1070	1048	包含層	須恵器	壺	(14.00)	(5.00)	−	ロクロナデ	外反して開く口縁部、端部肥厚し角張る	
242	1071	976	包含層	須恵器	壺	(19.70)	(5.00)	−	ロクロナデ、2帯の櫛描波状文	外反して開く口縁部、3本の突帯貼付、端部上方へ引き上げる	
242	1072	708	包含層	須恵器	壺	(17.00)	(6.75)	−	ロクロナデ、3帯の櫛描波状文	内湾気味に立上がり外反して開く口縁部、3本の突帯貼付、端部肥厚	
242	1073	1049	包含層	須恵器	甕	(20.40)	(6.75)	−	ロクロナデ、体部内面当て具痕(同心円文)、外面タタキ後カキ目	外反して開く口縁部、端部肥厚し上方へ引き上げる	
242	1074	847	包含層	須恵器	甕	(15.95)	(8.80)	−	ロクロナデ、体部内外面ユビ成形痕	内湾する体部から外反して開く口縁部、端部肥厚し外方へ引き出す	
242	1075	873	包含層	須恵器	甕	(24.25)	(6.20)	−	ロクロナデ、体部内外面ユビ成形痕	外反して開く口縁部、端部肥厚	
242	1076	850	包含層	須恵器	甕	(19.60)	(7.00)	−	ロクロナデ、体部内面当て具痕（同心円文）、外面タタキ	内湾する体部から外反して開く口縁部、端部肥厚	内面口頸部と外面肩部に灰かぶり
242	1077	947	撹乱	須恵器	筒形器台	−	(5.00)	(21.60)	ロクロナデ、外面カキ目・櫛描波状文2帯	脚端部屈曲して内湾する脚部、端部肥厚し外側に踏ん張る	方形透かしの痕跡？
242	1078	722	包含層	須恵器	鉢	(13.40)	5.20	(5.80)	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面にヘラ圧痕	椀状の体部、外反して開く口縁部、端部丸い	
242	1079	887	包含層	須恵器	鉢	(11.40)	(4.60)	(8.70)	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ後ナデ	平底から内湾する扁平ナ体部、口縁内側に屈曲し端部肥厚して角張る	
242	1080	946	包含層	須恵器	椀	−	(6.50)	−	ロクロナデ	椀状の体部から明瞭ナ稜線を持ち外反して開く口縁部、脚台付?	外面に自然釉

図版No.	報告No.	実測番号	出土地	種別	器種	口径	器高	底径	技法　他	形態の特徴	備　考
			遺構・土層			(cm)	(cm)	(cm)			
242	1081	738	東側溝	須恵器	把手付鉢	(7.30)	(7.10)	−	ロクロナデ、体部下半内外面ユビ押さえ痕、外面に凹線により形成された稜	内湾する体部、内傾する口縁部、把手の痕跡？	
242	1082	876	包含層	須恵器	鉢	(8.30)	6.80	(4.45)	ロクロナデ、体部下半内外面ユビ押さえ痕、外面に刺突文	平底、内湾して立ち上がる体部、口縁わずかに外傾、端部丸い	
242	1083	668	包含層	須恵器	すり鉢	−	(9.00)	−	ロクロナデ、体部外面カキ目	平底から筒状に立ち上がる体部	外面に自然釉
242	1084	814	包含層	須恵器	すり鉢	(13.00)	15.35	10.10	ロクロナデ、体部外面カキ目、底部ナデ	平底から筒状に立ち上がる、口縁部外反し端部肥厚、底部外方に突出し角張る、体部上半に焼成前穿孔、把手欠損	口縁部・底部に一部灰かぶり
242	1085	533	包含層	須恵器	樽形はそう	−	−	−	ロクロナデ	側面平坦、屈曲部外方に突出し尖る	内外面に自然釉
244	1086	670	包含層	須恵器	装飾器台	(25.60)	(25.20)	−	ロクロナデ、脚柱部内面ユビ成形後ナデ、外面カキ目、粗い櫛描波状文	椀状の受部、口縁端部内側に肥厚、筒状の脚柱部	方形透孔４方に３段
244	1087	955	包含層	須恵器	装飾器台	−	(8.20)	−	ロクロナデ、接合部ナデ、櫛描波状文３帯・櫛状工具刺突列点文	椀状の受部、外方へ開く脚柱部	方形透孔残存２個（８方？）
244	1088	954	包含層	須恵器	装飾器台	−	(10.60)	−	ロクロナデ、外面に櫛描波状文３帯	外反して開く脚台部	三角形透孔４方に２段
244	1089	956	包含層	須恵器	装飾器台	(41.60)	(11.70)	−	ロクロナデ、外面に櫛描波状文５帯	椀状の受部、外反して開く口縁部	内面に自然釉
244	1090	960	包含層	須恵器	装飾器台	(38.60)	36.30	(32.80)	ロクロナデ、外面に櫛描波状文受部・脚部に各５帯、最下段に円形の刺突文、１３本の突帯	椀状の受部、外反して開く口縁部、ハの字状に開く脚部	方形透孔８方に３段、その最下段の方形透孔間に円形透孔、受部内面・脚部外面に自然釉
246	1091	958	包含層	須恵器	装飾器台	(35.40)	(14.30)	−	ロクロナデ、外面にヘラ描き鋸歯文・格子文、刺突列点文・凹線	椀状の受部、外傾して開く口縁部	
246	1092	959	包含層	須恵器	装飾器台	−	(23.90)	(27.40)	ロクロナデ、外面に櫛描波状文８帯	つり鐘状の脚台部、端部外反する、外面に断面M字状の突帯	方形透孔８方に３段
246	1093	957	包含層	須恵器	装飾器台	−	(15.50)	(31.40)	ロクロナデ、外面に櫛描波状文４帯・櫛状工具による刺突列点文	ハの字状に開く脚部、端部外反する	方形透孔８方？に３段
246	1094	822	包含層	備前	壺	(26.15)	(8.05)	−	ロクロナデ、頸部以下にユビ押さえ痕	外反して開く口縁部、直下に突帯貼付	
246	1095	725	包含層	瓦器	椀	(12.95)	(3.25)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ後ヘラミカキ、外面ナデ	内湾気味に開く体部から緩やかに屈曲して立上がる口縁部、端部肥厚	外面に重ね焼き痕
246	1096	909	包含層	瓦器	椀（底部）	−	(0.90)	4.90	ヨコナデ	平たい底部、高台は外側に踏ん張る	
246	1097	726	包含層	瓦器	椀（底部）	−	(0.75)	(5.00)	ヨコナデ	平たい底部、低い高台	
246	1098	723	包含層	瓦器	羽釜（鍔部）	−	(2.90)	−	ヨコナデ	内傾する口縁部、端部内側に肥厚、羽はほぼ水平に突出する、	
246	1099	724	包含層	瓦器	三足鍋(脚部)	−	8.55	−	ユビ成形後ナデ	角状	
248	1100	1001	包含層	須恵器	椀？	−	(2.70)	−	ロクロナデ、２帯の細かい櫛描波状文	やや内湾して立ち上がる体部	
248	1101	1000	包含層	須恵器	椀？	−	(3.20)	−	ロクロナデ、２帯の細かい櫛描波状文	やや内湾して立ち上がる体部	
248	1102	1007	包含層	須恵器	壺？	−	(3.10)	−	ロクロナデ、外面タタキ後ナデ後櫛描波状文	内湾する体部	
248	1103	1005	東側溝	須恵器	杯蓋？	−	(1.60)	−	ロクロナデ、櫛状工具による刺突列点文	内湾する天井部？	
248	1104	1004	東側溝	須恵器	壺？	−	(2.60)	−	ロクロナデ、櫛状工具による刺突列点文	屈曲する肩部？	外面に自然釉
248	1105	1003	包含層	須恵器	壺？	−	(3.80)	−	ロクロナデ、櫛状工具による刺突列点文	屈曲する肩部？	
248	1106	1002	包含層	須恵器	壺？	−	(3.70)	−	ロクロナデ、外面ヘラケズリ、櫛状工具による刺突列点文	屈曲する肩部？	
248	1107	1006	包含層	須恵器	壺？	−	(2.20)	−	ロクロナデ、内外面タタキ後外面カキ目	内湾する肩部	
248	1108	1009	包含層	須恵器	器台	−	(2.80)	−	ロクロナデ、櫛描波状文・櫛状工具による刺突列点文	内湾する受部	
248	1109	1013	包含層	須恵器	器台	−	(4.00)	−	ロクロナデ、櫛描波状文	ハの字状に開く脚部	
248	1110	982	包含層	須恵器	甕	−	(2.10)	−	ロクロナデ、櫛描波状文	外反して開く口縁部、外面に突帯貼付	
248	1111	981	包含層	須恵器	壺	−	(3.20)	−	ロクロナデ、櫛描波状文	外反して開く口縁部、外面に突帯貼付	

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
248	1112	996	包含層	須恵器	甕	－	(4.40)	－	ロクロナデ、櫛描波状文	外反して開く口縁部、端部肥厚	端部に自然釉
248	1113	979	包含層	須恵器	甕	－	(3.00)	－	ロクロナデ、突帯で画された2帯の櫛描波状文	外反して開く口縁部、外面に突帯貼付	
248	1114	997	包含層	須恵器	甕	－	(2.90)	－	ロクロナデ、櫛描波状文	外反して開く口縁部、端部肥厚し角張る	外面に自然釉
248	1115	988	包含層	須恵器	壺	－	(3.80)	－	ロクロナデ、突帯で画された櫛描波状文	屈曲して立ち上がる口縁部？	
248	1116	987	包含層	須恵器	壺	－	(3.60)	－	ロクロナデ、突帯で画された2帯の櫛描波状文	外傾する口縁部	
248	1117	991	包含層	須恵器	壺	－	(5.00)	－	ロクロナデ、突帯で画された2帯の櫛描波状文	外傾する口縁部	
248	1118	980	包含層	須恵器	壺	－	(3.50)	－	ロクロナデ、突帯で画された2帯の櫛描波状文	外反して開く口縁部	
248	1119	994	包含層	須恵器	壺	－	(4.60)	－	ロクロナデ、櫛描波状文・櫛状工具による刺突列点文	内湾気味に立ち上がる口縁部	
248	1120	983	包含層	須恵器	壺	－	(5.40)	－	ロクロナデ、櫛描直線文・波状文	外反して開く口縁部	
248	1121	1008	包含層	須恵器	器台	－	(2.90)	－	ロクロナデ、櫛状工具による刺突列点文	内湾する受部	
248	1122	992	包含層	須恵器	壺	－	(3.50)	－	ロクロナデ、櫛描波状文	外傾する口縁部	
248	1123	999	包含層	須恵器	壺	－	(3.90)	－	ロクロナデ、突帯で画された2帯の櫛描波状文	外傾する口縁部	内面に自然釉
250	1124	993	包含層	須恵器	壺	－	(5.80)	－	ロクロナデ、櫛描波状文・櫛状工具による刺突列点文	外反して開く口縁部	
250	1125	989	包含層	須恵器	壺	－	(4.30)	－	ロクロナデ、突帯で画された3帯の櫛描波状文	外反して開く口縁部	
250	1126	985	包含層	須恵器	壺	－	(2.20)	－	ロクロナデ、ヘラ描文	外反して開き屈曲して立ち上がる二重口縁	
250	1127	990	包含層	須恵器	壺	－	(3.60)	－	ロクロナデ、櫛描波状文	外傾する口縁部	
250	1128	984	包含層	須恵器	壺	－	(4.50)	－	ロクロナデ、櫛描波状文？	外反して開き屈曲して立ち上がる二重口縁	
250	1129	986	包含層	須恵器	壺	－	(4.90)	－	ロクロナデ、櫛描波状文	外傾する口縁部	
250	1130	1011	包含層	須恵器	器台	－	(4.50)	－	ロクロナデ、櫛描波状文	ハの字状に開く脚部	台形？透孔の痕跡
250	1131	998	包含層	須恵器	甕	－	(6.00)	－	ロクロナデ、突帯で画された2帯の櫛描波状文	外傾する口縁部	
250	1132	1010	包含層	須恵器	器台	－	(7.10)	－	ロクロナデ、受部下半タタキ、櫛描波状文	内湾する受部	
250	1133	995	包含層	須恵器	甕	－	(9.30)	－	ロクロナデ、櫛描波状文	外反して開く口縁部	外面に自然釉
250	1134	1012	包含層	須恵器	器台	－	(4.40)	－	ロクロナデ、櫛描波状文	ハの字状に開く脚部	3方に方形の透孔の痕跡
276	1137	7	SK02	土師器	高杯	(18.20)	(7.55)	－	立上がり部ヨコナデ、受部外面ユビ成形後ナデ	ほぼ水平ナ受部から屈曲して大きく開く口縁部	
276	1138	8	SK02	土製品	土錘	2.80	14.15	5.20	ユビ成形後ナデ	紡錘形	
276	1139	1	SD02	土師器	鉢	(11.70)	7.65	－	口縁部ヨコナデ、体部ユビ成形後ナデ、外面下半ユビ成形後ヘラケズリ後ナデ	椀状の体部、内湾して立ち上がる口縁部、端部わずかに外反	
276	1140	2	SD04	土師器	甑（底部）	(9.40)	(8.20)	－	ナデ	平底から内湾する体部が立ち上がる	15個の円孔
276	1141	3	SD04	土師器	甑（把手）	(6.50)	(8.30)	－	ユビ成形後ナデ	上方に延びる、角状	
276	1142	5	SD04	須恵器	杯身	(10.20)	3.15	－	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	
276	1143	4	SD04	須恵器	杯	11.70	4.85	9.65	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	ややふくらんだ底部からゆるやかに立上がる体部、口縁わずかに外反する	
276	1144	9	包含層	土師器	壺	(23.00)	(8.20)	－	口縁部ヨコナデ、頸部内面ナデ	外反する頸部から屈曲して立ち上がる二重口縁、端部肥厚、屈曲部外方へ突出	内面強く被熱
276	1145	12	包含層	土師器	甕	(13.80)	(4.10)	－	磨滅のためﾒ調整不明	くの字状に屈曲して開く口縁、端部内側に肥厚	
276	1146	15	包含層	土師器	底部	－	(3.10)	5.80	ナデ	平底、体部外方へ開く	底面にヘラ記号

図版No.	報告No.	実測番号	出土地 遺構・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法　他	形態の特徴	備　考
276	1147	23	包含層	土師器	高杯	16.00	(10.70)	−	脚部接合部外面にユビ押さえ痕、脚部内面ヘラケズリ	椀状の杯部、緩やかに外反して開く口縁部、端部丸い	二次焼成
276	1148	14	包含層	土師器	高杯	−	(7.80)	11.40	脚部内面上半絞り目、下半ヘラケズリ、外面ナデ、裾部ヨコナデ	筒状の脚柱部から屈曲して開く脚部、端部わずかに肥厚	外面に黒斑
276	1149	26	包含層	土師器	高杯	−	(6.00)	−	脚部内面上半絞り目、下半ユビナデ、外面ナデ、裾部ヨコナデ	脚柱部から屈曲して開く脚部	上端部被熱？羽口に転用？
276	1150	13	包含層	土師器	小型丸底壺	(7.40)	(7.40)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビ成形後ナデ	扁平ナ球形の体部から屈曲して外方に立ち上がる口縁部、端部丸い	精製土器、表面に顔料塗布？
276	1151	11	包含層	土師器	ミニチュア土器	(5.40)	5.70	−	ユビ成形後ナデ、手づくね	平たい底部から立上がり、わずかに外傾して開く口縁部	
276	1152	16	包含層	土師器	ミニチュア土器	−	(3.50)	2.90	底部に放射状にヘラ圧痕	椀状の体部	ミニチュアの搬入品、珍
276	1153	10	包含層	土師器	ミニチュア土器	(9.20)	5.20	−	ユビ成形後ナデ、手づくね	平たい底部から立上がり、外傾して開く口縁部	匙形土器？
276	1154	25	包含層	土師器	甑	(28.00)	(12.15)	−	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面ハケ調整	外傾気味に開く体部、口縁端部内側に肥厚	
278	1155	17	包含層	須恵器	杯蓋	(13.70)	4.70	−	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	天井部丸く、稜線明瞭、口縁部外傾し、端部外側に尖る	外面に自然釉
278	1156	21	包含層	須恵器	杯身	(12.40)	(3.90)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ	内湾する体部で立上がり内傾、端部丸い、受部ほぼ水平	
278	1157	6	包含層	須恵器	高杯	(12.95)	(6.45)	−	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ、内面に仕上げナデ	内湾する体部で立上がり直立、端部丸い、受部水平、外方へ開く脚部	3方に方形透孔？内面・受部に自然釉
278	1158	18	包含層	須恵器	短頸壺	−	(6.80)	−	ロクロナデ、外面肩部にカキ目	肩の強く張る体部	
278	1159	19	包含層	須恵器	短頸壺	(7.20)	9.00	−	ロクロナデ、外面体部中位ヘラケズリ後ナデ、一部カキ目、下半ハケ調整後ナデ	扁平ナ球形の体部、ほぼ直立する短い口縁部、端部丸い	肩部に自然釉、蓋の痕跡？
278	1160	20	包含層	須恵器	甕	(16.40)	(13.50)	−	ロクロナデ、体部内面当て具痕（同心円文）、外面格子タタキ後カキ目	内湾する体部から外反して開く口縁部、端部肥厚し上方へ引き上げる、突帯2本	外面～口縁内面に自然釉
278	1161	24	包含層	須恵器	台付壺	−	(17.90)	−	体部内面下半ナデ・当て具痕（同心円文）、外面タタキ、上半後ヨコナデ、脚部ロクロナデ、外面カキ目後5帯の櫛描波状文	球形の体部、外方へ開く脚部	3方に三角形透孔
278	1162	22	包含層	土製品	土錘	3.00	9.00	4.00	ユビ成形後ナデ	円筒形	黒斑

第2表　土錘観察表

報告No.	実測番号	出土地		長さ(cm)	上端幅(cm)	最大幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	技法　他	形態の特徴	備考
		地区	遺構・土層								
9	443	C－3	SP476	8.70	3.20	4.30	2.00	144.30		円筒形	
30	440	B－5	SP264	8.80	4.30	5.40	3.80	142.50	板ナデ状工具で調整	円筒形、器壁薄い	二次焼成
31	439	B－5	SP264	9.20	4.70	5.50	4.00	187.30		円筒形、器壁薄い	二次焼成
32	441	B－5	SP264	8.70	4.50	5.55	3.70	150.80		円筒形、器壁薄い	二次焼成
40	442	C－2	SP502	8.70	4.00	4.55	2.30	174.60		円筒形、器壁薄い	
41	453	C－2	SP502	9.40	3.20	4.30	1.40	230.20	外面と端面にタタキ	円筒形	
86	444	－	SD14	8.70	3.50	4.25	1.50	139.60		円筒形	二次焼成。黒斑
92	10	B－7	SD16	(5.20)	－	－	0.70	(29.20)		円筒形	
123	450	－	SD45	(7.70)	3.60	3.90	1.50	(85.40)		円筒形	二次焼成
137	448	C－2	SD50	(6.50)	1.50	1.50	0.70	(17.40)		両端に円孔	
138	449	C－1	SD50	(7.15)	2.80	3.65	1.00	(92.00)		円筒形	
139	447	C－2	SD50	9.00	3.80	4.55	1.80	(123.90)		円筒形	
140	446	C－2	SD50	9.00	3.10	4.20	1.20	194.50		円筒形	
282	451	－	SK64	12.20	1.90	3.80	1.20	(144.50)		円筒形	
283	438	A－6	SK64	10.80	3.50	5.15	2.30	(252.20)	ヘラ調整	円筒形	
366	452	A－2	SK111	8.60	2.00	4.00	1.30	129.20		紡錘形	
439	437	C－6	SX03　a区	11.30	1.90	4.65	1.80	(203.00)		紡錘形	
547	445	－	SX06	10.10	2.90	3.55	2.30	92.40		円筒状、器壁薄い	
867	904	C－5	包含層	7.60	2.00	4.80	1.90	123.50		紡錘形	黒斑
868	795	C－2	包含層	8.35	2.30	4.40	1.40	134.20		紡錘形	
869	641	B－2	包含層	(5.95)	2.20	(4.50)	1.40	(71.40)		紡錘形	
870	524	A－7	包含層	9.00	2.20	4.50	1.00	179.30		紡錘形	
871	793	C－2	包含層　土器密集部	8.75	2.20	4.35	0.70	149.60		紡錘形	
872	785	C－2	包含層	(9.30)	3.10	4.30	1.20	(169.30)		紡錘形	
873	787	C－2	包含層	(9.20)	2.50	4.60	1.20	(183.30)		紡錘形	
874	786	C－2	包含層	11.10	2.30	5.10	1.30	(162.30)		紡錘形	黒斑
875	632	B－3	包含層	9.90	2.80	4.70	1.40	239.50		円筒形	黒斑
876	529	A－4	包含層	10.20	3.70	5.30	1.10	(268.00)		円筒形	黒斑
877	863	C－4	包含層	10.10	3.70	5.30	1.60	(298.30)		円筒形	黒斑
878	639	B－5	包含層	12.70	3.05	4.70	1.90	271.20	板ナデ	円筒形	黒斑
879	640	B－6	包含層	11.40	3.20	5.00	1.60	237.60		紡錘形	
880	654	B－5	包含層	8.60	4.60	5.50	3.80	(131.40)		円筒形、器壁薄い	黒斑

881	653	B－6	包含層	(9.00)	(4.80)	5.60	4.00	(88.10)		円筒形、器壁薄い	
882	635	B－5	包含層	6.15	4.05	4.30	1.40	123.60		円筒形	
883	784	C－2	包含層	8.60	3.70	4.05	1.80	119.10		円筒形、器壁薄い	
884	633	B－2	包含層	7.50	3.30	4.60	2.30	148.60		円筒形、器壁薄い	
885	525	A－1	包含層	(6.90)	3.60	4.00	2.00	(85.10)		円筒形、器壁薄い	
886	526	A－2	包含層	7.80	3.70	4.40	1.60	157.40		円筒形	
887	638	B－5	包含層	8.50	2.85	3.30	1.30	(127.70)	上下端部に格子タタキ	円筒形	
888	906	C－5	包含層	8.80	3.45	3.60	1.90	(77.70)		円筒形、器壁薄い	
889	905	C－5	包含層	9.30	2.70	3.75	1.30	(130.80)		円筒形	
890	949	－	包含層	8.20	4.30	4.60	2.20	164.70		円筒形、器壁薄い	上端に紐ずれ痕
891	782	C－2	包含層　土器密集部	9.10	(3.90)	4.30	1.90	(135.20)		円筒形	上端に紐ずれ痕？
892	792	C－2	包含層　土器密集部	8.90	3.80	4.70	1.80	(145.70)		円筒形	黒斑
893	528	A－2	包含層	8.20	3.00	4.10	1.40	131.30		円筒形	外面中位に紐ずれ痕？
894	948	1区	撹乱	9.00	3.50	4.40	1.30	214.80	上下端部に格子タタキ	円筒形	
895	637	B－6	包含層	8.60	3.30	3.70	1.50	133.10		円筒形	外面中位に紐ずれ痕？
896	626	B－1	包含層	9.00	2.90	3.35	2.10	(73.10)		円筒形、器壁薄い	
897	783	C－2	包含層	8.90	3.30	4.30	2.30	(133.40)		円筒形、器壁薄い	
898	527	A－2	包含層	(8.00)	3.80	4.30	2.00	(98.00)		円筒形、器壁薄い	二次焼成
899	629	B－1	包含層	10.10	3.10	4.20	2.40	147.20		円筒形、器壁薄い	黒斑、内面被熱
900	625	B－1	包含層	11.00	3.00	4.60	2.90	175.00		円筒形、器壁薄い	黒斑
901	621	C－4	包含層	(7.25)	3.10	3.40	1.70	(88.00)		円筒形、器壁薄い	黒斑
902	634	B－2	包含層	9.40	2.20	4.70	1.80	(170.10)		円筒形	黒斑
903	624	B－1	包含層	9.80	3.20	4.15	2.80	(125.10)		円筒形、器壁薄い	黒斑、外面中位に紐ずれ痕？
904	636	B－2	包含層	9.55	2.65	4.25	2.20	149.60		円筒形、器壁薄い	
905	618	B－1	包含層	9.55	3.40	4.30	2.00	143.20		円筒形、器壁薄い	二次焼成
906	620	B－1	包含層	10.50	3.40	4.50	2.30	167.80		円筒形、器壁薄い	上下端部に紐ずれ痕
907	623	B－1	包含層	10.25	3.40	4.20	2.30	128.50		円筒形、器壁薄い	外面中位に紐ずれ痕？
908	630	B－1	包含層	10.80	3.50	4.30	2.20	159.60		円筒形、器壁薄い	二次焼成による黒変
909	628	B－1	包含層	11.15	3.75	4.40	2.80	(142.30)		円筒形、器壁薄い	二次焼成
910	627	B－1	包含層	12.15	3.30	4.30	2.60	(169.20)		円筒形、器壁薄い	二次焼成、黒斑・煤付着
911	631	B－1	包含層	9.60	3.05	3.70	1.30	(132.20)		円筒形	二次焼成、上端に鉄分付着、羽口に転用？
912	622	B－1	包含層	11.55	2.60	3.35	2.20	103.60		円筒形、器壁薄い	二次焼成
913	617	B－1	包含層	11.70	3.80	4.30	2.50	201.00		円筒形、器壁薄い	黒斑、外面に木葉痕
914	619	B－1	包含層	10.50	2.40	4.10	1.40	188.60		円筒形	黒斑、外面に木葉痕
1138	8	4区	SK02	14.15	2.80	5.20	1.80	330.70		紡錘形	
1162	22	1区	包含層	9.00	3.00	4.00	1.60	119.50		円筒形	黒斑

第3表　石製品一覧表

実測番号	報告No.	出土地		器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
		地区	遺構・土層						
J13	J1	C−6	SX03　d区	紡錘車	4.30	(2.60)	0.90	11.95	滑石製
J54	J2	B−4	包含層	紡錘車	3.50	3.60	1.50	25.48	滑石製
J53	J3	A−2	包含層	紡錘車	4.35	4.35	1.05	25.95	滑石製
J2	J4	C−5	SE06	勾玉	1.65	1.10	0.40	0.77	滑石製
J1	J5	C−5	SE06	勾玉	1.65	1.15	0.25	0.55	滑石製
J3	J6	−	SX05	勾玉	2.65	2.35	0.80	5.01	メノウ製
J48	J7	その2 1区	包含層　(SD上面)	管玉	0.93	0.34	0.32	0.16	滑石製
J4	J8	B−1	SP499	双孔円板	2.65	2.60	0.25	3.28	滑石製
J8	J9	C−1	SD49　a区	双孔円板	2.45	1.92	0.38	2.99	滑石製
J6	J10	C−7	SD06	双孔円板	2.05	2.40	0.25	2.32	滑石製
J7	J11	C−7	SD14　a区	双孔円板	2.00	2.40	0.25	2.69	滑石製
J5	J12	C−7	SX05　b区	双孔円板	2.90	2.90	0.25	4.18	滑石製
J49	J13	−	包含層	双孔円板	1.75	1.80	0.30	1.74	滑石製
J50	J14	−	包含層	双孔円板	1.95	3.20	0.25	3.00	滑石製
J52	J15	C−1	包含層	有孔円板	2.475	2.56	0.35	3.90	滑石製
J51	J16	C−1	包含層	双孔円板	2.90	3.10	0.38	5.25	滑石製
J11	J17	B−1	SP499	臼玉	0.40	0.40	0.25	0.05	滑石製
J9	J18	A−6	SK64	臼玉	0.35	0.35	0.20	0.04	滑石製
J10	J19	B−2	SK122	臼玉	0.40	0.40	0.40	0.08	滑石製
J15	J20	C−1	包含層	臼玉	0.425	0.425	0.225	0.06	滑石製
J20	J21	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.40	0.40	0.20	0.06	滑石製
J28	J22	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.40	0.45	0.18	0.05	滑石製
J29	J23	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.40	0.40	0.20	0.05	滑石製
J34	J24	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.45	0.42	0.18	0.03	滑石製
J35	J25	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.38	0.40	0.10	0.02	滑石製
J36	J26	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.40	0.38	0.13	0.03	滑石製
J37	J27	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.40	0.40	0.19	0.04	滑石製
J14	J28	A−4	包含層	臼玉	0.35	0.45	0.30	0.09	滑石製
J17	J29	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.40	0.375	0.20	0.04	滑石製
J24	J30	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.46	0.50	0.275	0.08	滑石製
J25	J31	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.45	0.45	0.28	0.08	滑石製
J26	J32	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.40	0.42	0.20	0.06	滑石製
J27	J33	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.40	0.42	0.23	0.06	滑石製
J31	J34	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.45	0.45	0.25	0.06	滑石製
J38	J35	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.40	0.36	0.15	0.03	滑石製
J39	J36	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.38	0.40	0.13	0.03	滑石製
J40	J37	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.35	0.37	0.19	0.03	滑石製
J18	J38	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.45	0.45	0.25	0.07	滑石製
J19	J39	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.40	0.45	0.17	0.05	滑石製
J16	J40	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.40	0.40	0.30	0.04	滑石製
J21	J41	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.48	0.50	0.18	0.04	滑石製
J22	J42	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.40	0.40	0.28	0.06	滑石製
J23	J43	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.40	0.40	0.30	0.07	滑石製
J32	J44	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.43	0.425	0.20	0.05	滑石製
J33	J45	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.43	0.43	0.18	0.04	滑石製
J41	J46	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.33	0.30	0.20	0.03	滑石製
J42	J47	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.35	0.35	0.25	0.03	滑石製
J43	J48	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.40	0.40	0.30	0.03	滑石製
J47	J49	C−2	包含層	臼玉	0.40	0.35	0.125	0.01	滑石製
J30	J50	C−2	包含層　土器密集部	臼玉	0.38	0.39	0.38	0.08	滑石製
J45	J51	−	包含層	臼玉	0.40	0.40	0.30	0.07	滑石製
J46	J52	−	包含層	臼玉	0.40	0.45	0.29	0.07	滑石製
J44	J53	C−2	面精査	臼玉	0.45	0.50	0.45	0.09	滑石製

実測番号	報告No.	出土地		器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
		地区	遺構・土層						
S10	S1	C−2	包含層　土器密集部	打製石鏃	(4.00)	2.10	0.40	4.30	サヌカイト
S9	S2	C−3	包含層	磨製石鏃	(4.20)	2.10	0.35	3.80	粘板岩？
S11	S3	C−5・B−2	包含層　土器密集部	磨製石器	(8.10)	(4.90)	1.40	62.80	粘板岩製
S20	S4	B−7	包含層	石錘	7.25	4.85	4.00	195.00	
S15	S5	C−6	SP264	球状石製品	6.30	4.85	4.25	159.80	
S12	S6	C−5	包含層	砥石	(5.30)	(1.90)	(0.90)	12.50	玄武岩製？
S13	S7	−	SX03　d区	砥石	(7.80)	(1.50)	(1.80)	23.70	玄武岩製？
S18	S8	A−3	包含層	砥石	5.40	3.80	3.25	113.00	
S31	S9	−	排土（表採）	砥石	7.30	4.00	1.60	86.50	
S25	S10	B−4	包含層	砥石	6.50	2.80	2.15	62.30	
S1	S11	A−6	SK64	砥石	(7.00)	(3.65)	(0.10)	87.30	土器群B　砂岩
S29	S12	C−5	包含層	砥石	5.00	4.00	2.50	30.50	
S26	S13	C−4	包含層	砥石	4.90	5.80	1.90	64.80	
S2	S14	A−6	SK64	砥石	9.50	5.20	3.85	279.70	土器群B
S6	S15	C−7	SX01　a区	擦石	(6.20)	(5.05)	(2.60)	105.70	
S27	S16	C−5	包含層	砥石	6.85	6.95	0.95	64.80	
S28	S17	C−5	包含層	砥石	10.50	9.40	2.65	359.90	
S24	S18	B−3	包含層	砥石	13.10	8.90	4.95	901.80	
S7	S19	C−6	SX05　中央部分	砥石	(5.90)	(6.10)	(3.00)	132.10	
S17	S20	C−7	SX03	砥石	9.45	6.50	3.80	320.20	
S8	S21	A−6	SX04	砥石	(7.90)	(3.70)	(2.50)	112.00	
S21	S22	C−3	包含層	砥石	7.60	6.20	5.15	236.90	
S30	S23	C−5	包含層	砥石	6.95	7.65	1.65	107.80	
S4	S24	B−5	SP76	砥石	(10.00)	(6.45)	(5.50)	546.60	砂岩
S23	S25	B−2	包含層	砥石	7.45	5.90	2.20	140.50	
S22	S26	C−5	包含層	砥石	9.80	8.00	5.40	497.10	
S19	S27	A−4	包含層	砥石	15.95	8.55	3.60	217.60	
S3	S28	C−7	SP76	砥石	(10.90)	(7.40)	(3.40)	295.30	砂岩
J12	S29	C−6	SX05　西半	玉砥石	(5.28)	4.65	(1.35)	50.78	砂岩
S14	S30	B−2	SD44	砥石	16.30	6.05	7.15	916.00	
S5	S31	B−4	SP383	砥石	(12.90)	(9.00)	(6.10)	1200.00	泥岩製？
S16	S32	B−1	包含層	砥石	22.30	11.15	9.00	3000.00	
S32	S33	C−6·7	SX05　中央 c区 ・ SX03	破砕礫	(15.50)	(15.70)	(12.30)	3510.00	
S34	S34	C−2	SD50 a区	砥石	(10.50)	(2.10)	3.70	146.10	

第4表　木製品一覧表

実測番号	報告No.	出土地		器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
		地区	遺構・土層					
33	W1	C－5	SE09	板材	33.00	11.65	1.00	
32	W2	C－5	SE09	木枠	29.50	19.40	1.70	
39	W3	－	－	板材	(66.10)	10.50	2.20	
L1	W4	－	SE06	井戸枠	103.60	88.50	5.70	穴あり
L1	W5	－	SE06	井戸枠	104.00	89.60	6.50	穴なし
24	W6	－	SK54	柱材？	55.50	18.00	17.70	
28	W7	B－4	SP383	柱根	27.25	13.90	11.10	
29	W8	1区	SP06	柱材	25.70	21.50	15.60	
38	W9	－	－	柱根	59.80	15.00	15.00	
22	W10	A－5	SP292	柱根	60.80	8.70	8.70	
30	W11	C－2	SP483	角材	27.30	8.10	4.60	
23	W12	A－5	SP200	丸材	31.00	6.70	6.50	

第5表　金属製品一覧表

実測番号	報告No.	出土地		器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
		地区	遺構・土層					
M8	M1	第4次4区	SK02 灰色粘土	銅製環	(2.05)	0.20	0.20	No. 1
M2	M2	B－7	SK17	管状鉄製品	(0.85)	0.50	0.50	No.24
M5	M3	C－1	SX07	鉄製品	(2.60)	(2.65)	0.25	No.29
M3	M4	B－7	SX04	鉄製品	9.40	3.10	1.10	No.25
M4	M5	C－1	包含層	鉄製品（釘？）	(2.10)	1.20	0.45	No.27
M9	M6	B－7	包含層	鉄製品	(7.30)	2.00	0.70	No.42.43
M10	M7	B－7	包含層	鉄製品	(5.10)	5.00	0.60	No.42.43
M11	M8	B－1	包含層	鉄製品	(4.90)	2.10	0.50	No.44
M1	M9	－	排土	鉄製品	2.30	2.30	0.10	No.4
M7	M10	B－4	包含層	鉄製品	(3.05)	0.50	0.30	No.40
M6	M11	C－8	側溝	釘	(4.90)	0.30	－	No.33

第6表　出土鉄滓一覧表

地区名	出土遺構・土層	重さ（g）	個数	報告番号	地区名	出土遺構・土層	重さ（g）	個数	報告番号
A－7	SD03	21.1	1		B－7	SX04	7.6	1	
－	SD03 1区	26.9	1		B－7	SX04 b区	93.2	6	
A－7	SD04	51.4	1	M23	C－6	SX05	46.2	3	
A－7	SD04 6区	238.1	21		C－6	SX05 d区 西半	98	12	
A－7	SD04 6区	211.3	7		C－6	SX05 中央 c区	39.1	11	
A－7	SD04 c,d区	114.5	8		C－6	SX05 西半	28.4	5	
－	SD08	1.6	2		C－7	黒褐色シルト	15.9	1	
A・B－6	SD12	19.5	1		B－8	側溝	13.1	1	
B－6	SD14 c,d区	9.4	2		C－8	東側溝	9.3	2	
C－3	SD39	13.4	5		A－7	包含層	11.7	1	
C－2	SD44	183.1	1	M12	A－7	包含層	30.9	1	
C－2	SD44	32.2	4		B－1	包含層	34.7	1	
C－2	SD47	3.6	2		B－2	包含層	14.4	1	M25
C－1	SD48 c区	12.2	1		B－3	包含層	104.5	1	M16
C－2	SD48 c区	5.8	2		B－3	包含層	63.4	1	M17
C－1	SD50	98.4	1	M21	B－5	包含層	45.6	2	
C－1	SD50	39.1	1	M22	B－7	包含層	24.4	3	
C－1	SD50	49.5	2		B－7	包含層	71.6	4	
C－1	SD50	122.7	1	M20	B－8	包含層	4.4	4	
C－1	SD50	64.7	2		C－1	包含層	15.7	1	
C－1	SD50 a－b区	92.6	1		C－1	包含層	8.4	1	
C－2	SD50 a区	233.6	9		C－1	包含層	43.9	1	
C－1	SD50 b区	60.3	1		C－1	包含層	22	1	
B－1	SD50 d区	21.4	1		C－2	包含層	18.6	1	
B－1	SD50 d区 上層	7.3	1		C－3	包含層	62.6	1	
C－5	SE06	36.9	1	M24	C－6	包含層	9.4	1	
A－7	SK01	111.9	3		－	包含層	55.1	1	M15
－	SK12	42.7	1	M18	A－7	包含層　上面精査	3	2	
A－7	SK38	36.4	1		A－7	包含層　上面精査	88.5	3	
B－6	SK62	64.2	1		A－7	面下げ　黒褐色シルト	17.6	2	
A－6	SK75	98.5	1	M14	C－6	面精査	12.4	1	
A－6	SK77	26.5	2		B－1	包含層	15.2	1	
A－7	SP17	51.7	1		B－1	包含層	384.8	7	
B－6	SP172	13.6	1		B－5	包含層	75.9	1	
B－4	SP380	10.9	1		C－2	包含層	11	1	
A－3	SP505	101.2	1	M13	C－2	包含層	33	1	
C－7	SX01 a区	27.3	4		C－2	包含層	90	1	
C－6	SX03 b区	59.7	1		C－3	包含層	70.5	2	
B－7	SX03 a区	30.9	3		C－3	包含層	23.5	1	
C－6	SX03 a区	16.5	3		C－4	包含層	34.2	2	
C－7	SX04 a区	25.4	5		A－2		33.7	1	
C－7	SX05 a区	10.5	1		B－3		37.2	1	
C－5	SX03 c区	18.9	1		－		106.4	1	M19
C－6	SX03 d区	27.9	2		－		43.8	2	
B－7	SX04	22.1	2		総計		4640.2	214	

第７表　出土ガラス滓一覧表

地区名	出土遺構・土層	重さ（g）	個数	報告番号	地区名	出土遺構・土層	重さ（g）	個数	報告番号
B－7	SD09 b区	5	1		B－2	包含層	6.9	1	
B－1	SD48	6.9	1		B－3	包含層	6.6	1	
					総計		25.4	4	

第８表　出土羽口一覧表

地区名	出土遺構・土層	重さ（g）	個数	報告番号	地区名	出土遺構・土層	重さ（g）	個数	報告番号
A－7	SD03	215.7	1		B－4	SX06	29	1	
A－7	SD04 6区	91.4	6		B－4	SX06	33.7	8	
A－7	SD04 c,d区	75.6	6		B－8	側溝	6.9	1	
A－7	SD11	15.1	1		C－7	側溝	99.9	8	
B－6	SD16	143.5	1	93	C－7	側溝	15.3	1	
B－7	SD16	7.4	1		－	排土　表採	21.1	1	
C－6	SD4 b区	59.2	1		B－8	東　側溝	121.2	5	
C－6	SD4 b区	51.1	3		B－8	東側　側溝	22.8	1	
A－2	SD44	50	2		A－7	包含層	24	1	
C－1	SD50 a区	18.3	1		A－7	包含層	9.7	1	
C－2	SD50 a区	216.8	5		B－2	包含層	162.4	1	865
C－1	SD50 b区　上層	18.4	2		B－4	包含層	94.9	1	
C－1	SD50 c区　上層	18.2	2		B－5	包含層	128.7	1	864
B－1	SD50 d区	74.5	3		B－5	包含層	300	1	866
C－1	SD50 a区	9.4	1		B－6	包含層	59.1	4	
A－1	SD56	22.8	1		B－6	包含層	6.5	1	
A－3	SK104	32.2	2		B－7	包含層	9.8	1	
A－3	SK104	14.8	1		B－7	包含層	12.9	9	
－	SK12	8.5	1		B－7	包含層	41.9	7	
A－7	SK16	45.5	1		B－7	包含層	27.4	1	
A－7	SK18	40.3	1		B－7	包含層	8	1	
A－7	SK20	12.1	1		C－5	包含層	38	5	
A－7	SK22	13.4	1		C－5	包含層	90.5	1	
B－6	SK23	9.9	1		C－5	包含層	273	1	863
A－6	SK64	23.6	1		C－6	包含層	139.2	2	
A－6	SK64	59.6	4		C－7	包含層	23.6	1	
A－6	SK64	22.3	1		C－7	包含層	35.2	1	
A－6	SK64	90.9	1		C－7	包含層	10.3	1	
A－6	SK64	294	1	284	A－7	面下げ　黒褐色シルト	2.8	1	
A－6	SK77	99.3	2		C－7・8	面精査	20.6	1	
C－5	SK84	67.4	1		B－2	包含層	14.4	1	
C－5	SK84	18.5	1		B－3	包含層	935.9	46	
C－5	SK84 第１層	57.1	1		B－3	包含層	11.1	1	
C－5	SK89	18.1	1		B－3	包含層	436.9	21	
B－4	SP396	19.2	1		B－3	包含層	6.4	1	
A－3	SP419	12.1	1		C－2	包含層	6.2	1	
A－3	SP442	39.5	2		C－2	包含層	10.7	1	
A－3	SP451	10.6	1		C－2	包含層	24.6	2	

C－7	SX05 西半（中央部）	38.6	2		C－3	包含層	19.1	1	
C－7・8	SX01	3	1		C－3	包含層	109.3	4	
C－7	SX01 a区	3.3	1		C－3	包含層	50.9	1	
C－7	SX01 a区	37.3	1		C－4	包含層	29.8	2	
C－7	SX02	33.5	1		C－5	包含層	20.5	2	
C－6	SX03	56.1	3		C－5	包含層	18	1	
C－6	SX03	9.9	1		C－5	包含層	17.4	1	
B－7	SX03 a区	25.9	1		C－5	包含層	133.6	1	
B－7	SX03 a区	43.7	1		－	包含層	249.7	1	1135
C－7	SX03 a区	7.6	1		－	包含層	122.7	1	1136
C－6	SX03 c区	71.7	1		A－8	包含層　掘り下げ	50.9	3	
C－5	SX03 d区	50.5	1		B－8	包含層　掘り下げ	8.3	1	
C－6	SX03 d区	14.4	1		－		16.4	1	
A－6	SX04	28.6	2		B－1		13.7	1	
A－6	SX04	42.6	3		B－7		36.9	2	
C－6	SX05	108.9	2		C－2		23.9	1	
C－6	SX05 中央 c区	91.8	6		C－3		90.5	3	
C－6	SX05 中央部分	84.3	3		C－3		166.4	1	
C－6	SX05 中央部分	192.7	3		－		7.4	1	
C－6	SX05 西半	170.3	5		－		82.1	1	
C－7	SX05 東半	116.1	1		総計		7909.2	280	

V　若王寺遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

（株）九州テクノリサーチTACセンター
大澤正己

概要

古墳時代後期に属する若王寺遺跡から出土した鍛冶関連遺物を調査して、次の点が明らかになった。鍛冶作業は鉄器製作に際しての鍛錬鍛冶である。鍛錬鍛冶は、前工程の高温沸し鍛接工程は弱く、後工程の低温素延べ・火造りが主体と想定される。鍛冶に供した鉄素材の始発原料は銅（Cu）分検出から磁鉄鉱石系と提言できる。

1．いきさつ

若王寺遺跡は尼崎市若王寺３丁目に所在する古墳時代の集落遺跡である。遺跡の特徴は、竪穴住居が無くて掘立柱建物で、これに韓式土器を多量に出土し、鉄滓や羽口を共伴している。出土した鍛冶関連遺物を通して当時の鉄器製作の実態を把握する目的から金属学的調査に至った。

2．調査方法

2－1．供試材

Table１に示す。調査試料は椀形鍛冶滓７点と羽口１点を対象とした。

2－2．　調査項目

（１）肉眼観察

遺物の肉眼観察所見。これらの所見をもとに分析試料採取位置を決定する。

（２）マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機の10倍で撮影した。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

（３）顕微鏡組織

切り出した試料をベークライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000と順を追って研磨し、最後は被研磨面をダイヤモンド粒子の3μと1μで仕上げて光学顕微鏡観察を行った。なお、金属鉄の炭化物は、ピクラル（ピクリン酸飽和アルコール液）で、フェライト結晶粒は5%ナイタル（硝酸アルコール液）で、腐食（Etching）している。

（４）ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成と、金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester ）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

（５）ＥＰＭＡ（Electron Probe Micro Analyzer）調査

分析の原理は、真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定が可能である。

（6）化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）、：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素（SiO_2）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K_2O）、酸化ナトリウム（Na_2O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO_2）、酸化クロム（Cr_2O_3）、五酸化燐（P_2O_5）、バナジウム（V）、銅（Cu）、：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

3．調査結果

（1）NKO－1　椀形鍛冶滓

①肉眼観察：鍛冶炉の炉底に堆積形成された椀形鍛冶滓である。平面が不整台形状の破片で、側面の2面が破面となる。表裏面は風化からの脱色を受け無光沢の灰褐色を呈する。上面の一部に黒色ガラスの羽口溶融物を付着する。下面は細かい木炭痕の凹凸が著しい。緻密質の滓である。

マクロ組織：Photo. 5の上段に示す。大部分が淡灰色短柱状ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）で右下に白色凝集ヴスタイト（Wüstite：FeO）の塊状部分が遺存する。鍛錬鍛冶滓の低温型素延べ時の排出滓に分類される。

③顕微鏡組織：Photo.1の①～③に示す。鉱物組成の主体は②の淡灰色短柱状結晶のファイヤライトで、これの粒間に微小白色樹状晶のヴスタイトが晶出する。①はマクロ組織の右下方の塊状ヴスタイトで凝集している。鉄器製作に際して排出された低温型の鍛錬鍛冶滓である。

④ビッカース断面硬度：硬度測定の圧痕を①と③に示す。①は白色粒状結晶で、硬度値は483Hvが得られた。ヴスタイトの文献硬度値が450～500Hvであり（注1）、この範ちゅうに入る。また、③は淡灰色短柱状結晶で、こちらは696Hvであった。ファイヤライトに同定される。

⑤化学組成分析：Table 2に示す。全鉄分（Total　Fe）は、44.14%に対して、金属鉄（Metallic Fe）は0.01%以下、酸化第1鉄（FeO）が47.64%と多くて酸化第2鉄（Fe_2O_3）は10.17%の割合である。ガラス質成分（$SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$）は37.49%で、このうちに塩基性成分（$CaO + MgO$）2.98%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（$TiO_2$）0.21%、バナジウム（V）0.01%などは左程多くなくて、酸化マンガン（MnO）0.12%、酸化クロム（Cr_2O_3）0.02%、硫黄（S）0.01%、五酸化燐（P_2O_5）0.36%なども低値である。鍛錬鍛冶滓の特質である。しかし、銅（Cu）の0.07%は高くて、始発原料は磁鉄鉱系が想定される。

（2）NKO－2　椀形鍛冶滓

①肉眼観察：平面が不整長方形を呈する椀形鍛冶滓の破片である。側面の4面が破面となる。表面は酸化土砂と風化を受けて詳細な観察が困難であるが色調は灰褐色で木炭痕を数ヶ所刻む。下面は中央に

茶褐色の錆化鉄剥落痕が残る。緻密であるが重量感に欠ける。

②マクロ組織：Photo. 5 の下段に示す。視野いっぱいに微小白色粒状ヴスタイトが広がる。なお、右側に 2 点の金属鉄小片が遺存する。なお断面周縁の黒ずみは風化を受けて素地が侵された跡である。該品は高温沸し鍛接鍛錬鍛冶滓に分類される。

③顕微鏡組織：Photo. 1 の④～⑧に示す。④の鉱物相は白色粒状結晶のヴスタイトと、その粒間を淡灰色盤状結晶のファイヤライトが埋める。⑤⑥はマクロ組織で観察された金属鉄の小さい方の拡大を示す。白いフェライト（Ferrite：純鉄）基地に細く黒い結晶粒界が網目状に走り、その交点に層状組織のパーライト（Pearlite：フェライトとセメンタイトが交互に重なり合って構成された組成の名称）が微量析出する。このパーライトの面積率で炭素含有量が推定されて0.4%Cは約半分、全面パーライトで0.77%Cと推定される。該品は0.01%以下の極軟鋼である。⑦⑧も同じく金属鉄であるが、こちらは粗大化傾向のフェライト単独の結晶で純鉄である。 2 点の金属鉄は鍛冶作業中の滴下鉄であり、鍛冶滓中には時折見受けられる。

④ビッカース断面硬度：Photo. 1 の⑧に金属鉄フェライト結晶粒の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は103Hvとフェライト単独結晶にしては高め傾向を呈する。本来は80Hv前後であろう。金属鉄を含む滓は高燐（P）気味であり、こちらからの影響があるやも知れぬ。

⑤化学組成分析：Table 2 に示す。鉄分は低めで、全鉄分（Total　Fe）は32.39%に対して金属鉄（Metallic Fe）0.02%、酸化第1鉄（FeO）は少なくて7.35%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）38.11%の割合である。ガラス質成分は38.47%で、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）は1.55%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）0.31%、バナジウム（V）0.01%は低めである。鍛冶原料鉄は砂鉄系は否定されよう。該品も前述NKO－1と同様に銅（Cu）を0.07%含有される。なお、こちらは五酸化燐（P_2O_5）を1.70%と高めを含む。後述するが羽口胎土が高燐成分であって、こちらからの影響があるのだろう。高温側の作業であり、高燐傾向も頷ける。

（3）NKO－3　椀形鍛冶滓

①肉眼観察：平面は不整楕円形状を呈する偏平椀形鍛冶滓で、重量は65gと小型ながら、ほぼ完形品である。上面の端部は、羽口溶融物のガラス質が広がる。滓の上面は平坦で、風化から本来色調は脱色されて灰褐色を呈する。下面は細かい木炭痕による凹凸が著しく、一部に木炭の噛み込みが見受けられる。

②マクロ組織：Photo. 6 の上段に示す。鉱物組成は微小白色粒状ヴスタイトと淡灰色長柱状結晶のファイヤライトで構成される。断面の周縁部は風化されて黒く侵されている。

③顕微鏡組織：Photo. 2 の①～③に示す。①は上面端部に付着した羽口先端から溶融滴下したガラス質スラグである。一部にファイヤライトを晶出する。②が代表的鉱物相で、淡灰色長柱状結晶のファイヤライトと、これに微小白色結晶のヴスタイトで構成される。高温沸し鍛接から低温型素延べの過渡期的な鍛錬鍛冶滓に分類される。

④ビッカース断面硬度：Photo. 2 の③に淡灰色長柱状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は616Hvであった。鉱物相はファイヤライトに同定される。

⑤化学組成分析：Table 2 に示す。全鉄分（Total　Fe）は40.46%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.01%以下、酸化第 1 鉄（FeO）43.35%、酸化第 2 鉄（Fe_2O_3）9.67%の割合であった。ガラス質成分

は多くて43.01%あり、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）を3.62%と多めを含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）は0.31%、バナジウム（V）0.01%などは前述してきた椀形鍛冶滓と大差なし。また、他の随伴微量元素らもほぼ近似しており、銅（Cu）も0.05%が検出された。やはり鍛冶原料鉄の始発原料は磁鉄鉱系であろう。なお、該品の成分系はNKO－1椀形鍛冶滓に近いものであった。

（4）NKO－4　椀形鍛冶滓

①肉眼観察：平面は不整五角形を呈する偏平な椀形鍛冶滓の破片である。重量は65gを測り、薄手で厚みは10mmであった。側面の4面は破面となる。滓の表面は風化されて無光沢で黒灰色を呈する。表面や破面には中小の気孔が散在するが比較的重量感をもつ滓である。下面は炉底粘土と酸化土砂を付着する。

②マクロ組織：Photo. 6の下段に示す。断面の天地は滓の上下に対応する。上側は白色粒状結晶のヴスタイト主体で、その隙間を淡灰色盤状結晶のファイヤライトが晶出する。下側はガラス質とファイヤライトで構成される。

③顕微鏡組織：Photo. 2の④～⑧に示す。④はマクロ組織の下側、いわゆる椀形鍛冶滓の下面に対応する。鉱物相は、淡灰色盤状結晶のファイヤライトに白色多角形結晶のマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）が少量晶出する。なお、多角形結晶は厳密に観察すると2相に分かれ、結晶の中央部は白色でマグネタイト、周縁部は暗色気味で、こちらはマグネタイトとヘーシナイト（Hercynite：$FeO \cdot Al_2O_3$）の混合組成となる。⑤は当鉄滓の主体鉱物相のヴスタイト組織であり、⑥は局部的に散在するマグネタイトとヘーシナイトの混合組成の固溶体を示す。該品は鍛錬鍛冶滓でも前半工程の高温沸し鍛接時の排出滓に分類される。もしくは前段階の精錬鍛冶滓の可能性もなきにしもあらずだが小型滓であり、鍛錬鍛冶滓とする。

④ビッカース断面硬度：Photo. 2の⑦に白色粒状結晶、⑧に白色多角形結晶の硬度測定の圧痕を示す。前者は485Hvでヴスタイト、後者は626Hvでマグネタイトとヘーシナイトの混合組成に同定される。マグネタイトであれば600Hv以下の値を呈する。

⑤EPMA調査：Photo. 9の2、2段目に反射電子像（COMP）と定量分析結果を示す。まず1段目はマクロ組織の下方の鉱物相の分析結果である。反射電子像（COMP）に1の番号をつけた淡灰色不定形結晶は、68.2%FeO－30.54%SiO_2組成で鉄かんらん石のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が同定される。極く微量のマグネシウム（Mg）を固溶する。2の番号は淡灰色に若干黒味を帯びた個所で、77.4%FeO－16.4%Al_2O_3－2.3%TiO_2組成である。ヘーシナイト（$FeO \cdot Al_2O_3$）にチタン（Ti）分を固溶する。磁鉄鉱系を物語る。3の番号は白色粒状結晶で99.1%FeO組成でヴスタイト（FeO）が同定される。

次は別視野で白色多角形結晶と基地の分析結果を2段目に示す。4の番号のつく暗黒色ガラス質スラグ基地は54.8%SiO_2－11.2%Al_2O_3－4.4%CaO－5.3%K_2O－1.9%Na_2O組成で珪酸塩である。5の白色多角形結晶の組成は90.0%FeO－3.8%Al_2O_3でヘーシナイト（$FeO \cdot Al_2O_3$）が同定される。顕微鏡組織で観察鑑別した鉱物相とEPMA調査結果では矛盾するものではない。

⑥化学組成分析：Table 2に示す。鉄分が多くてガラス分が低減傾向にある。全鉄分（Total Fe）は52.03%に対して金属鉄（Metallic Fe）0.01%以下、酸化第1鉄（FeO）多くて52.30%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）16.27%の割合である。ガラス質成分27.52%で、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）2.06%

を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）0.21%、バナジウム（V）0.01%以下は低めである。これに対して酸化マンガン（MnO）0.43%は多くて、更に銅（Cu）も0.13%は前述してきた椀形滓に比べると2倍近くの値である。鉄素材の違いか単なるバラツキか興味を呼ぶ問題である。マンガン（Mn）は親石元素、銅（Cu）は親鉄元素という背景を抱えているところに注目している。

（5）NKO－5　椀形鍛冶滓

①肉眼観察：平面は不整楕円形状の偏平な椀形鍛冶滓である。側面の一面は大きく曲線状の破面を残す。表面は風化されて脱色気味。色調は黒灰色であるが酸化雰囲気に曝されたのか一部に紫紅色を呈する個所がある。緻密な滓である。

②マクロ組織：Photo.7の上段に示す。断面上方はファイヤライト単独の晶出、中程以下がヴスタイトとファイヤライトの共存となる。左手上方に黒色ガラス質部分があるのは、羽口先端からの溶融スラグの滴下個所である。低温素延べ鍛錬鍛冶のやや高温寄りでの作業が想定される。

③顕微鏡組織：Photo.3の①～③に示す。①は羽口先端溶融物である。0.01～0.1mmの気泡を発するガラス質スラグの珪酸塩が観察された。②はマクロ組織の中程以下のヴスタイトとファイヤライト域の拡大組織であり、③は上方のファイヤライトに微細な白色樹状晶ヴスタイトの共存組織の拡大である。

④ビッカース断面硬度：Photo.3の③に淡灰色不定形状結晶の硬度測定圧痕を示す。硬度値は652Hvでファイヤライトが同定される。

⑤化学組成分析：Table 2に示す。全鉄分（Total　Fe）は49.29%に対して金属鉄（Metallic Fe）0.01%、酸化第1鉄（FeO）56.23%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）7.97%の割合である。ガラス質成分は34.43%であり、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）3.26%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）0.22%、バナジウム（V）0.01%以下、酸化マンガン（MnO）0.24%も左程多くはない。しかし、銅（Cu）は前述してきた各椀形鍛冶滓同様に0.08%と高めを含有し、鍛冶原料鉄の始発原料は磁鉄鉱系であろう。

（6）NKO－6　椀形鍛冶滓

①肉眼観察：平面が不整円形状で、63g強と小型の完形椀形鍛冶滓である。地の色調は灰黒色を呈するが上面の端部の一部に羽口先端溶融スラグの滴下した黒色ガラスの付着が見られる。下面は全面が細かい木炭痕を密に刻む。

②マクロ組織：Photo.7の下段に示す。断面の上面黒色部は酸化土砂の付着した中に微細な白色針状剥片が観察されるのは鍛造剥片の断面の点在である。

当鉄滓の大部分は淡灰色長柱状結晶のファイヤライトで、僅かに白色粒状結晶のヴスタイトが下方に晶出する。該品も低温型素延べ鍛錬鍛冶滓の傾向を呈する。

③顕微鏡組織：Photo.3の④～⑧に示す。④は当鉄滓の半分以上を占める鉱物相のファイヤライトである。淡灰色長柱状結晶で、これの粒間には微小白色樹状晶のヴスタイトが晶出する。その量は極微量である。

⑤は白色粒状結晶のヴスタイトで、この粒内には微小褐色結晶のヘーシナイト（Hercynite：$FeO \cdot Al_2O_3$）が析出する。⑦⑧は赤熱鉄素材の鍛打で剥落した酸化膜、いわゆる鍛造剥片（注2）である。2次付着物であるが外層に微厚白色のヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3）、中間層はマグネタイト

(Magnetite：Fe_3O_4)、内層は侵されて虫喰い状に穴明き状となったヴスタイト（Wüstite：FeO）の3層分離型が提示できた。鍛錬鍛冶を傍証する資料となる。

④ビッカース断面硬度：Photo. 3の④に淡灰色長柱状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は661Hvでファイヤライトに同定できる。顕微鏡観察と矛盾するものではない。

⑤EPMA調査：Photo. 9の3段目に反射電子像（COMP）と定量分析結果を示す。分析対象は6の番号のつく暗黒色ガラス質スラグで、定量分析値は42.7%SiO_2－21.1%Al_2O_3－8.0%CaO－6.0%K_2O－3.1%Na_2O組成で珪酸塩が同定される。これには微細なファイヤライトが点在するのか19.4%FeOの固溶がある。7の番号は淡灰色盤状結晶で、定量分析値は69.6%FeO－30.8%SiO_2－1.9%MgO組成となる。ファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）で微量のマグネシウム（Mg）を固溶する。8の番号は白色粒状結晶で99.0%FeO組成からヴスタイト（Wüstite：FeO）、9の番号はヴスタイトの粒内析出物で64.7%FeO－33.6%Al_2O_3組成からヘーシナイト（Hercynite：$FeO \cdot Al_2O_3$）が同定される。こちらも顕微鏡観察で述べた鉱物相に対応した結果が得られた。

⑥化学組成分析：Table 2に示す。該品は前述したNKO－3に準ずる成分系である。すなわち、全鉄分（Total Fe）は39.13%に対して金属鉄（Metallic Fe）0.01%、酸化第1鉄（FeO）39.49%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）12.04%の割合である。ガラス質成分は多めの45.79%で、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）2.78%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）は少なくて0.30%、バナジウム（V）0.01%以下となる。他の随伴微量元素も低めであり、酸化マンガン（MnO）0.15%、酸化クロム（Cr_2O_3）0.04%、硫黄（S）0.02%、五酸化燐（P_2O_5）は少々高めの0.50%、それに銅（Cu）が0.11%とこちらも多い部類に属している。鍛冶原料鉄の始発原料は磁鉄鉱系である。

（7）NKO－7　椀形鍛冶滓

①肉眼観察：平面が不整五角形を呈する偏平なガラス質の椀形鍛冶滓で43 gを測る。上面は細かい木炭痕が散在し、下面には灰白色の炉床粘土が付着する。側面表層は一部青藍色を呈する。2次的な付着物であろうか。

②マクロ組織：Photo. 8の上段に示す。断面の大部分が非晶質のガラス質である。鉄器製作時の最終段階の低温型火造り時の鍛錬鍛冶滓に分類される。極く局部的な晶出物については顕微鏡組織で触れる。

③顕微鏡組織：Photo. 4の①～⑤に示す。該品はマクロ組織で述べたように大部分の鉱物相は非晶質のガラスである。①の微小白色針状結晶はマグネタイト、②③は淡灰色長柱状結晶のファイヤライト、④⑤の白色不整形結晶は金属鉄のフェライトである。

④ビッカース断面硬度：白色不定形結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は122Hvであった。当結晶はフェライト結晶であり、硬度値は高めに表れた。狭い測定面積、時効硬化などの影響からか、正確な値ではない。本来ならば80Hv前後を呈するであろう。

⑤化学組成分析：Table 2に示す。鉄分が少なくてガラス質分の多い滓である。全鉄分（Total Fe）は18.54%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.04%、酸化第1鉄（FeO）12.36%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）12.71%の割合だった。ガラス質成分は多くて70.01%でこのうちに塩基性成分（CaO＋MgO）は4.49%と高めである。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）は0.47%、バナジウム（V）0.01%とこの二成分が若干高めは、赤熱鉄素材に酸化防止粘土汁を塗布した折の粘土混入砂鉄の影響であろう。五酸化燐（P_2O_5）が0.94%と高めも、後述する羽口胎土の高燐傾向と関係するのだろう。銅（Cu）の0.03%と低

下は親鉄元素で鉄の減少が影響したとみてよい。

（8）NKO－8　羽口

①肉眼観察：17.0ｇに割れた羽口の小破片である。外面は熱影響を受け、色調は先端側から灰色～灰白色～淡褐色と変化する。また、ヘラ削りによる面とり痕跡を顕著に残す。胎土は緻密な粘土質で、石英、長石や極細かいスサを多量に混和する。内径は不明瞭。

②マクロ組織：Photo.8の下段に示す。肌理の細かい粘土質鉱物に小粒の石英粒が点在し、2～4mm長さのスサも目に付く。

③顕微鏡組織：Photo.4の⑥⑦に示す。素地を構成する微細な燐片状の粘土鉱物セリサイトは熱影響を受けることなく観察できる。また、石英や長石にも加熱変化は認められない。羽口先端の溶融部分から大きく外れた破片と見做される。

④化学組成分析：Table 2に示す。強熱減量のIg　Lossは5.36ｇと僅かに熱影響を受けて結晶構造水が飛散している供試材の分析である。鉄分（Fe_2O_3）は3.48%と低め傾向で軟化性に有利であり、更に酸化アルミニウム（Al_2O_3）が20.41%と高く、かつ塩基性成分（CaO＋MgO）が1.45%と左程多くなくて高耐火性が望める成分系である。胎土中には二酸化チタン（TiO_2）が0.86%含まれ、少量の砂鉄が混入されている。これは自然界の働きであって人工的な添加ではない。鉄には常温脆性の原因となる五酸化燐（P_2O_5）が1.19%と高めである。前述した鉄滓のNKO－2、NKO－7で高燐傾向と羽口胎土成分の関係は指摘してきた。

4．まとめ

若王寺遺跡の古墳時代後期の遺構では、全域で鍛冶関連遺物が出土する。（注6）　そのうちの一部の鉄滓と羽口を調査して次の点が明らかになった。個々の結果のまとめをTable 3に示す。

（1）鍛冶内容

鍛冶作業は、板状もしくは棒状半製品を鍛冶原料としての鉄器製作が想定される。この鉄器製作に際しては、成型･加工される鉄素材の酸化目減り防止に粘土汁やワラ灰を塗布し、炉内に返すので低温型･素延べ時の滓は鉄（Fe）と珪酸（Si）分の接触で鉄かんらん石のファイヤライト（Fayalite：2FeO･SiO_2）鉱物相、さらに後工程の低温加工・火造り時には暗黒色ガラスの非晶質スラグの珪酸塩で形成される。

出土鉄滓は前述したような鍛錬鍛冶滓が主体をなし、それも高温沸し鍛接主体で排出された滓は少なく、低温側の滓が目につく。これは鍛冶原料鉄の成型規格化された半製品の搬入に起因した鉄滓の構成と読みとれる。一部に高温沸し鍛接滓が存在するのは、高・低炭素含有量の異なる素材の合せ鍛え加工が推定される。Fig.1に鉄生産工程の流れ一覧のなかに若王寺遺跡出土鉄滓の位置ずけを示しておく。

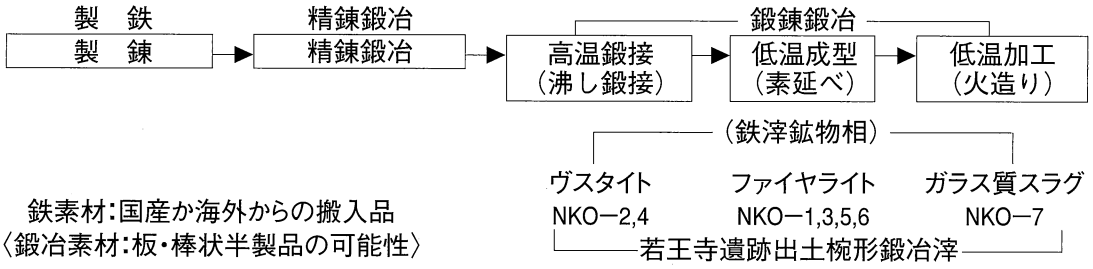


Fig.1 鉄器製作工程の流れ一覧（鉱石）

（2）鍛冶原料鉄

滓の成分で注目されたのが0.05～0.13%と高銅（Cu）傾向であった。銅（Cu）は親鉄元素であり、鉄素材の鍛冶原料鉄は高銅（Cu）含有で、含銅磁鉄鉱あたりが製鉄始発原料となろう。現在迄のところ、国産の鉄生産で高銅系のものは、製錬系・鍛冶系共に広島・岡山・滋賀の各県では見当たらない。しかし、これを4・5世紀の鍛冶滓成分へ目を転ずるとお膝元の兵庫県側からの出土例がある。5世紀中葉に比定される雨流遺跡出土鍛冶滓（0.039～0.19%Cu）があり（注7）、4世紀後半に属する小戸遺跡出土鍛冶滓（0.016～0.079%Cu）が挙げられる。雨流遺跡や小戸遺跡は高銅鍛冶滓としての共通性があるものの、操業年代が大きくズレる。

古墳時代後期になると西日本では製錬は開始されて、国産鉄は存在しうる。しかし若王寺遺跡出土の鍛冶滓成分の銅含有量をみると、合致する産地は見当らない。朝鮮半島側においても鍛冶滓の分析例は少ないが、容易に候補地を挙げることができない（注8）。しかし、中国の山東省になると含銅磁鉄鉱の賦存地はあるものの（注9）、その方面からの鉄の導入は不鮮明であり、これらの産地同定は今後に残された研究課題になってくる。最後に参考までに古墳時代前期・中期の鉱石系鍛冶滓の主要成分をTable 4に提示しておく。

注

（1）日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968.

ヴスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。また、ウルボスピネルの硬度値範囲の明記がないが、マグネタイトにチタン（Ti）を固溶するので、600Hv以上であればウルボスピネルと同定している。それにアルミナ（Al）が加わり、ウルボスピネルとヘーシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため700Hvを超える値では、ウルボスピネルとヘーシナイトの固溶体の可能性が考えられる。

（2）鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌（金肌）やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色（光沢を発する）へと変化する。粒状滓の後続派生物で、鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる。（注3）

更に、鍛冶工房の調査に当たっては、鍛冶炉を中心にメッシュを切って土砂を採り上げ、分布状況を把握できれば、工房内の作業空間配置の手掛りも得られる。（注4）

鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3）、中間層マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）、大部分は内層ヴスタイト（Wüstite：FeO）の3層から構成される。このうちの

ヘマタイト相は1450℃を超えると存在しなく、ヴスタイト相は570℃以上で生成されるのはFe－O系平衡状態図から説明される。（注５）

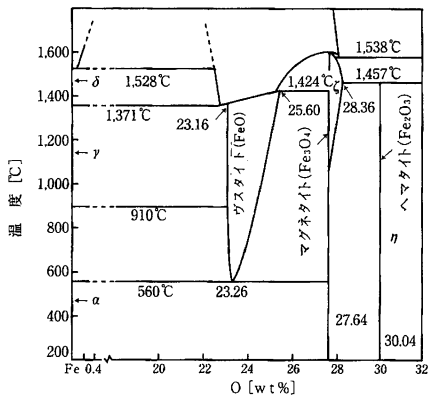
鍛造剥片を王水（塩酸３：硝酸１）で腐食すると、外層ヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3）は腐食しても侵されず、中間層マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）は黄変する。内層のヴスタイト（Wüstite：FeO）は黒変する。鍛打作業前半段階では内層ヴスタイト（Wüstite：FeO）が粒状化を呈し、鍛打仕上げ時になると非晶出化する。鍛打作業工程のどの段階が行われていたか推定する手がかりともなる。

（３）大澤正己 1992「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘　年報15』（平成３年度）千葉県房総風土記の丘

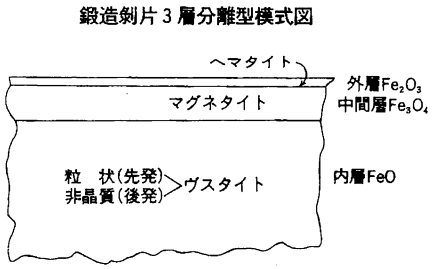
（４）①大澤正己 1991「奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『奈良尾遺跡』（今宿バイパス関連埋蔵文化財調査報告第13集）福岡県教育委員会

②大澤正己 2003「重留遺跡鍛冶工房跡出土鉄関連遺物の金属学的調査」『重留遺跡第４地点』～若園線住宅移転用地整備事業関係埋蔵文化財調査報告4～（北九州市埋蔵文化財報告書第303集）（財）北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室

（５）森岡進ら 1975「鉄鋼腐食科学」『鉄鋼工学講座』11　朝倉書店



Fe-O系平衡状態図



（６）渡辺昇・川村慎也 2001「若王寺遺跡」『平成12年度年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

（７）大澤正己 1990「雨流遺跡出土椀形滓と鍛造剥片の金属学的調査」『雨流遺跡』～淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ～（兵庫県文化財調査報告　第76冊）兵庫県教育委員会

（８）大澤正己 2004「金属組織学からみた日本列島と朝鮮半島の鉄」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集

（９）大澤正己 2005「アウラガ遺跡出土鍛冶関連遺物からみたモンゴル帝国での鉄器製作の一形態」～金属学的調査からのアプローチ～英訳論考　同成社出版

「The Avraga Site－Preliminary Report of the Excavation of the Palace of Genghis Khan in Mongolia 2001－2004」Kokugakuin University & The New Century Project Joint Japan－Mongolia Archaeological Expedition. Mar. 2005

Table 1　供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	遺構名	遺物名称	推定年代	計測値 大きさ(mm)	計測値 重量(g)	磁着度	メタル度	調査項目 マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	カロリー	備考
NKO-1	若王寺	A-3、SP505	椀形鍛冶滓	古墳時代後期	72×45×32	110.0	2	なし	○	○	○			○			
NKO-2	若王寺	C-5、SE06	〃	〃	52×30×18	40.0	4	H（○）	○	○	○			○			
NKO-3	若王寺	A-6、SK75	〃	〃	75×60×15	100.0	3	なし	○	○	○			○			
NKO-4	若王寺	B-6、包含層	〃	〃	68×48×10	65.0	4	なし	○	○	○		○	○			
NKO-5	若王寺	B-3、包含層	〃	〃	80×45×16	105.0	3	なし	○	○	○			○			
NKO-6	若王寺	B-3、包含層	〃	〃	55×50×15	65.0	3	なし	○	○	○		○	○			
NKO-7	若王寺	SK12	〃	〃	60×54×65	45.0	1	なし	○	○	○			○			
NKO-8	若王寺	SX03	羽口	〃	40×38×15	17.0	1	なし	○	○				○			

（11個所硬度測定実施）

Table 2　供試材の組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分(Total Fe)	金属鉄(Metallic Fe)	酸化第1鉄(FeO)	酸化第2鉄(Fe_2O_3)	二酸化珪素*(SiO_2)	酸化アルミニウム*(Al_2O_3)	酸化カルシウム*(CaO)	酸化マグネシウム*(MgO)	酸化カリウム*(K_2O)	酸化ナトリウム*(Na_2O)	酸化マンガン(MnO)	二酸化チタン(TiO_2)	酸化クロム(Cr_2O_3)	硫黄(S)	五酸化燐(P_2O_5)	炭素(C)	バナジウム(V)	銅(Cu)	造滓成分Σ*	造滓成分/Total Fe	TiO_2/Total Fe	注
NKO-1	若王寺	A-3、SP505	椀形鍛冶滓	古墳時代後期	44.14	<0.01	47.64	10.17	27.81	5.11	2.24	0.72	1.00	0.61	0.12	0.21	0.02	0.01	0.36	0.07	<0.01	0.07	37.49	0.849	0.005	
NKO-2	若王寺	C-5、SE06	〃	〃	32.39	0.02	7.35	38.11	28.66	7.15	1.19	0.36	0.73	0.38	0.10	0.31	0.03	0.07	1.70	0.45	<0.01	0.07	38.47	1.188	0.010	
NKO-3	若王寺	A-6、SK75	〃	〃	40.46	<0.01	43.35	9.67	30.23	7.02	2.51	1.11	1.54	0.60	0.21	0.31	0.02	0.01	0.36	0.11	0.01	0.05	43.01	1.063	0.008	
NKO-4	若王寺	B-6、包含層	〃	〃	52.03	<0.01	52.30	16.27	20.11	4.50	1.34	0.72	0.50	0.35	0.43	0.21	0.03	0.02	0.38	0.33	<0.01	0.13	27.52	0.529	0.004	
NKO-5	若王寺	B-3、包含層	〃	〃	49.29	0.01	56.23	7.97	25.05	4.75	1.73	1.53	0.84	0.53	0.24	0.22	0.03	0.01	0.31	0.06	<0.01	0.08	34.43	0.699	0.004	
NKO-6	若王寺	B-3、包含層	〃	〃	39.13	0.01	39.49	12.04	34.12	6.83	2.00	0.78	1.30	0.76	0.15	0.30	0.04	0.02	0.50	0.28	<0.01	0.11	45.79	1.170	0.008	
NKO-7	若王寺	SK12	〃	〃	18.54	0.04	12.36	12.71	50.61	11.08	3.15	1.34	2.57	1.26	0.29	0.47	0.02	0.01	0.94	0.23	0.01	0.03	70.01	3.776	0.025	
NKO-8	若王寺	SX03	羽口	〃	3.50	0.06	1.29	3.48	62.47	20.41	0.77	0.68	1.84	1.15	0.07	0.86	0.01	0.01	1.19	# 5.36	0.01	<0.01	87.32	24.949	0.246	

Table 3　出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	調査項目 Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	ガラス質成分	P_2O_5	Cu	所見	備考
NKO-1	若王寺	A-3、SP505	椀形鍛冶滓	古墳時代後期	F+W	44.14	10.17	2.96	0.21	<0.01	0.12	37.49	0.36	0.07	鉱石系低温型素延べ鍛錬鍛冶滓	H15年調査
NKO-2	若王寺	C-5、SE06	〃	〃	滓部：W+F、微細金属鉄:フェライト単相～亜共析組織	32.39	38.11	1.55	0.31	<0.01	0.10	38.47	1.70	0.07	鉱石系高温沸し鍛接鍛錬鍛冶滓、高P傾向が顕著	〃
NKO-3	若王寺	A-6、SK75	〃	〃	試料上面:ガラス質滓、下面:F+W	40.46	9.67	3.62	0.31	0.01	0.21	43.01	0.36	0.05	鉱石系低温型素延べ鍛錬鍛冶滓	〃
NKO-4	若王寺	B-6、包含層	〃	〃	M+MとHの固溶体+W+F	52.03	16.27	2.06	0.21	<0.01	0.43	27.52	0.38	0.13	鉱石系高温沸し鍛錬鍛冶滓もしくは（M残存:精錬鍛冶滓か）高Cu傾向が顕著	〃
NKO-5	若王寺	B-3、包含層	〃	〃	試料上面：ガラス質滓、下面:F+W	49.29	7.97	3.26	0.22	<0.01	0.24	34.43	0.31	0.08	鉱石系低温素延べ鍛錬鍛冶滓	H16年調査
NKO-6	若王寺	B-3、包含層	〃	〃	F+W（粒内微細H）、付着土砂中に鍛造剥片混在	39.13	12.04	2.78	0.30	<0.01	0.15	45.79	0.50	0.11	鉱石系低温型素延べ鍛錬鍛冶滓、高Cu傾向が顕著	〃
NKO-7	若王寺	SK12	〃	〃	ガラス質滓F+M晶出部、微小金属鉄：フェライト単相	18.54	12.71	4.49	0.47	0.01	0.29	70.01	0.94	0.03	鉱石系低温型火造り鍛錬鍛冶滓、高P傾向が顕著	〃
NKO-8	若王寺	SX03	羽口	〃	粘土鉱物、石英・長石粒など混在	3.50	3.48	1.45	0.86	0.01	0.07	87.32	1.19	<0.01	高Alのため、耐火性に優れた鍛冶羽口の可能性が高い	〃

W:Wüstite（FeO）、F:Fayalite（$2FeO \cdot SiO_2$）、M:Magnetite（Fe_3O_4）、H:Hercynite（$FeO \cdot Al_2O_3$）

Table 4　古墳時代前・中期の鉱石系精錬・鍛錬鍛冶滓出土例

遺跡名	所在地	推定年代	羽口出土状況	鍛冶炉検出	鉱物組成	化学組成（%）					注
						Total Fe	CaO	TiO_2	Cu	V	
橋牟礼川	鹿児島県指宿市	5C中葉		有	Wustite Fayalite	55.7	3.47	0.24	0.013	0.010	1
博多59次	福岡市祇園	4C初	有	〃	〃	59.5	1.09	0.13	0.040	0.003	2
松木	福岡県那珂川町	4C中頃			〃	48.8	3.95	0.11	0.004	0.001	3
松木A	〃	5C前半			〃	45.9	3.99	0.15	0.016	0.001	〃
野坂一町間	福岡県宗像市	5C中頃			〃	43.7	1.85	0.30	0.010	0.005	4
勝浦井ノ口	福岡県津屋崎町	4C後半			〃	50.34～54.09	1.29～1.39	0.31～0.38	0.010～0.020	0.01	5
重留	福岡県北九州市	5C前半	専用羽口	有	〃	49.9～55.0	1.24～1.92	0.32～0.41	0.010～0.025	＜0.01	6
荻鶴	大分県日田市	5C前半～中	高杯脚 専用羽口	〃	〃	61.28	0.14	0.06	0.012	0.002	7
窪木薬師	岡山県総社市	5C前半			〃	45.10	1.99	0.36	0.012	0.012	8
小戸	兵庫県川西市	4C後半	有		〃	41.3～54.3	0.7～1.37	0.15～0.24	0.016～0.079	0.003～0.006	9
雨流	兵庫県三原郡三原町	5C中葉	〃	有	〃	39.4～67.0	0.9～2.14	0.14～0.18	0.039～0.19	0.001～0.004	10
大県	大阪府柏原市	5C末～7C初	〃	有	〃	53～66	0.32～1.53	0.083～0.27	0.003～0.007	0.001～0.007	11
大和田今池	大阪府松原市	5C前半	〃		〃	47	1.14	0.84	0.005	0.040	12
土師27－1	大阪府堺市	5C後半	〃		〃	27.8～42.7	1.9～3.8	0.18～0.37	0.012～0.020	0.005～0.012	〃
陵南北	〃	〃	〃	有	〃	46～55	0.59～2.0	0.23～2.1	0.019～0.043	0.001～0.005	13
森	大阪府交野市	5C後	〃	〃	〃	43.0～56.6	1.8～3.34	0.14～0.25	0.001～0.016	0.002～0.003	14
田屋	和歌山県和歌山市	5C後半	〃		〃	33.6～53.1	1.19～3.61	0.24～1.09	0.030～0.24	0.004～0.020	15
長瀬高浜	鳥取県羽合町	4C末～5C初			〃	57.7	4.44	0.14	0.008	0.001	16
吉田奥	愛知県瀬戸市	5C末	有	有	〃	34.0～59.4	1.01～5.56	0.12～0.51	0.027～0.20	0.002～0.010	17
行人塚	埼玉県大里郡江南町	5C初～中	高杯脚 転用羽口	〃	〃	44.0～62.0	2.8～5.7	0.23～0.51	0.006～0.010	0.005～0.013	18
御蔵山中	埼玉県大宮市	5C中葉	〃	〃	〃	34.0～62.0	2.7～8.8	0.54～1.29	0.080～0.063	0.011～0.026	19
御蔵台	〃	〃			〃	49.0～57.0	3.70～6.0	0.40～0.59	0.010～0.026	0.013～0.044	〃
中山	千葉県四街道市	5C前半	高杯脚 転用羽口	有	〃	49.0～63.0	0.42～2.1	0.020～0.58	0.005～0.065	0.006～0.036	20
折返A	福島県いわき市				〃	43.23	3.05	0.40	0.010	0.01	21
西裏	栃木県小山市	5C末	高杯脚 転用羽口	有	W＋F＋H	42.5～46.0	3.3～7.02	0.51～0.52	0.010～0.025	0.01	22
新郭	栃木県壬生町	5C中葉	高杯脚 専用羽口	〃	W＋F	38.28～51.33	0.73～1.77	0.44～0.68	0.010～0.020	0.01～0.020	23
永作	福島県郡山市	5C後半		〃	〃	39.0～53.0	1.4～2.4	0.24～0.44	0.013～0.030	0.004～0.010	24
南山田	福島県郡山市	5C	専用羽口	〃	〃	54.09～61.71	0.71～1.88	0.20～1.44	0.008～0.010	0.01	25
辰巳城	福島県石川郡玉川村	〃	有	〃	〃	55.7	1.32	0.35	0.007		26
南小泉	宮城県仙台市	5C中頃			〃	56.5	1.98	0.12	0.002	0.002	27
山王	宮城県多賀城市	5C	高杯脚 専用羽口	有	〃	34.8～51.5	1.62～5.85	0.15～0.31	0.025～0.045	0.01	28
八幡脇	茨城県土浦市	4C末～5C初	専用羽口	〃	〃	64.01	1.65	0.22	0.001	0.006	29
畑沢	千葉県木更津市	5C中葉			W＋F＋H	33.08	4.84	0.69	0.016	0.021	30
女威	大阪府茨木市	5C初～6C前			W＋F＋H	61.9～67.7	0.17～0.30	0.17～0.24	0.004～0.009	0.006～0.010	31
下城	大分県佐伯市	表採；不明			W＋F	54.74	1.40	0.78	0.004	0.02	32
古志本郷	島根県出雲市	4C代	専用羽口		W＋F	50.09～60.85	1.97～2.74	0.08～0.29	＜0.01	＜0.01～0.01	33
柳	島根件安来市	弥生時代終末期		有	F	39.32	2.51	0.45	0.002	0.01	34

H：Hercynite、$FeO \cdot Al_2O_3$

Table 4 の注

1．指宿市教育委員会発掘調査、報告書準備中
2．大澤正己「鉄滓からみた古代の鉄生産」『特別考古学講座ー鉄と考古学（第２回）』福岡市埋蔵文化財センター　1993.10.16
3．大澤正己「松木遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『松木遺跡』（那珂川町文化財調査報告書第11集）那珂川町教育委員会　1984
4．原俊一他「埋蔵文化財発掘調査報告書1984年度」（宗像市文化財調査報告書第９集）宗像市教育委員会　1985
大澤正己「春日市の鉄の歴史」『春日市史上巻』　1995.3.31
5．大澤正己「勝浦井ノ口遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『勝浦北部丘陵遺跡群ー勝浦井ノ口遺跡』（津屋崎町文化財調査報告書第１３集）津屋崎町教育委員会　1998
6．大澤正己「重留遺跡鍛冶工房跡出土鉄関連遺物の金属学的調査」『重留遺跡第４地点』（北九州市埋蔵文化財報告書第303集）（財）北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室2003.3
7．大澤正己「荻鶴遺跡鍛冶関連遺物の金属学的調査」『荻鶴遺跡』（大分県日田市埋蔵文化財調査報告書第9集）日田市教育委員会　1995
8．大澤正己「窪木薬師遺跡出土鉄関連遺物の金属学的調査」『窪木薬師遺跡』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86）岡山県教育委員会　1993
9．兵庫県川西市教育委員会、報告書準備中
10．大澤正己「雨流遺跡出土椀形鉄滓と鍛造剥片の金属学的調査」『雨流遺跡』（兵庫県文化財調査報告書第76集）兵庫県教育委員会　1990
11．大澤正己「大県遺跡及び周辺遺跡出土鉄滓・鉄剣の金属学的調査」『大県・大県南遺跡ー下水道管渠埋設工事に伴うー』大阪府柏原市教育委員会1981
12．大澤正己「大阪府所在土師遺跡27ー１街区、大和川・今池・高師浜遺跡出土鉄滓の調査」『大和川・今池遺跡Ⅲ』大和川・今池遺跡調査会　1981
13．大澤正己「新日本製鉄研修センター内出土鉄滓・鉄製品の科学的分析調査」『土師遺跡発掘調査報告書その１』堺市教育委員会　1976
14．交野市教育委員会「森遺跡Ⅰ・Ⅱ」1989・1990
大澤正己「交野市森遺跡とその周辺遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『森遺跡Ⅲ』交野市教育委員会　1991
15．大澤正己「田屋遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『田屋遺跡』（一般国道24号線和歌山バイパス建設に伴う発掘調査）（財）和歌山県埋蔵文化財センター　1991
16．鳥取県教育委員会提供試料、未発表
17．大澤正己「吉田奥遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『上之山』～愛知県瀬戸市吉田、吉田奥遺跡群・広久手古窯跡発掘調査報告書～瀬戸市教育委員会　1992
18．大澤正己「本田・東台Ⅰ・Ⅱ遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『本田東台・上前原』（江南町文化財調査報告書第8集）埼玉県大里郡江南町教育委員会1988
19．大澤正己「御蔵山中遺跡出土鉄滓と鉄器の金属学的調査」『御蔵山中遺跡』大宮市遺跡調査会　1989
20．大澤正己「中山遺跡鍛冶工房跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『中山遺跡・水流遺跡・東原遺跡』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第11集）印旛郡市文化財センター　1987
21．財団法人いわき市教育文化事業団、報告書準備中
22．大澤正己「西裏遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『西裏遺跡』（栃木県埋蔵文化財調査報告書第180集）栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団　1996
23．大澤正己「新郭遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『新郭古墳群・新郭遺跡・下り遺跡』（栃木県埋蔵文化財調査報告第214集）栃木県教育委員会・栃木県教育文化振興事業団　1998
24．福島県郡山市教育委員会調査、福島県文化センター寺島文隆氏経由入手試料、未発表
25．大澤正己「南山田遺跡出土鍛冶関連遺物・鉄製品の金属学的調査」（財）郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団への提出資料　1998.7.10
26．大澤正己「辰巳城遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『母畑地区遺跡発掘調査報告書31』福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター1991.3
27．大澤正己「南小泉遺跡祭祀土壙出土鉄滓の金属学的調査」『南小泉遺跡第16～18次発掘調査報告書２』（仙台市文化財発掘調査報告書第140集）仙台市教育委員会　1990
28．大澤正己「山王遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『山王遺跡Ⅰ』（多賀城市文化財調査報告書第45集）多賀城市教育委員会・建設省東北地方建設局　1997.3
29．大澤正己・鈴木瑞穂「田村・沖宿遺跡群〈八幡脇・尻替遺跡〉出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『八幡脇遺跡』（田村・沖宿地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書）土浦市教育委員会、編集：土浦市遺跡調査会　準備中
30．予定原稿「畑沢遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」白井久美子氏依頼
31．大澤正己・鈴木瑞穂「安威遺跡出土鍛冶滓の金属学的調査」『安威遺跡』（大阪府埋蔵文化財報告1999.6）大阪府教育委員会　2000.3
32．大澤正己「下城遺跡採取鉄滓の金属学的調査」『下城遺跡群の研究』別府大学考古学研究室編集　提出原稿・刊行未定
33．大澤正己「古志本郷遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『古志本郷遺跡Ⅵ』（本部編３第２分冊）〈斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅦ〉国土交通省出雲工事事務所2003
34．大澤正己「柳遺跡出土椀形鍛冶滓の金属学的調査」『塩津丘陵遺跡群』～塩津山遺跡・竹ケ崎遺跡・附　亀ノ尾古墳～一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区Ⅸ　建設省松江国道工事事務所　島根県教育委員会1998.3

NKO-1
椀形鍛冶滓
①×200 試料下面側：ヴスタイト
凝集部、硬度圧痕：483Hv
②×100 微小ヴスタイト・ファイヤライト
③×200 硬度圧痕：696Hv
ファイヤライト

NKO-2
椀形鍛冶滓
④×200 滓部
硬度圧痕：483Hv.ヴスタイト+ファイヤライト
⑤～⑧ 試料上面鉄部 ナイタルetch.
⑤×100 ⑥×400 中央：残存金属鉄
フェライト・少量パーライト.亜共折組織
⑦×100 ⑧×200 中央：残存金属鉄
フェライト単相.硬度：103Hv

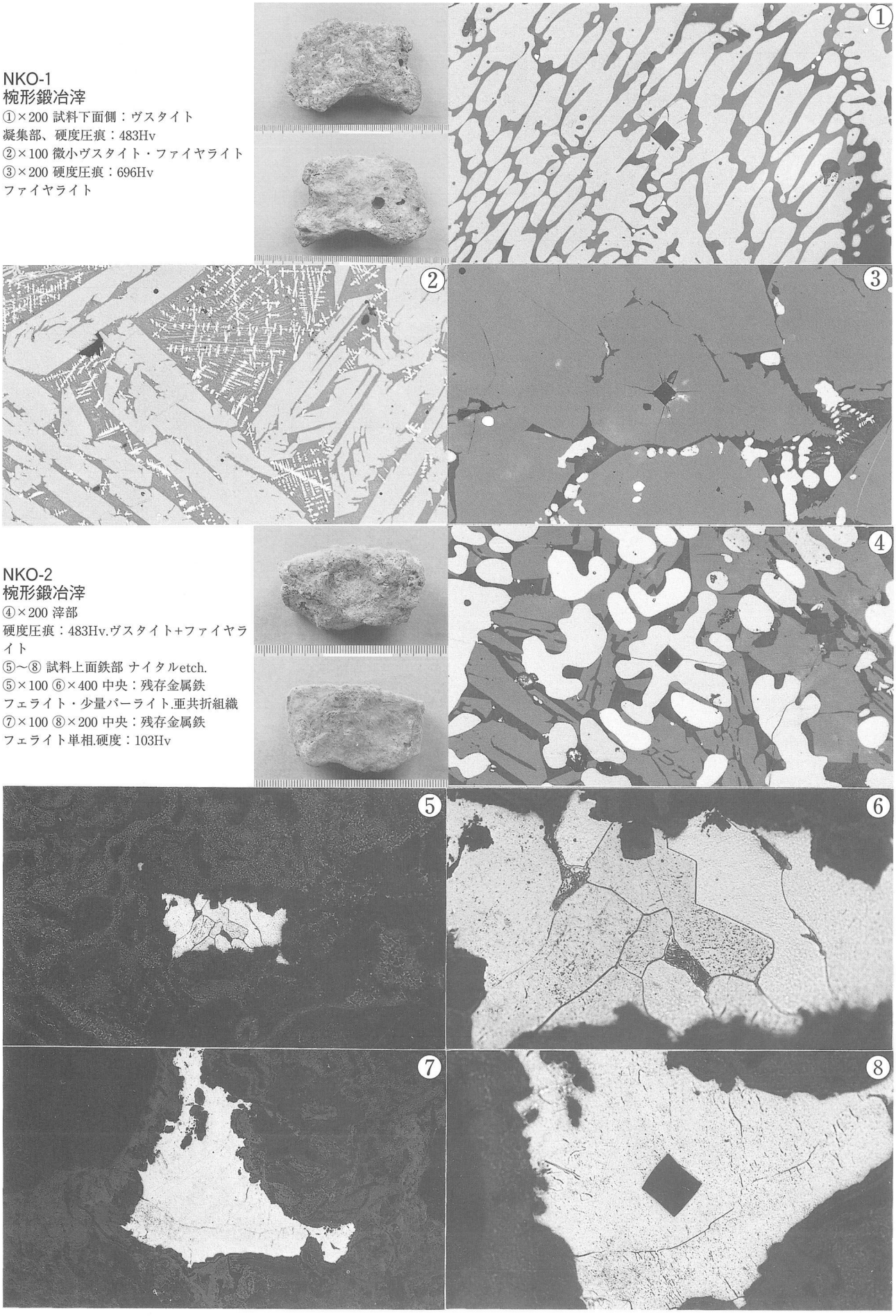


Photo.1 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

NKO-3
椀形鍛冶滓
①×100 試料上面側：黒色ガラス質滓．
羽口先端溶融物
ファイヤライト晶出
②×100 下側：滓部
微小ヴスタイト・ファイヤライト
③×200 硬度圧痕：616Hv
ファイヤライト

NKO-4
椀形鍛冶滓
④×100 多角形結晶（2相）
中央白色部：マグネタイト
外側暗色部：マグネタイト・ヘーシナイト
の固溶体
⑤×100 ヴスタイト・ファイヤライト
⑥×100 白色凝集結晶：マグネタイト・ヘーシナイトの固溶体
⑦⑧×200 硬度:⑦485Hv⑧626Hv

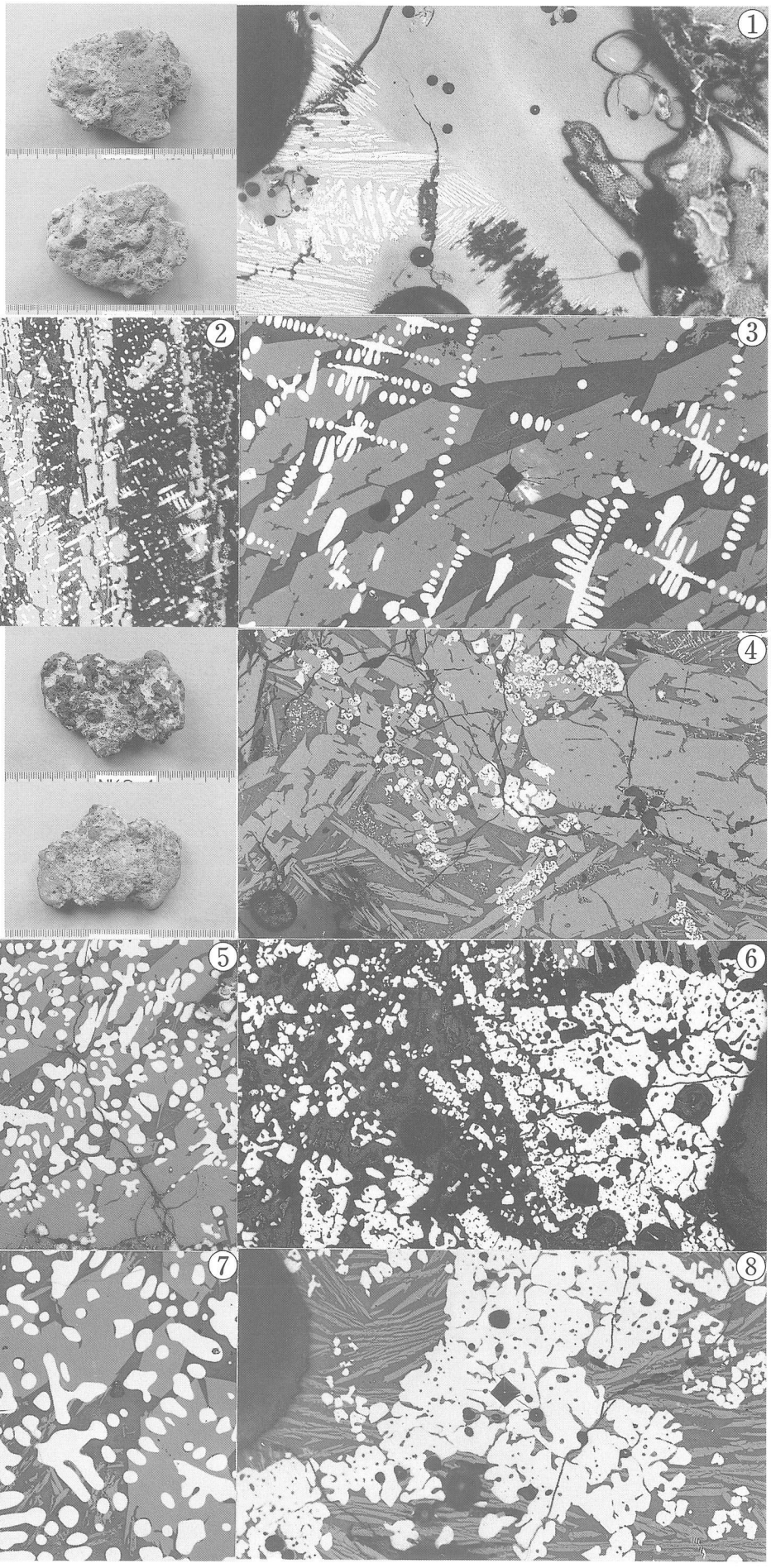
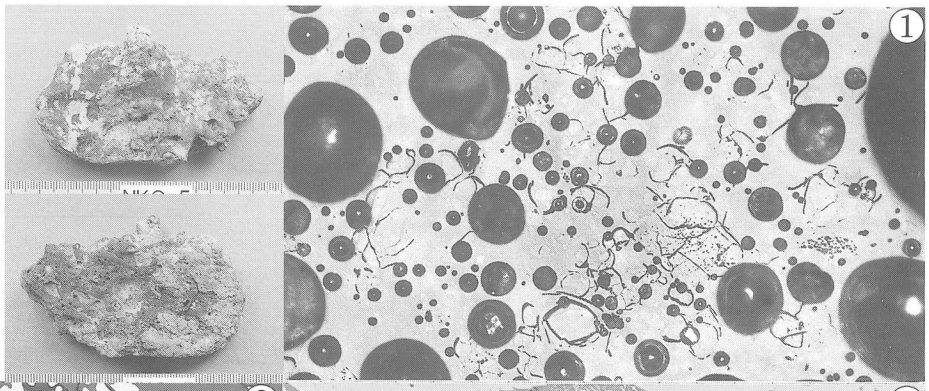
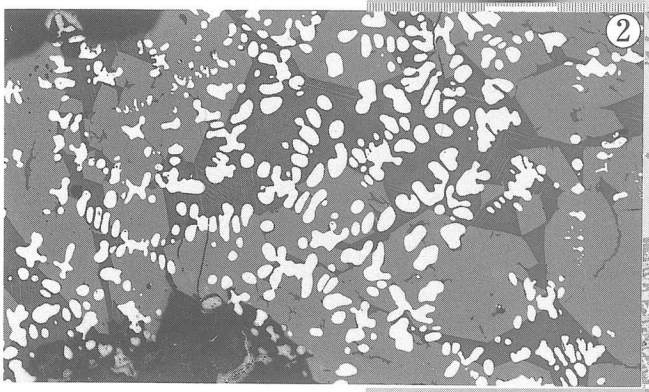


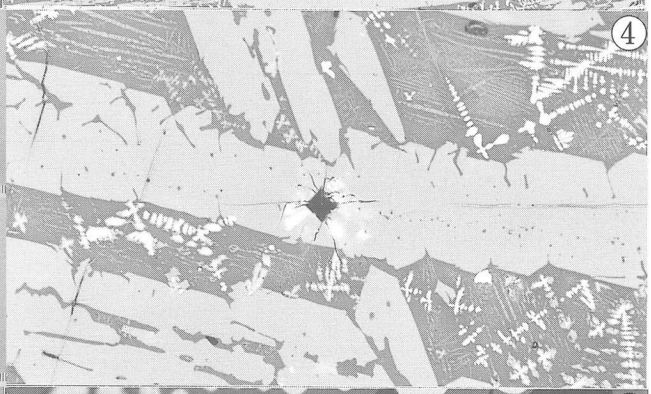
Photo.2 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

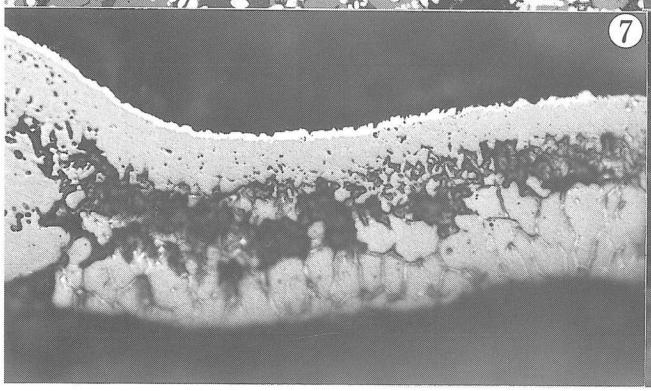
NKO-5
椀形鍛冷滓
①×100 試料上面側：黒色ガラス質滓.羽口先端溶融物
②×100 下側：滓部
ヴスタイト・ファイヤライト
③×200 硬度圧痕：652Hv
ファイヤライト





NKO-6
椀形鍛冷滓
④×200 硬度圧痕：661Hv
ファイヤライト
⑤×100 ⑥×400 ヴスタイト（粒内微小ヘーシナイト晶出）・ファイヤライト
⑦⑧×400 付着鍛造剥片 3 層分離型
⑦内層ヴスタイト凝集
⑧内層ヴスタイト非晶質化





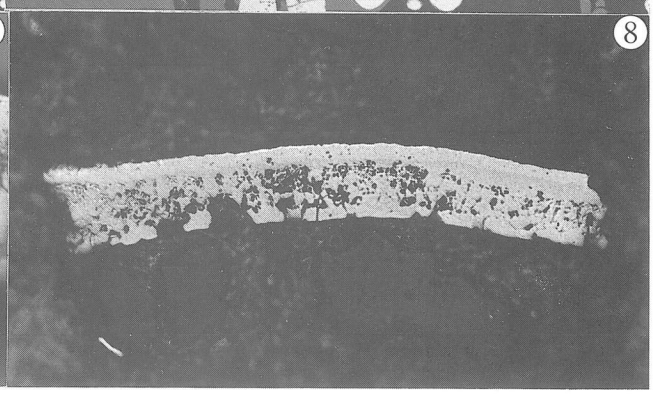


Photo.3 椀形鍛冷滓の顕微鏡組織

NKO-7
椀形鍛冶滓
①×100 試料上面側：暗青灰色ガラス質滓部
白色結晶：マグネタイトか
②×100 ③×200 試料下面ファイヤライト晶出部.硬度：693Ｈｖ
④×100 ⑤×200 白色部：金属鉄フェライト単相.硬度：122Ｈｖ

NKO-8
羽口
⑥×50 胎土：粘土鉱物・長石粒等の鉱物混在
⑦×50 同上

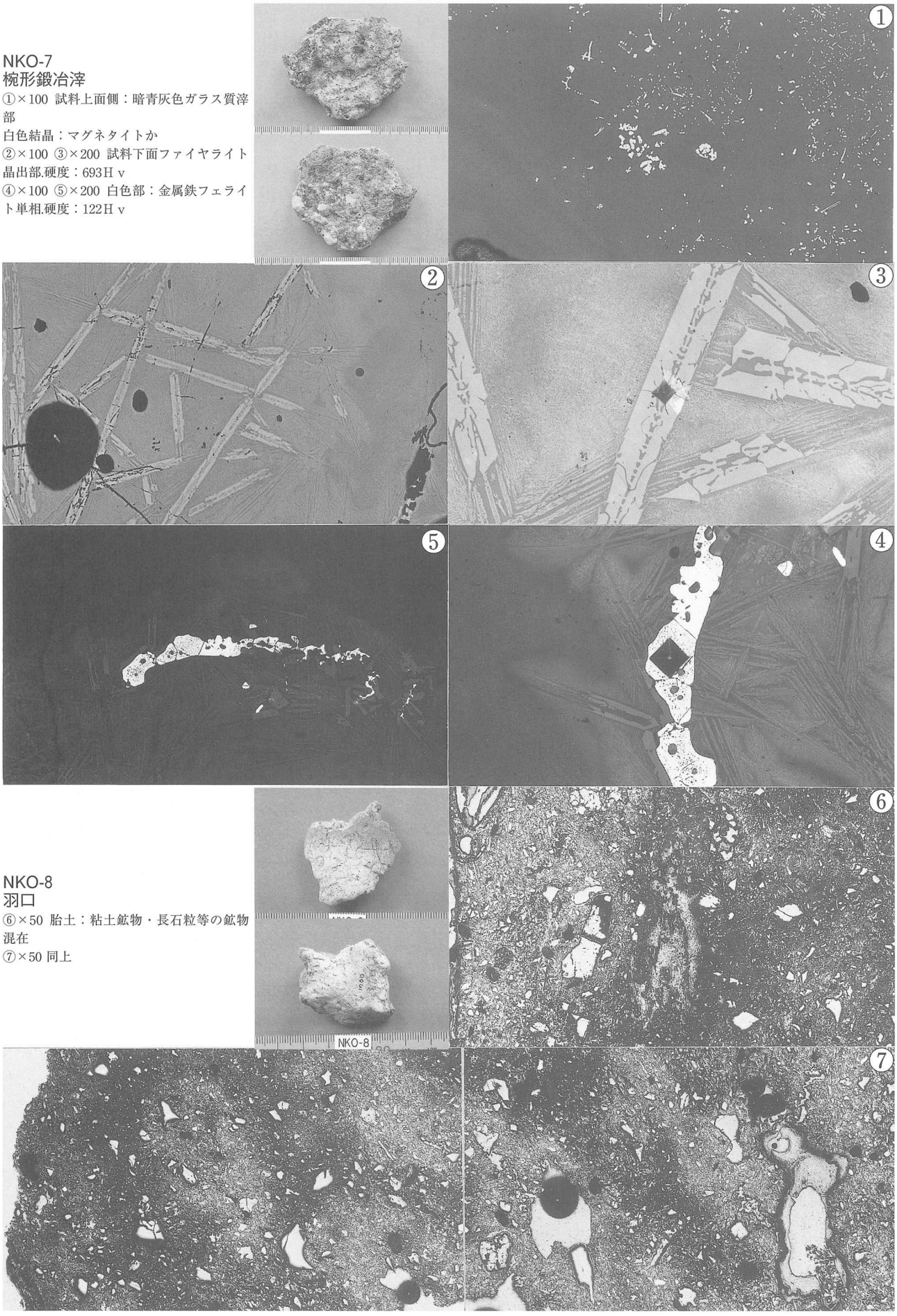
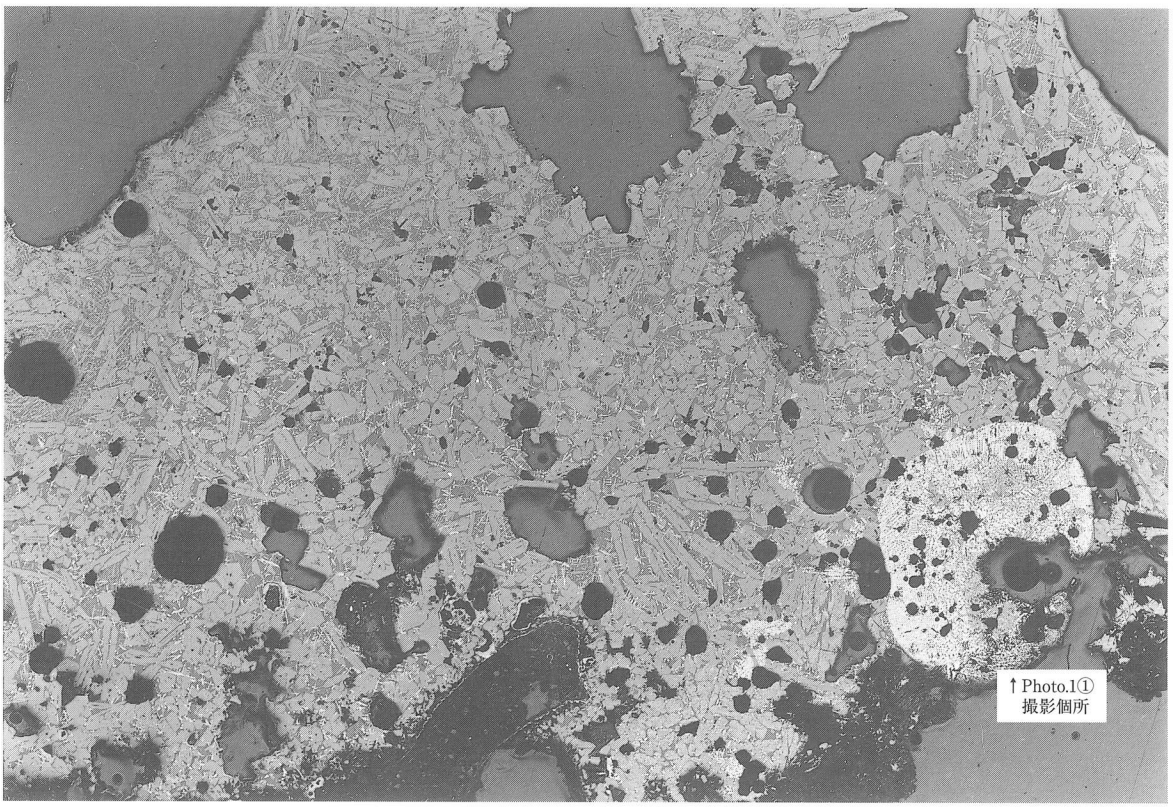
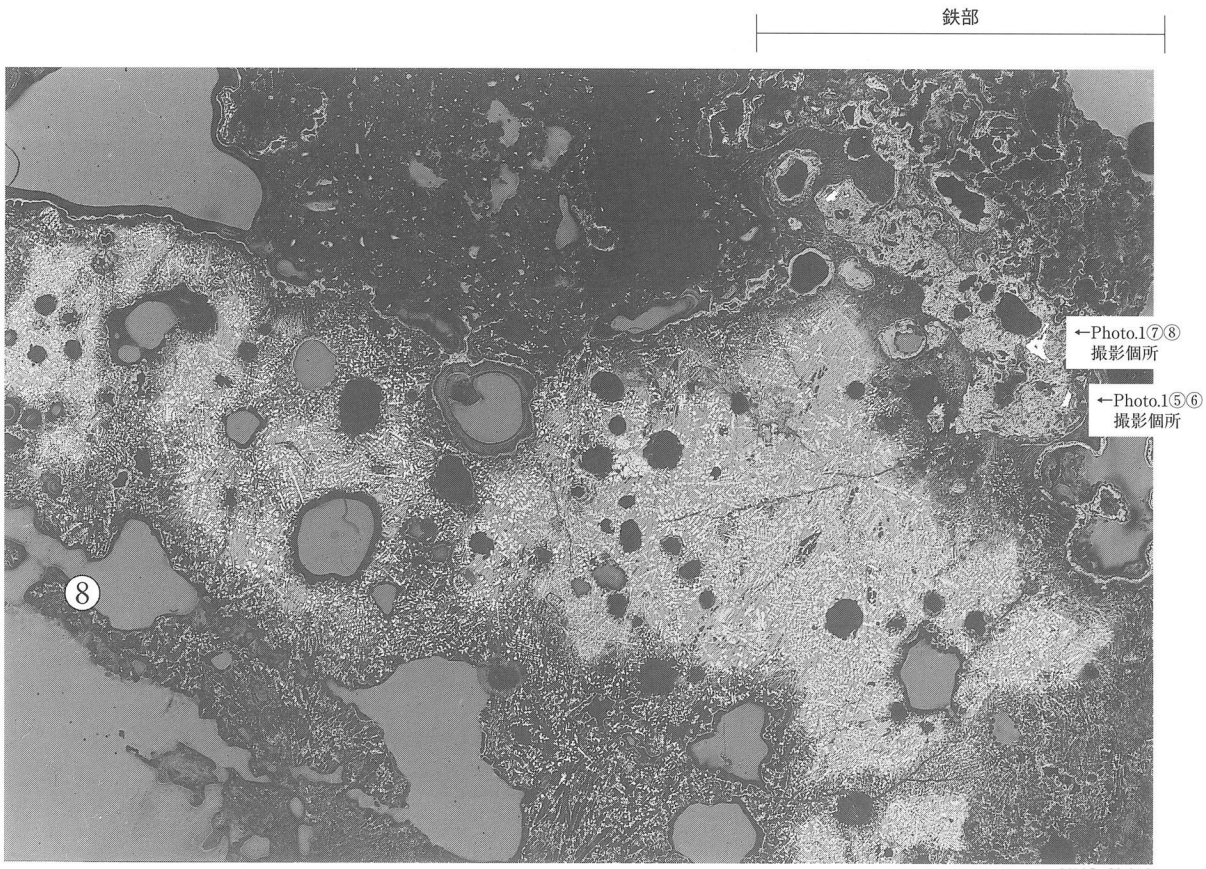


Photo.4 椀形鍛冶滓・羽口の顕微鏡組織

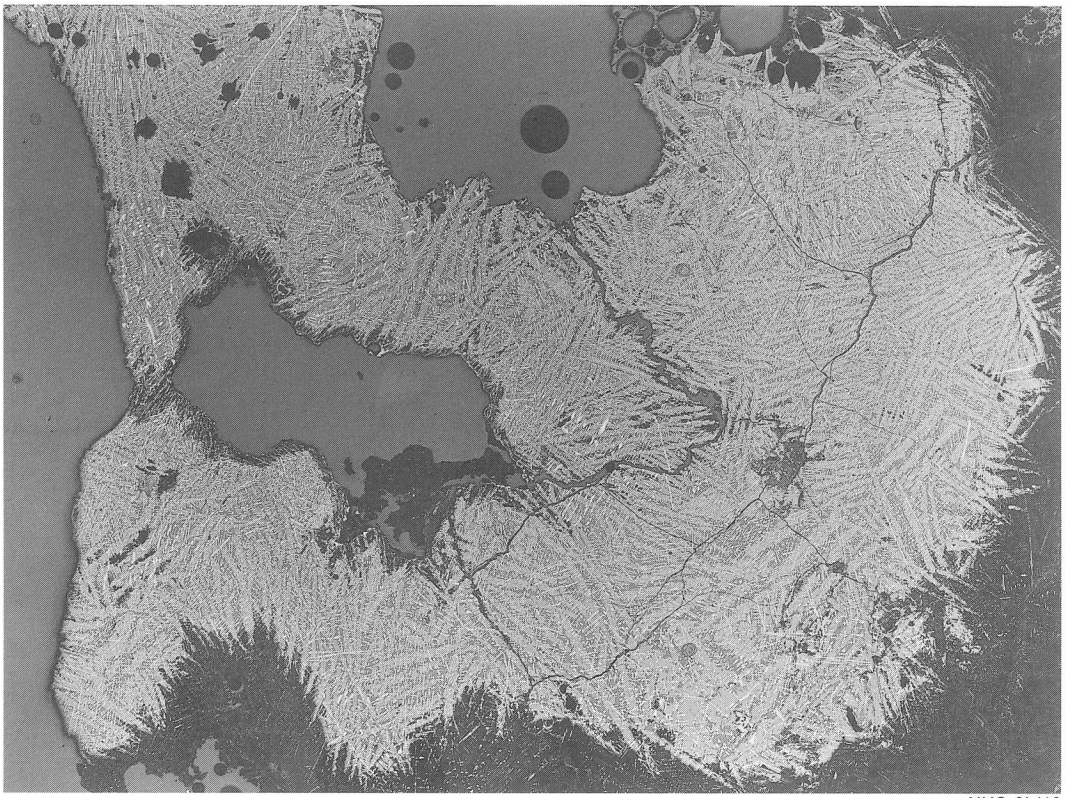


NKO-1×10

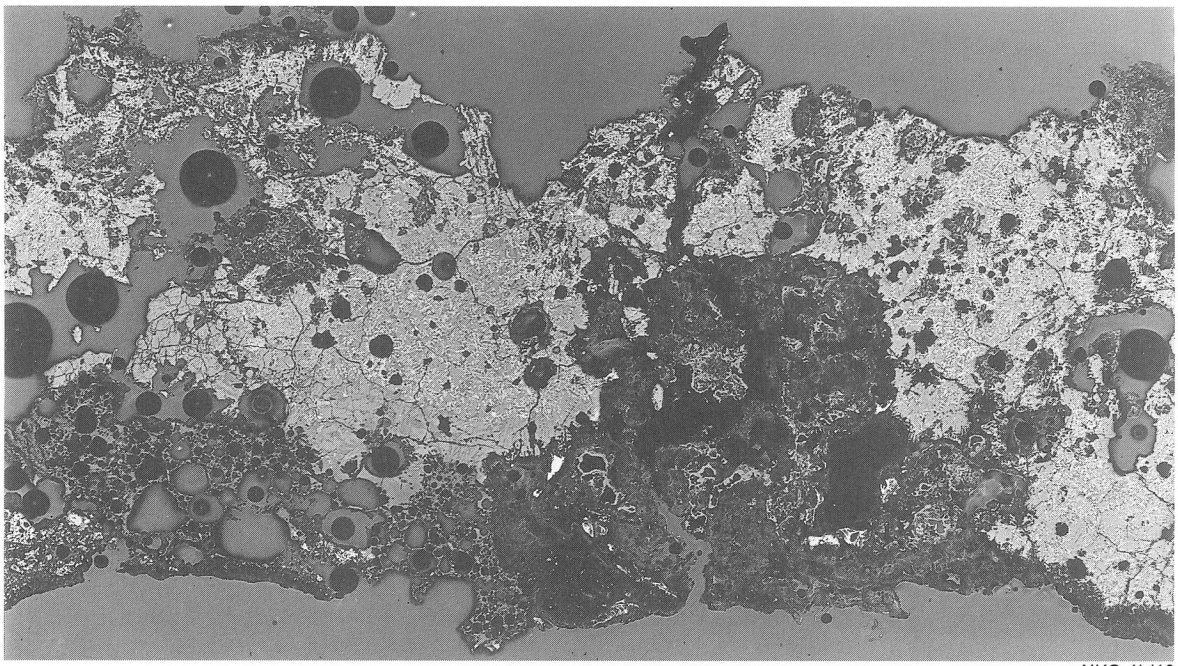


NKO-2×10

Photo.5　上段：椀形鍛冶滓(NKO-1)のマクロ組織(×10)
下段：椀形鍛冶滓(NKO-2)のマクロ組織(×10)

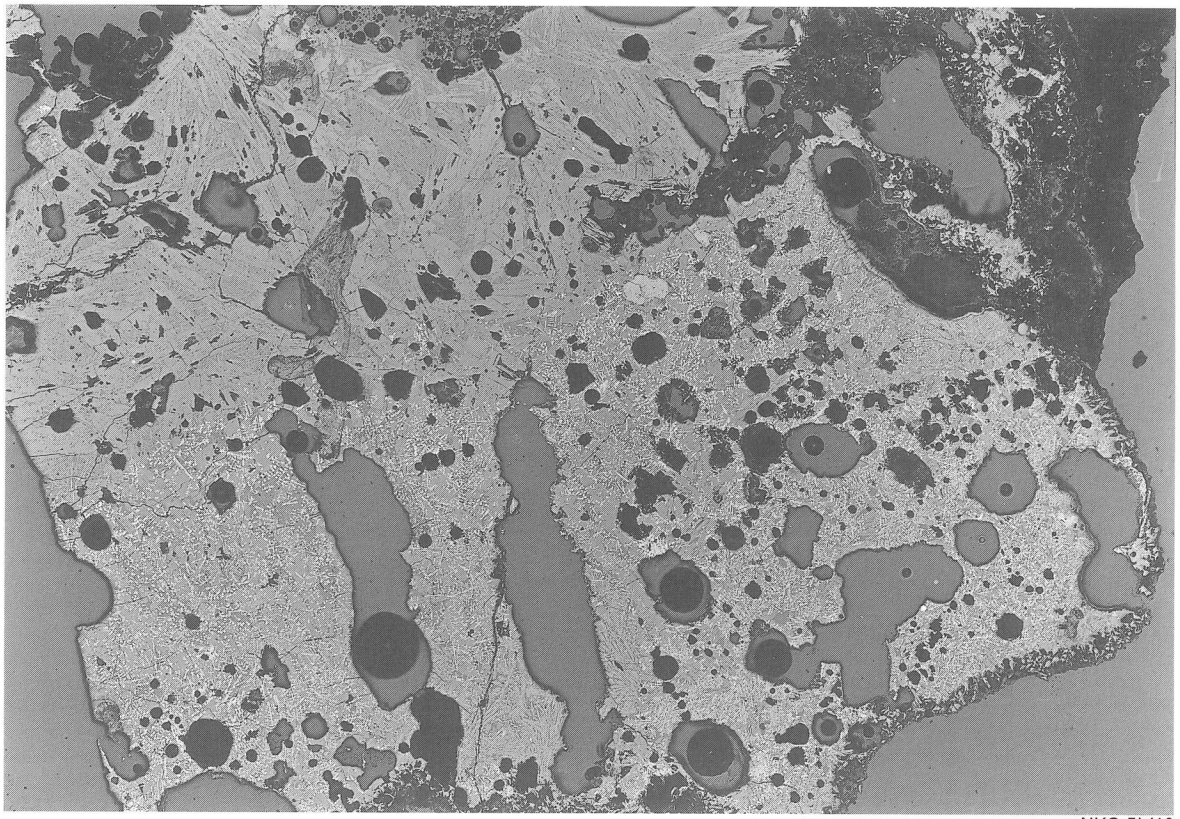


NKO-3×10



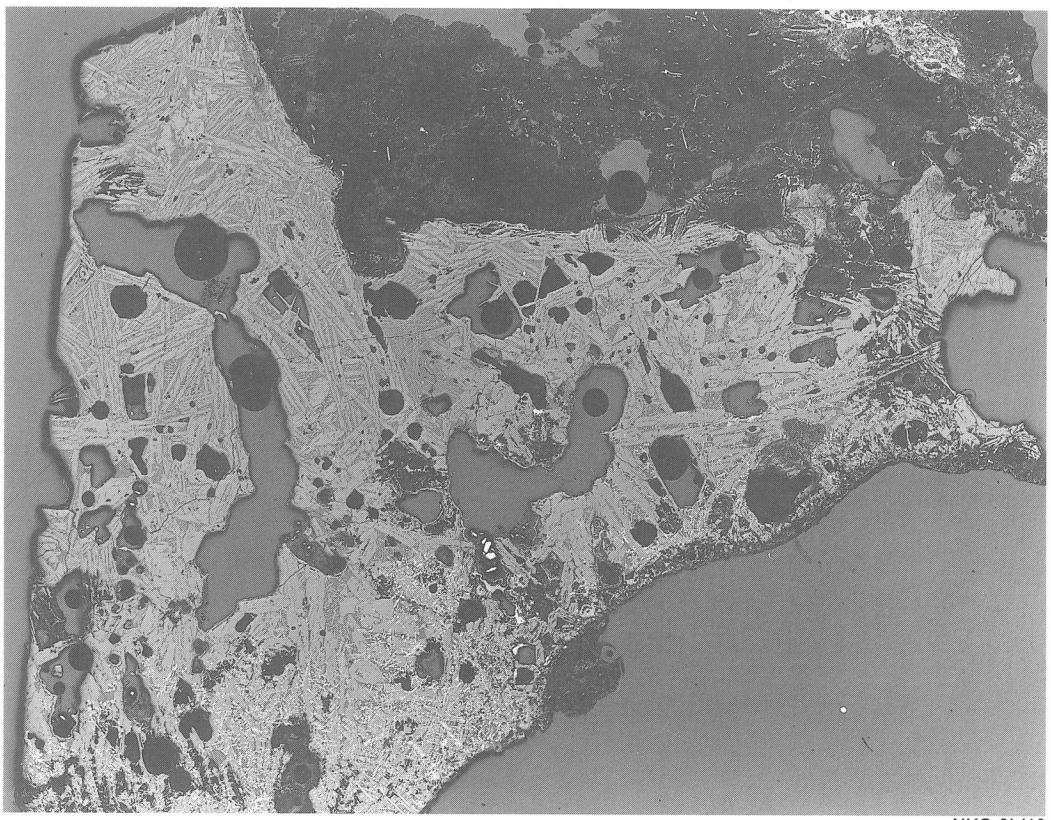
NKO-4×10

Photo.6　上段：椀形鍛冶滓(NKO-3)のマクロ組織(×10)
下段：椀形鍛冶滓(NKO-4)のマクロ組織(×10)



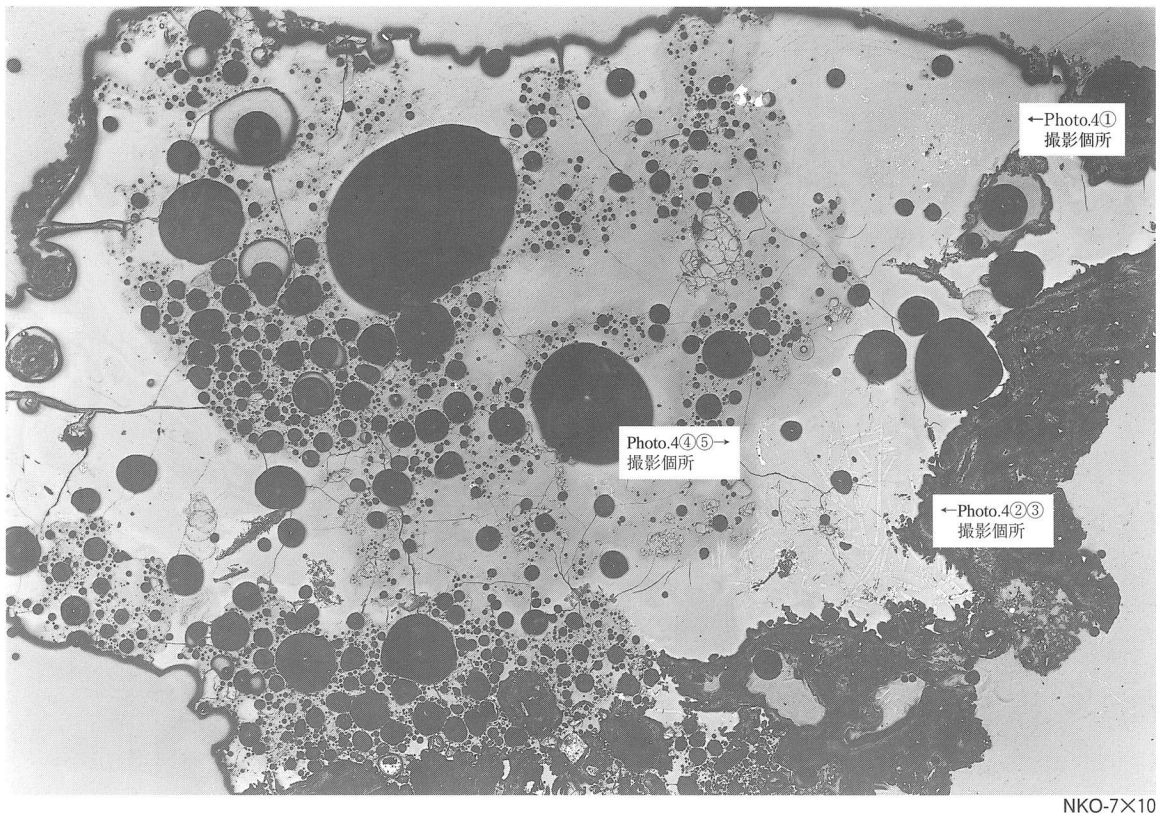
NKO-5×10

上面黒色部：付着土砂・鍛造剥片混在

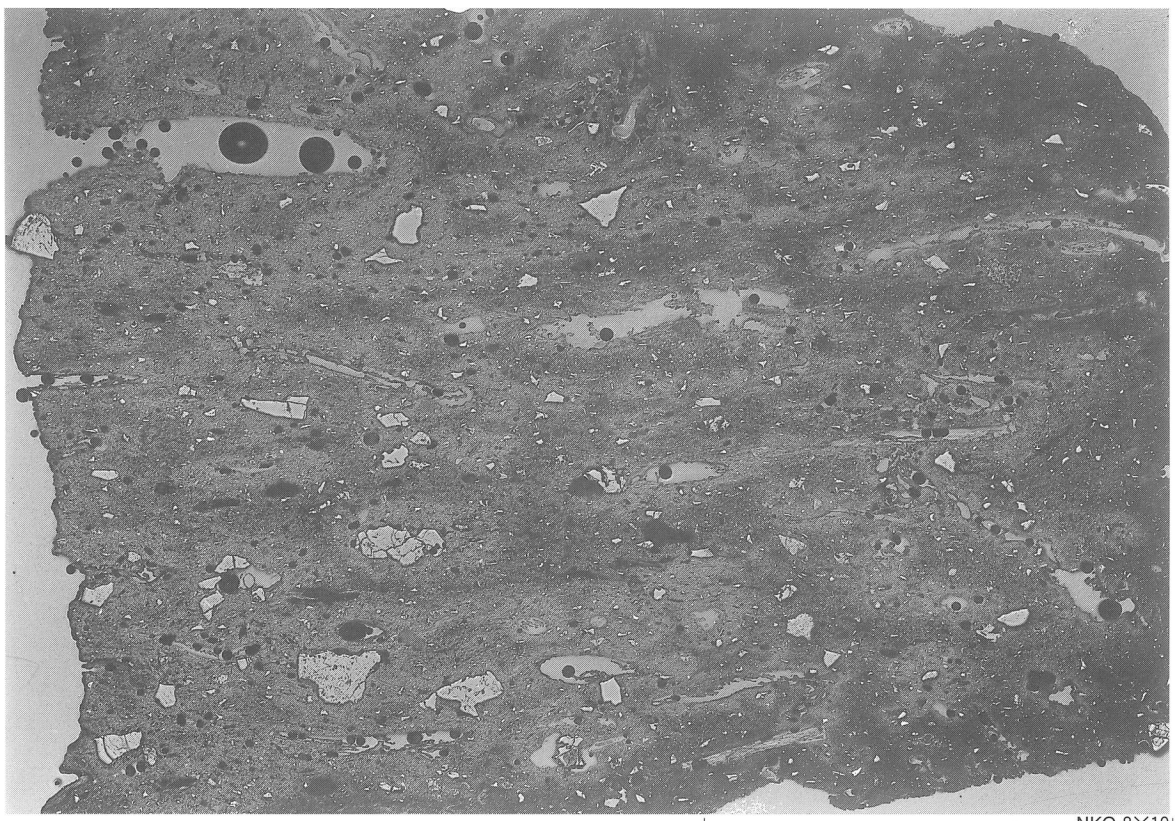


NKO-6×10

Photo.7　上段：椀形鍛冶滓(NKO-5)のマクロ組織(×10)
下段：椀形鍛冶滓(NKO-6)のマクロ組織(×10)



NKO-7×10



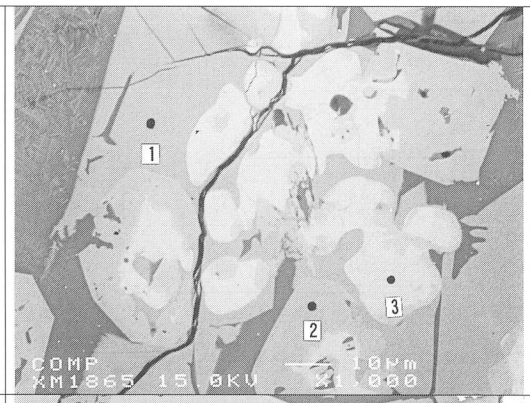
NKO-8×10

外面表層

Photo.8　上段：椀形鍛冶滓(NKO-7)のマクロ組織(×10)
下段：羽口(NKO-8)のマクロ組織(×10)

COMP
×1000

NKO-4



Element	1	2	3
F	-	-	-
Na20	0.027	0.021	0.009
Mgo	1.118	0.173	0.077
A1203	0.163	16.418	0.487
Si02	30.541	0.687	0.546
P205	-	0.012	0.016
S	-	-	0.002
K20	0.008	-	-
Ca0	0.416	-	-
Ti02	0.048	2.308	0.303
Cr203	-	0.108	0.101
Mn0	0.184	0.056	0.061
Fe0	68.170	77.435	99.079
Zr02	0.003	0.054	-
Ba0	-	0.054	0.049
Sr02	-	-	-
V203	-	0.112	0.116
Cu0	-	-	-
Total	100.678	97.438	100.846

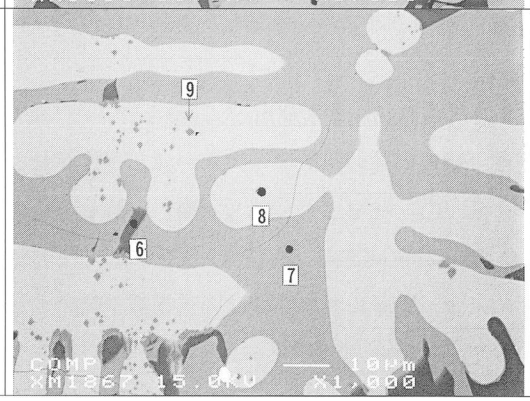
COMP
×1000

NKO-4

Element	4	5
F	-	-
Na20	1.925	-
Mgo	0.070	0.119
A1203	11.214	3.764
Si02	54.746	0.608
P205	0.101	-
S	0.028	0.003
K20	5.266	0.040
Ca0	4.360	-
Ti02	0.026	0.274
Cr203	-	0.026
Mn0	-	0.049
Fe0	22.800	89.975
Zr02	0.069	-
Ba0	0.017	0.042
Sr02	0.032	0.024
V203	0.054	0.027
Cu0	0.096	-
Total	100.797	94.950

COMP
×1000

NKO-6



Element	6	7	8	9
F	-	-	-	-
Na20	3.046	0.047	0.041	0.036
Mgo	0.019	1.893	0.074	0.276
A1203	21.049	0.130	0.769	33.586
Si02	42.715	30.752	0.391	0.412
P205	0.092	0.035	0.005	0.002
S	0.065	0.009	0.001	0.001
K20	6.025	-	0.003	-
Ca0	7.948	0.425	-	-
Ti02	0.109	0.039	0.447	0.727
Cr203	0.052	0.036	-	0.091
Mn0	0.067	0.169	-	0.048
Fe0	19.406	69.633	98.994	64.720
Zr02	-	0.035	0.033	0.021
Ba0	0.168	-	0.058	0.023
Sr02	0.153	-	-	0.062
V203	0.011	0.005	0.013	0.111
Cu0	0.036	0.048	0.025	-
Total	100.945	103.254	100.854	100.116

Photo.9　EPMA調査結果　反射電子像（70%縮小）及び定量分析値

Ⅵ　若王寺遺跡出土鍛冶関連遺物の考古学的調査

真鍋　成史

1．はじめに

本書で報告されている若王寺遺跡は、兵庫県の東南端、現在の兵庫県尼崎市若王寺３丁目に位置する。兵庫県教育委員会が1999年に行った発掘調査の結果、古墳時代後期の土器等と一緒に遺構や包含層中より鉄滓・羽口・ガラス質滓・鉄器が出土した。また、この兵庫県教育委員会の調査に隣接する場所では、昭和40年に調査団結成されて調査が行われた際にも同じく鍛冶関連遺物が出土している。

兵庫県教育委員会の発掘調査にあたって現地見学を、その後整理作業途中にも３回資料見学をさせていただいた。その際に調査担当者の渡辺　昇氏より、金属学的調査用の資料抽出を依頼され、その分析資料リストを元に大澤　正己氏側で金属学的調査が進められた。また、合わせて渡辺氏より鍛冶関連遺物の考古側での観察記録を依頼されたので、このたび報告させていただくこととなった。

2．鍛冶関連遺物の考古学的調査手順

まず、小破片も含めて鍛冶関連遺物を肉眼観察により、鉄滓（ガラス質滓含む）と羽口に分類し、各遺物の重量を測定している（表１・２）。

次に表１中からは、完形もしくはそれに近い鉄滓・ガラス質滓13点を選び出し、観察を行った（表３）。観察項目は、法量（長軸×短軸×厚さ：重量）、磁着度（磁性の強弱、数字が大きいほど磁性が強いことを示す）、メタル度（錆化していない金属鉄の有無、H（○）→M（◎）→L（●）→特L（☆）の順に、金属鉄が大きいことを示す）、遺存度（完形か破片か）、生成方向（羽口挿入方向に対しての滓の生成方向）、下面の形態や付着物の有無、上面の形態のほか、備考において鉄滓の重量感や緻密さ、木炭の噛み込みなどの気づいた点を記入している。

表２中からは、完形に近い羽口８点を選び出し、観察を行っている（表３）。観察項目は、法量（長径×外径×孔径：重量）、先端部磁着度、遺存度、使用角度（水平方向より下側に向けての羽口の取り付け角度）、突出長（炉内への突きでた長さ）、白色長（外面の白色部の長さ）、形態、溶解度（先端部の溶け具合）、胎土中の植物遺体・砂粒の含有などのほか、備考において特徴的な事項を記している。

以上の観察記録作成後、若王寺遺跡での特徴的な鉄滓・ガラス質滓７点と羽口１点を分析資料として抽出した。

3．鍛冶関連遺物の観察結果

以上の調査結果から、若王寺遺跡の鍛冶操業の具体像を推測しておきたい。当遺跡の鍛冶操業の主体時期は出土した土器から古墳時代後期（６世紀中頃以降）と考えられる。

鉄滓は最大のもので、384.8ｇであり、主体は200ｇ以下である。滓は小ぶりなものであり、下面には炉床土の付着するものが多く、そのことから鍛冶炉は小型であることが分かる。鍛冶関連遺物に占める鉄滓（ガラス質滓除く）の割合は25%（3,102ｇ）と少ない。これに対して、羽口が63%（7,800ｇ）やガラス質滓12%（1,549ｇ）と比率も高い。これも炉が小さく炉内全体が高温になったため、羽口や鍛冶炉の内貼り粘土の消耗度が激しくそのためガラス質滓もできやすかったことを示している。砥石（Ｓ５～34、うち２点除く）の点数も28点と多いことからも、荒鉄を処理する精錬鍛冶が主たる作業ではな

く、鉄器加工を主体とする鍛冶作業であったと思われる。

鍛冶作業と関連のある資料としてはこのほか鉄器（M１～11）を挙げることができる。これらの中には荒鉄のような鉄塊系遺物は含まれず、鉄器の加工に用いられた可能性をもつ板状素材（M４・６・７・８）がある。このほか、製品の破片（M１～３・５・９～11）などは鍛冶原料として他より持ち込まれた廃品なのかもしれない。

この遺跡を特徴づける鍛冶関連遺物として羽口がある。外面の縦方向に筋が走っているものが多く見られ、成形にあたってスノコを用いたと思われる。このスノコを用いた羽口の成形方法は古墳時代後期以降に多く見られるものである。

同じ若王寺遺跡の尼崎市教育委員会調査分でも同様の羽口が出土している。こちらの羽口は長くかつ重量もあり、兵庫県教育委員会調査分よりも一回り大きなものである。出土した土器と合わせて考えると時期的には古くなる可能性を持つ。また、大阪府側に入るが、大阪市の大坂城跡の下層でも同時期の鍛冶関連遺物が検出されており、同様のスノコを用いた羽口が出土している。こちらは大きさなどが兵庫県調査分とよく似た資料である。

４．小結

これまで見てきたように、若王寺遺跡においては、尼崎市教育委員会調査分も含めて、製鉄遺跡から持ち込まれた荒鉄を多量に処理していた可能性は低く、その処理を経た素材が当遺跡に持ち込まれ、それを鉄器に加工したのであろう。この状況は、先にも述べた大坂城下層の状況とも共通する。

日本列島内において６世紀中葉以降に、岡山県から広島県東部にかけての中国地方において製鉄操業が開始される。近畿地方においては、これに対応するかのように大阪府柏原市の大県遺跡において多量の鍛冶関連遺物が出土し、大規模に鍛冶操業が開始される。大県遺跡では２kgを超える鉄滓も出土し、また鉄滓が鍛冶関連遺物でも主体を占める。明らかに若王寺遺跡出土鉄滓の大きさや鍛冶関連遺物の構成とは異なっており、大県遺跡においては製鉄遺跡から持ち込まれた荒鉄の処理を行っていたのであろう。

若王寺遺跡においては、その当時大県遺跡を通じて鍛冶素材を入手したのか、それとも中国地方東部の製鉄遺跡周辺の鍛冶遺跡で処理されたものを手に入れたのか、さらにはいまだに国内での需要に対応するだけの国内生産量に達していなければ、引き続いて朝鮮半島からの素材の輸入の可能性も考えられる。素材の供給元がどこなのかは、今後の研究課題である。

参考文献

岡本静心編「若王寺遺跡」『尼崎市史』第１巻　尼崎市役所　1966

財団法人大阪府文化財センター編「豊臣大坂城築造以前」『大坂城跡発掘調査報告１』2002

真鍋成史「柏原市域出土の鍛冶関連遺物の考古学的調査結果について」『田辺遺跡』柏原市文化財概報2001－Ⅱ・2002

表1　出土鉄滓（ガラス質滓含む）一覧表

地区名	出土遺構・土層	重さ(g)	個数	報告番号	地区名	出土遺構・土層	重さ(g)	個数	報告番号
A－7	SD03	21.1	1		B－7	SX04 b区	93.2	6	
－	SD03 1区	26.9	1		C－6	SX05	46.2	3	
A－7	SD04	51.4	1	M23	B－7	SD09 b区	5.0	1	
A－7	SD04 6区	238.1	21		B－1	SD48	6.9	1	
A－7	SD04 6区	211.3	7		C－6	SX05 d区 西半	98	12	
A－7	SD04 c,d	114.5	8		C－6	SX05 中央	39.1	11	
－	SD08	1.6	2		C－6	SX05 西半	28.4	5	
A・B－6	SD12	19.5	1		C－7	黒褐色シルト	15.9	1	
B－6	SD14 c,d区	9.4	2		B－8	側溝	13.1	1	
C－3	SD39	13.4	5		C－8	東側溝	9.3	2	
C－2	SD44	183.1	1	M12	A－7	包含層	11.7	1	
C－2	SD44	32.2	4		A－7	包含層	30.9	1	
C－2	SD47	3.6	2		B－1	包含層	34.7	1	
C－1	SD48 c区	12.2	1		B－2	包含層	6.9	1	
C－2	SD48 c区	5.8	2		B－3	包含層	6.6	1	
C－1	SD50	98.4	1	M21	B－3	包含層	104.5	1	M16
C－1	SD50	39.1	1	M22	B－3	包含層	63.4	1	M17
C－1	SD50	49.5	2		B－5	包含層	45.6	2	
C－1	SD50	122.7	1	M20	B－7	包含層	24.4	3	
C－1	SD50	64.7	2		B－7	包含層	71.6	4	
C－1	SD50 a－b区	92.6	1		B－8	包含層	4.4	4	
C－2	SD50 a区	233.6	9		C－1	包含層	15.7	1	
C－1	SD50 b区	60.3	1		C－1	包含層	8.4	1	
B－1	SD50 d区	21.4	1		C－1	包含層	43.9	1	
B－1	SD50 d区 上層	7.3	1		C－1	包含層	22	1	
C－5	SE06	36.9	1	M24	C－2	包含層	18.6	1	
A－7	SK01	111.9	3		C－3	包含層	62.6	1	
	SK12	42.7	1	M18	C－6	包含層	9.4	1	
A－7	SK38	36.4	1			包含層	55.1	1	M15
B－6	SK62	64.2	1		A－7	包含層　上面精査	3	2	
A－6	SK75	98.5	1	M14	A－7	包含層　上面精査	88.5	3	
A－6	SK77	26.5	2		A－7	面下げ　黒褐色シルト	17.6	2	
A－7	SP17	51.7	1		C－6	面精査	12.4	1	
B－6	SP172	13.6	1		B－1	包含層	15.2	1	
B－4	SP380	10.9	1		B－1	包含層	384.8	7	
A－3	SP505	101.2	1	M13	B－5	包含層	75.9	1	
C－7	SX01 a区	27.3	4		C－2	包含層	11	1	
C－6	SX03 b区	59.7	1		C－2	包含層	33.0	1	
B－7	SX03 a区	30.9	3		C－2	包含層	90.0	1	
C－6	SX03 a区	16.5	3		C－3	包含層	70.5	2	
C－7	SX03 a区	25.4	5		C－3	包含層	23.5	1	
C－7	SX03 a区	10.5	1		C－4	包含層	34.2	2	
C－5	SX03 c区	18.9	1		A－2		33.7	1	
C－6	SX03 d区	27.9	2		B－3		37.2	1	
B－7	SX04	22.1	2				106.4	1	M19
B－7	SX04	7.6	1				43.8	2	
					総計		※4651.2	217	

※内訳一鉄滓3102.2ｇ・ガラス質滓1549.0g

表2　出土羽口一覧表

地区名	出土遺構・土層	重さ(g)	個数	報告番号	地区名	出土遺構・土層	重さ(g)	個数	報告番号
A－7	SD03	215.7	1		B－4	SX06	29.0	1	
A－7	SD04 6区	91.4	6		B－4	SX06	33.7	8	
A－7	SD04 c,d	75.6	6		B－8	側溝	6.9	1	
A－7	SD11	15.1	1		C－7	側溝	99.9	8	
B－6	SD16	143.5	1	93	C－7	側溝	15.3	1	
B－7	SD16	7.4	1		－	排土　表採	21.1	1	
C－6	SD4 b区	59.2	1		B－8	東　側溝	121.2	5	
C－6	SD4 b区	51.1	3		B－8	東側　側溝	22.8	1	
A－2	SD44	50	2		A－7	包含層	24	1	
C－1	SD50 a区	18.3	1		A－7	包含層	9.7	1	
C－2	SD50 a区	216.8	5		B－2	包含層	162.4	1	865
C－1	SD50 b区　上層	18.4	2		B－2	包含層	14.4	1	M25
C－1	SD50 c区　上層	18.2	2		B－4	包含層	94.9	1	
B－1	SD50 d区	74.5	3		B－5	包含層	128.7	1	864
C－1	SD50 a区	9.4	1		B－5	包含層	300	1	866
A－1	SD56	22.8	1		B－6	包含層	59.1	4	
A－3	SK104	32.2	2		B－6	包含層	6.5	1	
A－3	SK104	14.8	1		B－7	包含層	9.8	1	
－	SK12	8.5	1		B－7	包含層	12.9	9	
A－7	SK16	45.5	1		B－7	包含層	41.9	7	
A－7	SK18	40.3	1		B－7	包含層	27.4	1	
A－7	SK20	12.1	1		B－7	包含層	8	1	
A－7	SK22	13.4	1		C－5	包含層	38	5	
B－6	SK23	9.9	1		C－5	包含層	90.5	1	
A－6	SK64	23.6	1		C－5	包含層	273	1	863
A－6	SK64	59.6	4		C－6	包含層	139.2	2	
A－6	SK64	22.3	1		C－7	包含層	23.6	1	
A－6	SK64	90.9	1		C－7	包含層	35.2	1	
A－6	SK64	294.0	1	284	C－7	包含層	10.3	1	
A－6	SK77	99.3	2		A－7	面下げ　黒褐色シルト	2.8	1	
C－5	SK84	67.4	1		C－7・8	面精査	20.6	1	
C－5	SK84	18.5	1		B－2	包含層	14.4	1	
C－5	SK84 第1層	57.1	1		B－3	包含層	935.9	46	
C－5	SK89	18.1	1		B－3	包含層	11.1	1	
B－4	SP396	19.2	1		B－3	包含層	436.9	21	
A－3	SP419	12.1	1		B－3	包含層	6.4	1	
A－3	SP442	39.5	2		C－2	包含層	6.2	1	
A－3	SP451	10.6	1		C－2	包含層	10.7	1	
C－7	SX05 西半（中央部）	38.6	2		C－2	包含層	24.6	2	
C－7・8	SX01	3	1		C－3	包含層	19.1	1	
C－7	SX01 a区	3.3	1		C－3	包含層	109.3	4	
C－7	SX01 a区	37.3	1		C－3	包含層	50.9	1	
C－7	SX02	33.5	1		C－4	包含層	29.8	2	
C－6	SX03	56.1	3		C－5	包含層	20.5	2	
C－6	SX03	9.9	1		C－5	包含層	18.0	1	
B－7	SX03 a区	25.9	1		C－5	包含層	17.4	1	
B－7	SX03 a区	43.7	1		C－5	包含層	133.6	1	

C－7	SX03 a	7.6	1	
C－6	SX03 C区	71.7	1	
C－5	SX03 d	50.5	1	
C－6	SX03 d	14.4	1	
A－6	SX04	28.6	2	
A－6	SX04	42.6	3	
C－6	SX05	108.9	2	
C－6	SX05 中央（c）	91.8	6	
C－6	SX05 中央部分	84.3	3	
C－6	SX05 中央部分	192.7	3	
C－6	SX05 西半	170.3	5	
C－7	SX05 東半	116.1	1	

	包含層	249.7	1	1135
A－8	包含層　掘り下げ	50.9	3	
B－8	包含層　掘り下げ	8.3	1	
－		16.4	1	
B－1		13.7	1	
B－7		36.9	2	
C－2		23.9	1	
C－3		90.5	3	
C－3		166.4	1	
		7.4	1	
		82.1	1	
総計		7800.9	280	

表３　若王寺遺跡出土鍛冶関連遺物観察表

遺跡名：　若王寺遺跡	出土位置：溝･土抗など	時期及び根拠：６C中以降（出土土器）
鉄滓（ｇ）：3,102	小ぶりな鉄滓が多い。下面には炉床土付着するものが多く、炉も小型である。	

番号	報告番号	長軸(㎜)	短軸(㎜)	厚さ(㎜)	重量(ｇ)	磁着度	ﾒﾀﾙ度	遺存度	生成方向	下面形態	下面状態	上面形態	備考
1	M13	(72)	(45)	32	101.2	2	なし	破片 1/2	均等	椀状	木炭	凸面	平面、不整四角形をした厚みのある椀形鍛冶滓の破片。1/2欠損。本来は円形で、直径８cm程度の滓か。上下面とも酸化土砂が付着する。上面はやや凸面である。滓は茶褐色で、３㎜以下の気孔が多数ある。破面は２面。質はやや粗で、重量感をもつ。生成された炉は深めであったようである。分析資料（NKO－1)。
2	M24	(52)	(30)	18	36.9	4	H (○)	破片	不明	椀状	木炭	平坦	平面、不整四角形をした椀形鍛冶滓の破片。ほとんどが欠損する。本来の形態は不明だが、M13と同様の質感でもある。破面は側面すべてである。滓は茶褐色で、中にはわずかに金属鉄が入り込んでいる。質は粗であるが、メタルのためか重量感がある。上面ひび割れ個所がより磁性強い。炉はM13と同様のものと推定される。分析資料（NKO－2)。
3	M14	(75)	60	15	98.5	3	なし	破片 4/5	長軸方向	緩い椀状	木炭	平坦	平面、不整楕円形をした椀形鍛冶滓。1/5程度は欠損。下面は緩やかな椀状で、炉床土が付着せず木炭痕が認められる。長軸片側が破面である。滓は茶褐色で、質は粗。重量感あり。上面には羽口位置を示す黒色ガラス質滓が付着。下面は木炭痕も最長1.5cmのものが残っている。気孔は上・下・破面とも１mm以下のものが所々に認められる。M13・24と異なり下面の形状は緩やかである。分析資料（NKO－3)。
4	M15	68	(48)	10	55.1	4	なし	破片 3/5	不明	平坦	粘土	平坦	平面、長方形をした椀形鍛冶滓。2/5程度は欠損。上面は５mm以下の木炭が多数。長軸両端が破面である。滓は緑青灰色で、緻密で重量感あり。上・下・破面とも１mm以下の気孔が所々で認められる。分析資料（NKO－4)。
5	M16	80	(45)	16	104.5	3	なし	破片 1/2	不明	平坦	粘土	平坦	平面、不整四角形をした椀形鍛冶滓の破片。1/2程度は欠損。上面は羽口からの送風によって生じたと思われる２cmの窪みあり。長軸片側２面が破面。滓は緑青灰色で、緻密で重量感あり。また、紅色に変色した個所も認められる。酸化雰囲気であったことを示すか。また、白色ガラス質滓の付着も認められる。下面には気孔が点在するが、上・破面には少ない。分析資料（NKO－5)。
6	M17	55	50	15	63.4	3	なし	完形	均等	平坦	粘土	平坦	平面、円形をしたこぶりな椀形鍛冶滓。ほぼ完形である。滓は青灰色で、緻密で重量感あり。上・下面ともに５mm以下の木炭痕多数あり。分析資料（NKO－6）
7	M19	80	65	21	106.4	3	なし	破片 4/5	長軸方向	椀状	粘土	やや凹面	平面、楕円形の小ぶりな椀形鍛冶滓。上面、短軸片側に黒色ガラス滓が付着し、この位置に羽口があったものと思われる。下面は長軸がゆるやかなカーブ、短軸が急なカーブである。滓は緑灰色で気孔を所々に有する。
8	M21	65	(45)	25	98.4	4	なし	破片 2/3	不明	椀状	粘土	平坦	平面、長方形の椀形鍛冶滓。上面、２cm長の木炭痕を有する。滓は緑灰色で気孔を所々有する。
9	M22	60	48	15	39.1	4	なし	完形	不明	緩い椀状	一部粘土	平坦	平面、楕円形の小ぶりな椀形鍛冶滓。上下面ともに気孔を有する。上面は白色ガラス滓、滓は緑灰色でやや茶褐色になる。下面には粘土がわずかに付着する。
10	M20	(82)	(62)	15	122.7	2	なし	破片	不明	椀状	粘土	やや凹面	羽口が炉に装入された状態で付着する鉄滓。装入角度は不明。羽口下は黒色ガラス質滓で羽口の溶解物である。下面は青灰色の粘土が付着している。鉄滓上面には黒色ガラス質滓付着する。炉が小型であることを示す。
11	M12	90	(48)	35	183.1	2	なし	破片 1/2	不明	船底	粘土	平坦	半分に割れた半円形の椀形鍛冶滓。ずっしりとしている。上面は所々に木炭痕がみられ、下面は多数の気孔がある。破面をみると、この部分には気孔なく緻密である。

炉壁（g）：1,549					さほど溶解は進んでいるような感は受けない。炉の内貼り粘土が溶解して生成された白色ガラス質滓が主体を占める。								
番号	報告番号	長軸（mm）	短軸（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	磁着度	メタル度	遺存度	生成方向	下面形態	下面状態	上面形態	備考
12	M18	60	54	15	42.7	1	なし	ほぼ完形	均等	緩い椀状	粘土	凹みあり	平面、不整五角形をしたガラス質滓。ほぼ完形と思われる。上面には羽口の溶解した黒色ガラス質滓が付着する。1㎝以下の木炭痕多数あり。分析資料（NKO－7）。
13	M23	65	50	15	51.4	1	なし	ほぼ完形	不明	緩い椀状	粘土	平坦	やや扇状になった炉壁の溶解物片。上面は黒ガラス滓が付着し、一部青色になった箇所も見受けられる。

羽口（g）：7,800					外面は縦方向に筋が入ったものが主体を占め、スノコで巻いていて成形したものと思われる。										
番号	報告番号	長径（mm）	外径（mm）	孔径（mm）	重量（g）	磁着度	遺存度	使用角度（°）	突出長（mm）	白色長（mm）	形態	溶解度	植物遺体	砂粒	備考
14	M25	35	－	－	14.4	－	破片	－	25	－	ハの字状	弱	有	少	羽口先端下部の破片。ガラス滓が下に垂れ下がっている。先端部の溶解具合からみてもさほど操業温度は高くなかったと思われる。分析資料（NKO－8）。
15	863	90	50	22	273.0	1	ほぼ完形	20	15	15	ハの字状	弱	有	少	後端部ソケット状。先端一回は切り落とされ、その後使用。その後はあまり使われていない。外面の筋はスノコで巻いた痕跡と思われる。粘土2重巻きつけ成形している。
16	864	79	－	－	128.7	－	破片	－	－	20	ハの字状	－	有	少	後端部ラッパ状に広がる。外面の筋はヘラケズリでなくスノコで巻いて成形した痕跡と思われる。先端部は欠損する。
17	865	95	45	21	162.4	2	ほぼ完形	20	15	30	ハの字状	強	有	少	後端部ソケット状。先端の溶解進んでいる。外面、面取りでなくスノコで巻いた痕跡と思われる。
18	866	95	50	26	299.5	2	ほぼ完形	15	17	15	ハの字状	弱	有	少	後端部ソケット状であった所に送風管とのとり付け粘土残っている。先端の剥落進んでいる。外面の筋はスノコで巻いたと思われる。
19	284	128	40	18	294.0	1	ほぼ完形	5	5	25	ハの字状	弱	有	少	後端部ラッパ状に広がる。先端部は切り落とされた痕跡をもつ。外面の筋はスノコで巻いたと思われる。
20	93	72	38	22	143.5	4	破片	10	5	15	ハの字状	やや強	有	やや多	後端部が欠損している。先端の溶解は進み、磁性も強い。865、284と形状はよく似ている。外面の成形は不明である。
21	1135	98	45	25	249.7	3	ほぼ完形	5	20	20	ハの字状	強	有	多	後端部はラッパ状に広がると思われる。先端の溶解は進み、磁性も強い。先端下端部にはガラス質滓の垂れ下がりが見える。

まとめ	鉄滓の出土が少なく、これに対して羽口・ガラス質滓・砥石の量が多い。鍛冶素材かと思われる鉄器（M４・６・７）の出土も認められることからも、これらを用いていた可能性もある。以上のことから鉄器加工段階に主体をおいた操業が推測される。

Ⅶ．おわりに

半年足らずの2,900㎡と最近の調査としては小規模な部類に入る調査であったが、成果としては多大なものがあった。若王寺遺跡と聞くと、私たちの世代では阪神間周辺で考古学を学ぶ者として有名な遺跡であり、よく知られた遺跡である。集落では「弥生の田能、古墳の若王寺」と言われるほど知られた遺跡で、それを調査できることは望外の幸せであった。

その通りの調査で、多くの成果を上げることができた。今回の調査区の中に昭和40年に調査された第1次調査の確認坪も含まれていた。当時、遺構の密度の高さ・土器の集中度から保存したことが、容易に窺い知れる状態であった。先達が保存してくれた遺跡を、ほとんどノーマークに等しい形骸化した保存協議しか行えなかったことに後ろめたさを感じる。その贖罪の意味も含めて、十分な報告をと思っていたが、さらに後ろめたい状況に陥ってしまった。最低限の責任を果たしたに過ぎないことを恥じるとともに、調査・整理調査に参加戴き労力を惜しまなかった調査補助員・嘱託員の方々にお詫び致します。何かの機会にさらなる発展を望むものである。

1．遺構の時期

時期決定する資料として当然出土遺物が検討材料になる。細かい時期決定は置いておき、大枠で考えるのに須恵器の保有の有無が簡単な手段である。まず、須恵器の有無を表すと以下の通りである。

	土師器のみ	須恵器含む
溝（SD）	1，2，5，7，8，9、10、11、19、21、22、26、28、33、39、41、43、48、51、52、55	3，4，6、12、14、15、16、17、18、25、27、30、31、34、35、40、42、44、45、47、50、53、54、56、58
井戸（SE）	1，2，3、4、7	5、6，8
土坑（SK）	4、5，7、14、16、17、18、20、24、25、26、28、29、30、31、33、34、35、36、38、42、43、44、45、46、47、48、52、57、59、80、84、88、93、94、95、100、102、104、109、110、114、115、118、121、122	1，2，3，8、10、11、12、13、15、21、23、27、32、37、49、50、51、53、54、64、75、77、83、85、89、91、92、96、99、107、111、112
落ち込み（SX）		1、2、3、4、5、6

遺構の時期は庄内期から6世紀後半までに限られる。庄内期の遺構は井戸に限られており、多くは布留期（土師器のみの出土遺構）～須恵器が出土する遺構である5世紀から6世紀の遺構である。大きくは古墳時代を通しての集落ということになる。逆にいえば古墳時代終末を除いた時期に限られた集落であるとも言える。

掘立柱建物跡では、須恵器を柱穴から出土しているのはSB01、SB02、SB07、SB14、SB16 、SB18の6棟である。これと遺構の切り合いからSB10は須恵器の時期である。8棟の住居跡は新しい時期ということになる。逆に土師器だけ出土しているのはSB06とSB08の2棟である。SB05とSB14も土師器だけが出土しているが1基のピットだけからの出土で数点だけの土師器なので、断定はしかねる。主軸方向はSB07・10がほぼ正方位を取るものである。主軸方位からいくとSB12・13・17もこの時期であろうか。単純に時期を考えるなら南北方向は新しいと思われ、斜め方向となるものには時期差があることになる。SB06・08が古く、この主軸方向が古いと考えるのが妥当であろうか。そうすると、SB09とSB11が該当する。4棟が須恵器以前の掘立柱建物跡と考えられる。

出土遺物から確実に古いとされる遺構は、SE01である。庄内期に比定できる。次の時期の遺構が多くなり、布留0期である。SE07やSD33・SD11などが該当する。庄内期に活動をはじめ、布留期に拡大するものと思われる。須恵器出現までの布留の時期にSD11・36など多くの溝が掘られている。溝内から鉄滓も出土していることから、庄内期は不明ながら布留期には確実に製鉄作業を開始している。それから6世紀中葉まで存続しており、遺物のなかにTK209がないことから、この時期6世紀末には遺跡は終焉したようである。包含層から中世の遺物が少量出土しており、第2次調査では遺構も検出されているので、それまで断絶している。

2．遺跡の性格

製鉄遺跡であるということが最大の特徴である。遺跡存続期間と生産活動は同一であろうと考えている。製鉄遺構として明確な炉跡は検出していない。遺構としてはSK98がある。南北方向の遺構面で焼土面が広がっている。その上に鉄分が堆積しており、硬化面が形成されている。周辺にも鉄分が散乱しており製鉄作業を行った面として捉えることが可能である。西側には下層に溝も設けられており水分の除去も検討されている。それ以外に溝で囲まれた部分が炉跡と考えられる。炉床が残存していないもので、この中に炉が存在してであろう。SD27・31で囲まれた部分などを代表とする。複数の溝で囲繞された部分があり、その多くが該当すると考えている。大阪府大県遺跡などを類例とする炉跡を巡る施設と思われる。溝からは焼土・炭は多数出土しており、鉄滓・羽口が出土しているのも有力な理由である。大沢氏の分析によると、鉄鉱石系の材料を原材とした精錬鍛冶・鍛錬鍛冶が行われていたようで、鍛冶滓の分析からその銅成分に特徴があり産地を比定することができない。類例として兵庫県下の雨流遺跡（南あわじ市）、小戸遺跡（川西市）があり、関連が窺われる。小戸遺跡は近隣の遺跡であり、5世紀はじめに若王寺遺跡に製鉄技術が伝来したとすれば矛盾はなく、最先端の技術で製鉄作業が行われたとすれば興味深い。出土の羽口も特徴的なもので後世の飛鳥池遺跡などと同じ形態を採るという。新しい技術のポイントとなれば、若王寺遺跡の評価をさらに上げる理由になろう。

船材を再利用した井戸なども興味深いもので、神戸市荻原遺跡や天理市庵治遺跡で検出されている。布留0期の土師器も特徴的で、今まで見慣れた播磨のそれとは異なっている。精緻な土器で胎土など豊中市の土器と同じである。その時期も検討資料として活用すべきであろう。それ以外にも、個々の検討を加える必要があるが尽くせなかった。何かの機会に期したいと思う。長期間に渡る作業に十分に報えなかったことをお手伝い戴いた方々と、若王寺遺跡にお詫びいたします。発展活用戴けるようお願いします。

報告書抄録

ふりがな	なこうじいせき
書　　名	若王寺遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第305冊
編 著 者 名	大沢正巳・真鍋成史・渡辺　昇・友久伸子
編 集 機 関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所 在 地	〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号　TEL　078(531)7011
発行年月日	2006年3月14日

所収遺跡名（遺跡番号）	所在地	コード				調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号	北緯	東経			
若王寺遺跡（030079）	兵庫県尼崎市若王寺3丁目	28202	990261	34°44′46″	135°26′18″	1999.11.24	40㎡	経済産業省工業技術院大阪ライフエレクトロニクスセンター建設
			2000186			2000.6.20～11.14	2、380㎡	
			2000328			2000.12.12.～26	247㎡	
			2001124			2001.8.24～10.20	128㎡	
			2004150			2004.4.18～28	127㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
若王寺遺跡	集落跡	古墳時代	掘立柱建物跡・古墳・井戸	土師器・須恵器・紡錘車・勾玉・羽口・鉄滓・男根状土製品	

兵庫県文化財調査報告　第305冊

尼崎市

若王寺遺跡（本文編）

2006年3月14日発行

編集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652－0032　神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号
発行　兵庫県教育委員会
〒650－8567　神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
印刷　株式会社　廣済堂　神戸営業所
〒657－0834　神戸市灘区泉通6丁目2番15号